

---

# 魔法先生ネギま！～狐と兄の燈し語～

皐月二八

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜狐と兄の燈し語〜

### 【Nコード】

N13060

### 【作者名】

皐月二八

### 【あらすじ】

天狐の夜白輪廻と兄の夜白刹那、そして麒麟の夜白煌月が次にやって来たのは、魔法と陰謀と傷痕にまみれた世界。少女と兄、そして家族と英雄の残滓と運命のリングが希望の灯を燈していく、何の慈しみもない物語。注）『魔法少女リリカルなのは〜狐と兄の紡ぎ語〜』の直後の続編です。

プロローグ「確認、それは長い下積みと闇夜の提灯」(前書き)

いよいよ続編です。

心機一転して頑張っていきます。

## プロローグ「確認、それは長い下積みと闇夜の提灯」

創造神アリスによって、新たに飛ばされてやってきた『世界』。

お兄ちゃんヒコと私、そして煌月ヒコの3人は、お兄ちゃんヒコ、夜白刹那ヤシロセツナが『神』となったことで手に入れた能力『世界基礎ルシファース・ギフトの正体』と『永久シンフ調和オニ』。そして『閉鎖の神眼』の3つの力を訓練しつつ、この世界の情報を集めていった。

お兄ちゃんの力については追々説明するが……私 夜白輪廻ヤシロリンネたちがやって来たこの『世界』は、主に2つに分けられる。

前の世界と同様、この世界にも様々な魔術が存在する。主に『裏』で活躍していることにも変わりはない。しかし、魔法がおおっぴらになっっている世界がある。それが『魔法世界ムントウス・マキクス』。妖精や獣人が暮らす、文字通り魔法文化が基盤となっている世界だ。

対して、今私たちがいる日本やアメリカなどがある世界。これは『旧世界ムントウス・ウエトウス』（『現実世界』ともいう）と呼ばれており、『魔法世界』は『旧世界』の火星と同じ時空間座標に位置する。

2つの世界は、各地にあるゲートや個人による転移魔法などで行き帰りが可能。

魔法世界にしろ旧世界にしろ、いずれも西洋魔術が一般的であり、陰陽術や神道術、ミッド式魔法などはあまり知られていない。ミッド式やベル方式にいたっては存在自体知られていない。別『世界』の魔術体系だから当然といえば当然の話。

ここで、ちよつと西洋魔術について説明をする。

この魔術体系を一言で表すのなら、『呪文を唱えて何かする』。これに尽きる。ていうか、これオンリー。中には例外もあるけど。

西洋魔術の発動には、ラテン語または古典ギリシャ語の呪文が必要となる。ちなみに後者の呪文を必要とする魔法の方が上位らしい。

私もお兄ちゃんも煌月も、慣れ親しんでいないので詠唱が難しいし、西洋魔術に頼らなくてもどうにでもなるので軽く齧った程度で済ませてある。

話を戻そう。

呪文を唱える前には言葉としては意味を持たない、発動のパスワードのようなものが必要となる。これを『始動キ』と呼ぶ。が、術者のレベルが高ければ省略も可能。初心者でも、鍛えれば初歩的な術なら省略できる。

自然や五大元素（空気・火・土・水・<sup>エーテル</sup>霊）などを司る精霊から力を借りる というのが西洋魔術の骨子だ。

あと、特徴的なのが『<sup>ミニステル・マキ</sup>魔法使いの従者』。

要するに、魔法使いのパートナーだ。この世界の魔法使いには、多かれ少なかれ、呪文詠唱中が無防備という共通の弱点を持つ。当然、敵はそれを狙う。それを防ぐのが『<sup>ミニステル・マキ</sup>魔法使いの従者』の役目となる。

要は、遠距離用の攻撃準備中の魔法使いを守る楯 と同時に接近戦で敵を貫く矛としての役割が、期待されているというわけだ。

魔法使いと契約を交わした従者は、前者より魔力を供給されて身体能力を強化できる。  
ある意味、優秀な従者の有無は魔法使いにとってある種のステータスだった。優秀な従者がいるだけで、十分なアドヴァンテージになるからだ。

ちなみに、本来なら契約は原則一人としかできないが、お試し期間として何人でも『仮契約』が可能という親切設定だ。

ついでに言うと、もっともお手軽な契約方法は魔法陣上でのキス。

契約を行うと『従者カード』<sup>バクティオ</sup>が生まれ、魔法使いが実力者だった場合、パートナーの固有戦力をさらに高める道具である『アーティファクト』<sup>アイテム</sup>がパートナーに与えられる。

もちろん、私と煌月はすぐにお兄ちゃんとしたのだが 出て来たアーティファクトについては、またあとで説明しようと思う。

予想通りと言っべきかなんというべきか、神と最高位神獣<sup>わたくし</sup>、そして神と準最高位神獣<sup>き</sup>が仮契約したせいか、トンデモないものがでてきたので。

そういった情報を集めるついでに、私たちは2つの世界の各地を渡つて、この世界の『裏』<sup>バイナ</sup>関係と関係を繋いできた。

お兄ちゃんが求めているモノは『平穩』だ。

極端な話、私が生み出した『空間』に一生閉じこもっていれば手に入るのだが、そういうわけにもいかない。

創造神<sup>アリス</sup>がいった『研修』のため、適度に『世界』に触れなければな

らない。

「申し訳ありませんが……『世界』を破壊することにつきましては……一向に構いません。寿命が残り少ない……『世界』に送りますし……担当の神たちにも確約をとっています。ですが……『世界』と全く関わりを持たないということだけはやめてください。『研修』になりませんので……」

この『世界』に到着した直後、創造神アリスⅡVⅡRⅡスウォルディナから神下界直通電話を通じて連絡が来た時、私は思わず舌打ちした。

もう、戦いやら戦争やらにお兄ちゃんを巻き込むのは、何が何でも避けたかったというのが、私の本音だ。

それでも、なるべく平穏を保つため、『裏』関係の個人や組織と関係イを持っておく。厄介事を押しつけられることもあり、デメリットも多いがそこはギブ・アンド・テイクだ。

そんなことを続けているうちに、いつのまにやら魔法世界で戦争が勃発していたが、お兄ちゃん是不介入を決め込んだ。

以前から色々ときな臭かったので、魔法界には特に関わりを持たないようにしていたのであっさり回避できた。

もちろん、私も煌月も、お兄ちゃんに逆らったりはしない。するは

ずがない。

そんなこんなで、私たちはひっそりと活動しながら旅を続けていた。



プロローグ「確認、それは長い下積みと闇夜の提灯」（後書き）

戦争への介入はしません。

その代わり、原作（ネギ登場）からはかなり変えていく予定です。

## 設定資料1（前書き）

基本的には前作を踏襲しております。

## 設定資料 1

キャラ紹介、まずは前作から引き続き登場するキャラクター！。

夜白<sup>やししろ</sup> 輪廻<sup>りんね</sup>

性別：女

種族：最高位神獣『天狐』の特別変異。尻尾1本1本が、並みの天狐同等の力を持つ。

年齢：自由自在。普段は16歳程の姿になっている。

容姿：腰まである長い闇色の髪。眼は右目が紅、左目が翡翠色。肌は輝くほど白い。服装はたいいてい漆黒のドレス。身長は160センチ前後。スタイルも良く、100人中100人が振り返ってそのままフリーズするほど美人。じつは、眼には見えない獣耳と9本の尻尾を持っている。尻尾は伸縮自在。音速で動き、硬度も変化自在。

本来の姿は子犬ほどの漆黒の狐（サイズは変更可能）。尻尾はない。性格：兄至上主義。ヤンデレ。刹那以外のことだとしてことん無関心（ただし家族や親友は別）。

ラカンによる強さランク：測定不能

始動キ：ソラ・ヨゾラ・アエイジス・サムソーラ

能力：

『万物創造』

生命体を含むありとあらゆるものを生み出すことができる。さらに、創造したものに様々な付加価値を加えることができる。ただし、複雑なものであればあるほど、創造には時間がかかる。

『状態操作』

対象の状態を進めたり戻したりできる。破壊された物の復元や生物の怪我の治療、甦生すら可能。ただし、甦生の場合は死後半日以内でないと不可能。

『万象把握』

火や水、雷などの自然現象を自在に操る。輪廻が特に得意とするのは火で、俗に『狐火』と呼ばれる青白い炎を操ることができる。

『実現』

思ったことや希望を現実化させる能力。繊細にイメージする必要があるため、発動には時間がかかるうえに戦闘中には向かない。しかし、『状態操作』と違って確実に死者甦生ができる。『万物創造』と異なる点は、対象が「モノ」に限定されないこと。その代わり、モノを生み出すのなら『万物創造』の方が効率的。まだまだあるが、代表的なのは上記4つ。

夜白 やしろう 刹那 せつな

性別：男

位：神（階級なし）

年齢：22歳。不老不死だが、身体年齢は増える。最高30歳前後で成長（老化）は止まる。

容姿：長い茶髪に黒い瞳。髪は後ろで無造作に束ねている。左目が青色の義眼。優しそうな端正な顔立ちで、身長は188センチ。女性に人気があるが、本人は自覚なし。

性格：事なかれ主義だが、眼の前で困っている人がいるとほっとけない。他者の意見を尊重し、言うべきところは言う。NOと言える日本人。

魔導師ランク：測定不能

ラカンによる強さランク：同上

始動キ　：ペル・ペリユ・ペリユトーン・スレイプニル

使用魔術：『陰陽道』・『神道術』

五行を操るほか、式神を操ることもできる。さらに祈祷を使った回復術や結界など、補助系統の術も充実している。バリアジャケット展開時でも使用可能。

術式：ミッド・古代ベルカハイブリッド

デバイス：朱鷺<sup>トキ</sup>

インテリジェントデバイス。人格は女性。待機状態は左目の義眼。バリアジャケット時は青色の軍服で、背中に紅い翼が展開される。この翼は飛行機能だけでなく、オートで刹那を守り、敵を攻撃する。また、両手に日本刀タイプの刀が出現する。この刀は時空や敵の戦意、心をも斬ることができる。また、斬撃を飛ばし、遠距離攻撃も可能。西洋魔術や神道術との組み合わせも可能。また、バリアジャケットは視覚迷彩により隠すこともできる。

能力：

『<sup>ルシファース・</sup>世界基礎の正体<sup>ギフト</sup>』

神の叡智でもある火と光を自在に生み出し操ることができる。これらの火や光は刹那本人でないと消せない。さらに体を火や光にできる。

『<sup>シンフォニー</sup>永久調和』

光と闇、火と水、善と悪などの相反するモノを完璧に調和させることができる。応用性が高く、喧嘩を諫めるといった地味な使い方が、火と水属性の魔法の同時発動・合体などが可能。

『閉鎖の神眼』

見たあらゆるものを『閉じる』ことができる神眼。空気を閉じれば結界を生み出し、記憶を閉じれば記憶の封印が可能と言った応用性に優れる神眼。数ある神眼の中でも応用性はトップクラス。

夜白やしろ 煌月こうつき

性別：女

種族：準最高位神獣『麒麟』の上位種・白銀種。

年齢：自由自在。普段は18歳前後の姿になっている。

容姿：透き通るような白に近い水色のストレートヘア、長さはセミロング（肩まで）。瞳の色は蒼。肌は輪廻に負けず劣らず白い。身長は180センチ以上。スタイルもかなり良く、美人というよりカツコイイ系。服装は黒いスーツか黒を基調とした執事服。真の姿は白銀の姿の『麒麟』。（モンオンのキリンにそっくりだが少し違う）  
性格：刹那至上主義・ヤンデレ・冷静で無表情。

ラカンによる強さランク：測定不能

始動キー：ジルバ・ド・ヴァイス・オロラル

能力：

『水雷主』

水と雷を自在に操れる。体を水にしたり、雷にすることも可能。雷になれば、雷の速度で移動ができる。また、雨を降らせることもでき、その雨を硬質化させたり、雨と視神経を接続することもできる。

『状態操作』

輪廻のそれと同じ。

『絶対選択権』

対象の効果や範囲を選択することができる。空気を物質化させたり、自分に触れるものを選択させたりすることが可能。また、煌月が選択した結果『書き換えられた』効果・範囲は煌月にしか解除できない。

『霸瞬』

麒麟の上位種しか使えない独自の移動術。一瞬で『ありとあらゆる場所』へ自分・自分が触れている者を移動させる。過去や未来にも移動が可能。

まだまだあるが、代表的なのは上記4つ。

アリスⅡヴェロキアⅡローズタニアⅡスウォルディナ

位：最高神

役職：創造神

容姿：朱色のショートヘアに黒い瞳。身長は140センチ程度。服装は白いワンピース。

性格：気弱・口下手

能力：

『創造』

世界・神・生命などありとあらゆるものを自在に生み出すことができる。特に制限はないが、一応神の法には縛られているが、その法もやろうと思えば敗れるレベル。

『消滅』

自身が創造したものを消す能力。自分が創造にかかわっていないものは消せないが、自分が生み出したものが生み出したものは消せる。

『全智の神眼』

見た対象が将来どうなるかを知ることができる神眼。ただし、視界に映し出されるのは起こり得る『もっとも可能性の高い未来』にすぎず、百発百中ではない。

## 設定資料1（後書き）

次回から本編スタートです。

その後、もう1つキャラ紹介を行います。



**第1幕「構成、それは必然なようで偶然なアルス・マグナ」（前書き）**

＊アルス・マグナ……スペインの詩人兼哲学者ルルスの著した真理  
へと導く書。意味は『大いなる術』。

新しい家族の登場です。

## 第1幕「構成、それは必然なようで偶然なアルス・マグナ」

ああ、もう……七面倒だ。マジ勘弁。

はた迷惑と言つべきか、魔法世界での戦争、通称『大戦』は旧世界にも飛び火　もちろん『裏』で　した。

その残り火を消しつつ、私たちは旅を続けていた。

その途中で、仲間　　というか家族が2人増えた。

1人はマナ<sup>ニ</sup>アルカナ。後に夜白<sup>やしろ</sup>の性を貰い、さらに龍宮<sup>たつみや</sup>神社に一時預けていたためマナ<sup>ニ</sup>アルカナ<sup>ニ</sup>ヤシロ<sup>ニ</sup>タツミヤとなった、褐色肌と三白眼が特徴の『魔眼』<sup>ハーフ</sup>持ちの半魔人。

紛争地帯でノビているところをお兄ちゃんが保護し、そのまま面倒をみることになった少女だ。

私が言うのもなんだが、戦闘能力がかなり伸びしろがありそうだったので、お兄ちゃんと私、そして武器の専門家<sup>エキスパート</sup>である煌月で徹底的に指導した。

もつとも、私とお兄ちゃんは魔法や格闘術を軽く教えた程度で、もつぱら煌月が担当していたのだが。

結果、マナの戦闘スタイルは、煌月のそれに近くなった。

つまり、強化術を用いた速度で敵の最中に飛び込んで、影の中

『足元戸棚』<sup>シャドウ・キャビネット</sup>から様々な銃火器を取り出している殲滅戦法、あるいは超長距離からの狙撃。

一方、性格はずっとお兄ちゃんに付いていたせいか、お兄ちゃんの

『別の一面』だけ似ることになった。  
具体的な言つと、優しいが、現実主義者リアリストで皮肉屋で少々自虐が混じっている感じ。

どうやら彼女の中では、『理想の性格』お兄ちゃん』という方程式が組み立てられたらしい。

そしてもう一人は、私たちは『サク』と呼んでいる少女、桜咲刹那さくらさきせつな。烏族と人間のハーフなのだが、どういふわけか純白の翼を持ち（普段は見えない）、『忌み子』として里から追い出されたところを、偶然通りかかった私たちが保護した。

彼女もまた、私たちが指導して、一流 と言いはるがかなり強い剣士となった。他にも陰陽術や神道術も教え込んだ。

流派は、『名前がなければ締まらない』という理由で、私たちの性『夜白』と、彼女の性『桜咲』を合わせて『夜桜流』よやくらりゅうとした。

が、実は彼女の名前で一悶着あった。

彼女は夜白の性を欲しがったのだが、彼女の名字が夜白になるとお兄ちゃんの名前ともの見事にカブるのだ。かなり頑固な子なので1ミリも譲らなかつたのだが、流石に異性とは言え全く同じというのは不便だし、私自身、お兄ちゃんと同じ名前を持つ者がいるのは気に喰わない。

白熱した議論（マナは寝ていたため不参加）の末、結局サクの名前は桜咲』ヤシロ』刹那となった。縮めて桜咲』Y』刹那。折衷案だし、まるで外国人のような名前となったが、私の

「どの道すでに鳥族とのハーフなんだし、もう外人とのハーフでつち上げれば良いんじゃない？」

とほぼ苦し紛れに言った一言が原因でこうなった。本人が気に入っているからいいけど。

そんな私たちは、様々な紛争地帯をめぐるは、『裏』に『貸し』を作りながら旅を続けていた。

『こちらマナ……感度は……良好……うん……ポイント予定会敵場所に敵勢力確認……ああ、ちょっと多い……けど……あ、煌月さん……どうします……』

無線機からはマナの声が聞こえてくる。

現在、マナの修行も兼ねて、私たちは戦場にいる。

場所は山麓から中腹へと伸びる山道で、ウネウネと曲がりくねっている。そこを進むと、旧世界のマケドニアと呼ばれる国に入ることになる。現在、私たちが潜んでいるところはぎりぎりギリシア領だが。

『マケドニア』と聞いてピンとこない人がいれば、『旧ユーゴスラ

ピア』と言えはわかるだろうか。

もつとも、ギリシアからすれば、ここマケドニアもギリシアの一部だ。その理由は簡潔に言えば、マケドニアがギリシアの英雄アレキサンダー大王の故郷だからだ。

どこの地域にも、隣同士にある国家が互いに『ここは我が国の領土だ』と主張し合う土地……どこの国のものかはつきりしない土地、言うなれば『のりしろ』のような場所がある。当然、地域紛争が起るとすれば、その『のりしろ』は真つ先に戦場になり得る。

まあ、そんな話はどうでも良い。

要するに、私たちがいる場所も、そういうところというわけだ。

現在、ここで魔法の使用は確認されていない。ならば旧世界における正当法 要は銃撃戦 に頼るしかない。魔法の秘匿という考えからすれば当然のことだ。

「ところで刹那さん……。2人だけに行かせて本当に良かったのですか……。いえ、あの2人の強さは疑いようもありませんが……。敵は1個中隊でしょう……」

茂みに隠れ、日本刀を構えたサクがそう言って、心配そうにお兄ちゃんを見る。

そう、実際の話、戦場にいるのは煌月とマナだけだ。

私たちがいるのは『安全地帯』。

すると、お兄ちゃんはニヤリと笑いながらサクの頭を撫でた。

……羨ましいが、今は我慢しよう。本音を言うと、お兄ちゃんに逆らう敵全ては私が何度も何度も何度も殺してやりたいところだが、今回は修行だ。自重せねば。

「俺達まで出ると、敵サンは出て来ないぞ……連中、エモノが分散してから喰らい付くタイプだ。ここで『戦力分散』という愚を犯せば、奴らは飛びついて来るに違いない……」

「ってことは……煌月さんたちは囿ですか」

「いや、違うよ……まあ、半分正解だけど。私たちは今回、通信専用部隊のふりをしているから……ああ、ここまで言えばわかる？」

私の答えを聞いて、サクの顔は面白いくらい青ざめた。

「まさか……囿は……私たち……ですか……」

サクは思わず空を仰ぎ見た。そして、とうとう本音を口にした。

「あーあ、刹那さんはいい人だし大好きやけど……『敵を騙すにはまず味方から』を地でやるヒトだからイマイチ信用できへんわあ……。しかも、それでいていつも完全勝利なんだから夕チが悪いわ、こっちも文句は言えへんもんなあ……」

サクが嘆いているのを眺めていると、マナから通信が入った。

『見えたよ……連中、アホかい……双眼鏡で監視している。双眼鏡レンズの反射光で、位置が丸見えだよ。あれじゃあ欠陥品の標準器スコップ使っても当たる。

……あ、うん……狙撃だね……撃つよ……おっ幸先良いねえ、クリーンヒットだ……。……あ、気付かれたかな。

……あ、もう1発撃っちゃったよ……射線ではれるかな？……あー命中したし……いいか』

『馬鹿ですかあなたは』

最後に煌月の呆れたような声が混じった。

しばらくして、

『聞こえているかい？』

……ああ、大丈夫だ。全部掃討したよ……じゃ……引き上げるから  
……刹那ランテフホイントさんたちは合流地点に……頼むよ』

マナの晴々した声が耳に届いた。

「よし、任務完了だ。……引き上げるぞ……」。

ところでサク、今回の任務の秘匿コード、読み直してみる」

お兄ちゃんが含み笑いをしながらサクを見る。

言われたとおりに確認したサクは、素っ頓狂な声を上げた。

「えっと……『当該敵勢力排除作戦。コード37564』。……3  
7564……ミナゴロシ……皆殺し……うわっ……冗談やる?……」



第1幕「構成、それは必然なようで偶然なアルス・マグナ」（後書き）

刹那<sup>サク</sup>は気苦労の多いキャラとする気持ちです。  
いえ、決して不憫ではありませんよ？

第2幕「交渉、それは主張と主張がコンフリクトし合っもの」(前書き)

今回は詠春と木乃香の登場です。

## 第2幕「交渉、それは主張と主張がコンフリクトし合うもの」

日本国が誇る古都、京都。

表向き、そこは国内外で知られている観光スポットというイメージくらいしかないが、『裏』の立場からすれば、京都ほど剣呑な場所もないだろう。

『陰陽道』というものがある。

私やお兄ちゃんも使っている、古代中国の『陰陽五行説』　陰陽説と五行説が統合したもので、陰陽説は宇宙の現象事物を陰と陽の働きによって説明する二元論。

五行説は万物の根源（目火土金水）の関係、消長によって宇宙は変化するという説　に基づいて形成された吉兆などを占う方術……  
というのは当然表向きの話。

本来の陰陽道は、日本最古の呪術であり、『式神』という使い魔のようなものを使役したり、『呪符』という札を使って呪いをかけた  
りする対魔術なのだ。

東洋呪術の中では、日本神道術と並びベターな術。だけど、欧米や魔法世界にとってはとてもマイナーだ。

さて、陰陽道はさまざまな流派に分かれ、しかしそれでも全国に渡り主に京都、そして本州などを護って来た。

が、それも今は昔の話だ。

明治維新後、日本国内には西洋魔術が入り込み、『関東魔法協会』を設立してからは、陰陽師たちの地位は下がる一方だった。日本は、ありとあらゆる西洋文化を取り入れた。『和洋折衷』と言われたが、『裏』に限れば折衷どころか『和』の放棄だった。

いくら公的には下火になっていたとはいえ、陰陽師たちは幕末の混乱や鎖国体制を守れなかった。

開国政策が良いか悪いかは別として、それは明治新政府を始めとする『裏』関係者にとっては失望以外の何物でもなかった。

新政府としては苦肉の策だったかもしれないが、陰陽師たちにとっては、それは悪夢の幕開けでしかなかった。

日本という新たな『市場』に目を付けた魔法世界や西洋魔術関係者は、一気に主に東日本に乗り込み、瞬またく間に関東魔法協会という一大勢力を築き上げたからだ。

対して陰陽師たちは数々の流派に分かれており、しかも、それをまとめ上げる立場の者がいなかった。他の流派が何処で何をしているのかすら、わからない有様だったのだ。

結局、陰陽師たちは京都で伝統と格式を誇る家系を、中心に据えた“関西呪術協会”を設立した。

しかし、今の今まで全く別の流派だったのだ。その団結力や結束力は、御世辞にも高いと言い難かった。

そして当然の如く、東の組織と西の組織の仲は険悪で、全面戦争とまではいかなくとも、小競り合いは続いていた。

そんな中、関東魔法協会理事である近衛このえ 近右衛門このえもんの娘が、関西呪術協会の長である青山あおやま 詠春えいしゅん 後に近衛 詠春となった と結

婚した。

今世代のトップ達は、ここぞとばかりに融和策を展開、東西友好に努めている。

しかし、当然西にも東にも、強硬派というべきかタカ派というべきかの派閥や人間は存在する。東西友好は、円滑に進んでいるとはい難かった。

長々と説明した理由。

それは、その近衛 詠春が私たちの目の前で玉露をすすっており、私たちが関西呪術協会の総本山、京都の近衛家 旧青山家の屋敷に呼び出されたからだ。

『裏』関係の紛争地帯を回っている内、私たちはNGOか何かとして認知されていったらしい。

そして、詠春の目にも触れることとなった。

最初は挨拶程度で済ます関係だったが、今では立派な信頼関係を築いている。

お兄ちゃん曰く、

「詠春殿に組織の長としての手腕はないが、個人としてはとんでも

なく信用できる」

らしい。まあ、『英雄』の一員として名を挙げた生粋の剣士に、組織の長の腕を期待する方が無理だ。

実力があるのと、トップにふさわしいというのは、別次元の問題である。

「それで詠春殿、今回のご依頼は？」

お兄ちゃんが聞くと、近衛詠春は湯呑みを置いて、背筋を正した。

「実は、夜白君たちに娘の護衛を頼みたいのです」

娘と聞いて、私は広い庭で1人で手毬てまりをしている和装の少女を眺めた。

「貴方なら気付いているでしょうが、娘　木乃香このかは極東でも最大級の魔力を持っています。　危険すぎる」

『魔力の量』強さ』とは単純には言えない。が、魔力の量が大きい事が勝利への近道になるということは疑いようがない。大技を連発できるという点で、すでに大きなアドヴァンテージだ。

もちろん、当然制御できなければ宝の持ち腐れだが。

「木乃香嬢に魔法を教えれば良いのでは？」

「なにも殲滅魔法を教えるとは言いませんが、せめて結界術と防御陣  
くらいは」

「……刹那さん、それもなかなかどうして高度な術ですよ……」

小声で突っ込みを入れるサク。

まあ確かに高度だが、やってやれないこともない。お兄ちゃんの命令なら、私だつて本気で教えるつもりだ。……それこそ、ボロボロに壊れ果てるまで。

しかし、それを聞いても、詠春の表情は芳しくなかった。それどころか、さらに苦虫を噛み潰したような顔をした。

「私は、親として 木乃香には平穩を味わってほしいのですよ。できれば、『魔法』という血生臭いものに関わってほしくはない……」

「そのために、お兄ちゃんに平穩を捨てる、と？」

「輪廻さん……」

私が感情の無い声で言うと、詠春はますます悲壮な顔をした。

「……関西呪術協会の長として、最低な行動だということは分かっています。人間としても最低でしょうが、このままでは木乃香は対東強硬派に担ぎあげられるか、魔法世界で実験材料モルモットにされるか、大規模術式の発動に利用されるか……。

貴方達にとっては、迷惑でしかないのかもしれませんが……いえ、迷惑でしかありません。……いまや、私は自分の組織の者すら信用できません。お義父とうさん（近衛近右衛門）の組織も、連合（関東のバツク、魔法世界の超大国）も……。

もはや、信用できるのは組織ではありません、貴方達だけなのです……」

そう言って、詠春は深々と頭を下げ……いや、土下座した。

関西呪術協会の長が総本山で、それも傍から見れば全く無関係の個人 私からすれば、お兄ちゃんに至高にして最高の存在なのだが  
に土下座するなど、問題行動では済まない。

下手すれば物理的にも首が飛ぶ 詠春も、そして私たちも。

勿論、私はお兄ちゃんの首を飛ばすなんて、至上の愚行を、容認するつもりなんてない。そんな輩は、この爪で斬り刻んでやる。

「……承知しました」

お兄ちゃんが頷いた。



其れを聞いて、詠春は、慌てて顔を上げた。

「お、お兄ちゃん？」

まさか即答するとは思っていなかった私は、慌ててお兄ちゃんを見る。

が、お兄ちゃんは気にせず、言葉が続ける。

「ですが、いくつか条件があります……」

仕方無しに、私は、お兄ちゃんを見守る事に徹するのだった。

第2幕「交渉、それは主張と主張がコンフリクトし合っもの」(後書き)

次回は今部の直後の話になります。

第3幕「決定、それは蔑まれて称えられる十字の明日」(前書き)

突然ですが、今作のマナと刹那サクナはかなりキャラを変サウえるつもりです。他にヒロインにしたい人がいれば推薦してください。

### 第3幕「決定、それは蔑まれて称えられる十字の明日」

「条件　　ですか…………？」

詠春の表情が少し厳しくなる。

それを見て、お兄ちゃんは『失礼』と言いながら銀色の煙管キセルを取り出した。

「ええ…………。まず1つ、サク　桜咲<sup>ハ</sup> Y<sup>ハ</sup> 刹那に剣術　神鳴流<sup>しんめい</sup>  
剣術を教えていただききたい。それも、貴方直々に」

「…………ゴホツ…………はえっ!？」

突然名指しされ、サクは飲んでいた玉露を噴きだしそうになった。

詠春が一言唸る。

「神鳴流ですか…………。しかし、彼女はすでに、夜桜流とやらの使い手では？」

“京都神鳴流”。

青山家を宗家とする由緒正しき流派。

青山家が関西呪術協会のトップになったのも、詠春自身が『英雄』

となったのも、この流派のおかげと言っても過言ではない。

『裏』ではかなり有名で、主に呪術師の前衛を務めるものが使用する。

要するに、西洋魔術で言うミニステル・マジに相当する者が使用する剣術だ。もともと、剣術だけではなく投げ技などの体術や結界術も存在する。

当然、簡単に他者に伝授して良いものではない。

「夜桜流は完成途中でしてね……まだまだ改良の余地がある。そのため、他の流派も取り入れたいと考えております。

悪い話ではありませんまい。サクの戦力が上がることは、すなわち木乃香嬢を護る楯が強固になるということです」

「それはまあ……」

詠春は顎を撫でて、暫し考える仕種をする。

「……わかりました。桜咲〓Y〓刹那に神鳴流を伝授しましょう。やるからには妥協はしませんが、よろしいですか？」

「それはもう」

お兄ちゃんは紫煙を吐きつつ微笑した。

その後ろで、サクが体育座りで嘆き、マナがそれを苦笑交じりに慰

めていた。

「ウチの意見は……受け入れられないんやろか……」

「まあ、気にするほどの事でもないじゃないか。私は刹那さんに従うよ」

「で、他には？」

詠春がお兄ちゃんを催促する。完全に腹が決まったのか、目が据わっている。

「後は簡単です。」

まずはサクとマナを、木乃香嬢と同じ学校・クラスに行かせていただけよう便宜をはかっていたきたい。護衛という名目にすれば通るでしょう。ああ、2人の学費もお願いします。その代わり、依頼料はけっこうです。

次に、すぐにでも駆けつけられるよう、その学校の近所に住居、できれば一戸建てを用意していただきたい。

次に、『そちら』での自由な活動を認めていただけよう話をつけていただきたい。いちいち侵入するのに許可証を取るのは面倒ですし、向こうとの軋轢も避けたいので」

「その程度の事ならお安いご用です。」

木乃香は、お義父さんが理事をしている『麻帆良学園』に送るつもりですので、どうにでもなるでしょう」

詠春が頷く。この辺りは当然、本人も予測していたことだろう。

「最後……ある意味最も重要ですが、もし止む終えず、木乃香嬢に魔法が知られ、魔法を学ぶことが不可避となった場合、こちらが判断して彼女の了承を得たうえで、彼女に魔法を学ばせることを許可していただきたい。」

木乃香嬢が魔法の存在を知っているか知らないかでは、我々の負担は大きく変わります。

そして、その時は『極力』魔法に関わらせないことをお約束しましょう。」

「……ふむ」

娘の未来にかかわる重大な事柄だからか、詠春は目を瞑り空を仰いだ。

「……わかりました。『極力』関わらせないようお願いします。」

もし、『大きく』関わらせるような事態が起こった場合、最良の判断で独断での行動を認めましょう。」

「その『最良』とはなに　誰にとっての『最良』ですか？」

「……！？……煌月さん……」

珍しく、煌月が口を挟んだ。

それを聞いて、詠春がはつとした表情となった。

煌月の指摘は正鵠せいこくを射ていた。

麻帆良学園都市は、関東魔法協会の本部であり、連合の傘下組織でもある。連合が判断すれば、木乃香を魔法界に巻き込むことも考えられる。

もちろん、そうならないために近衛近右衛門がいるのだが、彼とて万能ではない。

寧ろ、自ら進んで木乃香を関わらせる可能性すらある。

事実詠春は、思い当たる節があるのか　いや、ありすぎるのか、顔を青ざめさせた。もっとも、流石歴戦の剣士というべきか、常人には読み取れない程度の変化だったが。

しかし、無然とした表情は隠そうともしていない。そもそも隠す必要すらないのだが。

その時、私たちは何をとれば良いか？

お兄ちゃんをとることは大前提だが、魔法世界と麻帆良と木乃香、どれを優先すべきか？煌月はそれを聞いているのだ。

「……木乃香です。麻帆良よりも、連合よりも、娘にとっての『最良の選択』をお願いします」



詠春は決意に満ちた表情でお兄ちゃんにもう一度、頭を下げた。

「……わかりました。御依頼、しかと引き受けました。木乃香嬢の『平穩』を優先して行動します。先方にも、そうお伝えください」

お兄ちゃんはそう言って、サクとマナを見た。

「というわけだ。俺たちもいるから心配するなよ。いざとなったら恥も外聞も捨てて俺たちを頼るんだ……決して無理はするなよ。俺は」

「『お前たちが全員揃っている』『平穩』が何より大事だ』だらう？……安心してくれ。貴方を悲しませるような真似は絶対にしない。私も、貴方が見ていないところで野垂れ死ぬなんてまっぴらごめんだよ」

マナがそう言って肩をすくめる。

「右に同じです。私には大切な家族がある。それを失いたくはありませんし、自分から離れるのも嫌です」

キリツとした表情で、サクが続けた。

それを見て、詠春が破顔した。

かつての自分の『仲間』、そして同じく『英雄』となった者たちのことを、思いだしているのかもしれない。

第3幕「決定、それは蔑まれて称えられる十字の明日」（後書き）

3 - A (2 - A) でマナとサク以外ヒロインにしたいキャラがいれば推薦してください。

木乃香は準ヒロインです。

第4幕「基幹、それは中心と外部のプリンスIPルの相違かつ複合」(前書き)

マナとサクは中学からの編入です。

#### 第4幕「基幹、それは中心と外部のプリンスブルの相違かつ複合」

マナとサクを送り出そうと思った矢先、私たちは麻帆良学園本校女子中等部にある学園長室に呼び出された。

新居は女子中等部のすぐ近くに用意され、マナとサクは引越作業のためここにはいない。

麻帆良学園都市。

明治中期に建てられた、埼玉県にある世界最大規模の学園都市。

というのはあくまで表舞台での話。その実態は、関東魔法協会の本部で魔法使いの教育機関である。

もともと、教員や学生、住人全員が魔法関係者というわけではなく、むしろ『裏』の者は一握りに限られる。

問題なのは、麻帆良学園は決して安住の地とは言い難いということだ。

関西呪術協会の総本山である京都が『裏』では剣呑なのと同じように、ここもまた剣呑だった。というか、現在進行形で戦場。弩がつかく程危険だ。

平和ボケしているけど。

ここには『図書館島』という施設があり、そこには洋の東西問わず、魔法関係者なら垂涎ものの蔵書が数多くある。

なぜそんなことになっているのかという説明は今置いといて、そんなモノを抜きにしても、関東魔法協会本部というだけで、敵対組

織から狙われるには十分すぎる理由だ。

そのため、この学園都市は高度な結界　私ならデコピンで壊せる  
くらいの脆い結界だが、人間の基準なら凄じほう　が張られている。  
る。

なにしろ、前述したとおり、魔法関係者はいかに麻帆良といえども  
一握りにすぎない。残りの住人のほとんどは、戦場の『せ』の字も  
知らない一般人だ。

侵入者にあつたら、拉致られるか、殺されるか、人質となるかのど  
ちらかしかない。何れにしても、避けたい　いや、避けなければ  
ならない事態だ。

だからこそ、この魔法教員はそれなりに腕の立つ者が多い。  
仮にも、極東の一大拠点というだけのことはあるというわけだ。

さて、私たちの目の前には、人間の骨格の限界を超越した頭部を持  
つ、仙人のような老人、近衛近右衛門学園長が執務机に備わってい  
る椅子に腰かけている。

そして彼の横には、学園ナンバー2、『英雄』の組織の一員だった  
英語教師タカミチ<sup>たかみち</sup>Ⅱ<sup>たかみち</sup>高畑教諭が控えていた。

それに面と向かって私たちは立っている。

学園長の正面にお兄ちゃんがいて、その後ろで学園長から見て右脇  
に私、左脇に煌月が控えている形に立っている。

「…………へっ…………教師、ですか？」

お兄ちゃんが軽く首を捻ると、学園長は微笑みながら頷いた。

「うむ、夜白殿に、木乃香たちのクラスである1-A…………そろそろ2-Aになるのじゃが、その担任をやっていただきたいのじゃ。実は現担任のタカミチ君は、これから『裏』関係の仕事で忙しくなるので、魔法関係こじちの都合で生徒の監督が不十分になり、肝心な時にいなかったり、学力低下を招いては目も当てられんから。生徒の監督を疎かにはできん。麻帆良は教育機関でもあるのじゃからのう。

そんなわけで代理の先生を探していたら、ちょうど良く婿殿（近衛詠春）が木乃香の護衛としてお主たちを送ってくれたというわけじゃ。しかも、婿殿に『私では勝てない』と言わせるほどの実力者であると聞く。学もありそうじゃし、頼まれてはくれんかのう？ ついでに警備員も受けてくれると有り難いのじゃが」

学園長の上から目線の、しかもお兄ちゃんの『平穩』をぶち壊しにするような提案に私は密かに歯を食いしばる。隣をチラリと見ると、煌月も、相変わらずの無表情ながら、怒りのオーラを放っていた。

私は自重しなければとは思いつつも、口からあふれ出る言葉を止められなかった。

「ちよいと御伺いいたします……。貴方たちは、お兄ちゃんの都合を考えているんですか？

こっちはただでさえ、護衛という任務を受けているんだよ。この状態で教師と警備？ 巫山戯てんじゃねえよ、お兄ちゃんを過労死させる気？

お兄ちゃんは『平穩』を望んでいるの。お兄ちゃんが望まないモノは、世界に存在する資格もないの。

殺されたいの？ 殺されたいんだよね、お兄ちゃんの敵は、自殺志願者ばかりだもんね。いいよ、何度でも殺してあげる。私の拷問は楽しいよ……。なにしろ、何億回、何兆回と生き返って、何度でも受けられるんだから」

私が言い終わると、煌月もそれに同調する。

「私も輪廻に賛成です。私たちは、あくまで近衛詠春殿の依頼で、麻帆良に来ているに過ぎません。

貴方達に従う義理はないはずです。

成程、担任になれば、木乃香嬢を護りやすくもなりましょうが、同時に接点が大きくなりすぎる危険もあります。単に彼女の護衛なら、マナとサクで十分だと当方では判断します。

付け加えるなら、片手間で行えるほど、護衛の任務は簡単ではありません。学園長殿は、御孫さんの護衛が片手間で良いと？ だとしたら、あまりにも楽観的な考えだと言わざるを得ません。

それに、私たちは、あくまで刹那様を最優先で行動します。刹那様が求める『平穩』を壊すのなら、麻帆良を消させていただきます。

それとも、若しくは刹那様をそのクラスの担任に据えなければならぬ他の理由でも御有りですか？」



煌月の最後の一言が凶星だったのか、学園長は僅かに片眉を上げるが、同時に、私たち2人の殺気にあてられ、高畑教諭ともども震え上がった。

人間に最高位神獣と準最高位神獣の殺気に耐えろというのが酷な話だ。

本気を出せば、私は殺気で人を殺せる。

お兄ちゃんの敵に、そんな楽な死に方など、させるわけもないのだが。

「ッ!!?!?.....むう、年寄りにはキツイのう。まさかこれ程とは.....。」

お主たちを敵に回しても、良い事などなさそうじゃのう。

隠し事もするべきではないのう.....」

学園長はそう言って、理由を語り始めた。

曰く、来年の3学期（2月）から、大戦の『英雄』の1人の息子であるネギ「スプリングフィールド」という少年が件のクラスの配属となるらしい。

本来なら担任とするつもりだったが、どうしても高畑教諭が辞退せざるを得なかったので、代わりに新任教師を入れ、ネギを副担任にすることにしたそうだ。

そのネギだが、『英雄の息子』として色々と狙われているらしい。

当然だ。戦争の英雄は敵からすれば怨敵以外の何物でもない。『人

を救った英雄』ではなく、『人を殺した英雄』なのだから。

が、困ったことに当の本人は全く自覚していない上に、魔法の危険性も正義の実態もまるで理解していない。よほどチャホヤされて育ったとみえる。正義とはあくまでエゴや主張にすぎないモノだ。

……そんなこと、ある意味では常識だろうに。

天狐キツネに言われちゃあ、人間ちひめくたもお終いだ。

そこで、お兄ちゃんに、ネギの護衛兼教育係を頼むつもりだったらしい。

「勘弁してくださいよ。そんな少年が関わってきたら、木乃香嬢の危険度はマッハで跳ね上がります。下手をすれば、巻き添えを喰らいます」

お兄ちゃんが、慌てて首を振った。

「最低でも、木乃香嬢とネギはなるべく関わらせないようにしていただきたい。貴方は御自身の孫を死なせるつもりですか……?」

「そんなことはない。

じゃが、どうせ魔法に関わる可能性があるのならば、ネギ君という知名度ネムハリユーのある者の従者として少しでも名を上げてくれれば……手出しはされ難くなる。

ネギ君の従者なら、味方も増えるはずじゃ」

「それは逆効果ですよ、それ以上に敵も増えます……。木乃香嬢は喻えるなら核爆弾です。敵が強力な核を持っているのなら、それが『使用』される前に『奪取』か『破壊』を試みるのが人間の性であり、道理です。焦った西か元老院（連合のトップ）が強硬策に出かねません。ましてや、件の少年はまだ未熟でしょう……。鴨が葱背負っているようなものです」

「ふむ……。夜白君も婿殿と同じ考えかの」

「私は詠春殿より、『連合や関東よりも木乃香嬢の平穩を優先する』と言われており、それを約束しております。

最悪の場合、麻帆良を滅ぼしても木乃香嬢を護るために許可されております」

「ぐう……。それは……。聞いておるが……」。

わかった。どうやら、君のいうとおりにした方がリスクは少ないよ  
うじゃの。

それで、どうしても教師と警備員は駄目かのう……。人手不足が深刻  
なのじゃよ」

学園長が折れると、お兄ちゃんは腕を組んで、考え込む仕種をした。

「……。条件があります。

- 一つ、副担任に輪廻を据えて、ネギ少年は副担任補佐とすること。
- 一つ、警備の担当は煌月……。あとマナと桜咲にすること。
- 一つ、マナと桜咲は私たちの新居に住むことを許可すること。ただ

し、同時に寮に部屋も用意すること。  
一つ、それ相応の賃金を私たち全員に支払うこと。  
一つ、私たちのやり方や行動にあまり干渉しないこと。  
最後に、木乃香嬢とネギ少年の関わりを極力防ぐこと。そして、そのように私たちが行動する許可をすること。  
これさえ飲めば、担任になります」

結局、学園長はこの条件を飲み、お兄ちゃんは晴れて来年から2・A担任、兼社会教師となった。

……ああ、しんどい。

第4幕「基幹、それは中心と外部のプリンスブルの相違かつ複合」(後書き)

タカミチが忙しくなったのは、刹那たちが暴れた反動です。

## 設定資料2（前書き）

今回はマナと刹那<sup>サクナ</sup>の紹介です。

2人とも原作よりだいぶ強いです。

あと2人とも、すでに刹那と仮契約しています。

神鳴流のルビをミスりました……なんてことだ。やっつけてしまいました。御指摘くださった方、ありがとうございます。

## 設定資料2

マナ⇨A⇨Y⇨タツミヤ（マナ⇨アルカナ⇨ヤシロ⇨タツミヤ）

原作との変更点：

かなり刹那に依存しているほか、刹那との関係もかなり深いものになっている。夜白家の家族になって以降、経済的な面は刹那が管理しているので、原作ほどお金に五月蠅くない。刹那とは大抵コンビで行動し、たまにボケては刹那から突っ込みを受ける。

現実主義者で皮肉屋かつ自虐的な面を持つが、『家族の愛情』というものを受けているため、それほどストイックでもない。が、仕事肌であることには変わらず、『裏』では原作よりも知名度が高い。

刹那の真似をするのが好きで、たまに煙草を吸う。

戦闘能力：

煌月から教わった戦法を好んで使用する。超至近距離での火力重視の射撃や近接格闘戦、或いは超長距離射撃を使い分ける。が、大抵は刹那とコンビで戦闘を行う。ナイフや刀なども扱う。また、刹那から神道術を習得しており、回復や結界などのサポートもこなせる。

『韋天』

煌月の『霸瞬』の劣化版。流石に世界移動や時間移動は無理だが、速度だけなら煌月に近い瞬間移動術。純粹な体術で、気や魔力は使えない。ぶっちゃけると『ワンピース』の六式のアレ。

『足元戸棚』

これも煌月から伝授された技。影の中に武器を仕舞い込み、召喚する。影の空間は実質無限なので武器の収納数に制限がなく、大型の銃器などもわざわざ分解しておく必要がない。さらに『〇〇が欲しい』と思うだけで、瞬時にマナの元に出現するので、『念じる』というワン・アクションだけで武器を装備できる。

アーティファクト：『御転婆少女』

規格外な狙撃銃で、『とある魔術の禁書目録』の砂皿緻密すなざらちみつが使用し

ていた学園都市製磁力狙撃砲『MSR-001』とほぼ同じ。電磁石でスチール製の弾丸を発射するが、動力を魔力、あるいは気に依存している。威力は低いが反動が無く、狙いは精密な上に火薬を使わないため無音である。が、一番規格外なのは弾丸で、様々な付属効果を持つ弾丸が各種用意されている。なお、弾丸は自動補給される。

『転移弾』

発射した後想像通りの位置・座標に転移させられる弾丸。転移可能範囲は狭いが、極端な話、真後ろの敵も狙える。

『操作弾』

発射した後マナの思い通りに弾丸の軌道进行操作できる。が、弾丸は直角にしか曲がれない。

『速度変化弾』

発射した後の弾速をある程度操作できる弾丸。

他にも種類はあるが、代表的なのはこの3つ。

桜咲<sup>おんさく</sup>⇨Y⇨刹那<sup>せつな</sup>（桜咲⇨ヤシロ⇨刹那）\*本作では主にサクと表記原作との変更点：

マナと同じくかなり刹那に依存している。独自の剣術『夜桜流』を使用する。ただ『夕風』は所有している。刹那のアフターケアがばつちりだったうえ、刹那たちが人外揃いであるということもあり、自身の生い立ちや背中<sup>せなか</sup>の白翼にそれほどコンプレックスを持っていない。原作よりも融通がきくが突っ込み体質で、気苦労も多い。また、原作よりも学校の成績は優秀。マナとはセット扱いされることが多く、マナよりスタイルの面で敗北していることをかなり気にしている。



木乃香との関係は『幼馴染』だが、原作よりも一緒にいる期間が短かったために精々仲の良い『友達』程度。が、コンプレックスが無いこともあって関係は良好。

生真面目で、マナの喫煙を良く思っていないが自分もしてみたいという欲求はある。

戦闘能力：

煌月や刹那の剣術をモデルにした『夜桜流』剣術を使用。彼女の実力が高いこともあって、『裏』世界ではかなり有名。『夜桜流』は敵の殺害を第1目的とした実戦的な流派で、彼女自身、人を殺すことにそれほどためらいがない。が、戦闘狂ではない。また陰陽道や神道術も使いこなし、彼女の展開する結界は麻帆良のそれよりも強固である。あまり多用しないが遠距離専用に弓矢を使う。が、遠距離戦はもっぱらマナに任せている。

『韋天』

マナのそれと同じだが、マナよりも若干速い。

『韋天斬』

『韋天』の速度で敵を斬り裂く。

『式武刀』

式神を己を媒体にして、もう1人の自分を作る。その分身との連携戦術。式神を2人にした『参武刀』をあるが、こちらはかなり高度な上に気や魔力の消費が激しい。

アーティファクト：『変幻刀・羽羽斬』

身の丈ほどの長刀。決して折れず、刃こぼれもしない刀。変幻刀の呼び名の通り、刃が伸びたり枝分かれしたりと自在に変化する。また、破魔及び不死殺しの効果があり、人も斬れるが妖怪や吸血鬼が相手の時に真価を発揮する。また一振りで鎌鼬を起こし、広範囲を攻撃することもできる。また、刹那が『敵』と認識した者しか斬らない。言い換えれば、仲間を巻き添えにしても被害は出ない。



## 設定資料2（後書き）

様々な御意見ありがとうございました。  
転生者は本作の方針上出せませんが、オリジナルの敵は出すつもりです。

第5幕「初陣、それは混沌とした霧に差す木漏れ日と朝霜」(前書き)

2 - A組初登場編です。

## 第5幕「初陣、それは混沌とした霧に差す木漏れ日と朝霜」

マナとサクを送り出して数カ月たった後、麻帆良は新年を迎えた。

そしてサク達が二年生となる四月の新学期。私たちは、廊下を歩いていた。

前任者である高畑教諭からの引き継ぎは、あっさりと終わり 向  
こうからの依頼だったのだから、当然といえば当然だが 高畑教  
諭は終わるやいなや、スーツケースを片手に出張した。

「まさか、教師をする日がこようとはなあ……。まあ、人生経験と  
すれば悪くはないか」

そう言うお兄ちゃんの横で、私は名簿を覗き込んだ。

麻帆良学園本校女子中等部 2 - A

担任：夜白 刹那

副担任：夜白 輪廻

出席番号1番 相坂 さよ

2番 明石 裕奈

3番 朝倉 和美

4番 綾瀬 夕映

31番	Zazie Rainyday
30番	四葉 五月
29番	雪広 あやか
28番	村上 夏美
27番	宮崎 のどか
26番	Evangeline A.K.McDowell
25番	長谷川 千雨
24番	葉加瀬 聡美
23番	鳴滝 史伽
22番	鳴滝 風香
21番	那波 千鶴
20番	長瀬 楓
19番	超鈴音
18番	Mana A.Y.Tatumiya
17番	椎名 桜子
16番	佐々木 まき絵
15番	桜咲 Y 刹那
14番	早乙女 ハルナ
13番	近衛 木乃香
12番	古菲
11番	釘宮 円
10番	絡線 茶々丸
9番	春日 美空
8番	神楽坂 明日菜
7番	柿崎 美砂
6番	大河内 アキラ
5番	和泉 亜子

\*補足：2月より副担任補佐ネギII スプリングフィールド就任予定

以上、三一人が私たちが担当することになる生徒たちだ。

「こーやって見ると、色々つまあ……個性には事欠かないクラスだねえ……」。

真祖の吸血鬼エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウエルに少なくとも半分人外が2人……。  
もっといういろいろいるっばいねえ。ビックリ人間コンテストの優勝でも狙えそつだよ。

加えて、担任が神かつ至高の存在で、副担任が天狐<sup>キツネ</sup>たあ……」

私たち二人は苦笑しながら、件の教室の前で立ち止まった。

「……ねえ、何かトラップが仕掛けられてあるんだけど」

「……ああ……あれだ、若気の至りってやつだ」

「……透視したんだけど、シャレにならないものもあるんだけど」

「……」

「……よし、マナとサク以外皆殺しの方向で」

「落ち着け……。はあ……もういいや。俺から行く」

お兄ちゃんはため息をつきながら、トラップ群を華麗にスル　しつ  
つ壇上へと上がっていった。

私もそれに続く。

騒がしかったクラスが静寂に静まり返った。

お兄ちゃんはチラリと私を一瞥すると、チョークで黒板に私たちの  
名前を書き込みながら、自己紹介を始めた。

ちなみに今のお兄ちゃんはスーツ、私はシャツにスラックス、ジャ  
ケット姿。二人とも、黒を基調としている。

「　　というわけで、今日からこのクラスの担当に任じられた夜白  
刹那、隣が副担任の夜白輪廻だ。  
新米だが何卒よろしく頼む」

「……………」

あ、挨拶するべきだったか？

何か言おうとした瞬間、

【か、カッコイイ……………】



【綺麗……】

という、2つの評価が押し寄せて来た。  
何か……熱い視線と吐息を感じる。

よく見ると大勢、というかほとんどが目を輝かせるか頬を赤く染めている。

そんな中、木乃香は嬉しそうに手を振り、サクは微笑みながらピースをし、マナは音が鳴らない程度に拍手しながら笑っている。

……お兄ちゃんがカツコイイのは当然として、私は美人なのか？  
お兄ちゃんに気に入られるなら何でも良いので、特に着飾ろうとしたことはないが……。

そんなことをしている内に、マイクを持った少女が立ちあがった。

「はいはい、收拾着きそうにないから、私が質問を一手に引き受けるよ。……あー……はいはい其処静かに……コラアツ！ 抜け駆けとか言ーなッ！ー！」

朝倉だった。どうやらこういうことが好きな性分らしい。

彼女はまずお兄ちゃんに質問をしていく。

「名前は？」

「夜白刹那」

「年齢は？」

「三〇」

「血液型は？」

「A B。ちなみにマイナス」

「趣味は？」

「読書と映画鑑賞」

「担当科目は？」

「社会。日本史が専門だが」

「好きなタイプは？」

「世話好きで家事ができる人」

あ、サクがガッツポーズしている。

「横の輪廻さんとの関係は？」

「妹。義理だがな。もう妻みたいなもんだよ」

あ、サクが机に突っ伏した……。

ってマナ、こっちに指弾を飛ばそうとするな、条件反射で殺してしまえそうになる。お兄ちゃんに嫌われたくないから止めて。あと殺気だすな、隣の子が怯えているよ。

というかお兄ちゃん、今の問題発言……でもないか。お兄ちゃんの妻は私と煌月だって決まっているし。

煌月とはかなり気が合うから、お兄ちゃんの妻となることを許しているのだ。私は、お兄ちゃんを縛り付けたりしない。お兄ちゃんが幸せならそれで良い。

【おおーーーーー!!!!!!】

「コラ、うつさい！」

……じゃあ、このクラスの中でタイプの人を。第一印象でもいいので……」

「……ん〜……じゃあ……あー……出席番号……一番から五番の人で」

「適當すぎるッ!？」

ちよ、せめて名簿じゃなくて顔を見て決めてくださいよ……」

「すまん、優柔不断だもんで」

「はぁー……じゃあ、『ヤシロ』って珍しい苗字ですけど、うちのクラスの桜咲さんとタツミヤさんにも名前に『ヤシロ』って入っているんですよ。……関係ありますか？」

「おおありだ。件の2人は自分が保護責任者をやっている。まあ、義理の親だな」

【ええー……！！！！！！！！】

次に、私に質問が移った。

「名前は？」

「夜白輪廻、よろしく」

「年齢は？」

「女性に聞くなボケ。宿題追加ね」

「ヒドッ！……マジすみませんでした。だから睨まないでください……。  
血液型は？」

「A B。ちなみにマイナス。あと年齢は一六歳。一応、大卒」

「答えるんですか、しかも若ッ！？」

「……趣味は？」

「（お兄ちゃんの）鑑賞と（お兄ちゃんの）想像」

「……………？……………まあサクサク行きましょ。  
担当科目は？」

「国語。古典が専門かな」

「好きなタイプは？」

「私の隣にいる人」

【おおー……………！！！！！！！！！！】

「コラア！！！！ リアクションにも限度があるでしょ、ビー・クー  
ルツ！！！！」

……………じゃあ次はこのクラスでタイプ」

「同性愛<sup>レス</sup>の趣味はない」

こんな感じで、挨拶しておいた。

あと、しっかりと遮音結界張っておいたから、迷惑はかけていない。  
お兄ちゃんが怒られるのは嫌だし、見てると相手を殺しかねない……。

まあ、頑張っつていこう。



第5幕「初陣、それは混沌とした霧に差す木漏れ日と朝霜」(後書き)

朝倉のキャラがイマイチ掴めずこんなことに。

普通、取材中に外野が騒がしかったら起こりますよね？

**番外編第1幕「彼女の夜は刃に映る自分のようで／Unchangeability」**

今回はサクとマナ編？です。

基本的に番外編は、サクとマナや2 - Aメンバーを中心にやっています。



番外編第1幕「彼女の夜は刃に映る自分のようで／Unchangeability」

麻帆良学園都市の、とある校舎の屋根の上。月が輝くその場で、

「……………下弦かげんの月がキレイな夜には餡蜜あんみつが食べたくなるね」

「どんだけ食べれば気がすむんや。いい加減かげんにしなはれッ！」

二人の少女が漫才をしていた。

「……………」

「……………」

少女たちは互いに見つめ合い、

「……………締まらないな」

「……………まったく」

二人揃ってため息をついていた。

褐色の一八〇センチを越す長身。黒いジャケットにスラックス姿の

少女はマナⅡAⅡYⅡタツミヤ。

その隣で同じく黒い和服で身を包んでいるサイドテールの少女は桜咲ⅡYⅡ刹那。通称『サク』。

花盛りの乙女2人が、こんなことをしているのにも理由わけがある。

事の発端は、2人の保護責任者で愛する男、夜白刹那が言った一言だった。

「学生なんだし、2人とも戦いだけじゃなくて趣味を見つけたらどうだ？」

そう言われ、少女2人は、碌に趣味と呼べるものも持っていないことを今更ながら自覚した。

苦し紛れに『修行』やら『射撃』やら『精神統一』やら『暗殺』やら言っても、自分たちが悲しくなるばかりである。

もちろん『愛する夜白刹那と一緒にいること』とも言えないし、言ったら言ったで『妻』2人になにをされるかわかったものではない。

「とにかく、刹那さんに気を遣わせるような真似は避けたいし……」

「うむ……」

刹那が『木乃香の護衛』にかこつけて、学生生活を堪能させるため

に自分たちを送り込んだということにサクとマナは気付いていた。

あの人には感謝してもしきれない。だからせめて、心配させたくないし、悲しませたくない。

それが、2人の本音だった。

だからといって、趣味に『漫才』を加えようとするのも、2人の少々ズレた一般常識の賜物である。

「はてさて一体どうしたものか。

……ん、マナ……仕事だ」

「やっとかい？」

サクが顔を引き締めると、それを見たマナが顔を綻ばせた。

屈託のない笑顔。それは、『獲物』の襲来を喜ぶ笑顔だった。

マナは決して殺しが好きでも、戦闘が好きでもない。それはサクも同じだった。

彼女二人の戦闘に対する見解は、夜白輪廻と夜白煌月に酷似していた。

それが偶然の産物か、輪廻たちがそうなるよう教育したのかはわからない。

が、少なくともサクもマナも、その『見解』自体に違和感や嫌悪感

を覚えていなかった。

2人が戦闘に対する見解　それは、『何とも思わない』。これに  
尽きた。

敵が来たら殺す。それはごく『自然』なことであり、嫌悪感や快感  
を得るようなものではない。

人間が箸を持つ時に、特に感想を抱かないのと同じだった。

そもそも怒りで人が強くなるだろうか？　喜びで判断力が増すだろ  
うか？

二人は、徹底した現実主義者リアリストだった。戦いに怒りや喜びを感じるこ  
とに、何の価値も見出せないでいた。

もちろん、戦闘に感情が混ざらないという意味ではない。

輪廻や煌月がそうであるように、サクにもマナにも、愛する刹那の  
『平穏』や彼自身を狙う敵を憎むという感情はある。

しかし、この『憎悪』は、輪廻と他三人では少々異なる。

輪廻は、拷問好きであり、筋金入りの加虐性愛者サディストだ。

彼女は生と死を操れる。憎い敵は、時間を立てて丁寧に拷問して殺  
す。死んだら、また生き返らせて拷問する。

だから輪廻は、『手加減』に関しては一流だった。

今まで輪廻を怒らせた敵は、少なくとも一〇桁は、生と死を繰り返  
させられた。短くても万、長ければ兆・京の拷問を受け、身も心も  
壊れて、惨めに死んでいった。

しかし、煌月、サク、マナは違う。  
煌月は稀に拷問を行うこともあるが、大抵は一撃で敵をしとめる。  
サクとマナも同様。

憎い敵はできるだけ生きているところを見ていたくない。だからすぐに殺す。とつとあの世に行つてほしい、という考えである。

四人に共通していること。

それは刹那との平穏を望み、刹那を愛し、敵は許さないということだ。

マナが笑っている理由。それは彼女が、頑張つて刹那に褒めてもらうことに、至上の喜びを感じているからだ。

まるで犬か何かのようだ。尻尾があつたらさぞかしこれ見よがしに振っていることだろう。

そう考え、マナは苦笑しながら、胸ポケットからハイライトという銘柄の煙草とライターを取り出す。

これは、元は刹那の煙管キセルを吸う姿に憧れて始めたものだ。

いかに背格好が中学生離れしているとはいえ、教育機関でもある麻帆良で、未成年者の喫煙が許されるわけもない。バレれば、生徒指導室に直行である。

当然、未成年者が容易く煙草を購入できる場所でもないが、マナは独自のルートで入手していた。

刹那にバレると責任を感じそうなので、マナは刹那にも隠れて吸っていた。

煙草は毎日吸うんじゃないくて、たまに吸うからこそ美味しい。

肺の中を煙で満たしながら、マナは『韋天<sup>イテン</sup>』で飛び出していったサ  
クの姿が、闇に溶け込むのを眺めていた。

「やれやれ、碌に吸わせてもくれないのかい？」

マナは咳きながら、煙草を携帯灰皿に押しつけた。

「……………今日は　スナイパーデイか、ファイアーデイか……………」

馬鹿ばかりだ。

サクはそう思い、小さく舌を打った。  
相棒<sup>マナ</sup>を含む、味方への罵倒ではない。逆だ。

他国の魔法結社の手の者らしい男たちが数人、彼女の目の前でたむろしていた。

「どうやら、攻撃を仕掛けるタイミングを見計らっているらしい。」

目の前』とはいっても、常人の視力ではこの闇夜で視認など、とてもできない距離から、サクは男たちを見ていた。

周囲への警戒、気配の絶ち方、隠密行動のスキル、どれをとっても最低クラスだ。

敵を見くびるほど自身の力に自惚おぼれてはいないが、したくなるほど敵は間抜けだった。

思わず、囁かささと疑ってしまいたくなる。

まったく、まだ宿題も残っているのに……。

心の中で文句を言いつつ、サクはどのように攻撃するのが最短で済むかを計算していた。

と、その時。

背後に人の気配を感じた。

思わず『夕風』の刃を抜きそうになったところへ、同胞の声が響いた。

「サク、柄から手を離してくれ。同士討ちはまっぴらだ」

サクの肩に手を置きながら、闇夜にマナの顔が現れた。

「って何だ？……その顔」

サクが呆れたようにマナの顔を凝視した。

マナは顔を真っ黒にペイントしていた。魔力や気、気配を絶ち、赤外線なども無効化する特殊な塗料だ。

しかも夜間戦闘用の軍用を改造した暗視装置ゴーグルを付け、接近戦用に黒刀まで装備していた。片手には黒く塗装したサブマシンガンである。

もともと、当のサクも、そのペイントと同様の効果がある呪符を顔に書き込んでおり、傍から見れば、顔（正確には頬）に妖しげな記号を墨で書いた変人に見えるのだが。

「備えあれば憂いなしだよ。刹那さんも、常に最悪の場面を想定して万全の態勢を取れと言っていただろう……。」  
「……。」

「先刻から監視をしていたが、どうやら奴さん、他国の連中のようだ。ところどころ会話が拾えたんだが、ロシア語だったぞ。遠い上に早口だったから意味までは分からなかったが……。」

「おそらくだが、本隊の到着を待っているか、陣地でも作っているか」

「何だ。だったら話は早い。」

「……各個撃破は基本中の基本だ。仕留めるか　いや、いつそ奪おうか」

「さて、後方に別働隊が控えていたらどうするつもりだ？」



「いると思うかい？ 火力を持つ別働隊が、あいつらよりも後ろに？ 私たちに悟られずに？」

これにはサクも黙る他なかった。

後方にいる部隊は、大抵遠距離攻撃担当か補給担当、或いは撤退時の予備戦力だ。補給部隊の場合は注意する必要もないし、火力部隊だったらそれ相応の戦力が必要となる。

そして大規模であれば大規模であるほど、火力部隊の秘匿は難しい。それこそ、バケモノ隠蔽能力の高い一騎当千の強者がいない限り。

そして並みの強者では、サクとマナの2人を打ち破ることなどできないのだ。

何しろ彼女たちの修行を担当しているのは、神に神獣という正真正銘の化物バケモノなのだから。

ロシアのとある魔術結社の侵入部隊は、後方の援護部隊が遅刻したせいでアクションを起こせなかった。そんな中、やっと役者が揃って指揮官が命令を出そうとした時、魔術師たちのド真ん中に、2人の少女 彼らにそれは理解できなかったが が出現した。

1人は電光石火の速度で、次々と枝分かれする剣で彼らを薙ぎ払い、もう1人は両手に構えたサブマシンガンと蹴り技を巧みに操って周囲に骸の山を築いていく。

「何だシト　！？　何があったタコエー！？」

後方の援護部隊の指揮官が異常を察し、呼びかけた時には、すでに其処には骸の山が残るのみだった。

「……なあ、サク」

「どづした？」

輪廻の生み出した『空間』のシャワールームで血塗れの身体を洗っていたマナは、隣で同じようにシャワーを浴びているサクに呼びかけた。

「趣味の話だが……。もう、輪廻さんと同じでいいんじゃないか？」

「……はあ、結局そうなるのか……」

ある程度は予測　いや、覚悟していたのか、サクはため息をついた。

そのため息は、すぐに湯気の中にのまれていった。



番外編第1幕「彼女の夜は刃に映る自分のようで／Unchangeability」

次回からは本編に戻ります。

第6幕「判断、それは希望的観測と経験的現実によるファンファーレ的な結末」

エヴァのお話です。

第6幕「判断、それは希望的観測と経験的現実によるファンファーレ的な結末」

普段通りに授業を終えた後、絡繰からくりに呼び止められた。

「輪廻先生。放課後、桜ヶ丘四丁目一九番地にあるマスターの自宅に来ていただきませんか？」

「マスター？」

……ああ、マクダウエルのことだね。諒解」

正直、呼び出されるならお兄ちゃんだと思っていたので、少々予想外だったが、私はこのロボット少女の誘いを、にべもなく受け入れた。

せっかくだ。精々お兄ちゃんに手を出さないよう、釘をさしておくことにしよう。何だったら物理的にも。

そう考えて、私は職員室へと戻っていった。

「つたく、2 - Aの成績の悪さは予定外だなあ。

これは補習が必要か……」

仕事は真面目にこなす。お兄ちゃんから教わったことだ。  
お兄ちゃんの命令は絶対なのだ。

エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウエル。

真祖の吸血鬼。

ハイ・テイライトウォーカー  
『真祖』と普通の吸血鬼は大きく違う。

日の光を浴びても死なず　そもそも不老不死だが　水も効かず、  
（泳げないが）鏡にも映る。葱やニンニクには弱い。ちなみに血  
を吸う必要もない（魔力を得るためには必要である）。

彼女の生まれは『百年戦争』時代、およそ六〇〇年ほど前だ。望ま  
ぬうちに真祖とされ、人間に追われてひっそりと生きて来た（らし  
い）。  
化物だろうと何だろうと、マイノリティ少数派が迫害されるのは、どこの世界も  
同じってこと。

主な異名は、『ダーク・エヴァンジェル闇の副音』。

見た目は一〇歳程度の金髪少女。

彼女は到着した私が一服するのを見届けると、私を探るような目で  
見てきた。

「どうしたの、マクダウエル？

呼び出すのならお兄ちゃん　夜白刹那先生だと思っていたけど…

…」

私がそう言つと、マクダウエルは忌々しそつに首を振つた。

「つち、いけしゃあしゃあと……。」

私、それと茶々丸に夜白刹那に不必要に接近すれば発動する呪いをかけおつて……。

それも、わざとわかるようにしただろう。おかげで丸々一夜、解呪作業につき込む羽目になつたぞ……。」

睨みつけられ、私は口元を歪めた。

「酷いなあ、お兄ちゃんに内緒であのレベルの呪いを発動することがどんだけ骨が折れるか……。予想は付くでしょ？」

術の構成に1秒近くかかったよ、大規模殲滅術でもあるまいに……。で、解けたの？」

興味津々に聞くと、マクダウエルは苦りきつた顔をさらに歪めた。

「いや、皆目駄目だ。

あんなものを解くくらいだったら『登校地獄』の方が千倍、いや、万倍マシだな。

しかも御丁寧に、解いたら解いたで、新しい呪いが発動するように仕掛けていただろう。

しかも即死性の。さらに『不死殺し』のオマケつきだ。

見つけた時は肝を冷やしたぞ」



「ああ、そつちはわかつたんだ。史上最大の賞金首殿に、どの程度解析されるか実験だったんだけど」

「御託はいい。貴様の正体と目的を話せ。ついでに夜白刹那のこともな」

「まあ、勝手に呪ったという負い目もあるしね。お兄ちゃんも『謝罪と恩返しはしっかりしろ』ってえ言ってたからねえ……」

そして、私は自分の事を話した。

『天狐』だということ、お兄ちゃんを愛し、お兄ちゃんのためだけに動いていること、お兄ちゃんと『平穩』を味わうのが目的だということ。

お兄ちゃんが膨大な神力を危険視され、創造神に神にされたこと、この世界にやって来たのも研修の一環だということ。学園に来たのは依頼のためだということ。

「ふむ、『天狐』……に『神』か……だったらその莫大な力も納得がいくな……」

「あっさりと信じてくれましたね」

「まあ、目の前に現物があるしな、勝てる気もせんし……。  
つて、貴様、何時の間に……ん、貴様は……夜白煌月ではないか」

私の横に『霸瞬』してきた煌月を見て、マクダウエルが素っ頓狂な声を上げた。

「警備員の顔合わせ以来ですね。ミス・マクダウエル」

「ああ、お前がタカミチを瞬殺したのは傑作だったが……何の用だ？」

「この際、もう一度挨拶をしておこうかと思ひまして。ちなみに、私は『麒麟』です。」

私は『水』を操れます。大気中の『水分』と自身の視神経や聴神経を接続すれば、大気がある場所全ての監視が可能です」

「はは、ついに麒麟まで出て来たか……伝説は本当だったのだな。つというか、なんだその反則な能力……タカミチは稲妻の剣で斬り払っていたな」

「『雷』も操れますよ。……麒麟が神や聖人の誕生を祝うという伝説ですか？」

煌月は茶々丸から湯呑みを受け取り一口飲んだ。

「まあ祝いますが、私はしたことはありませんね。」

義務みたいなものですが、特別束縛もされておりません」

「で、マクダウエルはどうする？ お兄ちゃんに何もしいつてえ言うなら、殺さないけど……。」

私も煌月も、お兄ちゃんの敵を生かしておく趣味はないよ」

「手は出さんよ、私だって命は惜しい……が、実に興味深い存在だからな貴様らは……長いこと生きていると、未知の存在に飢えてくるんだ。」

手は出さん代わりに、こちらの頼みを聞いてくれないか？

まず、私の『登校地獄』の呪いを解いてくれ、煩わしくて仕方がない。次に、貴様らが持っている技術を教えてくれ」

「ん、いいよ……。でもその代わりに、『現地』の協力が必要だったら協力してね」

「……いいだろう。私も、貴様らが麻帆良で何をするのか興味がわいた……それを助けるのも悪くなさそうだな。我が名と誇りに誓おう」

マクダウエルが力強く頷くのを確認し、私は煌月を見た。  
煌月も頷く。

マクダウエルは自身を悪だと語っているが、彼女は下手な『正義の魔法使い』よりもよほど信用できる。少なくとも、誇りはある。

「まあ裏切ったら……私の九本の『見えない尻尾』でボコボコに殴ってズタズタに斬り刻んだ後、さらに私直々にボコボコにぶん殴って焼き尽くしてあげるよ……」一〇〇〇兆回程」

「……肝に銘じておこう……」

そのあとすぐ、お兄ちゃんを呼びに言っ  
て、正式に同盟を結んだ。

## 第6幕「判断、それは希望的観測と経験的現実によるファンファーレ的な結末」

輪廻はエヴァなど完全な状態でも瞬殺できます。  
というか、やろうと思えば刹那も瞬殺できます。

本作の最強は輪廻です。

\*御指摘を受け、エヴァのセリフを少し変更しました。  
エヴァがあっさり飲んだのは、命が惜しいのと刹那たちに興味があるからということ。

第7幕「夢幻、それは現と黄泉の狭間で踊るミツバチ」(前書き)

大学の教室変更を知らなくて遅刻寸前になることってありませんかね。

後期の初めはしょっちゅう教室変更があるから嫌いです。

## 第7幕「夢幻、それは現と黄泉の狭間で踊るミツバチ」

私は警備員の仕事には就いていない。

が、だからといって、まったく戦わないというわけではない。

麻帆良で私が戦うことはあまりないだろう。それこそ目の前に敵が出てくるか、お兄ちゃんを傷付けられでもしない限り。

が、麻帆良外では話は別だ。

私の夢は、ありとあらゆる『世界』からお兄ちゃんの敵を無くすことだ。敵は誰ひとり残らず消えれば良い。

そして『平穏』になった世界で、私はお兄ちゃんに甘え、お兄ちゃんを癒して過ごすのだ。

が、それでも

「……………カッターイ」

私は魔法世界のとある建物の屋根の上で呟いた。

お兄ちゃんの敵は多い。

世界は常に、害意と傷痕と私怨にまみれている。

嫌らしい空気を舌で感じ、私はそれを咀嚼した。

お兄ちゃんを煩わしく思っている組織　連合の元老院や戦争に纏  
りついている時代錯誤共、そして暗躍する秘密結社。

私は　私たちはそんな連中を暇を見つけては、排除していた。

煌月は旧世界、私は魔法世界を担当することになっていた。お兄ちゃ  
んには知らせていないし、サクとマナにも教えていない。

分身にもやらせているので、今魔法世界では『複数いる』私が黙々  
と塵芥を掃除しているだろう。

私は尻尾を撫でた。

私とお兄ちゃんしか見えず、触れることもできない尻尾。1本で天  
狐1匹分の力を持ち、あらゆる敵を殴り、貫き、斬り払う武器でも  
あり、あらゆるものから私やお兄ちゃんを護る楯にもなる伸縮自在  
の尻尾。すでに兆を超す塵芥の血をかぶり、その度にお兄ちゃんに  
綺麗にしてもらい、撫でてもらい、ブラッシングしてもらっている  
尻尾。常に敵を殺したが、お兄ちゃんを求めている尻尾。

一振りですべては容易く滅ぼせるものだが、今の私は完全に制御  
できる。

そして私『本体』には、並みの天狐数十体分の力がある。

最初は恐ろしかった自身の力も、今でははっきり分かる。

この力はお兄ちゃんのためだけの力だ。私が息をするのも、歩くの  
も、殺すのも、全てはお兄ちゃんのためなのだ。



でも、塵芥ちりあくたどもはいつまでもわき続けてくる。わく度に排除するのだが、堂々巡りのような気がしてならない。家族以外の全人類を消せばどれだけ楽か。

お兄ちゃんに止められているから、そんなことはしないが。

「ウットウシイ……。本当に……。ウットウシイ」

私は咳きながら、気配を絶って建物の中に入る。

中では、数十人の男たちがたむろしていた。

私はポケットに突っ込んでおいたリストで、一人一人確認する。

「全員揃っているね……。じゃあ、殺やるか」

小声で咳き、尻尾を振った。

途端に、全てが壊れる。九本の尻尾が手当たり次第に襲いかかり、次々と獲物をいたぶっていく。

一人一人を丁寧に、少しずつ破壊し、肉を削いでいく。

目に見えなくなるほど小さく斬り刻んだら、瞬時に再生させ、生き返らせ、再び惨殺カットしていく。

人間や亜人の身体を、まるで宝石のように少しずつ惨殺カットしていく。が、いくら惨殺カットしても、その肉塊げんせきは綺麗にならない。

塵芥<sup>チリ</sup>は決して、光り輝く芸術<sup>ほうげき</sup>になどなりはしない。血しぶきが舞い、血肉の山が積み上げられるばかりだ。

「…………ふう…………」

斬り刻まれていく塵芥どもを見て、私はため息をつく。

弱い。弱すぎる。

この程度も防げず、まるで人形<sup>サンドバック</sup>のように一方的に殴られ、斬り刻まれる塵芥ども。

私にかすり傷一つ負わせられない程度の者<sup>ユミ</sup>に、お兄ちゃんが狙われているという腹立たしい現実に、私は忌々しげに舌打ちし、絶叫した。

「お兄ちゃんに逆らうな、皆お兄ちゃんに跪いていれば良いんだ、そのためだけに存在しているんだッ!!」

私は怒りとお兄ちゃんへの想いに耐えられなくなり、叫び声を上げた。

体が勝手に動き、目に入った肉片を片っ端から殴り、蹴り飛ばす。

純白の肌が真っ赤になっても、黒いドレスが血に染まっても、私は満足がいくまで殺し続けた。

特にリーダー的な塵芥<sup>ユミ</sup>はひたすらに殴り、いたぶり、苦しませた。

ようやく気が済んだのは、侵入してから3時間後のことだった。私は再び屋根の上まで転移すると、体を綺麗にし、服の汚れも落とした。

そして慣れない西洋魔術の呪文を詠唱する。

「あー……えーと、ソラ・ヨゾラ・アエイジス・サムソーラ……火の精霊……えーと……9999柱……魔法の射手……『遠弾・火の9999矢』っと。

……あーもう、『魔法の射手』（サギタ・マギカ）はどのくらい撃てばよいのか加減がわからないなあ、本気なら20桁くらい軽く撃てるし……っていうか1発の威力もよくわからないからなあ、普通に『狐火・局地火葬』使った方が早かったかなあ……」

『魔法の射手』（サギタ・マギカ）。西洋魔術の中でも、特に攻撃魔術では基本中の基本だ。素人のそれでも、拳銃弾くらいの威力はあるらしい。

私は跡形もなく消し飛んだ建物を見下ろしながら、ポケットから手帳を取り出した。

「この組織は殲滅クリアつと……。えーと先刻6人の分身たちも殲滅しごとを終えたから……今日の成果は七つか……。まあ……こんなものかなあ……」。

あーあ、まずお兄ちゃんを狙う組織の詳細と名前から調べなくちゃあいけないから……カッターインだよなあ……。お兄ちゃんの敵が

いる『世界』なんて、存在する価値もないのに……」

私は闇色の長髪を弄りながら、小さくため息をついた。

「まあ、『世界』ごとやったらお兄ちゃんが怒るし、サクとマナはまだそれに耐えられるほど強くはないしなあ……。煌月はどうかなあ、旧世界の方が敵は少なさそうだなあ……。はあ、はやく『平穩』を手に入れてお兄ちゃんとのんびりしたい……」

私の嘆きは、憎たらしいほどの綺麗な晴天に打ち消されていった。

私たちは、こうしてまた一歩、『平穩』へと近付いていく。

第7幕「夢幻、それは現と黄泉の狭間で踊るミツバチ」(後書き)

後期の講義にもようやく慣れてきました。できるだけ多くの単位をとっておきたいですからね。

番外編第2幕「早めのレスポンス／Welcome・・・The best N

今回は千雨編です。

推薦していただいたキャラは、なるだけ全員絡めたいと思います。

感想や質問も待っています。

長谷川<sup>はせがわ</sup> 千雨<sup>ちかめ</sup>は、自他共に認める『傍観者』である。

彼女は『普通』・『常識』・『平穩』を渴望し、『非常識』・『二<sup>ま</sup>次災害』を忌み嫌っていた。

軽度の対人恐怖症でもある彼女は、自ら壁を構築し、他との関わりを極力減らしていた。それは、彼女にとっては処世術であり、『日常』でもあった。

そんな長谷川にとって、麻帆良は一種の地獄だった。

異様に身体能力が高い者、学力が大学教授レベルの者、平然とクラスに溶け込むアンドロイド。そしてそれを、『普通』と受け止めている。おそらくこの学園都市の住人のほとんど。

長谷川は、常に少数派<sup>マイノリティ</sup> いや、唯一<sup>オンリーワン</sup>だった。少なくとも、彼女は他に学園の異常性に気付いている者を知らない。

いや、何人かは気付いているのかもしれない。気付いていても、それは『パンドラの箱』だと知っているのかもしれない。

もしそんな奴がいたとしたら、そいつは私よりもよほど賢い。そして、正解だ。

しかし、長谷川は知らぬふりをできなかった。パンドラの箱を開け

るのは、いつだって女性なのだ……しかも愚かな。

マイノリティ  
少数派は攻撃され、いつかは淘汰される。

長谷川はそれを怖れた。いつの間にか、麻帆良での『日常』が、自分の理想の『日常』になる気がした。その恐怖が、彼女の壁をますます強固にしていた。

それは長谷川にとって、安住の地に土足で踏み込まれて、しかも勝手に改築されたような不快さだった。

しかし、ある日彼女は、幾分か気を持ち直すことになる。

それが、夜白よしろ 刹那せつなの就任である。

彼は理論的かつ合理的ドライだが、どこかウエットなところもある。それでいて人の話をよく聞き、完璧とも思えるアドバイスを生徒たちを導いていた。

時には理論で、時には感情論で生徒を諭す刹那のアドバイスの評判は、瞬く間にクラスどころか他校まで広まった。

きっかけは、一年の後半に転入してきたマナ「A」「Y」「タツミヤ」の提案だった。

当時、エスカレーター式の学校、おまけにその中でもズバ抜けて楽観的だった2-Aの中では、珍しく将来について真剣に検討していた和泉いずみ 亜子あこに対し、マナは肩をすくめながらこう言った。

「進路相談？ だったら刹那さんに聞くのがベストだね。あの人の



アドバイスに何度救われたことか。

……まあ、とにかく大人に相談するのが良いよ……違うかい？」

彼女の発言自体は良かった。問題なのは、このセリフをクラスの輪の中で、しかもそれなりの声量で言い放ったことだった。

要するに、長谷川を含むクラスの大半に聞こえていたのである。

当時、進路相談において確固たる地位を築いていたのは、専門家で  
厳しいが、厳しいからこそ『教師の鑑』と人気の高い新田教諭であ  
った。

が、問題児揃いの2 - Aの中には、彼の指導を受けた記憶を持つ生徒  
徒が大半である。そして、数少ない2 - A 穏健派も、大概巻き添え  
というかとばつちりを受けている。そのため、相談相手としては少  
々怖すぎた。

むろん、相談役が生徒に嘗められて務まるわけもないが。

担任であり、接点も大きいということが、それに拍車をかけた結果  
…… 昼休みや放課後の職員室へと2 - A 生徒が相談に来るとい  
う、2 - Aを知る教師が、揃って目を剥く事態が目撃されるようになる。

そして駄目押しとなったのが、2 - Aのパパッチこと朝倉 和美  
が、刹那の手腕を大々的に報じたことだ。

これにより、刹那は『社会教師』としてではなく、『スクールカウ  
ンセラー』としての地位を獲得してしまうことになる。

ちなみに、彼の妹として、そして16歳の美少女として有名だった  
夜白 輪廻は、このことを聞いて終始不機嫌だった。彼女は刹那の

負担が増えることを怖れたからだ。流石のマナもこの事態は予測できず、結果、輪廻に修行という名の煉獄ブルガトリオに放り込まれることになる。マナの悲劇は置いといて、長谷川もまた、藁にも縋る思いで刹那に相談した。

刹那は長谷川が学園内の『認識障害』の魔法が効かない体質であることに気付き、このままでは取り返しのつかないことになるかと判断した。

『認識障害』は、魔法の隠蔽に一役も二役も買っている魔法である。一般人はこれのおかげで、『異常』に気付かないのである。これが効かないのが、長谷川の悩みの原因だった。

刹那のカウンセリングのおかげで、長谷川は大分元気になった。相談できる相手がいることは、彼女にとって十分なケアになったのだ。

なお、長谷川にはあずかり知らぬことだったが、刹那はマナ、そして桜咲サクラ＝＼＼＝刹那せしなに彼女の監視 という名のケアを頼んだ。

その日、長谷川はゲームを買うために、学園都市の電器街をふらついていた。

ヘッドホンを装備し音楽を聞き、気に入っている楽句フレーズを口ずさみながら歩いていると、陸上選手かと思紛う程のダッシュ力で駆ける神楽坂くわらさか 明日菜あすなが目に入った。

休日だったのに、非常識なモン見ちまった……。

長谷川は小さく舌を打つと、近くのベンチに腰掛けて頭を抱えた。

彼女の気分は晴れなかった。刹那との会話で大分マシになったが、それでも傷痕は簡単には消えない。いや、現在進行形で傷は広がっていった。

「何だつてえんだ……ド畜生」

長谷川は人生何億回目かわからないため息をついた。

「……はれ、どうしたんです？ 長谷川さん」

名前を呼ばれて顔を上げると、目の前に袴をはいた少女が立っていた。

「桜咲か……」

長谷川にとっては、日常的に会話をする数少ないクラスメイトだった。

しかし、そんな少女の顔を見ても、長谷川の表情は冴えなかった。

それを見て、サクこと桜咲は、『待つてて』と言って走っていった。どう考えても袴をはいた少女が出せる速度ではなく、これもまた長谷川にとつて見たくない光景である。

が、彼女も、数少ない友達を異常呼ばわりするほど心が荒れていないので、それを静観していた。

サクは自販機の前に立つと、お金を入れてボタンを押した。

そして、緑茶とココアの缶を抱えて戻ってくる。

「はい」

「サンキユ」

ココアを差し出され、長谷川は素直に受け取る。彼女の好みではなく、一瞬文句を言いたくなかったが、慌てて喉の奥に押し込んだ。そして密かに自嘲する。

馬鹿か。今まで桜咲に……いや、誰かに、自分の味の好みなんて言ったこともねえくせに。

長谷川は一気に液体を喉に流し込んだ。好きではない甘味が喉を駆け巡ったが、それほど嫌な気分にはならなかった。いや、なる資格もないのだろうと思ひ直した。体の方が、よっぽど礼儀がいいらしい。

「……私が言うのもなんですけど……」

クラスでマナと並び、運動神経がぶっちぎりで良いサクはそう言って、缶から昇る湯気を見つめる。

「このクラスは　　ああ、違うか、学園はいろいろオカシイですからねー……」

へらへら笑う友人に、長谷川は顔を顰める。

「あんたも……『異常』なのか？」

「バケモノ化物ですよ、とびっきりのね」

サクはそう言って、光の無い瞳で長谷川を見つめる。

「今はそうでもないんですけどね、小さい頃の私はそれはもうひどかったですよ……。自分バケモノは化物だから、助けてもらった恩人から離れようとして……貴女のような『普通』を　　なにより憎んだ」

声のトーンが変わり、長谷川は息をのむ。  
彼女は直感した。

サクの話は、比喩や冗談ではないことを。

「でも知ったんですよ、世の中は奇妙で異常でしかない。此の世の全ては奇妙なのですよ。」

私たちは、それに気付きもせず、喜劇と悲劇の狭間でうち捨てられた人形マリオンネットでしかないって、「ある人」が言ってまして……。  
私以上の化物バケモノなんていくらでもいる……。そしてその化物バケモノたちは、私よりずっと幸せそうで……私を幸せにしてくれました」

サクはそう言って、天を見上げた。

「空は青い。それは常識です。でも、奇妙じゃありませんかね。それを私たちは疑わない。」

空が青い理由メカニズムを知っている人が何人いるんでしょうね。そして、そのメカニズムを実際に正解だと保証できる人は？ 『目で見た』なんて、一体どうして証拠になるんです？

人の五感ほど、信用できないモノはありませんよ」

サクはいたずらっぽく笑った。

もしかしたら、コイツは自分が思っているよりもよほどフランクなんじゃないか？

生真面目でお固いイメージのサクは、珍しくおどけている『演技』

をしていた。それに長谷川は気付いていない。もっとも、言っている内容は『本心』だった。

長谷川は、こんなことを聞いても全く混乱していない自分に気付いた。

しかし、サクは自分が知らない『ナニカ』を知っていることは事実だと思った。

「お前は……それを知っているのか？」

「興味本位で突っ込んではいけませんけど……刹那さんが言ってきたよ、そろそろ限界だって。今度、刹那さんと話をするときに……『教えてほしい』と言ってみてください。渡したいものがあるそうです……」

サクはそう言って微笑むと、スタスタと歩いて行ってしまった。

そして次の日　長谷川は、世界の本当の姿を垣間見ることになる。

「……全く、私は案内人<sup>ガイド</sup>には向いていないよな……」

千雨は強くせず、あくまで護身ができる程度にとどめます。

刹那が千雨に渡したものについては、また次回で。

\*パパラッチ……『五月蠅く付きまとう虫』という意味の伊語。<sup>イタリヤ</sup>映画『甘い生活』でスターおっかけカメラマンがこう呼ばれたのが始まりで、五月蠅いマスコミの事。



第8幕「天国、それは突きつけられた現実の崩壊と理想の体現」(前書き)

ちよいと構成に苦勞しているので、更新が遅くなるかもしれません。

## 第8幕「天国、それは突きつけられた現実の崩壊と理想の体現」

お兄ちゃんと私のクラスでの評判は上々だった。

お兄ちゃんが教え上手で、親身になって相談に乗ってくれていることもあつてか、2 - A、いや麻帆良に大分馴染んでいた。

2 - Aの成績も、社会と国語を中心に少しずつ伸びていき、相も変わらず学年最下位だが、夏休み前の期末試験では、社会でクラス全員が学年平均点以上獲得という快挙を成し遂げることになる。

2 - Aにはズバ抜けて成績が高い者も存在するが、まさに玉石混交で、学年最下位連中もまた2 - Aに所属している。

成績下から5番目までの者、『バカレンジャー』とか呼ばれている者たちが文字通りの意味で足を引っ張っていた。

件のバカレンジャーの内、綾瀬夕映あやせゆえは頭が良いのだが勉強に価値を見いだせず、単に勉強をしていないだけなので、お兄ちゃんが色々諭せばそれで済んだ。

「義務教育や、大学以下の非専門的かつ普遍的な授業は、いわば『土台工事』だ。人生という巨大な『ビル』を建てるためのな。

それに価値を見いだせない気持ちはわかる。今のお前たちには、どんなビルを建てるのか、そもそもビルを建てるのかすらわからない  
初期中の初期の状態だ。設計図も工事予定表もほぼ白紙だ。

確かに将来、自分にどんな知識やスキルが必要になるかなどわからない。美容師になる奴がピタゴラスの定理を知ったところで役に立

たんし、保育士が光の三原色など知っていても意味はない。

が、逆を言えば、お前たちの設計図や工事予定表は好きなように描き換えられる。警官になることも、稀代の大悪党になることもできる。

しかし、ビルの建設には設計図だけじゃ駄目だ、『資材』がいる。

コンクリやら鉄やらセメントやら色々な。理想の設計図が描けても、資材がなくなっちゃ『机上の空論』だ。

そんな時に、決して後悔することのないようにしてもらいたい。義務教育の全てが役に立つかと聞かれれば、答えはノーだ。が、義務教育が大切かと聞かれれば、答えはイエスだ。

間違っても、自ら設計図を破ったり、資材を溝ぐいに捨てるようなことはするんじゃないぞ……まあ、長々と話したがこれを機に、一考してもらおうことを望むよ」

これは綾瀬や2・Aだけではなく、他のクラスの者も別の機会で聞くことになった。

反応は様々だった。

サクは目を輝かせてついでに頬を染めお兄ちゃんを見つめ、マナは目を瞑り腕を組んで何度も頷き、長谷川は『凄まじい説得力だ』と小声で呟き息をのんだ。木乃香は必死にメモをとり、クラス最下位の神楽坂明日菜は真剣な眼差しでお兄ちゃんの話に聞き入り、肝心の綾瀬は決意の籠った顔で空を仰いだ。

他にも軽口一つ叩かなかつた鳴滝姉妹なるたき。無表情だが密かに顔を綻ばせた茶々丸ちぢぢ（本人にこう呼べと言われた）。顎に手を当てて息を吐いていた大河内アキラたがわい。喩えに保育士が出てきて苦笑しつつも頬を染めお兄ちゃんを見ていた那波千鶴なば。目を見開いて感心していたマ

クダウエルなど。

話を聞いた全員に共通していることは、勉強に対する認識を程度の差こそあれ改めたこと、そしてお兄ちゃんをさらに尊敬するようになったことだ。

そして2・Aの成績向上は、そのままお兄ちゃんの株の高さに比例した。

まあ、私が、あまり目立たずにお兄ちゃんの補佐に徹していたのも一因だが。

そしてお兄ちゃんの株の上昇は、そのまま発言力の高さに結び付いた。もとより、（書類上は）新任教師であり、赴任してきたばかりのお兄ちゃんの話にそれほどの説得力はない。

が、『2・A成績上昇』という高畑教諭や新田教諭ですら頭を痛めた。高畑教諭は放任主義だったが。（これは決して不真面目という意味ではない） 難問を達成したお兄ちゃんに対する生徒や教員（表裏問わず）の評価は、うなぎ登りに上昇する。

結果、他校の教員からも相談を受けることになり、お兄ちゃんは教師としての盤石の地位を築いていた。

お兄ちゃんの負担が増えることを嘆いていた私は頭を抱えたが、当のお兄ちゃんが全然気にしていなかったので黙殺した。

魔法関係の教師も、すでにお兄ちゃんの実力（の一端）は知っているので、お兄ちゃんの発言を無下にすることはできなくなった。

結果、お兄ちゃんは刻一刻と来日が近付いていたネギ「スプリングフィールド」に対する『英雄の息子』という名の『色眼鏡』を、学園

長や高畑教諭を始めとする魔法関係者から撤廃させることに成功する。

「彼の将来は彼自身で決めさせるべきです。そして、それが決まった時は決して『特別視』をしてはなりません。徹底して厳しく鍛えるべきです。」

彼が『立派な魔法使い』を目指すのなら実戦形式の訓練を課し、彼が農業関係者を志すなら北海道の牧場にでも放り込みましょう」

職員会議の場で、ジョークも交えて説明するお兄ちゃんの前に、教師陣は笑いを噛み殺しながら頷いた。

「今にして思うと、メルディナ（ネギが在学中の学校）の連中がいかにネギにスプリングフィールドを『英雄の息子』でしか見ていないかが良くわかりますな。……資料を見ましたが、これは拙い。拙すぎる。」

甘やかし過ぎて碌な一般常識の教育もしていない。下手すれば責任問題ですな。

夜白君に言われた後なら、こんな教育で『立派な魔法使い』が『製造』できるわけがないとすぐにわかります……」

ハンカチで汗をふき、苦り切った表情で、オールバックに髭、サングラスに黒スーツの一見コワモテの神多羅木教諭がボソリと言つと、隣で若い教員が続けて発言した。

彼は教員の中でも神多羅木教諭に並ぶ実力者であるが、その顔は汗

にまみれ、酷く青ざめていた。

「それに今まで気がつかなかった我々も、同じ穴のムジナですが……『前』のまま、ネギ君を迎えていたと思うと……ゾツとしますよ。恐らくですが、彼の『歪み』が酷くなるだけだったでしょうね……」。

聞けば学園長は、元々神楽坂と御孫さん（近衛木乃香）とネギ君を同室にするつもりだったとか……。もし、ネギ君がこの資料ペーパーの通りの子供なら、最悪赴任当日に魔法をバラすことにもなりかねません……」

瀬流彦せりゅうひこ教諭の発言は、その場にいたほとんどの教員の心境を代弁していた。

全くその通りの可能性が高いだけに、学園長はバツが悪そうに顔を顰めている。

私？ 勿論、その時もお兄ちゃんのことを考えていた。

「こいつは、我々の認識や彼の扱い・教育方針を転換する必要がありませんな……」

黒人男性のガンドルフィーニ教諭が、眼鏡を押し上げながら呟いた。それが結局、御開きの合図となった。

話を2 - Aに戻そう。

成績上昇中の我がクラスは、勉強だけではなく運動にも精を出していた。というか、元々こつちの方が得意分野である。

例外こそあるが、基本運動神経が高い人材が集中している。

たぶん、二年で体育科クラスを設置したら、半分以上は2 - A生徒が占めるだろう。

運動会ではマナとサク、ながせがえで長瀬楓や古菲クーフェイなどを中心に大暴れし（比喻ではなく、実際にいくつかの備品が使い物にならなくなった）、昼休みではお兄ちゃんの弁当をめぐって真剣ガチ殴り合いが勃発した（もちろん勝ったのは私だ。ちなみに珍しく長谷川が大真面目に参加し、大河内相手に互角で戦ったが結局共倒れになった後、那波に説教された。理由は『ハードルで殴り合う』というシャレじゃ済まない事態を引き起こしたため）。

……運動会は、どれほど多くの女性がお兄ちゃんを慕っているかを知らしめる結果となった。個人的にはこつちの方が収穫だろう。

そんなこんなで、私たちの学園ライフは続いていった。

**第8幕「天国、それは突きつけられた現実の崩壊と理想の体現」(後書き)**

次回は大河内編です。

ちなみに、作中で刹那が言っている話は僕が実際にとある人に言われたことです。



番外編第3幕「霧とキャラメル色の不審／Or・・・Mortal Life」

基本的に番外編は、本編や他番外編とリンクしています。

大河内おおこうち アキラは、いつも通りに部活を終え、帰宅しようとしていた。

彼女は水泳部のエースと呼ばれ、マナやサクも一目置くほどの身体能力ももっている。

もっとも、本人は寡黙なのであまりクラスで目立つタイプではない。

うん？霧？

学生寮へ向かう途中、彼女はいつの間にか、白い空間に自身がいることに気付いた。珍しい事態に当惑するも、彼女は気にせず、学生寮へと続く（と思われる）道を歩いていった。

「あー……ド畜生……」

が、聞き覚えのある声、というか悪態を聞いて、大河内は足を止める。

そして、一寸先も見えない空間に向けて声を放った。

「千雨？」

「あん、大河内か……？」

目の前に現れたのは、運動会の『大乱闘事件』を機に急速に親しくなった少女、長谷川 はせがわ 千雨 ちかめ だった。

大河内はホツとしたが、すぐに顔を引き締めた。長谷川は制服姿だったが、酷く汚れ、裾は破れていた。暴漢にでも襲われたかのような有様だった。

「どうしたの!？」

「あん? どうって…… ああ、これか。ちよいと転んだだけだよ」

実際は『人払い』が効かなかったことにより戦闘に巻き込まれ、慌ててマナから教わった『韋天』 イテン で逃げたところ、不慣れなために転移先の座標計算をしくじって木々の中に突っ込んだのだから嘘は言っていない長谷川は、そう言っつて右腕にはめた腕時計を一瞥した。

長谷川は夜白 《やしろ》 刹那 せつな から『真実』を教わり、記憶を失うより、自衛できるようになることを望んだ。しかし長谷川が望んだのは敵の『打倒』ではなく、敵からの確実な『逃走』だった。

そのため、夜白 やしろ 輪廻 りんね が彼女に教えたのが『ケルト魔術』。ローマ帝国の侵攻により、人間界ではすでに潰えた魔術である。

ケルト魔術の特徴は、その『隠密性』と『安全性』にあった。ケルト魔術の起源はケルト神話にあるのだが、これらはすでにキリスト教と一体化している。つまりこの魔術は、キリスト教の聖典や聖書

などから術式言語や術式画像を抽出し、組み立てて成立させる。

要は抽出しない限り、発動媒体はいかようにも誤魔化せる。当然、魔力反応もないし、そもそもケルト魔術発動のための魔力は、術式を組み立てた時に始めて『出現』する。

もう一つの特徴である安全性については、このケルト魔術は初心者でも容易く使え、防御や逃走術に秀で、少ない攻撃術も、『神の一部』というモノを召喚して戦わせるので、術者本人は何もしないところからきている。

そして長谷川の魔法媒体が、学生どころか人間が身につけていてもまるで違和感のないもの。腕時計だった。これは刹那の特別製の腕時計で、ケルトの術式が文字盤に肉眼では見えない文字で組み込まれているほか、AIも装備されている。

つまり、その場で最適だと思われる術式を自然にリストアップしてくれるというオマケ機能だ。もつともまだ初心者の方谷川に、使える術式は限られているのだが。

「……ホント？」

無然とした表情で、大河内は長谷川を睨む。

それがかなり迫力ある顔だということに、当の本人は気付いているのだろうか。

なにしろ大河内はマナに並び、モデルと呼んでもいいほど中学生離れたボデイの持ち主である。傍から見れば、高校生が後輩を尋問

しているようにしか見えない。

困った。

長谷川は心中で頭を抱えた。

ケルトには対象者を混乱させたり、記憶消去をしたり、精神干渉もできたりする術式があり、当の長谷川はそれを使える。

先刻腕時計を見た時も、記憶消去術の術式がリストアップされていて内心怒鳴り散らしそうになった。

自分の記憶を奪われるのを怖れておいて、他人の記憶を平然と奪うなど虫の良いことが許されるわけもない。ましてや、仲の良いクラスメイト相手にできるわけがない。

誤魔化しも恐らく効かないだろう。大河内は世話好きでおせっかいだが、同時に決して親友の危機を見過あかしごしたりはしない。

それどころか、大河内と仲の良い明石あかし裕奈ゆつななどからクラス中に広がり、『長谷川千雨がバイオレンスなことに巻き込まれた』などという噂が立ちかねない。

『平穩』を求める彼女にとって、それは死刑宣告でもあった。

何しろ改めて自分の姿を見てみれば、まさに『強姦されかけ抵抗したら暴力を受け、命かががら逃げ出した』ドラマの登場人物のような少女さながらである（おまけに実際襲撃されかけたのだから嘘ではない）。

そうだ、あいつらがまだ寮にいるはずだ……。

長谷川はとうとう諦め、

「わかった。話すがここは場所が悪い……。『連中』、いっぱいこの隠蔽術をかけやがって」

と憎々しげに霧を睨みつけた。

なんのことだろう？

大河内は小首を傾げるが、長谷川が片手を振った途端に霧が晴れるのを見て驚愕した。  
むろん、腕を振った時起こった風で霧払いしたわけではない。かき消えたかのように、霧は瞬時に消えたのだ。

「行くぞ、大河内　　今度はおまえの番だ。『最良の悪夢へようこそ』」

皮肉気に微笑んだ長谷川の顔を見て、大河内はようやくやく自分が、ナニかの『線』を超えてしまったことに気付いた。

桜咲<sup>さくらさき</sup>Ⅱ Y Ⅱ 刹那<sup>せつな</sup>は、ガラの悪いネズミを見ていた。

現実ではない。テレビアニメのキャラクターである。

親友の長谷川から貰ったポスターを、彼女は興味深げに見つめていた。

人間の欲しがるものはよくわからないなあ……。

そんなことを考え、自身を完璧に『人外』だと認め、それでいて特に悲しんでもいない自分に気付いた。

良いことじゃないか。コンプレックスなんか、何の役にも立ち  
はしないし……。

もし、刹那に拾われなかったらと思うと、彼女は蚯蚓と蛭に全身を  
纏わりつかれるような、恐怖と不快感を覚える。

そしてその恐怖感は、刹那への想いと反比例していた。

彼女は、かつてはこの手で引きちぎりたいほど憎んでいた白い翼を  
愛おしげに撫でた。刹那に褒めてもらい、優しくブラッシングして  
もらい、マナから羨ましがられたのも良い思い出だ。

そんなことをつらつら思いだしていると、ドアが大きくノックされた。

思わず『夕凧』を手に取るが、

ああ、そろそろ、長谷川さんが来る時間だったな。

と思い直した。

刹那の新居は女子寮から少し離れているし、生徒の夜間の外出は禁止されている。

そのため、サクや長谷川は、この部屋にある『空間』入口を使い、輪廻の生み出した、訓練にはもってこいでリゾート地も兼ねる『空間』や、夜白家を行き来していた。

輪廻の空間は以前の『世界』の時から変わらず、『主島』という巨大な島（面積は長野県ほど）がひとつ、それを左右で挟む小さい島（面積はハワイ島ほど）、『右島』と『左島』、主島の上空に浮かぶ埼玉県ほどのサイズの浮遊島『天島』、そしてそれらを囲む海で構成されている。

大量に設置された防衛兵器や侵略兵器も健在だった。

サクがドアを開けると、そこには長谷川、そして大河内がいた。

「……バレたんですか」



「……………面目ねえ」

それだけで事態を察したサクは、自身の顔から血の気が引くのを自覚した。

これ以上修行相手を増やしたら、『お兄ちゃんと一緒に時間が減る』とか言って輪廻さんと……………煌月さんがキれる。

サクにとっては輪廻の戦場よりひどい修業はトラウマだし、無表情のまま淡々と制裁を与える夜白煌月やしろつぐみはとてつもなく怖い。

「……………どうしたの？サク」

死刑判決を受けた罪人もかくやというほど悲壮な表情のサクを見つめる大河内。

一方、サクは答えず、呑気にベットで仮眠をとっているマナの元に歩いていく。

そして、マナの耳元で小声で何かを囁いた。

途端にマナは飛び起き、狼狽した表情のまま、ひどく急いで『空間』の入口であるキャビネットに置かれた花瓶に飛びついた。瞬時に姿を消したマナに大河内は仰天するも、長谷川に無理矢理、部屋に押し込まれた。

サク、そして長谷川による事情説明が終わった後、大河内は夜白家に連れられた。

将来、夜白刹那の従者の中でも『アフノーマル異常』な能力を持つ『ノーマル普通』の少女、大河内アキラが始めて『魔法』に接した瞬間だった。

大河内アキラは魔改造します。

アキラは刹那に恋心を抱いております。この後、描写はありませんが千雨と一緒に刹那と仮契約します。ネギが来る頃までには最強クラス（サクやマナレベル）となる予定です。

刹那の従者になるキャラは、輪廻と煌月を除いてサク、マナ、千雨、アキラの4名となる予定です。（予定が変われば増やします）  
今のところ、他のキャラは関わらせはしますが、仮契約して『家族』にまではならない予定です。

刹那と関わらせたいキャラは随時募集しております。

第9幕「披露、それは程度の違うメラニコリイの拡散」(前書き)

オリジナルのハイキング編です。

オリジナルの敵も出て来ます。

## 第9幕「披露、それは程度の違うメランコリイの拡散」

麻帆良の秋の行事の一つに、『歩行際』というものがある。言ってみれば、修学旅行代わりのハイキングだ。

あみだで行き先が別れた結果、2・Aを含めた3つのクラスは、千葉県のある山にハイキングに出かけていた。

私、お兄ちゃん、マナ、サク、千雨ちゆ、アキラの六名で一グループとなり、3クラスの中でも最後尾を歩いている2・Aの中のさらに最後尾をのんびりと歩いていた。

煌月はあくまで警備員に過ぎないので、今は麻帆良で待機している。

ちなみにマクダウエルは呪いは解けているのだが、『山登りは面倒』の一言で欠席し、茶々丸もマスター（マクダウエル）を放っとく理由はないので欠席。

本気になれば、富士山だろうがエベレストだろうが駆け足登山できる私たちにとって、ハイキングは文字通りのレジャーだった。

最近おちおち旅行もできなかつたので、素直に楽しみたいところなのだが。

ツイていない時は、とことんツイていないものだ。

私は指を鳴らして、会話保護の結界を展開した。

これは探知が不可能な上に、この結界内で会話が交わされると、そ

の周囲の人間には『十分にあり得る当たり障りのない会話』に自動で変換されて聞こえるという便利なものだ。元々は、皆に隠れてお兄ちゃんとデートの約束をするために構築した術なのだが。

思念通話を使っても良いのだが、登山中に六人の男女（男女比1：5）が無言で目配せするという、シユールな光景になりかねないので、結界にすることにした。

「お兄ちゃん、何だか妙な匂いがする。ナニカいるかもしれない」  
「何だと」

お兄ちゃんは顔を顰めた。

「具体的には」

「『神の眷属』をもっと生物臭くしたような感じ……これは……」  
はぐれ眷属』かな」

「はぐれ眷属？」

アキラがオウム返しに聞き、

「はぐれ眷属って……」

それにサクも続く。意図せずして、輪唱の完成だ。

私以外誰も知らないの（説明していないので当然だが）、イチから説明することにした。

以下、それを要約する。

『はぐれ眷属』とは、『神の眷属』のなれの果てである。

本来なら下界に中級神以上は降臨できない。だから、雑多な任務には自身の神力を使って生み出した『手足』を使う。それが、『神の眷属』である。眷属は使い捨ての上に神が死ねば消滅するのだが、稀に恒久的な任務を与えられている内に、自我や独自の生命を持って、神の支配から脱却するものがある。

それが『はぐれ眷属』である。

「眷属ねえ……。前の『世界』ではうじゃうじゃいたなあ」

「軽く一〇桁は始末したねえ、シャウロ＝クロミネの時とか……」

お兄ちゃんと考え深げに頷いていると、千雨がイライラしたように言った。

「で？ そいつは敵なのか……？ どうなんだ？」

「さあ？」

肩をすくめると、千雨はがっくりと肩を落とした。

「だって、眷属が与えられた任務なんて創った神ほんにんしか知らないし、その後独立行動した眷属の考えなんて知らないよ。……下界に放たれた眷属は、大体人間に化けられるし、中にはちゃっかり自由気ままな人間ヒューマンライフを満喫している奴だっていると聞くよ」

「ああ、そりゃ無理だな」

マナは顎に手を当ててあっさりと納得した。が、

「まあ、中には欲望のままに『食人』している奴もいるそうだよ。人間界で起こる『神隠し』の半分以上は『はぐれ眷属』の仕業だつて、聞いたことある」

私の補足説明を聞いて、顔を引きつらせた。

「……その情報ソースは？」

「アーレイ＝ゴト ザキつていう上級神。『地球』シリーズ系統総督府所属の情報一元化担当神。信用できる神だよ」



お兄ちゃんの質問に即答で答える。そしてそのまま、私はお兄ちゃんに微笑んだ。

「で？どうするの？お兄ちゃんが命令すれば、私が殺してくるけど」

「どの辺にいるんだ」

「山の中腹。登山ルートからはかなり離れているね。熊狩りでもするつもりかなあ……」

『熊が出るのかッ！？』という千雨の叫びを無視して、全員が周囲を警戒する。

「……サク、登山ルートに結界を張れるか？」

「こんなこともあろうかと、登山ルートの各所に呪符を張っておきました」

サクは不敵に笑うと、しゃがみ込んで地面に結界陣をチョークで描きだした。そして、その陣に両手をつけて呟く。

『夜桜流奥義・神道結界術・くにのとこたち 国常立の神川守かみかわもり』

鈴が鳴るような音と共に、登山ルートを薄い紫色の結界　　むろん

常人には見えないが　　が覆った。  
私でも破壊に1秒はかかる強力な結界だ。その硬度は、麻帆良の結界の比ではない。

「よし、次だ……あぶりだせ」

「はい」

顔色一つ変えず、サクは次に空中にチョークで陣を描いてゆく。そして再び呟いた。

『夜桜流奥義・神道捕縛術・天常立あまのとこたちの空駆槍そらかけやり』

陣から無数の蒼色に輝く槍が射出され、四方八方に広がっていった。あくまで捕縛・封印用の非殺傷の槍だ。

「マナ、ビルド・ファンゲ『御転婆少女』用意。弾種は『転移弾』」

「諒解」

「千雨、エスス・ヒンセント『工芸神の指先』用意。何かあれば弄りまくれッ」

「オケイツ！……ッたく……趣味の悪い玩具アーティファクト与えてくれやがって  
……ッ」

「わ、私は!？」

「アキラの『アレ』は使いどころが難しいから待機しろッ! 輪廻は全体的なサポートをッ!」

私はお兄ちゃんの指示に従いつつ、アキラの能力……『レインボウ・アーク虹色枢』について考えていた。

第9幕「披露、それは程度の違うメランコリイの拡散」(後書き)

次回は千雨とアキラの能力の紹介です。

### 設定資料3

はせがわ  
長谷川 千雨 ちさめ

原作との変更点：

原作よりいくらか皮肉さにキレがかかっている。刹那の『平穩』を求め、想いにもっとも共感している。そのため、刹那とはかなり気が合う。刹那に対して恋心を抱いているが、本人はまだ（9話まで）踏ん切りがついていない。なお、刹那に相談してからは伊達眼鏡をはずしている。

刹那の生い立ちを知ってからは、軽々しく『普通が良い』と言わなくなった。

『傍観者』の立場を貫いていたが、夜白家やアキラのことは例外で、自ら危険に関わるうともする。また、倫理観を歪んでおり、人殺しにさしたる躊躇いもない。

刹那と比べ冷静でちょっとバイオレンスな突っ込みをする。

戦闘能力：

主にケルト魔術を使うが、敵からの逃走を第一としており、戦闘能力や身体能力は刹那の従者の中でも最弱である。そのため、もっぱら参謀役や補助役に徹する。が、それでも並みの魔法使いよりは戦闘能力は高い。なお、ケルト魔術の媒体は腕時計であり、これがないと発動できない。戦闘時はもっぱらアキラとコンビを組む。が、戦うことはほとんどない。

イアン  
『韋天』

マナやサクのと比べるとスピードや移動範囲が劣る。

『神の一部』

ケルト魔術独特の召喚術。文字通り、ケルト神話の神々の身体や武器の一部を召喚する。術者本人である千雨は指示を出すのみであるが、言い換えれば千雨は丸裸であり発動時は後方に退避することが多い。おまけに発動には時間もかかる。

アーティファクト：『エスス・ピンセット工芸神の指先』

見た目は『とある魔術の禁書目録』に出てくる『ピンセット』瓜二つ（金属製のグローブのようなもので、人差し指と中指にガラスでできた長い爪のようなモノがついている）で、両手にはめられるよう2つある。これは様々なモノを『掴み』、『組み立てる』もので、空気や土・火などの形を変えて楯や剣を創造したり、人体を文字通りバラバラにしたり、生物の細胞や脳を弄つたりも出来る。制御は難しいが、手先が器用な千雨はすぐにマスターした。なお、エススはケルト神話の工芸や旅、大工の神である。

おおこうち大河内 アキラ

原作との変更点

刹那に恋心を抱いている。普段は母性溢れる癒し寡黙キャラだが、戦闘時にはかなり冷徹になる。千雨と同じく、殺人という行為に全く躊躇いがない。理由は、やはり刹那や仲間を護りたいから。

体が大きいことへのコンプレックスは、刹那により解消されている。奥手なので刹那にあまり積極的になれないが、刹那の事は狂信的なまでに慕っており、刹那が傷つけられたり侮辱されたりすると輪廻やマナ並みに怒る。怒るととてつもなく怖い。

刹那の現実主義リアリストで皮肉屋なところに少し感化されている。

千雨の突っ込みの最大の標的。

戦闘能力：

身体能力はマナやサククラスで、戦闘能力は極めて高い。気の総量はサクを上回る。サポートはあまりせず、ガンガン攻撃していくタイプ。一通りの格闘術を身につけ、格闘センスもまたピカイチ。スピードに頼るよりも重い一撃を放ちまくるタイプである（要はラカ

ンだが、気の総量も破壊力もラカンより上）。

『韋天』

千雨のよりもスピードに優れ、尚且つ凄まじい余波を発生させたりもできる。

『千龍郭滅』  
せんりゅうかくめつ

凄まじい気も纏って放つストレートパンチ。龍の形をした気が四方八方に飛び散る。生身の人間が受けたら軽く消滅する。

アーティファクト：『虹色枢』  
レインボウ・アーク

アキラのサイズにピッタリな虹色の枢ひじき。中に入ると7色のボタンが出現し、其々のボタンを押すことで体が凄まじく強化される。しかし、強化までには1分かかり、1日1回しか使用できない。なお、この枢にはアキラしか入れず、アキラが入ると自動で魔法無効化マジックキャンセルの結果が周囲に展開される。さらに強化後はアキラの髪と瞳が其々の色に変化し、見た目も若干変わる。強化は自由に解除できるが、一度解除するとまた枢に入らないと強化できない。

『赤』

身体能力が異常に上昇する。純格闘戦向き。

『橙』

背中に橙色の翼が生え、空を飛べるようになる。この翼は楯にも武器にもなる。

『黄』

土を自在に操れるようになる。また、土と一体化できるようになる。

『緑』

植物を自在に操れるようになる。また、植物と一体化できるようになる。

『青』

酸素を自在に操れるようになる。真空を生み出したり、遠方を監視したりも可能。

『藍』

精神に干渉できるようになる。相手の心を読んだり、乗っ取ること

も可能。

『紫』

冥府に干渉できるようになる。死者甦生や霊召喚などが可能。



第10幕「把握、それは零れない零 / Green . . . A Tree Swai

今更ですが、英字が入っているサブタイトルの話は第三者視点です。

戦闘は基本第三者視点で持っていきます。たまに輪廻視点も入れます。

「どうだ？」

「……一瞬捕えたようですが、彼奴め、どうやってかは知りませんが解除したようです」

夜白 刹那の問いに、桜咲Ⅱ YⅡ刹那は軽い舌打ちと共に答えた。

サクが放った『天常立の空駆槍』の槍は1本1本、サクの神経と接続している。獲物を捉えたらすぐにわかる。

「……アキラ、『緑』だ」

「わかりました」

刹那からの指示に、大河内 アキラはすぐに『虹色枢』の中に入っていく。途端に枢は空中に浮かび、周囲に結界が展開される。

「でもいいのか？まだ敵かわからないんだろ？」

ハイキングコースを歩きながら、何喰わぬ顔で両手に『工藝神の指先』をはめた長谷川 千雨が輪廻を見た。

『認識障害』のおかげで、一般人、いや並みの魔法使いでも、その珍妙な手袋を視認することなどできはしない。

「わかってないな。……いや、本当はわかっているんだろう？ 刹那さんの『平穩』には、善悪の区別なしに 『はぐれ眷属』なんていらなんだよ。

ましてや『真つ当な』はぐれ眷属が、こんな山の……それも山道以外にいるわけもない。

刹那さんの邪魔をするモノは、全て消さなければならぬんだ」

アーティファクトである狙撃銃、『ヴィルド・ファンク御転婆少女』を撫でながらマナ  
「AIIYIIタツミヤがほくそ笑んだ。

「それにしても、サクの捕縛術から逃げるとは……はぐれ眷属は無駄に知能が高くて強かだから困るんだよねえ……。ランクは、下級神の下くらいかなあ……」

夜白やしちろ 輪廻りんねが事も無げに言うと、千雨は顔を引きつらせた。

「おいおい、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ、私なら最高神（アリス創造神）だって瞬殺できるし、マナとサクだって高位神獣（中級神レベル）くらいなら倒せるよ」

それが千雨を落ち着かせるための嘘ではないことは、輪廻の表情を見ればすぐにわかるだろう。輪廻はつまらなそうに長い闇色の美髪を弄りながら、刹那の腕にしがみついている。

その表情が、せつかくのハイキングを邪魔されたという怒りによるもので『しか』ないと一目でわかる。でなければ、愛する刹那と肌を密着しておいて、浮かない顔をしているわけがない。

つまり、輪廻はこの状況下で、焦りなど微塵も抱いていなかった。もっとも、彼女の手にかかれれば『神界』が消滅しても『大したことはない』で済まされてしまうのだが。

五人は、さり気無く前方のグループを追って登山しつつ、周囲を警戒していた。

そしてようやく一分が経ち、ふよふよと浮かんで五人の後をついていた枢の蓋が開いて、アキラが出て来た。

普段は黒いポニーテールは、まるで植物のエキスを吸いつくしたかのように深い緑色に染まり、瞳はエメラルドを彷彿させるほど緑色に輝いている。

しかも、髪にはとところどころ、本物の植物が混じっていた。さながら、そのままたの意味での『植物人間』である。

「フフツ……この姿になると、植物の囁きが聞こえて山の中ではないとも心地よい」

普段より抑揚のない　まるで山の主ヌシか何かのような言葉遣いに、

他の五人は苦笑する。

どうやら『レインボウ・アーク虹色枢』で強化され、容姿が変わると性格や口調も若干変わるらしい。

当然、アキラの変身は他の者（一般人や他魔法関係者）には気付かれていない。

「アキラ、奴を探してくれ」

「はい」

アキラは短く返事をする、近くにあったクヌギの木に触れた。すると、まるで沼に沈むかのように、ズブズブと木の中に消えていった。

アキラにとっては初めてと言っていい実践である。刹那がアキラに指示を出したのも、ただの訓練の延長線上のものに過ぎなかった。

なぜなら輪廻の視線が、常に『敵』を射抜いていたのだから。

その頃、はぐれ眷属であるガウ＝シユレーメンは冷や汗をかき、輪廻の視線に怯えていた。

やばい。

彼は、素直にそう思った。あれは、ナニカはわからないが神獣だ  
それも、最高クラスの。

シュレーメンは眷属の中でも、その戦闘能力は極めて低い。  
なぜなら、彼はこの世界の自然調査のために派遣された眷属なのだ。  
知識がある者が見れば、彼を『エルフ』と呼ぶかもしれない。

先程の捕縛術から回避できたのも、彼が幻術の専門家エキスパートだからだ。

自我が芽生えた後、シュレーメンはいつの間にか人間の味を覚え、  
時たま食人行為を行っていた。

深い山だ。中学校のハイキングに選ばれるとはいえ、全く危険がな  
い山などありはしない。彼の自然の知識と幻術を駆使すれば、『遭  
難』や『熊に襲われる』などをでっ上げて食人行為をするなど、  
せんもないことだ。

しかしそれは、相手が『無力な人間』に限ればの話だ。

シュレーメンはあくまで植物の専門家であり、魔術の専門家ではな  
い。

ましてや下火マイナーな神道術の知識などあるはずもない。そのため、薬草  
を調合する程度の知識はあるが、サクが放った術が非殺傷の捕縛術  
とまでは気付かなかった。

だから相手サクが自身を仕留め損ねたのは、単に自分の幻術が優れてお  
り、尚且つ相手サクが未熟だからと判断した。

これは仕方がなかった。長い間自然調査と食人行為に明け暮れていたシュレーメンは、自身の幻術が人間のそれと比較しても、相手が相応の術者ならば、それほど遜色ない程度のレベルであることをとんと忘れていたからだ。

これは彼を生み出した神が、あくまで調査用の眷属だから自衛ができる程度で良いという考えで、彼を生み出し『能力』を与えたのだから当然のことだった。

しかし長い年月と、『今まで多くの人間を喰ってきた』という事実が、彼に不必要な自信を持たせていた。

確かに、眷属は妖あやしや魔獣をモデルに創られており、そのため『人を喰えば力が上がる』特性を持つ。が、はぐれ眷属でもない限り、そもそも自我がないんだから『それなら人間を喰おう』という発想自体が生まれない。第一、支配者コントローラである神からしてみれば、眷属が勝手に強化するなどデメリットではない。当然、そうならないようプログラムミング設定している。

しかし、『塵も積もれば山となる』とは言うが、シュレーメンの場合、彼が自信を持つほど強化されてはいない。

一桁や二桁喰ったところで、それほど劇的に強くはならない。それこそ、凄腕の術者を喰いでもしない限りは。

おまけに今まで『襲撃』こそしたが、『戦闘』はしていないシュレーメンには、そう判断するだけの材料がなかった。

要は、比較対象がいなかったのだ。眷属である以上、いくら彼とて身体能力は人間よりは強い。そう、『普通の』人間よりは強い。

彼が自身の計算違いに気付いたのは、自分の腹に大穴が開けられた、まさにその瞬間だった。

植物と一体化したアキラは、相手の草を踏む音や、木に振れる音で全てを察することができる。

今の彼女にとって、この山 いや、世界中の山、森、林などが、自身の領域<sup>レイヤ</sup>だった。

彼女はすぐに、拳動不審になりつつも、迷彩柄のチノパンと黒いジヤンパーを着た、眼鏡をかけた青年を見つけた。

何に怯えているのかとっていると、すぐに、輪廻の視線に怯えていることに気付いた。

彼女自身、輪廻の怖さは知っているので苦笑する。

しかし、アキラは輪廻や煌月達の、『全てを敵にしても刹那を護りたい』という想いには素直に共感していた。

それを、全く歪だと思っていない自分にも気付いた。そして、自分の刹那への想いは決して気の迷いなどではないと改めて自覚したが、

やじりづらいな。



そう思わずにはいられなかった。相手が人間に化けたモノだということにはわかっていた。

が、命であることには違いがない。アキラは深呼吸をし、刹那への想いを頭の中で反芻する。

あの人は、善人ぶるつもりなんてない。その証拠に、人を殺すために訓練している私を見ても……幻滅したりはしなかった。

次にアキラは、刹那が言った一言を思い出す。

『が、逆を言えば、お前たちの設計図や工事予定表は好きなように描き換えられる。警官になることも、稀代の大悪党になることもできる』

そして、静かに自嘲した。

まさか本当に、『稀代の大悪党』になる日が来るとはね。

そしてアキラは心からの笑顔を見せ、『敵』に飛びかかった。

傍から見れば、青年の背後にある木から、少女が生えてくるというホラー映画　それも三流の　さながらの光景だ。そう考え、アキラはさらに自嘲する。

『人殺し』という三文芝居を眺めるには、『殺す役』は……絶好の位置だ。<sup>ボシヨン</sup>

アキラは気を込めたストレートパンチを、青年の腹に喰らわした。血や臓物が飛び散り、彼女の腕は、青年の胴体を『貫通』した。

煌月さんの『雷脚』<sup>ツヤペリン</sup>の方がカッコイイなあ……。

そんなことを考えながら、アキラは目の前の、奇怪なオブジェのような光景をまじまじと見つめた。

「がハッ……！！！」

そんな言葉を『敵』が吐くが、同時に大量の血が零れ出た。

アキラは貫通した腕を抜くと、そのまま血塗れの手で木に触れた。その木から鋭い音を立てて、木と同色の刀が飛び出した。

「ぐッ！！」

『敵』は倒れず、人間離れた速度でアキラと距離をとった。

しかし、その時

「ぐわあッ！！！！」

『敵』　　ガウ！！シュレーメンの肢体に、紅の花が咲き乱れた。

それは、マナの『狙撃』だった。『転移弾』という、発射した弾丸の転移が可能という世界中の狙撃手に喧嘩を売っているような弾丸を使い、マナは見事に、シュレーメンの両手両足を撃ち抜いたのだ。アキラ自身、全く発射に気付かなかったのでギョツとする。

無理もない。マナの『御転婆少女』ウィルド・ファンゲは、御淑やかで物静かな少女の皮を被っている。なにしろ発射に火薬を必要としない。銃声など存在すらしてないし、当然硝煙も出ない。それを遠距離から、どう探知しろと言うのか。実力はあるものの、戦闘経験が少ないアキラ、そしてシュレーメンには酷すぎよう。

しかし、それでもシュレーメンは生きていた。いや、もはや人の姿を捨て、羽虫のような羽が生えた灰色の肌の青年に姿を変えていた。しかし、追撃は続く。

次にシュレーメンを貫いたのは、不可視の槍だった。

それは、空気の槍。千雨が『エスス・ヒンセント工藝神の指先』で空気から錬成し、生み出した槍だ。

そしてそれをサクが、力任せに投擲したのだ。

むろん、そんなことになれば、槍は悠長な速度で空中を飛んだりせず、戦艦の艦砲射撃もかくやという速度　いや、それ以上のスピードで『発射』された。

そしてそれが、まともに人体を貫いたらどうなるか。『突き刺さる程度ですむ道理がない。』

衝撃波が巻き起こり、地面には小さなクレーターができ、シュレーメンの身体は文字通り『四散』した。

草木や雑草が吹き飛ぶのを見て、アキラは顔を顰めた。

痛みこそはないが、今のアキラは植物と『同じ』だ。こんな光景を見せられ、心が安らぐわけもない。

帰ったら、千雨と投げた奴（アキラは千雨があんな速度で槍を投げられるわけがないと思っていたし、事実正解だった）に説教すると誓いながら、アキラは再び、木の中に戻っていった。

もっとも、実はアキラは説教される側だった。

彼女は知らなかったが、眷属の中には神と同じように『多生命保持者』であることが多く　一度殺したくらいでは死なないのだ。

それを知ったアキラは慌てるも、輪廻に止められた。

「どさくさになって逃げたよ、あいつ」

その顔は微笑んでいたが、ひどく凍えるような笑みだった。

第10幕「把握、それは零れない零 / Green . . . A Tree Swai

シユレーメンはまた出て来ます。

第11幕「当惑、それはリアリティと常識の切断」(前書き)

もう少しオリジナル展開を入れた後、ネギを登場させます。

## 第11幕「当惑、それはリアリティと常識の切断」

「冬休みとなりましたので、ちよいと旅行に行こうかと思えます」

『空間』の『左島』にある西洋風の建物、見た目はイギリスのカンタベリー大聖堂に酷似しているこの建物は、見た目そのまま『ゴシックの城』と呼ばれている。

『主島』が統合防衛兵器群の中枢がある『白亜の塔』を中心に、研究・訓練施設やアミューズメント施設が集中しているのに対し、『左島』はこの城を除けば、大森林や湖などの自然しかない。要するに、静かだった。

そしてその一室、金色と紅色の装飾に統一された大広間で、突然お兄ちゃんがそんなことを言ってきた。

「旅行、ですか？」

なぜか異常に似合う執事服を着込んだ 私より胸があるくせに、なぜ男物の執事服が似合うのかは謎だが 煌月が、テーブルにティーカップを置きながら言った。

スピードだけなら私をも凌駕する準最高位神獣『麒麟』である煌月だが、普段の彼女の立ち位置は、もっぱらお兄ちゃんの執事というか、秘書だ。



彼女は相変わらずの無表情で、お兄ちゃんに最高級のアッサムを渡しながら呟いた。

「では、すぐに手配を……」

「ああ、いいよ。必要ないから」

「決められていないのですか？」

「旅行つていつても、ちょっと違うかな」

その微妙なニュアンスに、薄いリアクション　要は無言　だつた他の面子が一斉に反応した。

「例の、紛争地帯めぐりかい？」

アッサムを飲みながら、銃の点検をしていたマナがニヤリと笑う。

「それも吝か<sup>ひんか</sup>ではないが、流石にそこまではしないさ。何しろ世界に、ここの訓練場以上の戦場なんてないからね」

お兄ちゃんがそう言うと、キーボードを叩いていた千雨や、ソファで丸くなっていたアキラまでもが顔を上げて苦笑した。

まあ、天狐わたしと麒麟きりんが行う訓練が、凄まじく厳しいことは認めよう。  
サクやマナですら、毎度毎度死にかけているし　いや、そうでない  
いと修行にならないのだが。

強くなることにあまり積極的ではない千雨はともかく、アキラは私も  
唾然とするほど成長スピードが速いので、教える方からすれば、  
楽しくて仕方がないのだ。

私は以前の『世界』で、人間の価値というモノを知った。それまで  
は、お兄ちゃん以外など気にも止めていなかった私だが、人間の利  
用価値を知り、お兄ちゃんへの独占欲が減った今、マナたちを家族  
として普通に受け入れ、大切にすることが出来る。

煌月はわからないが、たぶん嫌ってはいないだろう。煌月はまだ、  
人間界に来てあまり間がないし。

「では、何をするんです？」

刀の手入れをしていたサクが、こっちに歩いて来る。

「ああ、金稼ぎだよ」

【……は？】

私も含め、全員がポカンとした表情でお兄ちゃんを見つめる。

どついうことだろう。お兄ちゃんの財産は、以前の『世界』から引き継がれているし、麻帆良に来る前いろいろ依頼を受けて、10桁くらいは稼いだはずだが……。ましてや、今は現在進行形で給料をもらっている。

「……………すられたんですか」

「ねーよ」

首を捻ったアキラの頭に千雨が投げた文庫本が直撃した。もちろん気で強化しているのでダメージはないが。

「別に金がないってわけじゃあない。サクやマナはともかくとして、千雨とアキラは金稼ぎの経験なんてないだろう？　今のうちに、体験させておこうかと思ってな」

「確かに『一応』麻帆良は中学生のバイトを禁じているからな……。でも、雇ってくれるのか？　タツミヤや大河内みたいに実年齢よりも年う」

「何か？」

「マジすみませんでした」

千雨がロケットランチャーを構えたマナと、握り拳を作って頬笑むアキラに土下座した。

それを見て苦笑しつつ、お兄ちゃんは話を続ける。

「大丈夫だ。魔法世界でちょいと護衛の任務をするだけだ」

「……ってえことはもう、依頼受けているんですね」

サクが紅茶を飲みながら言うと、お兄ちゃんは軽く頷いた。

「軽い任務さ。その後はのんびり観光だ」

「魔法世界かー。どんなところかなー」

「アキラは行ったことなかったね。千雨も」

「ああ、話には聞いていたけどよ」

「で？誰の護衛なんだい？」

「ああ」

お兄ちゃんはいたずらっぽく笑うと、大声で宣言した。

「ヘラス帝国、テオドラ第三皇女だ」

『ヘラス帝国』。  
主に亜人が住む、魔法世界では『北の連合』に並ぶ『南の帝国』と呼ばれる超大国だ。その第三皇女、テオドラとは、プライベートな信頼関係を築いている。

戦後の混乱に乗じて暴れた犯罪組織の討伐依頼をこなしていくうちに、私たちは帝国と信頼関係を築いていたのだが、プライベートで中が良いのはテオドラだけだ。

「お久しぶりですね、テオドラ」

お兄ちゃんが煙管キセルを吸いながら、皇女に挨拶する。

当然、無礼中の無礼だが、これはテオドラ自身が望んだことだ。彼女は親しい者に敬称を使われることを好まない。散々堂々巡りの話し合いの末、何とか『様付け』だけはお兄ちゃんは止めることになった。

ちなみに、私は普通に『テオ』と呼んでいる。最初は『雌餓鬼』だったのだが蹴られたのと、お兄ちゃんに注意されたのが原因で（主に後者）止めた。

煌月、サク、マナもすでに顔見知りであり、敬語を使うのは生真面目なサクと、誰にでも敬語を使う煌月だけだ。

「うむ。本当に久しぶりじゃのう」

テオは笑顔で私たちを出迎えた。

初対面の千雨、アキラと自己紹介した後、仕事の話やプライベートの話をする。

「刹那への依頼じゃが、実は護衛というのは建前でのう……。本当の依頼は、妾が視察する予定の平原に住み着いておる龍の討伐じゃ」

「人間の次は龍ですか。 本当によく狙われますね」

「色々やらかしたからのう」

そう言って苦笑するテオ。

「色々と被害が増えておるのじゃ」

「強いのですか？」

「突然変異らしくてな。正体はよくわからんのじゃが……」

「わかりました……じゃあ」

お兄ちゃんはそのままで言って振り返り、後ろで厳かに紅茶を飲んで

いたアキラと千雨を見つめた。

「千雨とアキラ と煌月。頼む」

「承りました」

スーツ姿の煌月が頷き、アキラはため息をつく千雨を慰めていた。仕方がない。今のうちに、経験を積んでおかなくてはならないのだから。

第11幕「当惑、それはリアリティと常識の切断」(後書き)

次回は再び戦闘です。



第12幕「結果、それは予測と行動のエレメント/M a y . . . H o t S u a

多分次くらいからネギが来ます。

赤茶けた大地に、一人のスーツ姿の美女が立っていた。透き通った白に近い水色の髪に蒼い瞳、そして凍死体を思わせるほど白い肌。無表情で、長い日本刀を自身の足に立て掛けていた。

夜白やしほく 煌月こうげつ。

夜白やしほく 刹那せつなを護る2人の神獣の1人で、その正体は『麒麟』。白銀種は、雷と水を司る。

その後ろでは、黒を基調としたジャケットを羽織った長谷川はせがわ 千雨ちゆめが、大地と同色の天幕の下で、望遠鏡のようなモノを覗き込んでいた。

『ようなモノ』なのは、三脚の上に大口径の望遠鏡が斜めに取り付けられているのまでは普通なのだが、その望遠鏡からコードが伸び、後ろの見慣れない装置に繋がっているからだ。

その装置はかなり大きく、高さは千雨を遥かに超し、缶詰に洋梨と巨大な長方形の物体を乗せたような形をしている。

「本当に、こんなんで龍を倒せるのかよ……」

千雨は、その長方形から少し飛び出している、丸っこい先端が特徴的な細長い物体 合わせて6基 を疑わしさ全開の表情で眺めた。

それは、ミサイルだった。特に名前は付いておらず、輪廻りんねが先刻『空間』から引っ張り出して、千雨に渡したものである。『渡した』

といつても、分解し、重さもゼロにした状態で、だが。

千雨とて、『神の一部』や『エス・ペンセット工芸神の指先』を使えば立派な攻撃手段が手に入るのだが、相手が巨大な龍となると話は別だ。

『神の一部』は発動に時間がかかるうえ、千雨が無防備になるなどリスクである。しかも、賭ける必要性は高くない無意味なリスクだ。そしてアーティファクトを使っても、巨龍を分解するには時間がかかるうえに、喩え武器を創造しても、千雨にそれを扱うだけの技量がない。

話によると、例の龍は丘ほどもあるらしい。

そこで、千雨が今回使うのが、このミサイルである。このミサイル、元々は対艦ミサイルだ。しかも、標準器スコプ(望遠鏡部分)で目標を捉えれば、瞬時に目標の魔力波や体温、形状などを記憶し、魔導式エンジンが尽きるまで追尾し続ける。一応対妨害用に無線誘導も可能だ。

それでいて、元は軍艦の内部にまで突き刺さって炸裂するよう設計されているので、殺傷力は極めて高い。

千雨とて、現代兵器の代表格であるミサイルの威力は知識として知っているが、何しろ相手はデータなど無きに等しい突然変異の正体アン不明。  
不明。

もしかしたら、外殻が核シエルター並みに強固かもしれないし、ミサイルより遥かに高速かもしれない。

まあ、丘ほどのサイズの龍が、ミサイル以上の速度で飛ぶ光景など想像するだけで阿呆らしいが、それでも『もしかしたら』という思いが、千雨の中で広がっていた。

そもそも、龍が実際にいる時点で十分阿呆らしい。そして、中学生である自分がミサイルの発射トリガを何時でも押せるといふことも。

そして、その千雨の隣で、『レインボウ・アーク虹色枢』の『橙』で強化し、オレンジ色の髪と目、そして翼が特徴的な大河内おおこうちアキラが準備運動をしていた。

彼女は黒のライダージャケットを着込み、腰には大口径の大型リボルバを差していた。

「……………おお、来たぞ。……………何だあ、アレ……………」

千雨が驚愕と怖れと呆れが混ざったような声色で叫ぶと、残る2人も反応した。

ゆっくりとした動きで、『それ』は着地した。前足と翼が一体化している、俗に『飛龍』フイウランとかいうタイプの龍だったが、首が異様に長く、しかも三又になっていた。

そしてその先には、それぞれ一本角を生やした頭があった。そして長い尻尾が生えており、尻尾の先端は団扇のように平べったくなっていた。

巨体だが寧ろほっそりとしたイメージを持たせる体つきをしており、何ともバランスが悪そうだが、ダークレッドの岩のような鱗に覆われている。見るからに堅そうだ。

「成程、確かに、現在この世界で確認されているどの種類カテゴリーにも当てはまりません。しいて言えば『飛龍フイウァーロン』の」

煌月が相変わらずの無表情で真剣に検討していると、その三つ首龍は天に向かって猛り狂い、そのまましゃがみ込んだ。

「……休憩中か？」

「見つかっていないようだね」

「アキラは、取り敢えず様子見で『千龍郭滅せんりゅうかくめつ』を撃つてください。その後は、状況次第で追撃をかけます。胴体を狙ってください。そして、止めは千雨が」

「……え？いいんですか？……『アレ』使って」

「はい」

即答され、アキラは複雑そうな顔をしながらも、大きく羽ばたいて龍の傍まで移動した。

ステルスのおかげか、或いは視力は高くないのか、龍の首はそれぞれ別々の方を向きながらも、アキラを捉えられなかった。それとも、単に無視しているのだろうか。

「……奥義……」

アキラは気を込め、構えをとった。極限まで集束・凝縮された気は、バチバチと凶悪そうな音を立てながら、そして時折龍の形をした火花をまき散らしながら、徐々に大きくなっていく。

『せんりゅうかくめつ  
千龍郭滅』

そして、アキラは大きく振りかぶり、渾身のストレートパンチを龍の身体に叩き込んだ。たちまち轟音が響き、龍の身体が一瞬だが『浮いた』。龍の気は四方八方に広がり、幾重にも気を纏った龍が爆ぜ、三つ首龍は大声を上げて吠えた。

辺りに砕けた鱗の破片が飛び散り、その鱗に込められていた魔力が拡散した。

しかし、腹にダメージを受けたとはいえ、三つ首龍は健在だった。アキラの最大技を耐えきった龍は、アキラを見つけると怒り狂って口から炎を漏らした。

が、そこに煌月の蹴り 雷の速度で撃ち出される『雷脚』<sup>ジャペリン</sup>が、それも連続して何億発と叩き込まれた。今度こそ、三つ首龍は完全に吹き飛んだ。上空へ吹き飛ばされた龍に、煌月は抜き放った日本刀で斬りかかった。

『そつらいカリン  
奏雷追復曲』

それは斬撃というより、ほぼ完全な雷撃だった。龍は稲妻を落とさ

れたかのように輝き、次の瞬間、鱗という鱗が爆ぜた。展開していた障壁が限界を超えたのだ。それに続き、龍は全身から血を撒き散らした。

血と鱗の破片が雨や雹のように地表に降り注ぎ、真下でこの光景を眺めていたアキラは、慌てて千雨の元に『韋天<sup>イテン</sup>』した。

なんっつー攻撃だ。

そう思つて顔を顰めながら、千雨は戻つて来たアキラ、そして煌月を一瞥した。

そして、ミサイルの発射トリガを引いた。

途端に轟音、そして突風が巻き起こり、千雨は慌てて耳を塞ぎ、しやがんだ。

眠りから覚醒した6基のミサイルは垂直に上昇、すぐにコースを変え、真一文字に三つ首龍に突入した。

龍はまだ意識があるのか、炎、というより熱線を吐いてミサイルを迎撃した。

1基、いや2基がそれに巻き込まれ、瞬時に果てた。

「くそッ……ド畜生!……」

千雨は舌打ちし、拳を天に突き上げた。

「マツハの速度のミサイルを、平然とピンポイント邀撃しやがった。……あいつは頭が3つある。口も3つか……対空砲が3門あるようなもんだ……しかも狙いは正確だッ」

続いて龍はそれぞれ扇状の炎を吐いた。

ミサイルは緊急回避しようとするが、3基が避けきれず、まともに灼熱の炎の中に入った。

しかし、残る1基は猛然と龍の胴体　というより、右翼の付け根に突入した。そして、炸裂。

これが止めとなった。どうやら、翼を動かす筋肉をやられたらしい。飛行魔法が安定せず、丘ほどもある巨体の龍が重力に抗う術など持つわけもなく、龍の巨体はそのまま大地に墜落した。

凄まじい揺れに転びそうになるも、千雨は歓喜の雄叫びを上げた。アキラもガッツポーズをして喜ぶ。

が、煌月の

「これで千雨の使い魔は決まりましたね」

の一言に文字通りの意味でひっくり返った。

「までまでまでッ！！　どうしてそうなるんだよッ！！」



千雨は慌てて反論、というか説明を求めて煌月に飛びついた。が、肝心の煌月は相も変わらず無表情で千雨を見下ろしたまま、淡々と説明した。

「簡単なことです。刹那様は、千雨とアキラをコンビとして組ませるつもりですが、流石に攻撃全てをアキラに任せることには無理があります。」

その点、使い魔なら『神の一部』より召喚時間は短い。いや、擬人化させて連れていても良い。それにこの龍、かなりの実力です。このまま殺すには惜しい」

言外に『まともな攻撃手段がないのだから我慢しろ』と言われた千雨は唸るも、その通りのため反論できない。

確かに、サポート専用の私に、攻撃力の高い『龍』の使い魔は有り難い。いや、それどころか鬼に金棒か……。アキラのパワーと龍のパワーを合わせれば、私が攻撃役にならずとも、あの二人に勝つことが可能かもしれない……。が……。

そこまで考え、千雨は重要なことに気付く。

「だがよお、私の言うことを龍が聞くのか？ 犬や猫じゃあるまいし」

そう、確かに、使い魔をとつても千雨が扱いこなせなければ意味はない。

しかし、煌月はさも当然と言わんばかりに答える。

「当たり前じゃあないですか。止めを刺したのは千雨ですし」

その指摘を受け、千雨はあんどりと口を開けたまま固まった。

「いや、確かに……言われてみれば……そうか」

頭を掻きながら、千雨はようやく納得した。

こうして、千雨に三つ首龍の使い魔、サンレイが生まれた。ちなみに雌である。

第12幕「結果、それは予測と行動のエレメント／May・・・Hot Sun

サンレイは、人外の仲間を増やすために登場させました。  
あまり出番はないかもしれませんが。

次回はネギ登場です。

第13幕「胎動、それは不可視で不思議な未知の旅路」(前書き)

いよいよネギ登場です。

少々アンチになるかもしれませんが。

### 第13幕「胎動、それは不可視で不思議な未知の旅路」

2月になり、学園長室でお兄ちゃんと待っていると、なぜかジャージ姿の神楽坂明日菜かぐらさか あすなが殴り込んできた。

「学園長先生！一体どーゆうことなんですかつ！！」

しかも、えらく御立腹である。その後ろには、小さい眼鏡をかけた赤毛の少年、ネギィスプリングフィールドと近衛木乃香このえ このかが立っていた。

木乃香は、私たち2人を確認すると、笑顔で近づいて来た。

「おはよう、セツ兄様にリン姉様」

「おはよう、木乃香。どうした……なんで神楽坂はジャージなんだ？」

私たちと木乃香は、小さい頃から良く遊んでいたので関係は良好だ。特に木乃香はお兄ちゃんに良く懐いていた。

笑顔で聞いたお兄ちゃんだが、木乃香から事情を聞いて顔を引きつらせた。

なんでも、件の少年がくしゃみをしたと同時に、神楽坂の制服が吹

き飛んで、憐れにも塵と化した揚句、彼女が羨望の眼差しを向けているタカミチⅡTⅡ高畑教諭たかはたに見られたらしい。

おそらくは『武装解除』の暴発だろうが、一般人の木乃香と神楽坂がそれを知る由もない。いくら中学生とはいえ、いや中学生だからこそか、憧れの人物（しかも男性）の目の前で全裸にされれば、普通は怒る。

そんなわけで制裁をしていたら、高畑教諭から、少年が教師になることを聞かされさらに驚愕。当然、それは本来なら違法だ。よしんばそれを彼女らが知らなくても、『常識』であることくらいは理解できる。だから、真偽を確かめに殴り込んで来たらしい。

世界唯一と言っても良い『魔法無効化能力者』マジックキャンセラーの神楽坂に、武装解除が効いたのか、という素直な感想では済まない。

なぜなら彼女には、『認識障害』が効かず、そして『一般人』は『普通は』こんな事態は理解不能だからだ。

幸い、木乃香には『認識障害』が効いているので、彼女に見られたことは決して致命傷ではないが、決して良いことではない。

が、神楽坂に見られた（というより被害を与えた）のは大問題だ。『認識障害』や『記憶操作』の類は全く効かないのだから、物理的に消してもしない限り対処法はない。

くしくも、瀬流彦教諭せりゅうひこが懸念していた『赴任当日に魔法をバラす』が現実のものになってしまった。

私は、超然としていた学園長の顔が、一瞬失望に歪むのを見逃さな

かった。心の底では、もう少しマシだと期待していたのだろう。詠春もそうだが、この御老体もまた組織の長に向いていない。

「まあまあ、明日菜君。彼は特別な事情により、特例中の特例として教委（教育委員会）や文科省（文部科学省）も許可してある。当然、彼の母国である英国イギリスもじゃ。そして学力については何の心配もない。」

が、すぐに笑顔になって説明を始める。教委や文科省を、メガロメセンブリア連合に入れ替えれば、間違ったことは言っていないのだが。

「ネギ君には暫しの間、教育実習生として2 - A 副担任補佐をやってもらおう。その後、正式に教師となるかどうかが決まるはずじゃ」

神楽坂は若干絶望に染まった顔でお兄ちゃんを見ると、お兄ちゃんは肩をすくめ、苦笑しながら頷いた。それを肯定と受け取った神楽坂は、がっくりと肩を落として膝をついた。

その後、ネギは途中でお兄ちゃんの指摘を受け、常時展開していた障壁を解除するも、お兄ちゃんが制止する間もなく、絶賛巽仕掛け中の2 - A に飛び込んでいった。その結果、ネギは無残な姿で教壇

に叩きつけられた。

ネギ、そして生徒陣がそれぞれ違った意味での驚愕の悲鳴をあげながらも、お兄ちゃんは手を叩きながら教壇に立った。

見るからに危なっかしい様子で挨拶をするネギに、生徒一同は黄色い歓声を上げるも、お兄ちゃんの「静かに！」の声で一斉に静まり返った。

かつては騒音ヴォイスと混沌カオスの魔窟だった2-Aも、お兄ちゃんが来てからは大分マシになったのだが、それでもやはり「騒がしい」という人間の集団の根本的特徴は消えない。

が、それでもお兄ちゃんの人徳のおかげか、お兄ちゃんか私の指示の時だけは、訓練中の軍隊並みに自粛するのもまた2-Aだ。

ネギは、先刻までは打って変って深海のように静かな光景に目を丸くするも、ようやく教員としての自覚が働いたのか、引き締まった顔で生徒と対峙する。

「質問をするのは結構だが、周囲のクラスに迷惑はかけるなよ。…あと罨を張った連中、後で輪廻の説教」

【申し訳ありませんでしたッ！】

犯人かと思われる生徒たち数人が一斉に土下座した。……そこまで怖いか？ ほら、来日当日にジャパニーズ・ドゲザを見る羽目になったネギも困惑してるじゃん。



確かに、2 - Aの問題行動はお兄ちゃんに迷惑をかけ、評価も下げ  
る要因になるから、しっかりと、丁寧に、例外なく、きちんと諭し  
たが……。

「よし朝倉、質問に関してはおまえが仕切れ。でも五月蠅すぎたら  
お前の責任な」

「何ですかそれッ!? 死亡フラグどころか、死亡確定じゃあない  
ですかッ!？」

「どの道、俺が言わなくてもお前が仕切っていたらどう？」

「うっ……否定できない……わかりました。じゃあ気を取り直して  
」

朝倉の質問タイムが始まる中、さり気無くお兄ちゃんに近付いた千  
雨が、信じられないと言わんばかりの表情で、お兄ちゃんに尋ねる。

「アレが、本当に『英雄』の息子で、魔法学校メルディナ首席卒業なのか?  
あんな畏、今じゃ私だって初見で避けられるぞ。……魔法学校の教  
育水準はどうなってやがるんだ?」

近くにいたマナは苦笑し、サクとアキラは呆れが極地に達して、も  
はや不憫なモノを見つめる目でネギを見ていた。

「……彼の才能は本物だ。が、良い教育者には恵まれなかったな。彼が悪いわけじゃあない。現魔法協会の教育が悪いのだ……可哀相な世代だ。教育によつて、人は如何様いかようにも変わる。連合の連中は、よほど『正義』に固執しているらしい。これじゃあ、戦時下の教育の方が遙かにマシだな」

「……じゃあ、彼をサポートするの？」

私は小声でお兄ちゃんに囁いた。

「少なくとも今のあの子じゃあ、木乃香の護衛の障害にしかならないよ……ネギを木乃香と離しておいて正解だったね……」

「ああ、学園長も不用意に木乃香や生徒を魔法に関わらせないよう言っていたが、それは『意図的接触』の場合だ。『偶然』や『自分の意思』での接触となると、話は違うよ……正直な話、私は彼を排除するべきだと思う」

私に同意したマナが、冷めた目でネギを見つめた。

「うーん、刹那さんと輪廻さんは、ネギ先生に魔法教師だと知られてないから……こつそりと……？……駄目か。それでサポートできたととして、本人が自覚して改善するようにしないと……」

ネギを殺すのに若干の抵抗があるのか、アキラは腕を組んで唸っている。

「結局は、予定通りにやるしかないでしょうね……彼をどうするかは、学園長に任せましょう……」

最後に、諦めきった顔で机に突っ伏していたサクがポツリと言った。

そしてそれは、お兄ちゃんと同じ意見だった。

第13幕「胎動、それは不可視で不思議な未知の旅路」(後書き)

ネギは明日菜と木乃香の部屋には同居しません。

**第14幕「災害、それは無慈悲で偶発的な折れかけのキール」(前書き)**

ここからは原作を少し変えつつ行きます。

本格的なバトルは、修学旅行までお待ちください。修学旅行になったら月詠とかボコりますので。

## 第14幕「災害、それは無慈悲で偶発的な折れかけのキール」

ネギの問題行動は、私たちの予想の遥か上を行った。

授業では神楽坂の服を再び吹き飛ばし（流石に女として同情を禁じ得なかった）、歓迎会では高畑教諭に『読心術』を使い、あげくにお兄ちゃんが阻止したが、製造も使用も禁じられている強力な『惚れ薬』を製造・使用しかけた。

これには私たち夜白家全員が激怒し、他の教員もそれに倣った。

子供だから仕方がないというミスでは済まず、立派な犯罪だ。

中には修行の中止などを訴える者もいた　というより、大多数が処罰を支持した。これには比較的ネギ擁護派だったガンドルフィー二教諭や、高畑教諭も含まれる。

流石に、ミスはともかく、犯罪となれば庇い様がない。

結局、ネギには神楽坂の塵と化した服の弁償や、暴発阻止のためのトレーニング、さらに減給などのペナルティが赴任早々に与えられることになる。

お兄ちゃんや私たちは、ネギに自分たちの正体を明かさぬまま、『表の面』で少年をサポートすることになった。

そんな時、私とお兄ちゃんが職員室で談笑していると、突然悲鳴とともに誰かが飛び込んできた。

「うわあぁ～ん、先生ー!!!」

2・A生徒の佐々木まき絵と和泉亜子いずみあしだった。

何事かとネギもよって来て、私たち3人は、ところどころかすり傷を負った2人から事情を聞く。

ウルスラ女子高校の生徒たちと一悶着あり、何でも暴力事件（ただの喧嘩だろう）が起こったらしい。話を聞いたネギは表情を一変させ、わき目も振らずに走り出した。

新田教諭が注意するも、ネギの足が止まることはない。

「まったく、状況も不明確なのに走り出してどうする。あやふやなまま教師が介入すれば、さらなる混乱と対立を招くだけだぞ……」

ため息を吐きつつ、お兄ちゃんは立ちあがった。持っていたコーヒークップの中身を一気に飲み干し、

「佐々木、和泉、案内してくれ。そして、より詳しい現場の状況説明とそうなってしまった過程の説明を頼む。……主観や私情は入れなくてもいいよ、審判するのは君たちではない。」

……輪廻はここで待っていてくれ。

……新田教諭、少し問題が起こったようなので席をはずします……ええ、報告は後ほど……」

「はい」

私は頷くと、どこまでも冷静なお兄ちゃんの背中と、あまりのマイペースさに唾然としている女子生徒2人の背中を見送った。

その後、無事仲裁に成功したお兄ちゃんは、午後からの出張（純粹な『表』の）のためにスーツケースを片手に出かけて行った。  
お兄ちゃんを見送った後、

「輪廻先生、申し訳ありませんが、次の体育の授業に出られなくなりまして……代わりにお願いできますか？」

と体育教諭に言われたので、私は了承した後、屋上に向かった。  
麻帆良は学園の規模、そして生徒の数の割にはグラウンドが不足しており、バレーコートなどは屋上に追いやられていることが多い。

そして屋上に着いた後、私は頭を抱えた。

そこには、2-Aと先程のウルスラの2勢力が火花を散らし、いや、殴り合い一歩前だった。い



そして、なぜかネギが高等部連中にもみくちやにされている。

私は怒りを笑顔で隠しながら、

「はい、雌餓鬼共……今すぐその子供じみた玩具の矛を収めないと日本海溝に沈めるよー」

手をパンパンと叩きながら、両陣営の中心となっている場所に向かった。

そこには、今にも殴りかからんばかりの姿勢で静止した神楽坂と、向こうのリーダーと思しき高校生が、同じく拳を天に振り上げた状態で静止していた。

そして私を見て、一斉に顔を青くする2-A一同。私は神楽坂の顔に近付き、微笑みながら彼女に言葉を投げかける。

「さて神楽坂、『体育』は何の時間かな？」

「え、えーと、体を動かす……」

「そう。正式には、『心身の健康についての理解と合理的な運動の実践を通じて、健康の保持増進と体力の向上をはかり、心身ともに健康な生活を営む態度を養う』ことを目的としている科目なんだよ。では、貴女たちがやるうとしていたことは何なのかな？ 体術か何かの訓練かな？ ここは軍国主義下の教育機関じゃないんだよ？」

「えーと……た、ただの『喧嘩』……です……」

「そつだよ。これは授業じゃないね。で、喧嘩は学校で『も』してはいけないよね。」

「……で、その雌共。今は屋上<sup>「上」</sup>、中等部2-Aの使用時間というところになっているんだけど、どうしたの？それとも、日本語と数字が読めないの？」

「わ、私たちは自習で……」

しどろもどろで言うウルスラのリーダーに、私は嘲るような笑みとともに言い放つ。

「だったら、まずはローテーションを確認して、今回のような『不幸な重なり』が起こらなくするようにするべきでしょう？大体、ここ中等部の屋上は、当然中等部の生徒が優先して使えるよう、ローテーションが組まれているはず。都合良く開いている時間なんてあんまりないよ。考えなしで行動するから、こんな『事故』が起こるんだよ。軽率な行動は慎みなさい」

「ぐっ……」

傍から見れば、意図的なことであることは明白なのだが、敢えて『事故』の部分を強調する。

反論しようにも、ここで『わざとです』といえばさらに悪化することなどわかり切っているからか、黙っていることしかできないらしい。

やれやれ、『こついうこと』は、お兄ちゃんの専売特許なのだが。

私は2-Aの方を向き、『我関せず』といわんばかりの顔をしているサクとマナを睨みながら、

「で、ウチの欠陥生徒共も、手を出そうとしたからには」

「あ、あのッ!！」

「あ?」

突然遮られ、私は怪訝そうな表情を浮かべて声の発信源　ネギを見つめた。

そして、ネギはスポーツで白黒つけるという提案を出した。

悪くない考えだ。お兄ちゃんが諫めておいてこの結果なのだから、この後、中途半端に終わらしては、再びいざこざが起らないと限らない。

が、この後、ウルスラは爆弾を　それも特大の戦略核を投下した。

「私たちが勝つたら、ネギ先生と夜白刹那先生をいただきますわ」

バキン、と音が響いた。

私の足元の床に、ひびが走った音だった。

結局、2 - A V S ウルスラのドッジボール試合は始まったわけで

私は流石に自粛したが、私の目の前では、22対11の試合が行われている。が、すでにウルスラは、1人……あのリーダーを失っていた。

ボールを潰さんばかりに握りしめながら、幽鬼のオーラを纏ったアキラが、いきなり容赦のない一撃を浴びせて吹き飛ばしたのだ。目にもとまらぬ（私には見えるが）マツハの弾丸（比喻ではない）を腹に直撃され、憐れウルスラのリーダーは、血を吐きながら何度もバウンドして転がっていった。

これを驚愕して眺めていたウルスラ、と2 - A（一部）だったが、地獄の釜は開いたばかりだ。

次にマナが4人に一回で当てて脱落させた。4人共、ものの見事に外野まで吹き飛んでいった。っていうかマナ、ボールに気を纏わせて操作してるだろ……凄まじいスピードだったが、あの軌道はおかしいぞ。

同じように、サクが剛速球で当て、跳ね返って来た球をキャッチし再び投球。これを4回繰り返し、ウルスラはたちまち残り2人になった。

そして、最後に千雨が1人を仕留め、最後の1人は再び鬼と化したアキラの餌食となった。

ここまで所要時間、4分34秒。

試合終了である。

ちなみにウルスラには、後でしっかり説教しておいた。

第14幕「災害、それは無慈悲で偶発的な折れかけのキール」（後書き）

次回は図書館島編です。

第15幕「探検、それは好奇心と背徳心でバランスのとれた探求欲」(前書き)

図書館島編です。

こころへんはあまり変えません。

第15幕「探検、それは好奇心と背徳心でバランスのとれた探求欲」

ネギのテストとして、2-A最下位脱出が言い渡された。ウチのクラスは、相変わらず社会と国語が高いものの、他が足を引っ張っており、未だ最下位からは抜け出せずにいた。

私たちは学園長からアドバイスなども禁じられたが、予定通りというか恒例の、『テスト前勉強会』（参加商品のお兄ちゃん特製洋菓子の効果もあって、驚異の参加率を誇っている）の準備を進めていた。

が、開始の前日の真夜中、サクから連絡を受けた。

「は？木乃香とネギとバカレンジャー共が、図書館島に向かってる？」

『ええ……どうしましょう。図書館島に敵性反応はありませんでした。いえ、魔法使いの反応はありましたが、敵意はありませんでした。』

……ですが、伝えに聞くところ、件の島には盗難防止用のトラップが仕掛けられていると聞きます……』

携帯電話から、当惑したサクの声が漏れてくる。

「あー、バカレンジャーってえことたあ、神楽坂と佐々木、そして綾瀬あやせ 夕映ゆえと長瀬ながせ 楓かえでと古菲クフエイの五人＋ネギと木乃香？」



『ええ、そこに早乙女<sup>はやふめ</sup> ハルナさんと宮崎<sup>みやまき</sup> のどかさんが加わっています。ですが……うん？……ああ、たった今、早乙女さんが誰かに連絡を取り始めました、おそらく』

サクの音が終わらぬうちに、横で神妙そうな表情で聞いていたお兄ちゃんの携帯が鳴った。

「 正解<sup>しょうかい</sup>」

お兄ちゃんはため息をついて、携帯に出る。

「どうした……何、ネギ教諭たちとの連絡が取れない？……ああ、落ち着け……ふむ、学園長に連絡する。安心しろ……」

お兄ちゃんはすぐに学園長に連絡した。

「ああ、夜分遅くに申し訳ありません、あ？……『魔法の書』は偽情報<sup>デマ</sup>？

しかし……はい、わかりました……」

お兄ちゃんは珍しく、狼狽した表情で私を見た。

「何でも、学園長も本当に噂を信じて図書館島に行くとは思ってなかったそうだ、慌てて適当に罾に仕掛けて落としたりしい……俺は担任だから開けるわけにもいかん、輪廻、すまないが行ってくれるか……？」

「愚問だよ、お兄ちゃん……私が、お兄ちゃんの命令に従わないとでも？」

私は微笑むと、すぐに図書館島へと向かった。

何でも『最下位の生徒は小学生からやり直し』という根も葉もない噂に乗せられ、さらに学園長が流した『魔法の書』の罾に乗せられた馬鹿共が、夜の図書館島に乗り込んで行ったらしい。

まさか、本当に乗り込むとは思っていなかった学園長は石像ゴレムを操り、勉強ができる空間へと落とすたそうだ。

そこに行つて、馬鹿共を回収するのが私の仕事である。それにしても、ネギも教師なら止めるべきだろうに。カンニングどころか、不法侵入に窃盗罪のオマケ付きだ。やはり、色々指導してもらふ必要があるようだ。

サクに帰るように伝え、早乙女と宮崎も叩き帰した後、私は図書館島に入つていった。

『図書館島』。

見た目は巨大な洋館で、麻帆良湖に浮かぶ世界最大規模の巨大図書館。かつて旧世界で広がった2度の世界大戦中、戦火を避けるため世界中から様々な貴重書や魔道書が集められた。が、蔵書の増加に伴い（なぜか上ではなく）地下に向かって増改築が繰り返されたために、現在では全貌を知るものはいなくなっている。

そのため、その実態を調査する中・高・大合同サークル『図書館探検部』なる部も存在している。

もはや、どこのダンジョンだと文句を言いたいレベルなのだが、極めつけは、防犯対策用に様々なトラップが仕掛けられていることだ。おまけに、シヤレでは済まないものも多い。

本来なら、この手の膨大な書物は、電子データ化しておくのがベストなのだが、魔道書の中には『この紙にこのインクで書かれているからこそ効果がある』書や、『文字自体に魔力が籠っている』書も多い。

こういう書は、喩え呪文や内容だけ電子データ化しても無駄だ。

そのため、膨大すぎるアナログデータとして残っている。

それでも、紙の劣化防止や、対燃焼効果の魔力障壁に護られており、何百年前の蔵書も、劣化どころか汚れ一つついていない。ベストではないが、まあベターな保存方法といえるだろう。

ユーザー側からすれば、何処に何があるか、調べるだけで力尽きるだろうから、たまったものではないのだが。

言うまでもなく、これらの蔵書は魔法使いにとっては垂涎もので、こここの存在が、麻帆良が狙われる一大要因となっている。

入ると、目の前には都心を彷彿とさせるビル群　ではなく、巫山<sup>フザ</sup>　戯<sup>ケ</sup>てんのか的な超大さを誇る本棚が乱立している。そして当たり前のように、本棚には隙間なく、膨大な数の本が詰め込まれていた。

『本の虫』が見れば涙腺崩壊を起こすこと間違いなしだが、こんなものはまだ序の口だ。

罨を乗り越えつつ、ひたすら　だが高速で進むこと一五分。

おそらくここから落とされたのだろう、ぽっかりと穴があいている場所までたどり着いた。

私は目の前のゴーレムに話しかける。

「学園長、何考えているんですか。……馬鹿共がやって来ることくらい、想定しといてくださいよ。」

……せつかくの、お兄ちゃんとの時間を邪魔して……潰すぞ」

「フオツ!?!……こ、怖い……。そんなに殺気を出さなくていい、輪廻君。」

こつちもまさか、あんな噂を信じ込むとは思わなんだ……。

安易なズルなどせず、生徒を導いていく姿をネギ君に求めたんじゃないが……」

そう言って、フウ、とため息をつくゴーレム。

「や、無理でしょ……。でも、木乃香に見られて良かったの？」

「しっかりと『認識障害』は効いておる。木乃香までついてきたので、さらに念を入れてかけておいたからのう」

「ネギはそつちでしつかりと教育しておいてよ、こりゃあ犯罪まが  
いだしねえ……」

「あいわかった。そろそろ、本腰を入れるべきかのう……。エヴァ  
君に頼むとするかの」

「マクダウエルに？」

学園長曰く、ネギに一度、決定的な挫折を味合わせ、教育し直すつ  
もりらしい。

「危険だよ、今のマクダウエルは呪いが解けてるから、憂さ晴らし  
や復讐以外にネギを襲う理由がないよ。

子供なんて、あっさり死ぬよ？ 御老体、ちよいと焦りすぎだよ、  
人生まだまだ長いですよ？」

「ムウ……。そうじゃのう。あまりにもリスクが高い……。か。神多  
羅木君や瀬流彦君に頼み、心身共に鍛えてもらうことにするかの」

「今彼に死なれると、お兄ちゃん  
の努力が無駄になるからね。それ  
までは私もサポートしますよ学園長……。お兄ちゃんがサポートして  
おいて、あっけなく死なれちゃったらお兄ちゃんへの侮辱になりま  
すからねえ。」

『鉄は熱いうちに打て』、ですよ学園長。  
ネギは善にも悪にも染まりやすい。まだまだ、矯正は効くはずですよ」

「そうじゃのう。荒療治も辞さぬつもりじゃったが、考えてみれば、お主たちが学園にいる限りは安全じゃ……。ネギ君を狙う者などであるわけもない。ゆっくりゆっくりやれば良いか」

学園長は静かに頷いた。私は手を振ると、そのまま穴の中にダイブした。

「……何だ、こじ」

私は唾然として、目の前の光景を見つめた。そこは、机に椅子、本棚には『中学2年生用の』教科書や参考書、筆記用具、冷蔵庫には大量の食材と飲み物、キッチンにシャワールームまでついていた。

「……ウチのクラス全員連れてくるべきだったんじゃないか？ 学園長も、即興にしては無駄に拘っているなあ……。やるとなったら、とことんやるタイプかな？ あの御老体は……」

そんな他愛もないことを呟き、気絶して寝転がっている生徒とネギ

を見つめながら、私は闇色の長髪を弄ってため息ひとつ。

「せっかくだし、テスト前日までここでやらせとくか……念のために……」

私はポケットから烏の式神を出すと、現状を書いた紙を持たせて送り出した。

流石にここでは携帯は通じないし、思念通話は図書館内の魔力が天然のジャミングになる可能性が高い。

いや、精度を上げれば届くだろうが、そこまでして思念通話にこだわるのも馬鹿らしい。

そして、私は大きく息を吸った。

「起きろー！ー！ー！ー！ー！！！！！！」大馬鹿共おおおお！！！」

【うぎやああああああああああああああああああ！！！！】

結局、2・Aはぶつちぎりですり上がり1位となり、ネギは正式に教師、そして2・A副担任補佐となった。

第15幕「探検、それは好奇心と背徳心でバランスのとれた探求欲」(後書き)

吸血鬼編はやりません。

エヴァは復活してますし、ネギも急いで強くなる必要がない以上、やる意味もありませんので。

そのまま、修学旅行編へと行きます。こっちは長くなりますよ。



第16幕「転換、それは彼の者のねじれ／Fire・・・Dull Death

修学旅行編の前日談です。

刹那が学園長に『ある提案』をします。

始業式から、幾許か日が経った頃。

麻帆良学園学園長、そして関東魔法協会理事である近衛このえ 近右衛門このえもん は悩んでいた。

彼は、関西呪術協会との融和を推し進めており、今度、それに関する親書を送るつもりであった。

最初は、今年修学旅行に向かうことを機に、3 - A 副担任補佐ネギ「スプリングフィールドを『特使』とし、西の総本山に向かわせるつもりであったが、ここに来て、学園長はその方法の変更を検討し始めていた。

理由は、ネギがあまりにも未熟であり、学園の教師陣に鍛えられていても、未だに実戦経験が皆無なことだ。

西には、東との融和策に良い顔をしない者も多いと聞く。一体どのような妨害行動を行うか、解ったものではない。

何より、学園長は孫娘、近衛このえ 木乃香このかのみが心配だった。ネギを護り、木乃香も護る。それは難しい。大量の魔法使いを配備すればよいのだが、それでは西に宣戦布告をするようなものである。

学園長が考えを改めたのは、3 - A 担任にして、今や麻帆良の頭脳となった夜白やしろ 刹那せつなの影響である。

彼の慎重すぎるが的確かつ理論的な発言や提案・上申は、今や麻帆良中で絶大な信頼を得ていた。

それに感化された学園長は、今更ながら、自分がどれだけ楽観的だったかを把握した。

彼はこう考えていた。

西に『英雄の息子』ネギを送れば、西の強硬派も容易に手は出さまいし、出したら出したで、彼のちょうど良い修行になる　と。

しかし、今思うと、この計画は穴あきだらけどころか、そもそも『計画』ですらなかった。

西がネギに手を出さないという『前提』は、精密な計算で導き出された『判断』や、様々な事実を元に組み上げられた『予測』ではなく、理論的根拠など全くない『願望』だったからだ。

むろん学園長としては、関西呪術協会の長で、己の娘の夫、義理の息子でもある近衛詠春このえいしゅんの手腕を信じたいところではある。

が、組織は人間の身体とは違い、頭と手足は常に一心同体ではないのだ。第一、頭の意向に全ての手足が従うのなら、東西融和などとうの昔に完了している。

ましてや、『英雄の息子』は、決して誰からも神聖視される存在ではない。むしろ、ネギの父親に家族や知人を殺された者からすれば、ネギは憎悪の的にしかならない。

戦場は、理不尽さと苦しみと悲劇だけが平等の世界なのだ。学園長とて、大勢の人間から恨みを買っている。

ならば、『大戦』とまで呼ばれた魔法世界を滅ぼしかけた戦争で、どれほどの悲劇が生まれたか　そしてその怨みのうち、どれほどが『英雄の息子』に向かうか。想像するだけで、学園長は震えを禁

じ得なかった。

それだけではない。権力にしがみつく政治家にとって、『英雄』は自身の土台を揺るがす『疫病神』でもある。

安全地帯で会議を繰り返していた『政治家』と、戦場で数々の武功を上げた『英雄』。どちらに民衆の支持が集まるかは自明の理だ。

『英雄』は『権力者』から危険視され、辺境に押しやられるか、殺される。そんな『英雄』は、世界中の歴史をひっくり返せばごまんといた。

みなもとのよりと源頼朝に殺された（正確には自決に追い込まれた）、みなもとのよしつね源義経などが良い例である。

つまり、ネギもまた、連合に命を狙われる可能性は十分ある。というより、ネギ本人は自覚していないが、彼は連合の攻撃で故郷を失っているのだ。

連合にとって、この状況は、『ネギの死』を関西呪術協会になす擦り付ける絶好の機会である。

それは責任回避どころか、西へ侵略する格好の口実となるからだ。学園長は、今回の事を連合に指示されたわけではないが、連合の情報網がどうなっているかなど判断のしようがない。

なにしろ、『自分の城』である関東魔法協会は、連合の傘下組織なのだ。

そう考えると、学園長は、『自分の城』が難攻不落どころか、『砂上の楼閣』にすぎないことを今更ながら自覚した。

おまけに、木乃香という絶好の『餌』まである。いつか刹那が言っていたかのような、『鴨が葱を背負う』そのものである。

さらに、ネギは実戦経験がない。『訓練と実戦は違う』と口で言うのは簡単だが、その真の意味を知るものはあまりにも少ない。実戦では当然の如く、命のやり取りが起こる。学園長には、ネギが『相手を殺す』覚悟があるとはどう鼻屑目に見ても思えなかった。

自身を殺す気の相手を、殺さずに済ませることは難しい。そして今のネギには、そんな力などあるはずもない。そんなことは、彼の訓練を観戦（という名の『監視』）していた学園長がよくわかっている。

学園長も今こそ老いたが、それでも最高クラスの実力者であることには変わりがない。

その実力者が、何という失態だろう。

西との融和とネギと木乃香の安全。天秤にかけるとすれば、後者を重んじるべきではないか。

そんな考えてみれば当然のことに、学園長は今更ながら気付いたのだった。

しかし、西にはすでに特使派遣のことは打診済みである。こんなことを、極秘裏にやっては意味がない。それこそ、妨害しようとする者に口実を与えるようなものからだ。

そして、西が（表向きは）了承している以上、こちらからした提案を自分で取り下げれば、西の反東感情に油を注ぐことになる。

おまけに、3 - Aの行き先が『京都』であることは、すでに決定済

みである。

学園長は、自身の軽率さと憐れなほどの耄碌もろくぶりに激怒したが、全てはあとの祭りだった。

特使の派遣中止が不可となれば、特使自身を変える他ない。

が、彼の右腕でもあるタカミチたかみちⅡⅠ高畑たかはた教諭は適任だが、優先すべき仕事がある。  
となると、残りは。

「……………私、ですか？」

夜白刹那は、そう言って自身を指差した。

「うむ。他に適役がおらんのだじゃ。すまんのじゃが、引き受けてくれんかのう？」

「ふむ……………ああ、失礼」

ソファに腰掛けた刹那は、銀色の煙管キセルを取り出した。

「……学園長殿。自分に一つ、案があります。是非、御検討いただきたい」

「うむ、なんじゃ？」

学園長は期待の眼差しで、少し身を乗り出した。が、刹那の放った一言に驚愕して仰け反った。

「……この件の『特使』に、木乃香嬢を推薦いたします」

「な、なんじゃと!？」

学園長は愕然とした。

無理もない。刹那は、木乃香に魔法を隠すため、そして木乃香を護るために麻帆良に来ているのだから。

「木乃香に魔法を教えるか？」

「いえ、単に学園長殿が、『孫娘に御使いを頼めば』よろしいでしょう」

「……理由を聞こうかの」

学園長は厳しい表情で、刹那を見つめた。

「まず、私の特使にする件ですが……私は詠春殿の御依頼でここに  
来ておりますが、それでも特使になるには不十分な理由です。おま  
けに今の私は、東か西か微妙な立場ですし。しかし、長（詠春）の  
娘なら、まさに適役でしょう。」

次に、木乃香嬢を推薦する理由ですが……学園長が懸念しているの  
は、『何者かが特使・ネギIIスプリングフィールドの妨害をし、そ  
の過程で木乃香嬢が危険にさらされる』ということでしょう?」

「……うむ。ネギ君も心配じゃが、まずは木乃香ましむすめじゃ」

「では、その『特使』自身が木乃香嬢でしたら?」

「それは」

そこまで言って、学園長ははっとした。

違う。

『特使の同行者・近衛木乃香』への攻撃と、『特使・近衛木乃香』  
への攻撃は、全く意味が違う。

木乃香は西の長、近衛詠春の娘であり、彼女への攻撃や接触は、西  
の長でもある詠春、そして彼に与する者たち 便宜上、『穏健派』  
と呼ぼう への宣戦布告に他ならない。

そして、『特使』という役割を、近衛近右衛門から受けた木乃香は、  
一時的にはいえ、完全に立場を関東魔法協会に所属させるとい  
ことになる。なぜなら、『特使』は正式な役職であり、しかも関東



魔法協会のトップでもある学園長が、直々に命じる役職だからである。

当然、その『特使』への攻撃は、東への警告や挑発を通り越して宣戦布告と取られて然るべきである。

つまり、仮に西の不穏分子　こちらは『強硬派』と呼ぶことにしよう　が『特使・木乃香』を攻撃すれば、それは西の『穏健派』と東に、同時に宣戦布告をすることになるのだ。

対して、『特使の同行者・木乃香』に接触や攻撃を行っても、例えば特使を妨害する目的で『たまたま』木乃香を誘拐したという言い訳が成立してしまう。

それだと、西の『穏健派』を敵に回しても、東には喧嘩を売ることにはならない。寧ろ、『特使』自体には手を出さなかったことで、東の大多数　木乃香の存在や、秘密を知らない者　は、卑怯だが穏便な方法だと納得してしまう。

むろん、学園長の孫娘という理由で、学園長を怒らせることはできても、それは学園長の『私事』であり、『私情』である。トップの孫娘が傷つけられたという理由で戦争を起こされれば、下っ端にとつてはたまったものではないし、学園長とて独裁者ではない。無理矢理他勢力に戦争を仕掛けるなど不可能だ。

が、売られた喧嘩を買うことは可能である。

そして、仮に木乃香を攫う者がいたとすれば、その目的は、彼女の魔力か、あとは身代金狙いくらいしか考えられない。

ところが、その代償が、西の一部と東との同時戦争では、あまりにもリスクが高すぎる。

特に『強硬派』が犯人だったら、その目的は、『穏健派』筆頭である詠春の失脚と、西の長にとって変わることははずだ。

よって、もし、詠春を失脚できたとしても、その結果が東との全面戦争では、せつかく権力を手に入れたところで、戦争の指揮という重責が手に入るだけとなる。

要するに、彼らが木乃香を攫うことに何のメリットもなくなる。

さらに付け加えるなら、木乃香が『特使』に任命されれば、夜白家が受けている『木乃香の護衛と魔法隠蔽』という詠春直々の依頼を口実にして、堂々と木乃香を護ることができる。

つまり、木乃香の護衛については、西も東も第三勢力も、誰も文句が言えないのだ。

「……成程、そういうことじゃったか……。しかし、ネギ君の危険は残るぞ？」

学園長が聞くと、刹那は紫煙を吐きながら事も無げに言った。

「ネギ教諭が特使ではない以上、彼が西に狙われる理由は、それこそ復讐以外なくありません。だったら、それだけのことです」

「それだけのこと、じゃとッ!？」

学園長は興奮するが、刹那は微笑して学園長を諫めた。

「ですから、喻え彼に復讐したい者がいたとしても、西のせいにはできなくなります。……そんな状態で彼を狙うのは、命を捨てている馬鹿だけです。……そんな馬鹿が相手なら、ネギ教諭は勝てます。勝負を生き残る気がある者は、常に『勝者』ですから」

そう言って、刹那は微笑した。

翌日、近衛木乃香は、学園長室に呼び出され、あることを頼まれることになる。

僕は、『ネギをわざわざ特使にするメリットなくね?』と  
思っていたので、こっぴどくすることにしました。

ネギは小太郎と戦わせるつもりですが、その辺りは描写  
しません。あと、ネギは原作より若干実力が上がっています。

吸血鬼編の時間を、全て修行や訓練に当てていましたので。

第17幕「不穩、それは醜酔した悪意 / Do . . . Ruin Road」(前書)

修学旅行編の最大の見せ場は、月詠とフェイト袋叩きにするつもりです。

あと、オリキャラも出します。

第17幕「不穩、それは醜酔した悪意 / Do . . . Ruin Road」

麻帆良学園修学旅行は、クラスによって行き先が異なる。

何しろ、一学年何十クラスもあるマンモス校どころかゴジラ校だ。全クラスが同じところに行けば、迷惑では済まない。

そして、本校女子中等部3 - Aを含む数クラスの行き先が、日本国で最も有名な観光地と言っても過言ではない場所　一〇〇〇年以上、日本の首都であり続けた古都、京都である。

なお、誤解を招かぬよう明記しておくが、幕府がおかれた場所は『首都』ではない。あくまで、明治維新で首都が東京となるまでは、日本の首都は京都だった。

大戦の戦火を免れ、今なお、伝統的な町並みを残す場所だが、ここに伝わる伝統は、決して煌びやかなものだけではない。

かつて、京に魑魅魍魎が跋扈していた頃から、この街には長い、人ならざるモノとの戦いの　血と鉄の香りに満ちた伝統もある。

京都の伝統を無言で語る、瓦葺の屋根の上で、少女は同じくこの国の伝統である、日本刀を見つめていた。

桜咲<sup>さくら</sup> Y<sup>ひ</sup> 刹那<sup>せつな</sup>は、日光にその可憐で華奢な体を照らしながら、凜とした佇まい<sup>たたず</sup>でサイドテールを春風に揺らせている。その光景は、誰もを呆けさせる程の美しさを持っていた。

ん？

彼女は小首を傾げ、今頃は京都行きの新幹線に乗り込んでいるであろう自身の分身から、新たな情報を受け取った。彼女は眼を細め、それを咀嚼する。

新幹線の中で大量のカエルが出現。夜白やしろ 刹那せつなと夜白やしろ 輪廻りんねの指示で混乱を最小限に留めたが、どさくさにまぎれて近衛このえ 木乃香このかが預かっていた『親書』が奪われそうになるものの、自分の分身が刺客の式神を破壊。防いだというものだ。

やはり、出て来たか。

サクはそう思い、ため息をついた。

本音を言うと、華の学生生活の醍醐味メイニイベント 修学旅行を、純粋に楽しみたかった。家族と、親友と、そして自身の『親』でもあり、『愛する人』でもある人と。

今も自分の分身は、のんびりと新幹線の旅を満喫しているだろう。その分身は、文字通り『もう1人の自分』だから、自身と同じ思考回路を持つ。そしてその記憶は、いずれはオリジナルに還元されるから、ここにいるサクにも『純粋に修学旅行を楽しんだ』記憶と思い出は残る。

が、そこに、ナニカと戦う記憶や思い出も加わることは、もはや確定事項となった。

しかし、それならそれで良い。

あの人の 夜白刹那の邪魔をする輩を、片っ端から斬り捨ててやる。

そう思い、サクは凶暴な笑みを浮かべた。恐らく今の自分は、あの人に見せられるような顔をしていないだろう。

それでも、自分はある人の敵を斬りたいと 心から思うのだった。

それもまた、良い思い出になるだろう。

今、京都の街並には、サクを含め、四人が番をしていた。

サク、マナ<sup>ハ</sup>・A<sup>ハ</sup>・Y<sup>ハ</sup>・タツミヤ、<sup>ははがわ</sup>長谷川 千雨<sup>ちぬめ</sup>、<sup>おおこうち</sup>大河内 アキラが、修学旅行初日で3・A……の木乃香が周る予定の場所や、その周囲を遠方から監視している。

彼女らの『本日の』役割は、あくまで敵の発見や殲滅ではなく、単に『監視』である。

なぜかというところ、今、敵の妨害や工作を先に潰せば、『ここに我々がいて、貴方がたを阻止するため動いています』と敵に言っているようなものだからである。

もっとも、敵が動けば阻止はするが。

修学旅行は3泊4日。時間はたっぷりあるが、『親書』や『ネギ』スプリングフィールド』、『近衛木乃香』を狙うチャンスは自ずと限られている。慎重な敵なら、初日から白昼堂々剣を振りかざして特攻などしてこないだろう。



彼女たちは一人一人、優れた隠蔽術を持っている。情報統制も完璧であり、敵はこちらの戦力を把握していない。それは、大きなアドヴァンテージだ。

諭えるなら、ポーカーで、いきなりこちらがフルハウスを手に入れたようなものである。

将棋で言えば、飛車角が相手にはないようなもの。

そのアドヴァンテージを、わざわざふいにすることはない。

しかも、こちらには『英雄の息子』という格好の『罅』がある。

『特使・近衛木乃香』の護衛として、真つ先に彼が疑われる。というか、すでに東は『ネギ』スプリングフィールドを特使・近衛木乃香の護衛に任ずる』と西に伝えているから、それは確定である。

むろん、それは偽情報ではない。ネギは、学園長直々に、木乃香の護衛を頼まれている。が、ネギは夜白家もまた、護衛の任についていることは知らない。

そもそも、彼らが自分とは比べものにもならない実力者であることも知らない。

第一、夜白家が近衛 詠春より、木乃香の護衛の依頼を受けていることは、極秘中の極秘である。詠春は自身の部下さえ完全に信用しておらず、完全な独断で、夜白家に依頼したからだ。

が、夜白家と詠春が親しい関係であることは、よく知られた（あくまで西の上層部では）事実である。なぜなら、詠春に夜白家と関わる機会を与えたのは、他ならぬ彼の部下（西のそれなりの上役）の

手柄であるからだ。

そのため詠春は、夜白家と親しい理由については、『戦時中に世話になった』という噂を意図的に流していた。

夜白家の活躍は『裏』では有名なので、大抵の者はこれを信じた。しかも、全くの大嘘ではない。

噂は真実が混じっているからこそ伝染する。そして、伝染した噂は、勝手に真実味を増していく。

実は、これは刹那が詠春に入れ知恵をした結果だった。

詠春はすぐに納得した。

なぜなら彼自身、大戦時には『帝国のスパイ』だとか、『戦争を引き起こした原因』とかの噂の対象となり、噂に踊らされたからだ。

大勢の者が信じた噂は、たちまち『真実』へと化ける。

同じ具合で、詠春は、『彼の有名な夜桜流剣術は、元々は神鳴流と一つだったが分派し、一時期途絶えた剣術である。そして、近衛詠春は夜白家と協同し、これを再興させた』という噂を流した。

神鳴流が1000年以上の歴史を誇る流派であることが、勝手に噂の信憑性を高めてくれた。1000年もあれば、時には分裂し、その分派が途絶えては生まれたとしてもおかしくはない。むしろ剣術に限らず武芸というものは、時勢の変化に伴って形を変えるものだから、当然のことと言えた。

そして、サクの実力が高いことも、『神鳴流が大元なら、あの強さも納得できる』という感じで噂の真実味を増す要因となった。

そして、この2つの噂は合体し、『近衛詠春と夜白家の仲が良いの

は、使用剣術の大元が同じなのだから当然』ということとなった。実際は夜白家で夜桜流剣術を使うのはサクだけなのだが、そんなことを知る者はほとんどいない。

要は、木乃香の護衛の依頼云々の前に、夜白家と詠春の仲が良いこととは何の疑いもなく、西に受け入れられたのだ。

だからこそ、仮に夜白家が木乃香の護衛を西の長から任されたことが白日の下に晒されたとしても、むしろ当たり前だと西を納得させることができるのだ。くだらぬ言い訳を用意する必要などない。

こちらは完璧にクリーンなのだ。正義はこちらにある。サクは、正義は大義名分にすぎず、その正義を手に入れた者が勝者であることを知っていた。

来るなら来い。

サクはほくそ笑んだ。

敵に勝ち目はない。戦力云々の前に、大義名分があるこちらが勝者で正義なのだ。

何と我々に有利な戦いだろう。いや、これは戦いですらない。『出来レース』、いや『茶番』にすぎない。最初から勝負の行方が決している戦いなど、茶番ではないなら何だというのだ。

世界は常に、刹那さんの掌てのひらの上だ。刹那さんに逆らった者には、勝者となるチャンスすら与えられる資格はない。

サクは刹那を妄信し、勝利を確信していた。  
それは驕りではあったが、事実だった。

京都という舞台上で、最上級に滑稽で憐れな茶番は、すでに始まっていた。

一方、それから数時間後、マナは呆れた表情で、『それ』を見ていた。

「……西の強硬派に、マトモな刺客<sup>アホ</sup>はいないのかい……？」

マナは思わず呟いた。

彼女の視線の先には、『音羽の滝』が流れている。

その滝は、『音羽山』という京都、東山三十六峰の一つであり、標高二四〇メートルの山から流れている。ちなみにこの山の中腹に、彼の有名な『清水寺』がある。『清水の舞台』として有名なアレだ。そして、その滝の上には、巨大な酒樽が置いてあった。  
この滝、それぞれ3筋の水が流れているのだが、それを飲むと様々な御利益があるのだ。

そして、その話を聞いた3・A一同が、酒精<sup>アルコール</sup>たっぷりの滝水を飲みまくった結果、泥酔した中学生が大量に出現した。

刹那や輪廻、木乃香や新田教諭が中心となり、酔っ払い共を次々と

バスに乗せている。

マナの視線に気付いたのか、自身<sup>マナ</sup>の分身が、ダウンしている生徒を担ぎながら肩をすくめ、『やれやれ』のジェスチャーをしつつオリジナルを見つめた。

マナは、その視線に苦笑を返した。

敵の妨害工作の一環だろうが、邪魔者をダウンさせるつもりなのだろうか。

だとしても、これは拙い。こちらの呆れと油断を狙っているのか、或いは単におちよくっているのだろうか。

自分だったら、遅延性の毒を混入させるところだが。いや、樽の代わりにC4（強力なプラスチック爆弾）を仕掛けておく方が効率的か。

そんなことを考えながら、マナは宿泊予定の旅館を見つめた。

千雨とアキラが見張っているであろう、その場所を。

「……………おい、聞いたか？」

『何を？』

「分身からだよ……………音羽の滝に酒が入ってたらしいぞ」

認識障害と会話保護の結界を展開しつつ、千雨は携帯越しにアキラに話しかけた。

『あー。聞いたよ……私の分身も、ちよっぴり飲んだからね。味が伝わって来たよ……美味だね』

「そりゃ私もだ……。あーあ、修行の後に輪廻から、体力回復用のハイボール飲まされていたからな、酒に慣れちまった……」

『っていつか、最初は酒だって知らずに飲んでたもんね……』

「体力完全回復、味は最高、二日酔いもなし。癒し効果もある……全国のサラリーマンに売ったら馬鹿売れしそうだぜ」

千雨は呆れながら、キョロキョロと廊下を見渡した。

傍から見れば、今の千雨はスーツを着込んだビジネスマンが、携帯で相手と商談しているように見えるはずだ。しかも、見るからに『東大卒です』といった感じの。

千雨は中から、アキラは外から旅館を監視している。

『温泉まで酒が入ってたりして』

「笑えねエーッ。こちとら唯でさえ神経すり減らしてんだよ。んなことになったら、私は敵にサンレイをけしかける」

『怪物で滅ぶ街は、東京だけで十分だよ』

ゴジラが東京で大暴れしているシーンを思い浮かべた千雨は、それもそうだと納得する。

「っと……そろそろウチのアホ共が来る時間だな。切るぜ」

『うん。それじゃ』

携帯をしまい、千雨はバスが来るであろう、旅館の玄関へと足に向けた。

第17幕「不穩、それは醜酔した悪意 / Do . . . Ruin Road」(後書)

次回、いよいよ敵が出て来ます。



第18幕「雷鳴、それは剣士の斬り合い／Their・・・Crazy Smi

お気に入り登録数200突破。

大感謝です。

この先、色々忙しくなりそうなので、書留分を一気に投稿します。

19話以降は、毎日更新が難しそうです。申し訳ありません。

「チイツ！」

月明かりの下、眼鏡をかけた女性、天ヶ崎あまがさき 千草ちくさは焦っていた。

元々、彼女は大战で命を落とした両親の復讐のために、西洋魔術師を狙っていた。

そんな中、自身が属する関西呪術協会が、関東魔法協会との融和策を展開。彼女はそれに絶望し、東からの親書を奪い、特使である近衛このえ 木乃香このかを攫い、彼女の膨大な魔力を手中に収めようとした。

が、彼女の行動をサポートするはずの西の『強硬派』は、ここに来て二の足を踏んだ。

強硬派は確かに、東との融和策を嫌い、『穏健派』筆頭で現長である近衛このえ 詠春えいしゅんの失脚を狙っていた。そして、その後強硬派で関西呪術協会を牛耳ることも。

ところが、強硬派とて一枚岩ではない。それどころか、大多数は、融和策は認めないが、だからといって全面戦争は望まない者も多かった。

強硬派といえは聞こえはいいが、そのほとんどは『現状維持派』とでもいうべきものたちだった。つまり、『保守派』である。変化を病的に怖れる彼らは、同様に戦争も嫌っていた。

もったも、それは決して及び腰と非難できるものではない。

仮に西の穏健派と内戦になり、そこに東が関われば、結果として東の『漁夫の利』となりかねない。実際『今の』強硬派に、穏健派と東を同時に相手にするだけの戦力はない。

そのため土壇場になって、天ヶ崎のバツクの大部分は作戦中止を勧告するか、すぐごと撤退していった。おかげで今の彼女は、少数の個人的に雇った者を除いて孤立無援である。

天ヶ崎は激怒した。彼女の目的は復讐であり、権力闘争などどうでもよい。が、その権力闘争で、自分は切り捨てられたのだ。西洋魔術師に両親を殺され、ついに陰陽師たちには裏切られた。

天ヶ崎は、『例のアレ』を復活させて本山を破壊、東に乗り込むつもりだった。

が、今や味方もいない。日本中が自分の敵となってしまった。しかも、彼女の目的は、あくまで魔法世界への復讐である。つまり、東を蹂躪することですら、彼女にとっては『過程』にすぎない。

仮に『アレ』を手中に収めたとしても、それだけで日本中の魔術師、そして魔法世界を相手にできるだろうか。

そう考えると、彼女は、計画変更の可能性を考慮することを余儀無くされた。

しかし、すでに修学旅行は始まっているのだ。木乃香や憎い西洋魔術師・ネギィスプリングフィールドが京都にいるのは、今日を含めても僅か4日。悩んでいる時間などない。

天ヶ崎は、本来なら頭脳労働には向かない生粋の呪符使いにすぎない。頭が悪いわけではないが、事態の急変に対処できるほど、場慣れもしていなかった。

しかし、その考慮を自身のアジトでしていれば、まだ良かったのかもしれない。

彼女が犯した最大の失敗は、考慮を敵の目の前でしたことだった。

天ヶ崎が気付いた頃には、すでに自身の部下は暴走していた。

『強者』という、最高級の餌につられて。

月詠つぐよみという少女をパーソナルな面で評価すると、大抵の人間はこう考えるだろう。

『バトルマニア』、或いは『アフノーマル』、  
『戦闘狂』、異常者』。

この眼鏡をかけ、奇抜なファッションを好む 具体的に言うところのリフリのドレスとか 少女は、長刀と短刀を操る、二刀流の神鳴流剣士である。彼女は何より戦闘を好み 血を求めた。

そんな彼女にとって、目の前の剣士はまさに過去最高の極上の獲物だった。

「どうもー。お初にー。京都神明流の月詠といますー。あんさんが、彼の有名な夜桜流の桜咲はんですかー？」

「……………ああ」

「ほんなら……………」

月詠は、狂気で顔を歪めた。

「殺し合いましょかー」

桜咲さくらさき「Y」刹那せつなもまた、久しく見る『それなりの相手』に口元を歪める。

そして、サクは呟いた。

「……………賛成だ」

同じ頃、様子を見に来たネギもまた、天ヶ崎の部下である犬上いぬがみ小太郎こたろうと戦闘を開始していた。

それが、天ヶ崎の計画をさらにぶち壊していた。

「あのアホ共ッ！！ 木乃香お嬢様を攫ってもおらんに、戦闘を行っなんて……………何考えておるんや……………」

つて……考えておらんかったな……」

天ヶ崎は頭を抱えた。月詠と犬上、両者とも、どちらかといえばバトル目的で、誘拐など二の次だ。

特に犬上は、誘拐という行為自体に良い顔をしていなかった。が、天ヶ崎自身が信頼している唯一の仲間でもある。残りは彼女が、金によって雇っただけの存在にすぎない。

ましてや月詠は、確か強者との戦闘が第一目的だったはずだ。そんな時、目の前に、偵察目的だったサクが現れたのだ。桜咲「Y」刹那のことは、天ヶ崎でも知っていた。それほど、彼女は西では有名だった。

あの眼鏡少女の戦闘願望を低く見ていた。いつそのこと、出番以外は縄で縛っておくべきだったと後悔しても、もう遅い。

奇襲が無くなった以上、木乃香の誘拐の成功率はどん底だ。それどころか、現在進行形で、身の危険が迫っている。

天ヶ崎は、得体のしれない不気味さに恐怖した。本能が、今すぐ逃げろと警鐘を鳴らしている。

しかし、すでに部下2人は戦闘中である。見捨てて逃げることは可能だが、そんなことをすれば、自分は自身を裏切った強硬派と同じになってしまう。

どうするべきか……。

「そういえば、あの白髪はんはどこに行ったんや……？」

天ヶ崎は、ポツリと呟いた。

その頃、2人の剣士は斬り合っていた。月詠が猛攻をかける中、サクは野太刀1本で、それを完璧に防ぎきり、尚且つ反撃している。

「ああ……予想通り、いや期待以上やツ！！噂に聞く夜桜流、実に見事で……あんさん、最高やツ！！」

「それはどうも」

興奮する月詠に対し、冷めた目でそっけなく返しながらも、サクは考えていた。

木乃香の安全については問題ない。夜白<sup>やしろ</sup> 刹那<sup>せつな</sup>と夜白<sup>やしろ</sup> 輪廻<sup>りんね</sup>。最強の最強が二人もいるのだ。敵が何人いるのかは分かっている。

一人、少し手強い相手がいるが、それでも、サクとマナやアキラと千雨のコンビには敵わないだろう。

となると、自分は今対峙している少女の事に集中すればよいのだが……。

一撃で斬り捨てるには、少々惜しいな。

せつかくだから、少し楽しもう。  
サク自身、久方ぶりの斬り合いに、かなり興奮していた。

「夜桜流」

「おお、おっきいの来ますかー」

『水千鳥』  
みずちどり

「『ざーんく』……ってうおわあッ!？」

反撃しようとした月詠だが、彼女は驚愕して受け身に回った。  
その理由は単純で、サクは超高速の連斬撃を浴びせるだけではなく……いつの間にか口に啜えていた短刀で、月詠の首を刎ねようとしたからだ。  
慌てて飛んだ月詠が数瞬前まで立っていた地面は、幾重もの斬痕が芸術作品のように美しく刻まれていた。

「ほう、避けるのか」

「あ、あんさん、二刀流かいな!？」

涼しい顔で、短刀を文字通り『消した』  
正確には、彼女の部屋の『武器庫』に戻した  
サクに、月詠は驚愕の表情で尋ねた。



「別に。何刀でも使えるだけだ。やっぱりなかなかやるな。じゃあ」

そう言うと、サクは歪んだ笑顔のまま、月詠の眼前まで『韋天』<sup>イテン</sup>で移動した。

そんな彼女の手には 1丁の、小型拳銃が握られていた。そして、サクは何の躊躇いもなく、引き金を引いた。

「なああああッ!?!」

月詠は慌てて体をくねらせるも、鉄の火は確実に、彼女の右の脇腹を貫いた。

そして、血が噴き出したその傷に、容赦のない、サクの蹴りが突き刺さった。

「ぎゃああ!!!!」

凄まじい激痛とともに、サクの槍より鋭い蹴りは、容赦なく月詠の右脇の肉を削いだ。大量の血が溢れだし、月詠の華奢な体は二転三転しながら吹き飛んでいった。が、彼女は突然制止した。

「おっと……」

サクが周り込み、月詠の小さな体を掴んだからだ。血を吐きながら呻く月詠に、サクは優しく囁いた。

「卑怯だとは言わないでくれよ。……私も子供の時は、こつこつこつとに抵抗があったよ……」。

でも、輪廻さんがこつこつ言っただ。『剣士の誇りと、刹那さんの傍に。』  
「……」

サクはそう言って、日本刀『夕凧』を、再び構えた。

「……」  
「……」  
「……」

その言葉とともに、月詠の右腕は斬り離され、くるくると宙を舞った。

「くっ……あかん……あんさんは……上物……すぎた……か……」

切断面から大量の血を流しながら、月詠は虚ろな目で眩き、気絶した。

「ふっ。まったく……今頃気付いても遅いわぁ……。さて……放つとくか。運が悪かったら、助かるだろうし……」

サクはため息をついた。

「アキラ達は、大丈夫やるな……」

第18幕「雷鳴、それは剣士の斬り合い／Their・・・Crazy Smi

サクはバトルマニアではありませんが、強い剣士と戦いたいという、  
欲求くらいはあります。

第19幕「初見、それは連鎖の始まり／Henge・・・Awkarda

この後、少し間が開くかもしれませんが。

2日目の展開も悩みます。

「桜咲の奴、遊んでやがる」

長谷川<sup>はせがわ</sup> 千雨<sup>ちゆめ</sup>はそう言って、瓦葺<sup>かわいづみ</sup>の屋根の上に座り込んだ。

目の前では、鮮血が間欠泉か何かのように、天に向かって吹きあがっている。

「あいつの力があれば、わざわざ腕を落とさんでも無力化できたらうに……。月詠<sup>ガキ</sup>が刹那にも殺気向けたこと、まだ怒ってやがるな……。仕方ないか。輪廻なんてキレかかっていたし、大河内なんて

そこまで言っつて、千雨はブルリと体を震わせた。よほど思い出したくないのか、その顔は青ざめ、冷や汗が滝のように流れている。おそらく見る者が見れば、今の彼女の心境を『精神的<sup>トラウマ</sup>外傷』と診断することだろう。

「どうしたマスター」

そんな彼女を心配したのだろう。隣で立っている少女が千雨を心配そうに覗き込んだ。

背丈は150センチ前後。溶岩のようなダークレッドの髪をボブにし、大きくぱっちりした瞳は燃えるように紅い。肌は東洋系で、暖かさをイメージさせる。

そこまでは良いのだが、背中に2つ、眼も鼻も耳も口もない、同色の髪と顔だけの小さい頭をくつつけている。正確には、小さい頭2つを、首の後ろ辺りからぶら下げていた。

身に付けている衣服は、あろうことか麻帆良学園女子中等部の制服である。別に意味はなく、本人が気に入っているから着ているだけだが。

少女の名はサンレイ。千雨の使い魔にして、三つ首の飛龍ワイヴァーンである。突然変異で、その力は並みの古龍を凌ぐ。

「……なんでもねえよ」

「ふーん、なるほど」

何をどのように納得したのか、サンレイは無邪気に笑うと、足をブラブラさせている千雨の隣に座り込んだ。

「……おつかねえな。桜咲の奴、わざとあの月詠とかに再戦リウエンジの機会を与えやがった。見る、回収されたじゃねえか。変な坊主ガキに。

ネギ先生も少しはやるな。もっと駄目駄目だと思ってたがな。

……桜咲、あいつ、再び向かってきた月詠あいつを壊すつもりだ。……輪廻や大河内、タツミヤたちとな……。全く、刹那は『アレ』のおかげで絶対不死にな……。ありゃあズルイぜ」

「刹那センサーのことを悪く言ったら、マスターも殺される」

「ま、違いねえな。……本気じゃねえよ。私だって、あいつを」

「愛してる」

別の声が、千雨の言わんとしていた言葉を紡いだ。

ふいに、千雨の横に大河内アキラが現れた。髪は藍色の染まり、瞳もまた、どこか寒気を抱かせるような藍色の光を放っていた。さらに、まるで得体のしれない万華鏡のように、全てを見透かす予言者のようなオーラを纏い、雰囲気も、寡黙さに拍車がかかっている。

「……あ、てめえッ！勝手に人の心を読むなよ！」

「誰でもわかると思う」

頬を赤く染めた自身の主を見て、サンレイは呆れた表情で首を振る。アキラはそんな2人に薄ら笑いを返した。はつきり言って、好感を抱かせるような笑みとは御世辞でも言えない。寧ろ神経を逆なでするような笑みだ。

近衛詠春あたりが見れば、とある『英雄』の重力魔術師に似ていると思うこと間違いなしである。



「……天ヶ崎……千草……だっけ。彼女の『目的』を視てきたよ。やはり事前の推測通り……彼女の目的は、木乃香の魔力と、この地に封じられた飛驒の大鬼神……『リヨウメンスクナノカミ』だ。復活されても、輪廻さんなら何とかできるけど……」

「まじかよ……ったく、ここまで刹那の推測通りだと、かえって怖えな……。あいつ曰く、『当然の帰結』だそうだが……」

「いや、実際、木乃香の魔術を使用するほどの対象は、京都　この近辺では『それ』くらいだそうだよ」

『リヨウメンスクナノカミ』。

漢字表記では『両面宿儺』となる。かつて『英雄』たちによって封じられたが、2つの顔と4本ずつの手足を持つ鬼神である。大昔の飛驒国（現在の岐阜県北部）に現れ、朝廷に背いて民衆を苦しめていたが、朝廷が差し向けた武将・武振熊命たけふるくまのみことにより退治されたとされている。が、実際は京都に封じられたままであり、数年前に『英雄』によって再封印された。

『英雄』に封じられたことになっている通り、人間に対処できないほどの怪物ではないが、それでも並みの術師なら相対するだけで卒倒するような化物である。

アキラとて、千雨とのコンビで本気を出せば退治できそうだが、代償として日本列島が吹き飛びかねない。というか、まず京都は消滅間違いなしだ。

アキラも日本人の心たる京都を消滅させる気などないし、強力な相

手を回りを巻き込まずに倒せる程の強者ともなれば、輪廻と刹那くらいしか思い浮かばない。

「じゃあおあずけ？ニッポンの鬼神とバトルりたかったなー」

「龍と鬼神のバトルなんざ、特撮映画の中だけで十分だ」

不満げになるサンレイに、千雨は鬱陶しそうな視線を向けた。

「とつとと終わらせるぞ。んで、私は寝る」

「ひどく面倒くさがり屋のようなセリフだよ」

「本気で面倒だ。私は現実主義者なんだよ。現実では面倒事と馬鹿げた事しか起こらねえ。今だって、刹那の頼みじゃなきゃ監視しねえよ」

「OK。じゃあ監視に戻ろうか。……で？監視の一環だけれど、あの『白髪の子、どう思う？』」

「『どう』って……そりゃ私の『主観』か？それともデータ諸々からはじき出される『客観』か？」

今度は、本気でだるそうな目でアキラを見る千雨。実は彼女、刹那から頼まれた時は嬉しさを必死で隠しながら即答したのだ。彼女も恋する乙女である以上、意中の人に頼まれると断れないし、そもそ

も断る気もないとみえる。

どうやらアキラに心中を見透かされないように必死らしい。

そんな相棒を眺めつつ、アキラは『全部知っているよ』と言わんばかりの笑顔で千雨に問いを投げかけた。これでは短気な千雨じゃなくてもだらけたくはなるだろう。それでも本気でどならないあたり、彼女も大分丸くなったのかもしれない。

「前者の方で頼むよ」

「……だったら言わせてもらうが、ありやねえな。まるで人形だ……『無』って漢字をそのまま擬人化したような奴だな。……此の世の全てに絶望しても、悟りを完全に開いたとしても、人間あはならねえよ」

「で？実力のほどは？」

「微妙だな。私らの力量レイエルでも、コンビなら勝てる。1人だけだと厳しいな。最悪、相打ちまでもってかれるぞ」

千雨は小さく唸った。

夜白 刹那は、『何よりも家族が全員揃った平穩』を望み、その刹那に従う彼女らも、刹那にとっては『家族』であり 彼女らもまた、刹那との『平穩』を望んでいる。

喩え勝利したとはいえ、相打ちでは話になるかならないか、それ以前の問題である。

元々参謀役の千雨である。その評価は主観的とはいえ、正確だった。彼女は顎に手を当てながら、言葉を吐き続ける。

「特に私はサポート専門だからな、サンレイがいれば」

そこまで言っつて、千雨は言葉を切った。そして、まじまじと相棒の顔を見つめる。

「……ちよつと待て、何で『大河内が』私に聞く？ 『今の』（『レイ虹色ボウ・アーク枢』の『藍』を使っている）大河内なら、白髪あいつの心が」

それを聞いて、アキラは神妙な顔で頷いた。

「『視えない』んだ。あの子が、『次にどうしよう』とか、『ここはこうしよう』とかは視える。だけど」

そこでアキラは、一旦息を吸った。そして、思い切り吐き出した。

「あの子の『正体』や、最終的な『目的』については全く視えない。まるで、目的も願望もない……マリオネットみたいだ」

その頃、白髪の少年、フェイト・アーウェルンクスは冷や汗をかいていた。

彼は千雨とアキラを偵察していたのだが、いつの間にか、自分自身も監視されていることに気付いた。

なんてこった。この年で、まさかこれ程とは……。

フェイト自身、自分の実力に自信や誇りがないわけではない。それどころか彼自身、自他共に認める最強クラス（特に土系統では）の魔法使いで、格闘戦にも優れている。

ところがその彼が、あっさりと気付かれ、尚且つ監視されていたのだ。おまけに、自分でも全く気付かぬうちに、だ。

これが、噂に聞く『夜白家』の実力か。

『夜白家』。大戦では碌に聞かれなかった団体だが、戦前や戦後は『裏』の至る所で聞く名だった。

時には地域紛争に介入し、時には麻薬組織を壊滅させ、時には帝国の治安維持に務めた、詳細も目的も、そしてその実力さえも全く不明の団体である。

わかっているのは、確認されているメンバー全員が『夜白』<sup>ヤシロ</sup>の性を持っていること。そのため、通称『夜白家』と呼ばれている。

フェイトですら、リーダーの名が夜白刹那であり、桜咲<sup>せいのけ</sup>Ⅱ Y<sup>せいな</sup>Ⅱ 刹那という凄腕の『夜桜流』剣士が属していることしか知らない。が、あからさまに『正義の魔法使い』宣言したりせず、犯罪組織を潰しながらも、時には暗殺などの『ダーティな仕事』もこなしているという点では、フェイトは『夜白家』に親近感を覚えていた。

彼らとなら、同盟関係が結べるかもしれない。

フェイトはそう思い、部下や自分の属する『組織』のメンバーにデータ収集を命じ、自身も動いていた。

が、まさかこんな旧世界の東の果ての古都で出会うなど、さしものフェイトも想定外であった。

もし、『夜白家』が近衛<sup>このえ</sup> 木乃香<sup>このか</sup>、或いはネギⅡスプリングフィールド……いや、この際両方か。それらの護衛として動いているとすれば……。

フェイトは、自身の見通しの甘さを認めざるを得なかった。

元々、彼が来日し、天ヶ崎に協力しているのは、『リョウメンスクナノカミ』の力を見極めるため。そして近衛木乃香・ネギⅡスプリングフィールドが有力な敵となり得るかどうかを確かめるためだった。

そして、そのついでに『夜白家』の情報収集を行ったのだが、彼も

驚くほど、あっさりと『夜白家』の情報が入った。

実はそれが、近衛詠春が意図的に流した『例の噂』であった。フェイト自身、少々妙に感じたが、嘘情報デマとも思えなかったし、彼自身興味を抱いていた夜桜流に関する情報だったので、そこからさらに掘り下げて調査した。

そして、西で『最強』と呼び名の高い剣士　桜咲はくやくⅡⅡ刹那せしなについての情報を手に入れたのである。しかも、顔写真というオマケまでついた。

実はサクは、神鳴流剣士数人と個人的な関係（ぶつちやけると修行仲間）を持っており、フェイトが手に入れた写真も、その時に剣士仲間と戯れで撮ったものである（ちなみに、夜桜流剣術はあくまで『秘術』の類ではなく、サクが誰かに教えようとしただけである）。

もちろん、サクが必要以上に自分の痕跡を残すわけでもない。これは、刹那からの指示だった。サク『のみ』を『西で』有名にさせることで、自分たちの存在をアピールしたのだ。サクを指名したのも、彼女が一番顔が知られても問題ない　諜報活動など行わない純戦闘員だったから　と刹那が判断したからにすぎない。

今思えば、その時点で思い付くべきであった。

あれほど詳しい情報が手に入ったのだ。

桜咲ⅡⅡ刹那が神明流剣士と繋がりがある以上、『夜白家』と西の長に、個人的な繋がりがあることを疑うべきであったのだ。

もし、詠春が木乃香の身をそれなりに案じていたとすれば、『夜白家』に木乃香の護衛を頼んだとしてもおかしくはない。いや、むしろこれ程頼もしい護衛はおるまい。

そして天ヶ崎千草らが木乃香に対して何らかのアクションを起こせば、護衛の依頼に則り、『夜白家』は邀撃、或いは阻止に動く。当然、フェイトもまた、彼らとの戦闘を余儀無くされるだろう。

しかし、喻え気付いて作戦を変更していたら、自分は『夜白家』の実力を見誤ったままだっただろう。中学生ほどの少女2人が『これ』なのだ。トップやその側近がどの程度なのか。考えただけで、フェイトはらしくもない恐怖感に支配されるのを感じた。少なくとも、今の自分では殺されるだけだ。それこそ、まるで『人形』のように。

ここは、素直に彼女らの実力の一端を知れただけで僥倖としようか。

そう結論し、フェイトは立ち去ることにした。考えてみれば、これはまたとないチャンスである。交渉の機会はまだあるはずだ。

フフ。ますます君たちに興味がわいたよ……。

フェイトは消え際に、歪な笑顔を見せた。





第19幕「初見、それは連鎖の始まり/Henge・・・Awkarda

次はいつになるかな……。

時間も微妙ですし、展開にも悩んでいます。

なるだけ、2、3日以内には次話を投稿します。

第20幕「周囲、それは雪中の蒼炎 / Out . . . Burnish a Gaf

今まであまりスポットの当たっていなかった少女と少年の心境です。

ネギィスプリングフィールドたちが仮契約騒ぎを起こしつつも、修学旅行一日目は滞りなく過ぎていった。

そしてその翌日、近衛 木乃香は京都の観光名所の一つ、『シネマ村』に来ていた。かつての京都の街並を再現した場所で、着物姿の人間がちらほら歩いている。

木乃香は極東最大級の魔力保持者である。本人には自覚がないが、狼群のド真ん中に放り込まれた子羊肉のような存在である。

彼女の父親、近衛 詠春の判断により、魔法に関わらずに生きて来たが、今は天ヶ崎たちに現在進行形で狙われている。

もともと、実は木乃香は夜白刹那に一通りの護身術を教わっている。しかも、『女の子はいつ変質者とかに狙われないとも限らない』というもつともらしい理由でだ。

木乃香は、子供の頃から遊んでくれた刹那を『セツ兄様』と呼び、慕っていた。そんな彼が説得したので、木乃香は特に不審に思わずに 刹那が心配性（過保護とも言つ）なことは木乃香も知っていた。その教えを受け入れた。

教わったのは、柔術と合気道である。実は木乃香の實力は、護身どころか全国大会も狙えるレベルなのだが、当の木乃香は刹那以外と組み手をしたことがないため自覚していない。おまけに木乃香がマスターしたものは実戦向きの流派で、相手を殺すことはないとしても、並みの實力者なら軽く屠れる。

元々、図書館探検部や占い研究部に属していることからわかる通り、彼女はインドア派であるが、決して運動神経が悪い方ではない。

さて、木乃香は祖父である近衛このえ 近右衛門このえもんから、詠春宛てに『御使い』を頼まれていた。祖父曰く、父の仕事関係の親書 挨拶みたいなものだそうだ。郵便で送ってもいいのだが、せつかくだから実家の様子も見て来なさいと言われ、木乃香は特に不審に思わずに了承した。

宿泊先のホテルや見学コースからも、彼女の実家はそれほど離れていない。友達を誘ってもいいのだが、立派すぎる実家は彼女にとつて軽いコンプレックスとなっていた。精々、クラスメイトに見られれば恥ずかしいくらいのものだが。それに、友達を自分の御使いに巻き込むのも気が引けた。

が、木乃香はある意味、これをチャンスと捉えていた。

実は木乃香は、長年の知り合いである刹那の担任就任には喜んでしたが、彼の人気上がることに、若干複雑な感情を抱いていた。木乃香は輪廻や煌月、そしてサクやマナが刹那に好意を抱いていることは知っていたが、それでもこれ以上 兄のような存在に、好意が集まるのは嫌だったのだ。

子供の頃は良かった。素直に甘えられたし、抱き付けたし、キスだつてできた。それでも大きくなるにつれ 輪廻やサクの前で、あからさまに好意を向けるのを、木乃香は避けるようになった。それに彼女自身、羞恥心というものが芽生えていた。

唯一の親友と言えたサクやマナ、そして姉のような輪廻や煌月に嫌われるのを、木乃香は怖れていたのだ。そして、刹那との関係

『兄と妹』の関係が、『男と女』の関係に変わることも。

このままの方が良い。だって、普通に甘えられる……恋人としてではなく、妹として。

木乃香自身、刹那に対する感情が恋心なのかわかっていなかった。が、それでも 修学旅行は、刹那と楽しみたい。それは、彼女の本心だった。

だから木乃香は、思い切つて実家に刹那を誘つた。予想に反して、刹那はあっさりと承諾した。それが木乃香にはたまらなく嬉しかった。

彼女は、自分でも自覚するほど顔を緩ませ、刹那と手を繋ぎ、輪廻やサク、マナとシネマ村を回っていた。

もつとも、輪廻やサクは、木乃香が刹那を愛しても別に構わないと思っているし、むしろサクはそうなることを望んでいることを彼女は木乃香の葛藤に心を痛めていた 木乃香は知らない。

一方、ネギと神楽坂 かぐらざか 明日菜 あすな、そしてオコジョ妖精アルベール、カモミール、通称『カモ』は、こっそりとそんな木乃香たちの後を追っていた。

ちなみにこの時、ネギたちはサクやマナが『関係者』だということまでは知っていたが、刹那や輪廻、煌月、千雨、アキラも『関係者』だということは知らない。

ネギは、刹那のことを尊敬していた。魔法使い云々ではなく、教師として、だ。彼は刹那に、色々と人生論などを教えてもらい、これまでの価値観を一変させていた。今まで魔法以外には気にも止めていなかったネギだが、休憩時間や相談時に刹那から聞いた講談や大衆文学の話はとても面白いと感じた。

講談や大衆文学は、主に先人たちの知恵が書かれている。それは軍記・武勇伝など様々だ。何千年も前の武勇伝が、現代の、それも魔法の戦いに役に立つのかと言われるれば、答えはイエスである。

千年前だろうが百年前だろうが、人間の考えることにそれほど変化はない。文化や戦法（魔法の有無）が違えど、それは同じである。

『魔法の射手』は小火器のようなものだし、他の魔法も現代兵器に当てはまるものが結構ある。

実は刹那がネギに話していたのは、決しておもしろおかしな武勇伝ではない。戦術や戦法、現代人としての知恵や常識などだ。自然とネギは、戦術や常識などを、刹那から伝授されていたのだ。

刹那はネギを嫌ってはいない。任務の障害にはなると思っていたが、その生い立ちにはむしろ同情していた。歪んだ教育しか受けられず、大人の決めた道に従うだけ。

刹那は思った。

この少年は、何のために戦い、そして死ぬのだろうか。

本当に自分で決めたことのために戦うのなら良い。その人生にも、生き様に見合うだけの価値も出てこよう。

が、くだらぬ大人の　連合の元老院共のために戦い、しかも本人がそれを自覚せず、最後まで操り人形のように戦って死ぬのでは、あまりにも惨めで　酷い話だ。

だからこそ刹那は、精神や心の面で、ネギ自身自覚せぬうちにネギを鍛えたのだ。彼も相当なお人好しである。

輪廻は苦笑したが、彼女が刹那の意向に逆らうわけもない。そして輪廻もまた、ネギの『甘さ』は嫌っていても、ネギ自身は嫌っていない。ネギの甘さは、彼の天性のものではなく　歪んだ教育の賜物にすぎないからである。

加えてネギは、神多羅木<sup>かたらぎ</sup>教諭たちからの訓練を受け、自分の実力の程を熟知していたし、魔法の恐ろしさというものも知っていた。もとより、彼には素質があり、頭も良い。歪みを直せば、後はトントン拍子で強くなれる。

もつとも、流石に千雨やアキラの成長スピードには遠く及ばないが。

それだけに、相棒<sup>カモ</sup>の仮契約騒ぎには肝を冷やした。特に宮崎<sup>みやざき</sup>のどかのアーティファクトは危険な思考を持つ魔法使いに狙われるには、十分すぎるほどのモノである。

実力アップのためには欲しいが、その代償が生徒<sup>せいと</sup>の命の危機では話にならない。時間はかかるだろうが、自分がのどかのサポートがいらなくなるほど、強くなれば済む話だ。

それにネギは、以前ほど力に貪欲ではなくなっていた。

『立派な魔法使い』と言っても色々ある。



ネギの中で、『立派な魔法使い』像は大きく変化していた。何も力に頼るだけが正義ではない。世界には魔法・旧世界問わず、碌に学校にも行けない子供も多いと聞く。

そんな子供たちに字を教えてあげる。本を買ってあげる。

それもまた、『正義』で『立派な魔法使い』に相応しい行為ではないか。

そう思うと、ネギは疑問を感じた。

「……考えてみれば、『正義のために力を振るう』魔法使いだけが『立派』というのはおかしいんじゃないか……？……単に貧乏な人を救ったり、子供を笑顔にできる人だって、『立派』なはずだ」

貧困に苦しむ人を救うのに、強力な古代上級魔法などいらんではないか。財力が必要だが、金の稼ぎ方など無数にある。子供に字を教えるのも、教える方に学力があれば何の不都合もない。

そう考えると、今の連合の『立派な魔法使い』像はかなり歪だ。実力が魔法に秀でている者しか、なれないような存在だからだ。

「……じゃあ、ネギはどんな『立派な魔法使い』になりたいの？」

悩むネギに向かって、いつの間にか巻き込み、相談するうちに従者パートナになってしまった明日菜に言われ、ネギは言葉を濁した。

考えたことがなかった。

唯、父のようになるためだけに頑張つて来た。

人のために良いことをするのなら 何も、力が必要かは関係ない。ところが、自分は力を求めて来た。がむしゃらに、魔法 それも、攻撃魔法だけを主に学んできた。

なんのために？ 悪者をやつつけるために？ 人を殺すために？

人を殺したいか、と聞かれれば、ネギは一瞬の迷いもなく首を振れる。

が、自分に人を殺す力があるのか、と聞かれれば、ネギは言葉に詰まってしまふ。

ある。そう答えるのが正解だろうが、それでも、自分が簡単に人を殺せる存在であることを、ネギは認めたくなかったのだ。

殺したいか、殺したくないかは別として、『手段』は存在する。『魔法の射手』だって、人を殺せるのだ。普段、自分が何気なく撃つていた『魔法の射手』でさえ。

ネギは、自分が信じていた魔法が 人を救う力から、人を殺す力へと変わることには恐怖した。

10歳にも満たぬ子供に、人を殺せる『魔法の射手』を笑顔で教えている教師や、笑顔で教わっている生徒たちが、ネギの中で、異様な存在へと変わっていった。

「……僕は、どうするべきなんだろう……。人を殺せる力を学び続けるのか？ それとも……」

ネギは悩んでいた。が、その悩みもすぐに消えた。

「だったら、強くなれば良い。相手を殺さずに済むほど……強く」

その結論は簡単に出た。しかし、それでも、まだ踏ん切りはつかず

少年は、強くなることへの貪欲さを失っていた。

ネギもまた、ある程度は現実主義リアリズムに染まっていた。それが口で言うほど簡単ではないことは、ネギ自身も良くわかっていたのである。そしてそんな生き方では、単に禍根を残すことになりかねないということも。

もっともその悩みも、修学旅行で吹き飛ばすことになるのだが、それをまだ、少年は知らない。

第20幕「周囲、それは雪中の蒼炎 / Out . . . Burnish a Gaf

ネギは実力自体は、原作とそれほど変化なしかもしれませんが、心や精神面は、原作よりかなり成長しています。

第21幕「怒気、それは抗えない杭／Have・・・Vanishing Ho

オリキャラの登場です。

第21幕「怒気、それは抗えない杭 / Have . . . Vanishing Ho

闇色の長髪、紅と翡翠のオッドアイが特徴の美少女、夜白やしろ 輪廻りんねの顔は怒りに染まっていた。

先日、夜白やしろ 刹那せつなが月詠つきよみから殺気に向けられた時から、彼女は不機嫌だったが 彼女の尻尾は殺気に自動オートで反応するようになってるので、抑えるのが大変だった（ちなみに横でマナが囁ささしたてていた）。天ヶ崎あまがさき 千草ちくさが感じた『嫌な予感』はこれである ここに来て、目の前にフェイトIIアーウェルクスが現れてさらに不機嫌になった。

もつとも彼女はフェイトが嫌いなわけではなく、単に再び現れた月詠への折檻せきができなくて、不機嫌なだけである。そもそもフェイトは彼女や、その横で煙管キセルを咥くはえている刹那に敵意を向けているわけではない。輪廻は刹那や家族以外にも良いと思っっているが、言い換えれば、理由がない限り傷つけたり殺したりはしない。

とはいえ、フェイトがナニカすれば、即座に首を刎きねるつもりだった。フェイトの首先まづには、輪廻の『見えない尻尾』のうちの1本が先端を向けていた。そして残りの8本は、不気味に蠢うごきながらフェイトを囲かこんでいた。

輪廻の尻尾は、輪廻が見せようとしないう限り彼女と刹那以外には視認が不可能である。

それは、フェイトとて例外ではない。

が、自分では太刀打ちできないナニカが、自分の周囲アに在る。それは理解できた。尻尾、そして輪廻自身から放出される圧迫感アに、フ

エイトの顔から余裕の表情は消え失せていた。その顔は冷や汗にまみれ、死人かと思うほど青ざめていた。

フエイトは今更ながら、1人で来たことを後悔していた。「彼」くらはいは連れてくるべきだった。

まったく、この僕がいきなり打つ手を誤るとはね。

一方、輪廻は考えていた。

目の前の白髪の少年 ナニカ『神』的なモノが創った神工生命体じんこうのようだが は脅威には成り得ない。それに、性根も腐っていない。単に命令で動いているのではなく、しっかりとした自我がある。しかも、本人は意図的にあたかも自身を『人形』のように演じている。

そのパーソナルには、少し興味がある。

彼女の愛する兄の邪魔にならない限り、殺す必要はない。寧ろ、ちよつど良い『取引相手』になるかもしれない。

兄の願いを叶えるためには、キレイなモノに限らず 少しはケガしているモノの協力も必要だ。邪魔者は全て殺すつもりだが、それでも殺す数が少ないことに越したことはない。

お兄ちゃんは、私が大量殺戮者になることを望んでいない。

気にしなくても良いのに、と輪廻は思う。

彼女の兄の敵を殺すこと。それは『命令』ではなく、輪廻自身の『意思』だ。

それに、刹那を狙う、煩わせるような塵芥をいくら殺すことになっても、輪廻は全く気にしない。天狐の輪廻にとって、人間も亜人も眷属も怪物も神も他の神獣でさえも、自分とは違う 異質な存在に過ぎないからだ。人間が蟻を踏み潰しても、気にもとめないのと同じように。

本来なら、天狐の中でも異質のソンザイである輪廻が、元人間で、今は神である刹那に尽くす方がオカシイのだ。

天狐の立場（最高位神獣）からすれば、刹那ごときに身も心も捧げるなどあり得ないことだ。

刹那は輪廻より上の存在ではない。確かに、刹那も創造神を超える<sup>イレギュラ</sup>異常な存在ではあるが、それでも力では輪廻の足元にも及ばない。

輪廻は刹那を愛し、狂信的なまでに慕っている。当然彼女も、刹那が自分より弱いことなど承知の上で、だ。彼女は刹那に救われた。そして同時に、刹那に恋をした。だから彼女は、自ら望んで刹那の奴隷となっているのだ。

ちなみに、夜白<sup>やしろ</sup> 煌月<sup>くわげつ</sup>にも全く同じことが言える。煌月も輪廻よりは下だが、刹那よりは圧倒的なまでに強い。しかし煌月もまた、刹那に身も心も捧げている。煌月は麒麟の上位種、白銀種だが、今のところ、白銀種は煌月1体しかない。かなり稀少<sup>レア</sup>な存在で、少なくとも数千世紀は1体もいなかった。煌月が最初にして、唯一の白



銀種なのだ。ある意味、輪廻と同じく特別変異のようなソンザイである。

話を戻すが、輪廻にとって、喩え人間界と神界の全てを滅ぼしても、それは些事に過ぎない。彼女にとっては、刹那がすり傷を負ったとか、そんな普通に考えれば些細な事の方がよほど重大である。

しかし、刹那は輪廻が自分のために、返り血で汚れることを喜ばしく思っていない。それに、輪廻の刹那以外の命を全て軽んじる考えも、同調できるものではなかった。彼とて、人殺しが避けられるとは思っていないが、それでも殺す数はできるだけ減らしたかったのだ。

輪廻はそれを知っている。そのこと自体は、刹那の優しさの賜物だと考えていたから文句は言わなかった。が、それでも輪廻は、刹那を傷付けたり、侮辱したモノは1人残らず始末してきた。最高の苦痛を味合わせ、じっくりといたぶってきた。

「それで、アーウェルンクスは何しに来たの？お兄ちゃんに手を出すのなら……殺すよ」

輪廻はそう言って、瞳を妖しく光らせながら微笑んだ。見る者を虜にするような妖艶な笑みだが、彼女の美貌が一層恐ろしさを際立たせていた。

巨大な力が巻き起こり、三者を閉じ込めている結界　輪廻が人払い用に張ったものがミシリ、と嫌な音を立てて歪んだ。尻尾はまるで、獲物を見つけて狂喜乱舞する獰猛な蛇のように蠢く。

刹那とフェイトの背筋に冷たいものが走った。

刹那はフェイトの身を案じ、フェイトはかつてない恐怖と必死に戦っていた。そもそも、フェイトは今の今まで、恐怖とは全く無縁の存在だった。大戦中の時でさえ。

ところが今、フェイトは、目の前で妖艶な微笑を浮かべる少女を怖れていた。この場に煌月がいれば、フェイトはさらに恐ろしいことになっていただろうが、知らぬが仏である。

「……安心してくれ。戦いに来たわけじゃあない」

「そう。よかった。私も鬼じゃないから……。旅行中のお兄ちゃんに、少年が1000兆回いたぶりなぶられる光景シーンなんて見せないし、お兄ちゃんに貴方の血を浴びせたくもないから」

輪廻はそう言うと、おどけたように肩をすくめた。

もちろん、ただの『冗談』だ。彼女の力を使えば、フェイトの拷問を刹那に見られることも、刹那が返り血を浴びることも容易く防げる。輪廻が口に出していったのは、単にフェイトの恐怖心を煽るためのジョークに過ぎない。

輪廻は口元を歪めるが、魅惑の瞳は殺意と敵意に満ちていた。

性質タチの悪い脅しに、刹那は顔を顰める。彼は輪廻の頭を撫でつつ、小声で妹を諷めた。

「……輪廻、無駄に怖がらせるな。警戒心を高めるだけだぞ」

「……んっ……あ……はい、お兄ちゃん」

輪廻は目を細めて刹那に身を預け、彼の首筋にペロペロと舌を這わせた。

輪廻の頬は朱に染まり、瞳は刹那に撫でられる悦びから少々潤っており、撫でられた瞬間から、凍てつくような殺意や紅蓮の炎のような敵意は消えていた。フェイトに向けられていた尻尾のうち数本は、圧力を消して、刹那を優しく包み込む。

「……輪廻」

「……はい」

その尻尾たちを撫でながら、刹那は小声だが、有無を言わせぬ口調で輪廻を諫めた。

次は唇を奪おうと考えていた輪廻は残念そうにしながらも、少し身を引いて元の位置に戻った。  
そして、輪廻は小声で

「……貴方がいるせいで……」

と言いながら、忌々しそうにフェイトを睨みつけた。  
フェイトは再び寒気を感じ、不覚にも膝をついた。  
ため息をつき、刹那はフェイトを見る。

「大方、同盟を結びたいということですか？アーウェルンクス氏」

「……あ、ああ。……敬語はいらないし、フェイトで構わないよ、えーと……なんて呼べば良いかな？夜白刹那？」

「こつちも刹那でいいで……いい。ウチは基本、夜白の性が入っているからな」

「そうか。じゃあ刹那。君の予想通りだよ。僕たちの目標は『世界を救う』こと。はっきり言って君たちは脅威だ。『あの方』でも勝てるかどうか……いや、敵わないだろうね。だからこそ、ここで立場をはっきりさせたい。協力してくれれば嬉しいが」

「……俺たちは基本、家族や仲間が危険にならない限り動かない。基本の立場は中立だ。そつちに敵対する者に雇われれば、我々はそつちの敵となるだろう」

「……それはつまり、こちらで君たちを雇えば、味方になってくれる、ということかい？」

「ああ。でも、我々の優先はあくまで我々自身の『平穩』だ。それを壊さぬ程度なら、協力も吝かではない。もちろん、内容にもよる。罪のない者の大量殺戮なんて御免だ」

「それは安心してほしい。無関係な者を巻き込むことは、僕たちの組織　『完全なる世界』<sup>コズモエンテレケイア</sup>の主義にも反する。本当なら、『あの方』は『破壊』と『消滅』によって世界を変えるつもりだったそうだが……最近は、少々路線を変更してね。『破壊』や『消滅』は最小限度に留めることにした」

「……良いことだ。かつて、外科手術は『手術』という名の『破壊』だった。腕に膿ができた時は、肩から切り落とすとか……そんなモノだった。が、今は最先端の技術で、局部だけを取り除くことも可能となった。

時間は経つが、『全体』の破壊より『根源』の破壊の方が良い。一見効果がなさそうでも、ボディブローのようにジワジワと効いていく」

それを聞いて、フェイトは大きく頷いた。その職種は、先刻前よりはかなり人間らしさがあった。どうやらフェイトは、それなりに人間に近いソンザイとなりつつあるらしい。

「そうかもしれない、いや、その通りなのだろうね。『あの方』もそう考えるようになった」

実は、それは創造神　アリスⅡⅤⅡRⅡスウォルディナが行った『世界保護』　刹那たちを送った世界が『自殺』しないように、これまた異例だが神界が直接介入した　の結果なのだが、それを知る者はこの世界にはいない。

「が、それでも幾つかの『除去』は必要だね。歪んだ『正義』を標榜する者たちにとっては、十分『悪』となる。それは五月蠅いし煩わしいし。余計に事を拗らせかねない。だから、少しは血を流すことも必要だ。君たちが協力してくれると助かる。……ん、待てよ……」

笑顔で話していたフェイトは、突然何かを思いついたらしく、急に顎に手を当てて空を仰いだ。  
しばらく彼は、

「……彼を連絡役に……いや、だがしかし……うーん……」

と小声で唸っていたが、ようやく視線を刹那に合わせると、笑顔で言った。

「まあとにかく、少し経てばそちらに連絡員を送るよ……僕と同じようなソングザイだね、おかしはな 貶花 まじりい 桐威というんだけど。

……ああそうだ。同時にちよつと、『リョウメンスクナノカミ』の力を見てくることにするよ、明日……ね」

「木乃香は渡さんぞ」

「大丈夫だ、彼女は君の一派だろう？ だったら、誰が好き好んで手を出すものか。そこは、桐威の力を借りるよ」

「……そうか。まあいいさ。あの程度、いくらでも阻止できる」

「それを見たら、僕は帰るよ」

「諒解した。ああ、天ヶ崎千草と月詠、ちよいと預かっても良いか？」

「構わないよ。その方が面白くなりそうだからね。特に月詠は、さしもの僕でも手に余りそうだ」

そこまで言って、フェイトは視線を輪廻に向けた。

「……最後に、君の名前を覚えてもらってもいいかな？」

「……夜白 輪廻。輪廻でいいよ、変わり始めた人形さん」

「……そうかい。覚えておくよ……じゃあ、またいつの日にか」

フェイトはそう言って、水の転移<sup>ゲート</sup>魔術を使って消えた。

「……ふう。寿命が縮むかと……いや、確実に縮んだね、これは。酷く疲れたが、心強い味方ができたよ」

「……そりゃー重<sup>ちゆうじゆう</sup>畳<sup>じゆう</sup>」

瓦葺の屋根の上、フェイトはため息を吐きながら、目の前でマフラーをたなびかせている青年を見た。

年齢は17前後。背丈は160センチ後半。黒髪は前髪が長く、左目が隠れている。瞳も同じく黒で、肌も東洋系だ。金色のピアスをつけている。

スカイブルーのダメージ加工が少々酷めのジーンズに、幾何学的な模様が書かれたポロシャツ。紺と緑のストライプのネクタイをつけている。首には黒い薄生地のマフラー。そして、片手には今流行りの携帯ゲーム機。

一見、特に目立つたところの無い今時の若者。が、寧ろ作為的な意図的に目立たぬように創られたのではないか。そう思わせる雰囲気を感じていた。が、決して人間臭くないというわけではなく、青年は同情と喜びの入り混じった、複雑な表情で、パートナーと呼べる少年を見下ろしている。

「……桐威。『例のモノ』を」

「ほい」

桐威と呼ばれた青年は、ニヤリと笑いながらポケットからナニカを投げ渡した。

それは一見メノウに似ていたが、虹色の粒子がいくつも中を絶えず飛び回っている、不思議な石だった。



「……刹那たちへの連絡員は、君に任せるよ」

「サンキュー……フェイト君」

青年　　貶花　桐威は、にこやかに笑った。

第21幕「怒気、それは抗えない杭／Have・・・Vanishing Ho

次回、月詠再ボコリタイムです。フルボッコです。

フェイトたちとは同盟を組みます。ボコるのは、圧迫感で、ということ。いつか、フェイトとの模擬戦シーンも入れる予定です。その時は思いつきりボコりますが。

オリキャラ、貶花についての設定紹介もいつかはやります。

第22幕「廻廊、それは出口のない呪い／Twist・・・Drop of B

修学旅行編最大の見せ場、フルボッコタイムです。

近衛<sup>このえ</sup> 木乃香<sup>このか</sup>を分身でさり気無く避難させた後、結界内では戦闘が行われていた。

天ヶ崎<sup>あがさなき</sup> 千草<sup>ちくそう</sup>は大河内<sup>おほこうち</sup> アキラと長谷川<sup>はせがわ</sup> 千雨<sup>ちゆめ</sup>（+使い魔のサンレイ）、月詠<sup>つきよみ</sup>は桜咲<sup>さくらさき</sup>＝Y＝刹那<sup>せしな</sup>とマナ＝A＝Y＝タツミヤと対峙していた。

千草、月詠の両者は苦戦を強いられていた。

特に千草は、本来は遠距離からの攻撃や支援が専門である。接近戦が十八番<sup>オハコ</sup>のアキラとサンレイにいい様に弄ばれ、確実に追い詰められていた。

「 遅いよ」

「 あぐうツ！！」

千草は必死に反撃するも、距離を取ることなど不可能だし、取れても千雨の遠距離攻撃が待っている。

彼女はアキラの回し蹴りを喰らい、大きくはね飛ばされた。そのままアキラ、そしてサンレイに追撃される。2人の連続攻撃を受けた千草は、ゴム毬のように跳ねながら吹き飛ばされた。

「 ……ふう。刹那さんはひっ捕らえるよう言ってたし、捕まえてお

こうか……えーとウル・アオル・スウィル・ラ・スミル……  
戒めの風矢』」

千草を縛りながら、アキラは小さくため息をついた。

「……あの月詠とかいうコに御仕置きできないのは残念だけれど……  
……そこは任せたよ、サク、マナ……。殺さなければ良いって、刹那  
さんは言ってたからね……」

血を吐きながら蹲すくる千草を見下ろし、アキラは薄く微笑した。もつとも彼女は、後ろにいる相棒が青ざめて震えていることには気付いていない。

『ざーんくーうせーん』

『牡丹杏』

3筋の閃光が煌き、ぶつかり合った。サクと月詠、二人の剣士は先程から斬り合いを続けている。  
それを見ながら、マナは呆れた表情を隠すことなく、煙草を吸っていた。

息を吸うと、ニコチンの独特の臭いが肺を満たすのを感じた。

まったくサクも、はやいところ腕を落として死なない程度に斬り刻んでくれればいいのだが……剣士と戦う時は遊んでしまうのは、彼女の悪い癖だな。そうじゃないと、私が楽しめないじゃないか……。

そんなことを考えながら、マナは空に煙を吐いた。ちなみに流れ弾ならぬ『流れ斬撃』をかわしながらの行動である。斬撃はどこまでも飛び、結界内を飛び交っていた。

結界内だからいくらでも修復できるのだが、京都が誇る樹齡がもの凄いレベルの木々や、キレイに塗られた鳥居などが何本も薙ぎ倒されている。京都通や自然保護団体が見れば卒倒ものである。

いい加減に我慢の限界に来たマナは、特別に改造した軽機関銃を『シャドウ・キャビネット足元戸棚』から取り出し、斬り合う二人に向けて一連射した。

発射された弾丸は、時限信管付きの爆裂弾である。弾丸はサク達に到達する直前で爆発し、無数の破片が二人に襲いかかった。

「おっと」

「うわっつと！」

2人は斬り合いを止め、億劫そうにマナを見た。

「……何だ。せつかくこれから斬って刻んで髑<sup>なぶ</sup>るつもりだったのに」  
「だったら最初からそうしてくれよ。私もこのカスタマイズしたばかりの軽機（軽機関銃）を試したくてウズウズしているのに」

「……いや、死ぬだろ。アレ喰らえば。連射力と初速も高めている……防いだが、米軍のそれといささか勝手が違っていた。装甲車でも壊せるぞ」

「当たり前だろう。輪廻さんにも改造を手伝ってもらった、対戦車銃をベースにした特別製だ。」

使用する弾丸も劣化ウラン弾。海自（海上自衛隊）の護衛艦が搭載しているCIWS（近距離防御火器システム）でも採用している特別弾だ。流石に二〇ミリではないが、比重が鉄の2.5倍もあるのは大きいな。

装甲車など、コイツの前ではアルミ缶だ」

マナはそう言うと、誇らしげに身の丈の半分以上はありそうな銃身を掲げた。

それを聞いた月詠は一言、

「……悪趣味どすなー」

と呟いた。

全力で同意したいサクであるが、マナがこの手の改造銃を好んで使用することは知っているので黙っていた。

そして、マナは怒りを隠して、サクに微笑みかけた。

「……さっさと殺らせてくれ」

「……ああ」

サクは頷き、

「ッ!? ……え……」

月詠の両腕を斬り落とした。

「……すまないな、遊びが過ぎた」

サクはそう言って、月詠の血を全身に浴びながら、微笑んだ。

「私は 私たちには、刹那さんの敵をいたぶったり、拷問したりする趣味はない」

マナはそう言って、自動拳銃を取り出し、微笑んだ。

そして、2人は見つめ合い、微笑んだ。



「だが、『趣味ではない』だけで やったことがないわけではない」「

そう言つて、2人同時に、月詠の顔に蹴りを叩き込んだ。

「きゃんッ！」

吹き飛ぶ月詠を追いかけながら、サクは2枚の呪符を投げた。呪符は金色に輝く透明な膜となり、すぐに月詠の止血をする。切断面に覆い被さつたのだ。

そして、マナは自動拳銃の銃身で、月詠の腹を強く殴つた。さらに吹き飛ぶ月詠を、空に高く蹴りあげる。

サクは即座に白く輝く翼を展開し、思い切り羽ばたいた。そして月詠に接近すると、『夕凧』の峰<sup>みね</sup>でさらに月詠の上に叩き上げる。血を吐きながら空を舞う月詠を見つめ、サクはうっすらと微笑んだ。

「 まだまだだ。刹那さんに殺気に向けた罪は重いぞ 死なせないほど……な」

そして『韋天』<sup>イテン</sup>で月詠の真上まで接近し、彼女の耳元で囁いた。

「その罪は許し難いし、許す意味はない。が、刹那さんはお前に『価値』を認めている。」

だから 死ぬほど後悔し、死ねないほど苦しめ

月詠の腹に踵落としを喰らわした。

悲鳴を上げることができず、いや、もうそんな余力すら残っておらず、月詠は地面に叩き付けられなかった。

猛スピードで落下し、地面と衝突する寸前、マナの膝が月詠の身体に突き刺さったからだ。

「…………ふむ、存外に飛ぶものだ」

今度は横に吹き飛んだ月詠を眺めながら、マナは呟いた。その横に、サクが着地する。

「…………どうする？ 私たちは拷問には慣れていないし、剣も銃も、相手を生かしたまま苦しめるのには不適切な武器だ」

「…………ふむ、そうだな…………。いつそのこと、両手両足を斬るんじゃないかと丁寧に折っておくべきだったか？」

前にいつか…………刹那さんが敵に殴られた時、輪廻さんがやってたじゃないか。あの時は敵の骨を一本残らず丁寧に折っていたな…………」

マナが言うと、サクは嫌そうに顔を顰める。

「ああ、私たちが九歳くらいの頃だったな……。あれはトラウマになったぞ。絶えず骨を折る音と悲鳴が聞こえてくるんだ。敵、後半はもう発狂してたし……。」

輪廻さん、『よいしょ』とか言いながら笑顔で折っているから怖いななんてものじゃああらへん……。」

「しかもまだ序の口で、それで死んだ後生き返らせて、今度は長い爪で内臓や肉を掻き混ぜていたね……。輪廻さんは、『シエイクを掻き混ぜるようなカンジか、泡立て器で卵黄を掻き混ぜるようなカンジ』ってえ言ってたが……。おかげで暫く、マ○クシエイクが飲めなくなつたよ。」

「私はスクランブルエッグが食べられなくなった……。っていうかマツ○シエイク限定なのか？ スタ○のは大丈夫なのか？……。まあいいか……。あれ程同情できたんだから、『あの頃は』私たちも青かつたんだな……。」

そこまで言うと、サクは『韋天』で移動し、気絶した月詠を回収して戻ってきた。

そして口元を歪め、月詠を睨みつけた。

サクは月詠を投げ捨てる。

「ウチら、成長したわなあ、今じゃあ普通にできるもんなあ……。」

サクの口から声が放たれるのと、彼女が月詠の足の骨を踏み砕いたのは、ほぼ同時だった。

月詠の拷問はこの後暫く続きましたが、刹那が記憶を封印したので、トラウマになってはいません。が、刹那に襲いかかれたいようにはなっています。

\* 輪廻は『創造』の能力を持っているので、好きな武器やパーツを創造できます。マナの改造銃器には輪廻が創造したオリジナルのパーツが使われており、既存の兵器や軍の制式火器より遙かに強力です。オーパーツみたいなもので、現代の科学レベルでは実現不可能なパーツを搭載しているのです。

第23幕「露見、それは不幸と疑惑のコントラスト/Sing・・・Dead

修学旅行編も大詰めです。

この後は、暫くオリジナル展開や番外編が続きます。

僕にとっても予想以上の長丁場となりました。なのはの無印編より長いって……（笑）飽きてしまった方、『はよ進めろや』という方には申し訳ありません。

第23幕「露見、それは不幸と疑惑のコントラスト/Sing・・・Dead

関西魔術協会の総本山、近衛家の一画にて、夜白 刹那と近衛 詠  
春の2人が向かい合っていた。

部屋の周囲には遮音結界や人払いの結界などが敷かれ、2人の男の前には銚子が置かれ、2人は清酒を猪口でグビグビやっていた。刹那の横には夜白 輪廻がいて、刹那に垂れかかりながら酌をしている。不埒な光景だが、刹那と輪廻の2人に限ってはいつものことなので、誰も気にしていない。

だが、実は刹那はかなり酒に弱く、飲むペースはかなり遅かった。清酒だからこそ、このペースで飲めるのであり、これがウオッカともなるとグラス一杯でダウンである。

刹那の後ろでは、今回の任務を忠実にこなした4人の少女 桜咲  
「Y」刹那、マナ「A」Y「タツミヤ、長谷川 千雨、大河内 ア  
キラが思い思いに寛いでいた。

サクとマナは縁側に輝く月光を眺めながら和菓子をつまみ、男2人と同じように月見酒を堪能していた。生真面目なサクも、小さい頃から（無理矢理）飲まされていたせいから、飲酒については寛容である。

千雨は壁に寄り掛かるようにして眠り、アキラはそんな千雨に毛布をかけて読書を楽しんでいた。

「この度の事は、本当に御苦労様でした……木乃香への魔法バレは防げましたし、3-Aの被害者もなし。犯人は『白髪の少年』以外

は全て捕縛……親書も無事届けられました。天ヶ崎君の供述により、バツクに着く予定だった強硬派も一掃できそうです。

それにしても、ネギ君の成長は期待以上でした。貴方からはずいぶん酷い印象を受けたと報告されていましたが、犬上君に勝利し彼の捕縛に成功しています。……神楽坂君への魔法バレは防げなかったようですが、取り敢えずは明日、彼を『隠れ家』に連れていくつもりです。ついてきてしまった宮崎君や朝倉君も一緒に」

上機嫌な詠春が刹那に言うと、刹那は大きく頷いた。

「特使を木乃香嬢に任じたことは間違いではありませんでしたね……。

ネギ少年については、こちらの存在はバラしておりません。が、非力ながら精神面でサポートさせていただきました。

彼は真つ直ぐすぎる。芯の強さだけが、心の強さではない。曇りなき強さより、少しは煤けた強さの方が……この世界には向いています。血と硝煙にまみれた、この世界では……ね」

刹那が悟り切ったように言うと、詠春の顔はたちまち後悔と悲しみに塗られていった。

「……本来なら、あんな世界は私の代で終わらせるべきだったのかもしれない……しかし、それはできなかつた。あまりにも……あまりにも、時間と犠牲が必要でした。

旧世界のことです。手一杯だったというのは、言い訳にすらならないでしょうね……事実、私は20年近くかけても、足元の土台さえ、盤



石にできませんでした。私は、無力、すぎます……」

詠駿はそう言つて、猪口の残りを一気に飲み干した。畳に零れたのは、清酒か彼の涙かは刹那にはわからなかった。

「ゼクトやガトウは死に、ナギモアルも行方知れず……唯一の『仲間』で消息がわかつているのはラカンだけ、とは。私は老いて、今や桜咲君にも及ばないでしょう。『政治力』だけが武器の元『英雄』。そして、その政の手腕ていしゆすら、私には十分ではありません。

私には、娘を護る力もない……時々、考えてしまうのです。私の娘でなければ、木乃香は『極東最大の魔力』など持たなかったのだろう、と。私は、あの子を護ることはできないくせに、あの子を望ま  
ず不幸にしてしまう……」

「何をおっしゃいます」

刹那は鋭く言つた。彼は珍しく語気を強め、横にいる輪廻を驚かせた。

「貴方からの頼みであつたからこそ、私はこの度の依頼を受けました。貴方も御存知のはず。傭兵稼業にとって、護衛と秘匿ほど忌み嫌われる任務はありません。

それに貴方なくして、木乃香嬢の平穩など有り得なかつた。貴方は、自身の娘を道具にするようなことは決してしなかつた。

自信をお持ちになつてください。彼の少女は言うでしょう、近衛詠春の娘に生まれて、後悔することなど有り得ないと。夜白刹那は言

うでしょう、近衛詠春の友人となって、誇りに思わないはずがない、と」

「有難うございます」

詠春は静かに目を閉じた。

「……お兄ちゃん」

「ン、ああ……。では詠春殿、捉えた3人についてですが」

「ああ、はい」

詠春は落ち着いていたのか、そばにあった巻物を取り出した。

「犬上小太郎君いぬがみこたろうについては、本人の合意もあつて義父の元（麻帆良）に送ることになりました。彼は東に嫌悪感を抱いていたのですが、今回のネギ君との戦闘で払拭されたそうです。彼は半狗族ハーフですので、身体能力は高いですし、鍛えようによつてはさらに強くなれます。それと天ヶ崎千草君や月詠君つきよみですが、頼まれていた通り、貴方たちに引き渡します。情報をいただいた以上、これ以上、こちらで預かっていてはかえって危険です……彼女たちも、特に異論はないみたいなので」

「あの子たちを、ウチ（『夜白家』）専属の補助要員とするというお兄ちゃんの考えが図に当たったね。それなりに使えそうだし、特

に月詠っていういけ好かない雌餓鬼　なかなか伸びしろがありそ  
うだよ」

輪廻はそう言っつて、ニヤリと笑う。が、続けて爆弾発言をした。

「綾瀬にも千雨の結界展開が目撃されたからねえ、近いうちに接触  
してくるかもよ……上手くいけば、良い駒になる」

「　は？」

「　れ？お兄ちゃん、気付いていなかった？あの子は知的好奇心  
が大きいからねえ、ある意味、朝倉パパラッチより性質タチが悪いよ」

輪廻は何食わぬ顔で首をかしげ、ポカンとしたままの刹那の唇に口  
づけをした。

そんな彼女を除いた全員の視線が、熟睡する千雨に向けられた。

「……アキラ」

「……うん」

無表情で顎をしゃくつたマナに従い、アキラが千雨に近付き……持  
っていた本で千雨を殴った。

千雨の悲鳴が結界内に空しく響き渡った。

翌日、フェイトの手により『リョウメンスクナノカミ』が復活し、  
テンション高めのエヴァンジェリンとAとKとマクダウエルの手  
よって倒されたところをネギたちに目撃され、ネギがマクダウエル  
への弟子入りを志願することになるのは、また別の話である。

第23幕「露見、それは不幸と疑惑のコントラスト/Sing・・・Dead

長かった……オチが弱いのは勘弁してください。

基本的に、ネギ側の話はあまり描写せず、アナザーシナリオ的な感じが強いので。

主人公側とネギ側が接触するのは、もっと後のお話です。

番外編第4幕「微妙に震えるシーソー/Wood・・・No Iris ger

久しぶりの番外編、夕映編です。

彼女の登場を望む声は大きく、ようやく出せました。ちなみにヒロイン志望で一番票が多かったのはアキラでした。

ネタとか感想とか質問は、随時募集しております。

綾瀬<sup>あやせ</sup> 夕映<sup>ゆえ</sup>のパーソナリティを一言で表す場合、『理屈屋』、或いは『哲學家』となる。

この小柄な少女は、人付き合いが苦手ではないことを除いては、長<sup>は</sup>谷川<sup>せがわ</sup> 千雨<sup>ちゆ</sup>に酷似していた。

が、大きな違いは、千雨が『平穩』を望んでいたのに対し、綾瀬夕映は退屈で下らない世界に辟易していたということだ。事実、彼女は親友ができるまでは完全に世界に絶望していた。

勉強嫌いは夜白<sup>やしほ</sup> 刹那<sup>せつな</sup>によって大分緩和されたが、それでも綾瀬はどこか、平穩を拒絶していた。

もちろん、そんな考えで平穩を捨てるなど、過ぎしたくとも平穩を味わえない者からすれば言語道断であろう。聡明な彼女は、そこはしっかりと熟知していた。

が もしも、『チャンス』があつたなら、彼女はそれに飛びつくだろう。

修学旅行の最中、彼女は親友の宮崎<sup>みやざき</sup> のどかを探している最中、壁に何やら彫刻刀で掘っている千雨を見つけた。

怪訝な顔でそれを眺めていた綾瀬は、その直後 千雨が、消しゴムで消されたようにかき消えたのを目撃した。慌てて探しに出かけたが、結局その日、見つけることは叶わなかった。

綾瀬の心に引つかかったのは、千雨が壁に刻んだ記号である。正式にはケルト魔術の『術式図像<sup>ナンパー</sup>』というのだが、彼女はそれが、昔聖書で見たマークに酷似していたことに気付いた。

千雨が刻んだモノは、結界の展開ではなく、単に補強のためのナン

バーだったのだが。

綾瀬は千雨に聞こうとしていたが、ただでさえ、千雨は他者と壁を張っている。そこで綾瀬は、休日に千雨が良く遊びに行くという噂の夜白家に行くことにした。

ちなみに修行の時は、千雨たちは寮から出入りしている。だから、普通に千雨が夜白家に向かった理由は文字通りの意味で『遊びに行つた』時だった。

そのこと自体は、綾瀬は不審に思っていなかった。

綾瀬自身は行ったことはないが、夜白家に入っている生徒は、一人や二人ではなかったからだ。

まず、刹那の義理の娘でもあるマナ=A=Y=タツミヤと桜咲=Y  
|| 刹那。

この2人は、まあ、当然だろう。麻帆良生徒の寮暮らしはほぼ強制だが、学園都市内に自宅がある場合、寮監に許可さえ取れば実家で寝泊まりしても良いことになっている。同じ按配で、知り合いを自分の実家に泊めることも、許可さえ取れば問題無い。

もつとも、だからといって毎日実家で寝泊まりする生徒はいない。学生生活の都合上、寮の方が何かと都合が良いからだ。

次に、公私問わず刹那や夜白、輪廻を兄妹や姉妹のように呼んでいる近衛、木乃香。これも古くからの知り合いなので、特に不審に思われていない。

後は、単に刹那や輪廻と仲の良い生徒、千雨や大河内、アキラ、



那波 千鶴、和泉 亜子、神楽坂 明日菜など。というか、クラス  
の半分以上は一度はお邪魔している。

実は綾瀬、刹那と仲が良い。それは、彼の趣味が自分と同じ読書だからである。だから、本を借りに来たとか言つて、さり気無く、千雨の事を聞くつもりだった。本人がいてくれれば、さらに都合が良い。

元々、クールな綾瀬の交友関係は広いほうではなく、コミュニケーションスキルも高い方とは言えないが、やってみる価値はあるだろう。プライベートの千雨なら、少しは話しやすいかもしれない。

そう考えていた綾瀬だったが、彼女の考えは出だしから崩壊した。

インターホンを鳴らした後、玄関から出て来たのは、執事服を着込んだ見知らぬ美人だったからだ。

ま、まずいです……。まさか初対面の人間に出くわすとは……。

内心、軽く辟易した綾瀬は挨拶すると、小柄な自分を見下ろす長身女性は無表情のまま、深くお辞儀をした。

「綾瀬夕映ですね、どうぞこちらへ」

そういつて案内された後、美女は夜白 煌月と名乗った。3・A生徒の中では、夜白家の美女執事と陰ながら噂になっている煌月は、案外知名度が高い。

その名を聞いて、綾瀬は木乃香が『コウ姉様』と呼ぶ美人の話を、よくしていたことを思い出した。恐らく、目の前の女性と同一人物だろう。

成程、そう言えばこれでもかというくらい、木乃香の話と一致している。なんでも、夜白家の遠縁の親戚で、御手伝いとして刹那の元で働いているらしい（もちろん刹那が木乃香や3-Aに話した表向きの話である）。

「髪が透明かと思うくらいキレイで、瞳もとてもキレイで、肌もとてもキレイな人なんよー。無表情やけど、そこがまたカッコええんやー」

頭の中で、木乃香の話が反芻される。確かに絶世の美女だが、どことなく男性らしさを感じさせる。服装のせいではなく、雰囲気のせいだろうと綾瀬は見当をつけた。

綾瀬は、刹那のことについて聞くが、刹那も輪廻も出かけており、今家には自分しかいないと煌月から返される。

テーブルに置かれた紅茶を飲みながら綾瀬が思案していると、

「魔法について知りたいのですか？」

サラリとトンデモないことを聞かれ、綾瀬は紅茶を吹き出しそうになった。

「……どういふ……こと……ですか？」

「そのままの意味です。貴方は　世界の、本当の姿に触れたいですか？」

『世界の本当の姿』という言葉は、綾瀬の好奇心を刺激するのに十分すぎる力を持っていた。

思わず即答しかける綾瀬だったが、その瞬間、綾瀬の呼吸が止まった。

煌月が、無機質な目で綾瀬を見つめていた。

「刹那様ははじめをしつかりと取られるおつもりです。従者ちゆうさの不始末についてはしつかりと責任を取りますが、貴方はそれで良いのですか？」

「私、ですか？」

「はい。この世界は、争いと血と鉄臭さしかありません。貴方は人を殺すことになるでしょうし、殺されかけるでしょう。その時は、刹那様はしつかりと貴方を護られるでしょうが、死ぬ可能性はいつでも、そこにあります」

そう言うと、煌月はどこからかナイフを取り出し、それを投げた。綾瀬の目の前に置かれていた水の入った透明なグラスにそれは落ちた。

たちまちにして、水は真っ赤に染まる。ナイフには、赤い液体と塊がこびりついていた。

綾瀬は小さく悲鳴を上げて仰け反った。が、すぐに気を持ち直し、煌月を睨みつける。煌月のサファイアのような瞳が、綾瀬を射抜いた。

「　こんなものッ」

綾瀬はそう言っつて、血がこびりついているナイフの柄を握った。そして、ナイフを高々と掲げ　振り下ろした。

トン、と音とともに、ナイフが漆塗りのテーブルに突き刺さった。柄に付着していた乾いた血が、パラパラと粉になってテーブルに落ちた。

「退屈という理由で、好奇心や探究心という阿呆らしいものに負けて、平穩を捨てる馬鹿がたまにいます　私は、それです。それに……もう、のどかは巻き込まれています。だったら、私も同じ土俵に立って、世界を見てやります」

綾瀬はそう言っつて、身を乗り出して煌月を見た。

煌月は微動だにせず、それを見つめていた。

「私は馬鹿ですが　その馬鹿によって世界は動いている、違いますか？」

「……成程、剎那様が仰った通りの反応ですね」

「え？」

啖呵を切っていた綾瀬は、今にも息巻きそつな表情から大口開けた間抜け面になり、改めて煌月を見つめた。

「剎那様より、すでに許可は出ております。全く、人間は剎那様以外馬鹿で滑稽です」

煌月はそう言って、席を立った。

「嫌いではありませんが」

夕映ですが……どのくらい強くしよう。多分、刹那と仮契約するか  
ら……うーん、マナやサクよりちょっと下くらいかな、そうなるま  
で時間はかかりそうですが。

アーティファクトどうしようかな……。

第24幕「一転、それは起こるべくして起こった偶然と運命」(前書き)

久しぶりの輪廻視点です。

## 第24幕「一転、それは起こるべくして起こった偶然と運命」

『イブ原理』というものがある。

そもそも人間の身体的性（要するにセックス）とは、何によって決められるのか。おそらく大体の人間が、『遺伝子』或いは『染色体』と答えるだろう。それは間違っておらず、『SRY遺伝子』と呼ばれる遺伝子が存在する人間のみ、男性への分化が進行する。この分化は非常に複雑な過程をたどるのだが、それは、今は置いておこう。

SRY遺伝子が存在しない場合は、その人間、というより個体は女性になる。

ざっくりばらんに言うと、普通は女性になる個体にとある遺伝子が作用することによって男性となる。つまり、人間の基本の形というものはあくまで『女性』であり、『男性』とは、歪なモノが絡むことで生まれた『変異体』とも言えるものなのだ。

旧約聖書では、世界で初めて創られた男性アダムの骨から女性イブが生み出されたと書かれているが、その実は真逆であり、男性は女性型から分化した存在だ。

これが『イブ原理』。

要するに、女性の身体にごてごてしたものがくつついたのが男性体、ということだ。

「つまり、女性体の方が男性体よりも創りやすいということですか」



そう言って、私の傍らに立つ小柄な少女は、興味深そうに目の前の『それ』を見つめた。

先日夜白家の一員となったばかりの綾瀬<sup>あやせ</sup> 夕映<sup>ゆえ</sup>だった。白衣を着込み、時折首を傾げながら、一心不乱に『それ』を見つめている。

私は頷き、指を動かした。目の前にある、手術台に乗っかっている女性体が微かに動いた。

事の発端は、3 - Aの自縛霊少女、相坂<sup>あいざか</sup> さよが、お兄ちゃんに肉体を所望したことだった。成りたてとはいえ、一応神であるお兄ちゃんと神獣である私や煌月、そして退魔師でもあるサクやマナ（両者とも陰陽道や神道術を習得している）には、彼女が見える。

そのため、たまにお喋りをしていたのだが、そのさよが突然お兄ちゃんに懇願したのだ。修学旅行の思い出を無節操にしゃべりまくる3 - A（さよの存在自体知らないのだから仕方がないが）の所為で我慢の限界が来たらしい。

お兄ちゃんもそれとなく提案していたのだが、当時のさよは彼女なりに悩んでいた。無理矢理肉体を与えたところで意味はないので、暫くはそのままにしていた、というわけだ。

それは、お兄ちゃんが『肉体をあげる対価として、夜白家に少々協力して欲しい』と提案したからだ。流石に傭兵一家に協力しろと

言われ、即答するほど彼女は淡白ではなかった。無理もない。人殺しにも協力することになるだろうから。

が、結局さよはその条件を飲んだ。

お兄ちゃんはさっそく学園に許可を取り、私に肉体の創造を『依頼』した。……いつまで経っても、こういうことは『命令』せずに頼むのがお兄ちゃんだ。私はお兄ちゃんの命令なら何でもするということに。

ところで、私には『万物創造』の能力があるのだが、これはそれほど楽ではない。文字通り『万物』を創造できるのだが、欠点がないわけではないのだ。

例えば、戦艦を創りたいと思うとしよう。

当然、戦艦の姿を思い浮かべる必要がある。が、外見だけ思い浮かべたところで、外見『だけ』の要するにハリボテが創造されるだけである。戦艦を動かすには、動力やら機関（核融合炉かディーゼルかなども考える必要がある）やらが必要だし、武装やその配置も具体的に想像する必要がある。内部構造も、また然りだ。

そのため、いくら私でも創造は、構造が複雑なモノであればあるほど時間がかかってしまう。それでも、長くても半日から2日くらいで創造できる。

簡単に創造するためには、例えば戦艦なら設計図・外観図やモデルが必要だ。詳細な設計図があれば、五万トンだろうが五〇〇〇万トンだろうが、創造は容易い。

生命体に限っても、同じことが言える。今回の場合、生前のさよの顔写真やデータなどがあるから楽なのだ。加えて、女性体の方が創造は簡単だったりする。

男性体を創造する場合、まず女性体をベースにしなければならぬからだ。手を抜いて細胞や器官が変になってしまつては目も当てられないので、創造中は集中していなければならぬ。流石の私も、これは精神的にくる。

おまけに、今回は『さよ』という魂を入れるだけの器 受容体レセプタとも言えるモノを創れば良いのでさらに楽だ。人間らしい自我や個性を持たせることは不可能ではないが、手間がかかるという点では間違いないからだ。

お兄ちゃんのことなら数千世紀は考えていられる私だが、流石に集中力にも限度がある。欠陥ミスがあつてはならない。だから、さよの肉体創造が簡単なのは正直喜ばしいことだ。

それでいて、『万物創造』にはもう1つの効果がある。それが、創造したものに様々な付加価値を加えることができるというものだ。この『付加価値』もまた、特に制限はない。

そこで私は、さよの肉体に『靈化』の付加価値を付けた。これにより、さよはいつでも靈体キテルに戻ることが可能となった。ついでに肉体の強度や俊敏性なども高めておく。役には立つだろう。

「……つとまあ、こんな感じかな？」

「おお、凄いです！ ホムンクルス、とでも言うのですか？」

私が汗を拭いながら言うと、ハンカチを渡してきた夕映が興奮したように言った。

「うーん、ちよつと違うよ、ホムンクルスってえのは錬金術の賜物だし、フラスコ内でしか生きられない。人工生命体というより、人工精霊とか人工小人とか言った方が良いシロモノだからねーえ。

アレ、生命創造系の術の中でははつきり言って駄作だよ。『神』や私たち『神獣』、一部の『妖』などは、自身の神力や妖力を切り離す形で『眷属』を創れる。眷属と神工生命体はまた別モノなんだけど、ただ単一目的のためだけに生み出された眷属の方が、自我こそないけどホムンクルスよりはよほどできが良いよ。

実際、ホムンクルスはあくまで生命の研究目的として創られたのがそもそもの始まりだから、『生きている標本』以上の価値なんてないからねえ」

「そういうものなんですか？」

「そういうものだよ。でも、パラケルススは大したものだよ。研究以外に使えないとはいえ、『奇跡を起こせる』数少ない人間だったからね。

『神』とは『奇跡を起こせるモノ』だから、パラケルススはそれなりに神に近かったんだ。創造神や『地球』総括上級神たちも焦っていたなあ。全くの予定外だったからねえ」

「やっぱり、生命の創造は『奇跡』なのですね」

「まあね。もつとも、神界では『眷属』創造を除き、生命創造ができるのは創造神クリエーターくらいだよ」

「輪廻さんは？」

「できるけど、私はトクベツなんだ」

「そうなんですか」

「そうだよ、おーい、さよー」

私が呼ぶと、壁をすり抜けてさよが入って来た。そして目をぱちくりさせ、自分の肉体をしげしげと眺める。

「す、凄いです！ まんま私じゃないですかー！」

「入っても良いよ。最初はぎこちないだろうけど、すぐ慣れるはずだから」

「有難うございます！」

「礼なら、お兄ちゃんに言ってよ」

私がそう返しても、さよはペコペコと頭を下げる。

結局、さよが新たな肉体を堪能することになるのは、来てから10分後のこととなった。



第24幕「一転、それは起こるべくして起こった偶然と運命」(後書き)

さよがサポート要員に加わりました。

彼女は仮契約はしません。あくまでサポート要員です。

\*パラケルスス……ホムンクルス製造に成功したとされる錬金術師

第25幕「空気、それは不必要なまでに必要で残酷な良薬」(前書き)

総合評価が700越え、有難うございます。

予想以上の評価に舞い上がりつつ、どんどん行きます。

文化祭に雨降るとか勘弁だし。



## 第25幕「空気、それは不必要なまでに必要で残酷な良薬」

麻帆良がある日本の裏側に、『パタゴニア』と呼ばれる場所がある。

南米大陸の南部、コロラド川以南の地域を指すが、一般的にはアルゼンチン南部やマゼラン海峡、フエゴ島、オルノス島などを指すことが多い。

要するに、南米大陸の逆三角形になっている南端部分のことだ。

南米と聞くと、熱帯雨林を思い浮かべる者が多いが、この辺りはまさに乾燥地帯。アンデスによって水分を含んだ偏西風が遮られているからだ。

気温も最大で二〇度程度。風は強く、『嵐の地』とも言われた。年間降水量は多く、気温は北海道並みなのに、大氷河が形成される理由はそれである。

人口密度は多くない。アルゼンチン共和国　スペイン語ではアルヘンティナとなるが、広大な面積に比べ、その人口は四〇〇〇万に満たない。

そしてその内、パタゴニアに住む者は三パーセントかそこらだ。チリの分を含めても、少ない。

良く言えば自然に充ち溢れている、悪く言えば人跡未踏の地だ。

共和国はもとより、連合王国イギリスやエスパニア王国などが入植を試みたが、ほとんど尽く失敗している。

言い換えれば、誰にも悟られずに引き籠もるには格好の場所だった。

「……………壮観だが、ちょっと寒いね。……………全く、何てえ気候だ」

そう言いながら、マナが手を擦り合わせる。

黒いジャケットにグレイ迷彩のスボン、厚手の手袋と赤い耳当てをつけている。大きなバックパックを背負い、そこからはコードが伸びて、通信機を兼ねる耳当てにぶら下げたある小型の戦闘補助ゴーグルに繋がっていた。そして両手にはロシア製のものをベースにカスタマイズした自動小銃を抱えている。

マナがロシア製をベースにした小銃を抱えているのは、ロシア製の銃器は、大雑把に作られているからだ。厚手の手袋をはめていても操作や分解が容易で、当然だが寒さにも強い。

「……………ヒート・コートウェア超保温防寒障壁のおかげで寒くないでしょう」

私がそう言つと、マナはこっちを振り返って微笑した。

ちなみに私もまた、マナと同じように黒いジャケットだが、同色のスラックスと肩掛け式のドラムバック、首から携帯端末をぶら下げていた。

そもそも私は、わざわざ障壁など展開せずとも暑さも寒さも苦にならない。

「気分的には、だよ。しかし、白く染まる大山脈を実際に眺めているのに、体感温度が初夏くらいなのは……………どうも妙だ」

「じゃあ、切ってあげようか？」

「遠慮させてもらつよ。……寒いのは苦手だからね」

マナは肩をすくめながら、周囲をぐるりと見渡した。

「……それにしても、だ。……本当にパタゴニアに、魔法世界を根城にしていた犯罪組織が逃亡しているのかい？ 見たところ、どこにも魔力を感じないが……」

「感じたところで、そいつが犯罪組織の者だつていう証拠もないよ。パタゴニアにだって魔法文化はあるんだから」

パタゴニアに逃亡した犯罪組織の幹部他数名の捕縛。それが、今回依頼された仕事である。

今、ここパタゴニアに来ているのは、私とマナ、そしてお兄ちゃん  
と煌月という珍しい組み合わせだった。サクヤ千雨、アキラは私  
用で、明日から合流予定である。

夕映は修行。夕映の修行は、配下神獣や眷属に任せているし、まだ  
彼女は初歩中の初歩の段階なのでどうにでもなる。

さよや千草に月詠などの補助戦力は、まだ準備中で実戦には出せないし、  
そもそも出すほど大事ではない。

「じゃあ、どうやって……捕まえるんだい？ 正直、捕縛系の任務は  
不得手なのだが……」

「簡単なこと。風漬しに探せばよい。共和国の方とかにもしっかり

頼んで封鎖線を張ってもらっているから、連中は逃げられない。これはただのキツネ狩りだよ」

まあ、私も天狐<sup>キツネ</sup>だけどね、とどうでも良いことを考える。それを聞いて、マナが小さく口笛を吹いた。

「面白そうだけど、長丁場になりそうだ。相棒<sup>サウ</sup>がいないのは痛いけど……」

が、すぐに顔を顰めた。マナの狙撃は、サクという接近戦のプロがいて初めて効果がある。もちろん単独でも行えるが、そうになると必然的に『待ち』の戦いとなる。狙撃手にとっては獲物を待ち、戦場で何週間も爪を磨<sup>と</sup>いでいることくらい普通だが、いくらなんでも範囲が広すぎるし、氷河地帯に逃げられでもすれば待ち伏せもできない。パタゴニアという地域だけで、日本列島より遙かに大きい。

「だからこそこの私だよ。今回の貴女<sup>マナ</sup>の相棒<sup>パートナー</sup>は私。どう？ 完全装備の山岳歩兵師団と普通歩兵師団、一〇〇〇〇個分より頼もしいですよ？」

「そこに戦略爆撃航空団一〇〇〇個と砲兵師団一〇〇〇個、ついでに機甲化師団一〇〇〇個プラスしても良いね。

全く、貴女1人で国連加盟国と連合・帝国全軍の兆倍の力があるからね。ただ、この辺りは貴重な自然遺産だし、氷河は国定自然公園で世界遺産だ。あまり暴れないでほしいところだ。……流石に、自然を殺したくないよ」

「そんなの指パッチン一つで再生できるけどね。……お兄ちゃんにも言われたけど。」

確かに私は、煌月のような無駄に周囲を壊さない戦い方は苦手だけどねーえ。……特に対軍戦闘ではねえ」

「……数万人を相手にして、周囲に全く被害を出さない煌月さんの方が異常だと思うが」

「煌月はスピードなら私以上だよ。攻撃力や防御力は、私の方が上だけどね……第一、尻尾一振りで世界を壊せる私に、『周囲を巻き込むな』ってえ方が無理だと思うんだよねーえ。」

個人的には、お兄ちゃん以外の誰が巻き込まれても構わないし」

「……せっかくだし、私は『ロス・グラシアレス』も見ておきたいのだが」

マナがどこから取り出した観光パンフレットをめくりながら、こつちを一瞥した。暢気なものだが、私も乗り気だ。

私は後ろから、マナが見ているパンフレットを覗き込んだ。マナの方が背が高いので、私は普通に見ることができ。

「ロス・グラシアレス  
氷河？ スペイン語でそのままの意味が付けられた国立公園だね」

「ああ、グリーンランドに次ぐ世界第三位の大氷河群だよ。ビルほどの高さもある氷の塊、一度は見てみたいものだよ」

「とっとと終わらせればいくらかも見れるよ。お兄ちゃんと肩組ん

でキスしながら歩きたいな」

「……同感だが、けっこうシユールな光景だね。……映画のラストシーンみたいじゃないか……主人公が死ぬ系の」

「もしお兄ちゃんがそんなことになったら、お兄ちゃんを生き返らせて海を沸騰させてやる」

「止めてくれ。JAMSTEC（海洋開発研究機構）が大パニックだ」

当たり障りのない会話をしつつ、私たちは森の中を歩いていた。別方面では、お兄ちゃんと煌月が行動中のはずだ。

そこらじゅうに監視網を敷き、眷属や機械を使って広いパタゴニアを監視する。単純で地味だが、一応、連中の行動パターン（過去データ）を頼りに、可能性が高いところからチェックしている。

周囲も嚴重に監視しているので、気付かずはち合わせ、などという間抜けなことにもならない。

「任務だから仕方がないけど、お兄ちゃんに苦勞させたくないなあ……」

私はポツリと呟いた。



第25幕「空気、それは不必要なまでに必要で残酷な良薬」(後書き)

パタゴニア編です。

あと2、3話は続くと思います。



第26幕「模倣、それは新たな光と闇 / Look . . . Purple World」

パタゴニア編、刹那&煌月サイドです。

「煌月は、『Uボート』って知ってるか？」

パタゴニアのとある森の中、夜白やしる 刹那せつなはそう言って、隣を歩く夜白しや 煌月くわげつを見つめた。

「ええ、存じております。ドイツの潜水艦のことですね」

煌月は、刹那にしか見せない笑みを浮かべながら それでもかなりわかりづらいのだが 刹那の質問に答えた。

事実である。元々は英米を始めとする連合軍が作った用語だが。Uボートとは、ドイツ語で『潜水艦』を意味するウンターゼーboot（Unterseeboot）の略称で、そのままドイツ潜水艦を意味する。2度の世界大戦で活躍したあまりにも有名な兵器だ。何千トンものの船を海の底に葬った。

「じゃあ、狼群戦術ウルフ・パッケは知ってるか？」

「Uボートの集団戦術ですね」

Uボートの主任務は通商破壊戦、つまり商船・輸送船舶狩りである。独国の仮想敵国は英国イギリスだったが、英国は島国であり、海上交通路シーレーンの途絶は死に繋がる。

つまり、英国を弱体化させるためには商船狩りが最も適していた。

そこでUボートは商船狩り、もつという兵站線叩きに従事した。が、英国とて唯指を咥えていたわけではない。船団を組み、護衛をエスコートつけて対応した。

これを攻撃するためにドイツUボート戦隊が確立したのが、ウルフ・パ狼群戦術である。

方法はいたって単純だ。まず、敵船団を発見したUボートが近隣のUボートを片っ端から呼び寄せる。そして、よってたかつて船団を包囲攻撃、殲滅する。大規模な時は二〇隻以上が集団攻撃を行った。文字通り、狼群のように集団で獲物の喉笛に噛み付くのだ。

一九四二年代程までは、通用した手法だ。当時の魚雷には誘導性能などついておらず、ついていたとしても高性能とは言い難かった。要するに、『下手な鉄砲でも数撃てば当たる』状態だった。もつとも護衛船団が空母を伴い、対潜兵器も発達してくるとUボート神話は崩壊し、近隣の海でさえおちおち出撃できなくなつた。

しかしそれでも、Uボートはドイツ海軍の看板であり続けた。たかが基準排水量一〇〇〇トンにも満たない小型艦が、大戦果をあげたのだ。コスト・パフォーマンス的な面からしても優れた兵器だと評価できよう。

もつとも、多くのUボートとその乗務員が沈んだのもまた事実ではあるが。

「俺たちは、まさにそれをやるつというわけだ」

そう言って、刹那はニヤリと笑った。

「成程」

いつものように、黒いスーツを着込んでいる煌月は、大きく頷いた。僅か四人。『狼群』というにはあまりにも少ないが、それでもそれを補って余りある戦力がある。さらに明日になればサクたちの増援も見込める。

そんな中、煌月は周囲を電波や空気中の水分を介して監視しながら、刹那を護ることを考えていた。

彼女にとって『世界』は刹那と家族だけであり、他の存在は風景のようなものでしかない。輪廻と違い、煌月は刹那と家族、刹那の知人を除いて記憶はおろか、認識すらしていなかった。刹那を妄信するあまり、彼女の脳がそうさせている。

煌月は輪廻ほど刹那への好意を全開にしないが、ただ心の奥底に秘めているだけである。彼女の刹那への想いは本物だった。

だからこそ、彼女にとって刹那の敵は、生かしてはおけない害虫ガイチュウであり、輪廻が敵を塵芥チリカ呼ばわりしているのに対し、煌月は敵を虫扱いしていた。憎み、惨殺すべき対象であった。

煌月は、輪廻には劣るとはいえ準最高位神獣の上位種である。創造神を遥かに凌ぐ力を持つ。しかしだからこそ、彼女は効率的な戦い方を望んだ。強大な力を持っているにも拘らず、あえて日本刀ソウ『蒼らい』

雷』や回転拳銃などを使用するのはそのためである。

より詳しく言うと、彼女は無駄な時間や破壊・エネルギーの消費をとかく嫌った。神力<sup>エナジイ</sup>などほぼ無限だというのに、消費量に拘るのは彼女の性格のためだろうか。

が、そんな煌月の戦闘スタイルにも例外はある。

「私の『鉄豪雨奏鳴曲』<sup>てつこうう そうなつ</sup>であぶり出しましょうか？」

すなわち、刹那が関わっている時である。

彼女にとって刹那は絶対であり、煩わせてはならない者だった。彼が早く平穩を手に入れるためなら、煌月は無駄な破壊や消費など度外視する。戦闘スタイルなど唯の信条であり、つまりは刹那より優先されるものではないのだから。

煌月の技、『鉄豪雨奏鳴曲』<sup>てつこうう そうなつ</sup>は彼女には珍しい広範囲攻撃技だった。いや、広範囲殲滅技と言った方が正確だろう。水と雷を司る彼女は、雨を自在に降らせることができる。この技は、その雨を硬化し、尚且つ激しい勢いで大量に降らせる技である。文字通りの意味で『銃弾の雨』となる。当然人体などバラバラに引き裂かれ、凄まじい豪<sup>ウヰ</sup>雨が過ぎ去った後は、何もかもが破壊されている跡が残るのみだ。

戦車はもちろん要塞も、この悪魔の雨には無力である。いや、跡が残っている分、彼女の殲滅技の中では生易しいものなのだが。

戦場跡が遥かにマシに見える光景を思い浮かべ、刹那は顔を顰めた。

「いや、それは止めておこう。美しい自然が戦場跡になるような真似は避けたい」

「承りました」

どうやら煌月と輪廻の戦闘時における思考回路は案外似ているらしい。彼女もまた、刹那が関係すればそれほど周囲に気を使わないようだ。

同じ頃、輪廻とマナも同じような話をしていると知れば、刹那が苦笑すること確かだろう。

「それよりも、何か見つけたか？」

「今のところは何も。ですが、何者かがいた形跡は数ヶ所確認しております。もつとも、これが『標的』<sup>ターゲット</sup>のものだという確証はありません。この辺りは現地住民もたまに來ますし、観光名所でもありますので」

「ふむ、人数は？」

「場所によって様々ですが、概ね5〜10人ほどだと。ちなみに人間ではないということはあり得ません」

「魔力痕跡は？」

「確認できておりません。もう少し、範囲を広げましょうか？」

「連中に悟られるという危険性リスクは？」

「ほぼ零パーセントと見て良いでしょう。もっとも、敵に高位神獣でも混じっていれば話は別ですが。それでも、少々違和感を覚える程度です」

「じゃあ、頼むよ」

「承りました」

煌月は恭しく一礼すると、再び作業に戻っていった。

第26幕「模倣、それは新たな光と闇 / Look . . . Purple World

次回は輪廻&マナサイドに戻ります。



第27幕「欠片、それは深海に眠る泡と毒のダンス」(前書き)

今回、輪廻が少し壊れます。というか狂気の欠片を見せます。

## 第27幕「欠片、それは深海に眠る泡と毒のダンス」

「依頼内容によると、犯罪組織『ワイルドビー』の逃亡幹部は、判明しているだけで28人。未確認の塵芥チリを入れるともっといるかもしれないねえ」

森の中、私は塵芥チリの頭を蹴り飛ばしながらペーパーをめくった。首が胴を離れ、茂みの向こうに吹き飛んでいった。

「……いきなり標的ターゲットをゴミ扱いかい？」

「わかっているくせに。お兄ちゃんを煩わせるモノ、全てが塵芥チリだよ」

パタゴニアでの“キツネ狩り”を始めてから半日ほど。微かに魔力反応を捉えた私たちは、そのまま襲撃をかけて手始めに三人を始末した。

コレでも自重している方だ。本来なら死ぬまでいたぶりなぶるのを数兆回はやり、全てをぐちゃぐちゃにしてやりたいところだが、今回はとつとと終わらしてお兄ちゃんに楽をさせたいので数瞬で終わらせた。

もつとも、腕を落として顔を殴って蹴りを入れて体をスタスタに引き裂いて足を捻じ切って臓物を壊して尻尾で蓮撃を浴びせて死ぬま

で血を吐かせる行為を、数瞬で八〇〇〇回程繰り返したただけだが、瞬きしているくらいの時間でも、この程度のことは簡単だ。

私は蟲惑的な笑みを浮かべながら、頬にべっとりと付いた血を拭いた。

そのまま後ろを見ると、迷彩柄の鉄帽ヘルメットを浅くかぶったマナが自動小銃をくるくる回しながら呆れたようにため息をついた。

「やりすぎだよ。……あれはもう、立派な拷問だ」

「お兄ちゃんを愛しているからこそその行為だよ」

私がそう言うと、マナはピクリと片眉をあげた。濃厚な殺気が辺りを満たすが、私にとってはそよ風同然だ。闇色の髪を弄びながら、マナの反応を待つ。

「……聞き捨てならないな。……まるで否定している私が、刹那さんを愛していないかのような言い方に、聞こえたか？」

常人が見たら失神するほどの圧力を軽く受け流す。マナは腰から拳銃を抜き、銃口をこちらに向けて来た。確か、オーストリア製の強化プラスチックボディが自慢の拳銃だ。

「いや、マナの愛を否定したわけじゃあないよ」

私はそう言って肩をすくめる。

マナとももう、長い付き合いになる。彼女はお兄ちゃんを愛しているし、私同様、どっぷりと依存している。彼女にとってお兄ちゃんへの愛の否定は、アイデンティティの否定も同義だろう。

つまり、マナは私にそっくりだ。煌月サクモアキラも皆、お兄ちゃんなしでは生きられないし、そもそも存在している必要性が全くない。

マナのパーソナリティの確立には、お兄ちゃんや私、煌月が一役も二役も買っているのだが、つまりは皮肉屋で聡明、現実主義者リアリストなところはそっくりそのままお兄ちゃんなのだが、『狂気』は煌月のそれだ。

つまり 奥の方で蠢いている、無慈悲で物静かな怪物。

私は違う。怒りでかえって冷静になるのは軽い時だけだ。ホントウに怒ると私は 何もかもむき出しにする。怒りも、狂気も、欲望も。

以前、お兄ちゃんが人体実験施設に放り込まれたことがあった。アノ時は

「輪廻さん、刹那さんも言っていたじゃないか。……あの人は優しい人だ。敵にさえもその恩恵を与えてしまう。あの人は 誰かを拷問することは、好まない」

「だから？」

私は小首を傾げ、拳銃を仕舞ったマナを見つめ返す。

「私はお兄ちゃんに文句は言わないけど……。  
結局は憎いんだよねえ、お兄ちゃんの優しさに縋りついて、醜く生きようとしている奴らがさーあ。  
こうみえても、私にだって天狐としてのプライドくらいならあるんだよ……」

「プライド？」

「私はね、完璧主義者なんだよ」

そう言つて、私は髪を掻き上げながら尻尾を伸ばした。遠くの方で悲鳴が聞こえ、何かが薙ぎ倒される音や、肉を潰す音が響く。お兄ちゃんの敵をいたぶる感触が伝わって来て、私の顔は自然とほころぶ。

「お兄ちゃんの敵が生きているなんて認めない。苦しまずに死ぬのだって認めない。お兄ちゃんが手を差し伸べる事だって認めないし、お兄ちゃんに触れることも認めない」

続けて残る尻尾の先端に炎を灯し、大きく振った。強烈な突風と

もに蒼炎が舞い、四方八方に飛び散った。それぞれ旋回して、獲物を見つけた炎から高速で飛び去っていく。

『狐火・殲紅華緋』

この技は、精神<sup>ココロ</sup>だけを焼き尽くす炎だ。獲物の脳の中に入り込み、少しづつ油<sup>いたみ</sup>を搾り取るように、少しづつ焼いていく。獲物は絶叫し、悶え苦しむ。そして焼き尽くすと、焼いた記憶や苦痛を再現させる。壊れたカセットテープのように。何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も。発狂して痛みが感じなくなったら、それすらも無理矢理にでも『苦痛』に変える。

要は、ジワジワと、ココロだけをいたぶる炎だ。

「ッ！ それは……」

この炎の詳細を知っているマナは、見る見るうちに顔の色を失っていった。

「……輪廻さん。……また、刹那さんの命令無視かい……？」

そのマナの指摘に、私は笑顔で頷いた。

お兄ちゃんの命令は絶対服従。が、これには何の規制もかかっていない。別にお兄ちゃんの命令を遵守しないと死ぬわけでもないし、私には自我がないわけでもない。そもそも力ではお兄ちゃんの方が下なのだ。私がお兄ちゃんを意のままにすることは（理論的には）いくらでもできるが、逆は不可能だ。

何が言いたいのかというところ　私がお兄ちゃんの命令に従っているのは、単に私がそうしたいから従っているに過ぎない。

お兄ちゃんは至高の存在だが、完璧ではない。誰にだって、失敗はあるものだ。時にはお兄ちゃんも、判断を誤ることがある　その性格故に。

そんな時、私はお兄ちゃんの命令を待たずに、或いは無視してでも動く。お兄ちゃんに逆らうことは私にとっては身を裂かれるような苦痛を伴う行為だが、私にも、信念というものがあるわけだ。

お兄ちゃんの敵は　お兄ちゃんにとって必要なモノは全て消す。煌月だってそうするだろう。

寧ろ、煌月の方が私よりアグレッシヴなのだから。実際煌月は、お兄ちゃんの意味に反して獲物を殺すことも多い。

「大丈夫だよ、壊すのはココロだけじゃあない……全てぶち壊す。ココロもカラダも、お兄ちゃんの敵は全て殺す」

そのためなら、お兄ちゃんの優しさすら束縛する。不必要な塵芥にまで、その優しさが向かないように。

「けれど……カッターイなあ……」

私は大きく伸びをし、塵芥掃除チリに向かわなかった尻尾のうち1本を地面に置いて、それをクッション代わりに飛び乗った。そしてふかふかの尻尾のクッションの上に寝転んだ。

「一撃で全て捕まえられれば楽なのに……お兄ちゃんに無駄な時間の浪費をさせる自然なんていらなくてえのに……まあ、お兄ちゃんの命令を同時に2つも破りたくないしなあ……」

「……本当に、貴女は恐ろしいよ……私だって、刹那さんの言うことには従うというのに……そうしないと、恐ろしいのに……刹那さんに尽くすことが、私“たち”の存在意義だというのに……」

マナはそう言って首を振った。顔は汗ばみ、目は虚ろになっている。

彼女にとっては いや、彼女『たち』はそうだろう。特に、マナとサクは。お兄ちゃんの命令に逆らうことは、自身のアイデンティの否定に他ならないからだ。

お兄ちゃんに尽くし、お兄ちゃんのために生きることが、彼女たちの存在意義レゾン・デートルなのだから。

「お兄ちゃんの命令に従うだけが、私の仕事じゃあないからね」



私は微笑したが、直後の塵芥チリカの絶叫を聞き、顔を顰めた。

「……声をさせないように顎を砕いておこう、私の耳を震わしているのは、お兄ちゃんのキレイな声だけだし……」

そう言って、私は尻尾を動かした。

第27幕「欠片、それは深海に眠る泡と毒のダンス」（後書き）

輪廻は愛と狂気でできています。でも壊れてません。神獣の立場からすれば当然なのです。

輪廻が壊れるとすれば、刹那が殺された時くらいです。

第28幕「夕陽、それは壊れた想いのブレイクダンス／Really・・・P」

わかりづらかったと思いますが、パタゴニア編は前回で終了です。

パタゴニア編のテーマは輪廻の狂気と煌月の心境です。輪廻も煌月も、時には刹那の命令を無視することもあるということに留意してください。くれれば幸いです。

今回は原作で御馴染、麻帆良祭の布石です。

この後はもう暫くオリ展開が続きます。

超はかなり原作から変えます。正確も設定も能力も変えます。多分面影も残りません。そこは御了承下さい。シナリオ上、この方が都合が良いんですね……。

超<sup>チャオ</sup> 鈴音<sup>リンシエン</sup>はその日、麻帆良学園女子中等部のカウンセリング室にいた。

本来ならこの部屋に入る生徒は一樣に暗い顔、或いは努めて内心を隠そうとしている表情をする者が大半だが、最近はそうでもなくなっていた。

その理由は、3-A担任である夜白<sup>ヤク</sup> 刹那<sup>せつな</sup>が、時たまここで生徒を迎えることになったからだ。本来なら女子校のカウンセラーは女性が就任するのが通例であろうが、刹那のあまりの人気ぶりが災いした。

いつも彼が生徒から相談を受ける場合、生徒は教室か職員室、さもなくば廊下などで相談を持ちかける。それが授業についての質問などならそれで済むのだが、プライベートのこととなるとそうはいかない。

当たり前の話だが、学校というコミュニティにおいてはプライベートなど無きに等しい。

教室の隅でも、プライベートの質問を誰にも聞かれずに済む可能性はほとんど無い。それこそ、無人の場所でもない限り。

そこで刹那は、学園長よりカウンセリング室の使用許可を取った。実はこの部屋、ほとんど使われていなかったのだ。しかしカウンセリング室はその使用目的上、それなりに防音対策がされている。無駄とも呼べるほど各々の設備が優れている麻帆良なだけがあり、超が寛いでいるカウンセリング室もまた、無駄に防音対策が優れて

いた。

そして刹那が暇な時間にここにいることを生徒たちが知れば、もちろん相談にも来るのだが、単に雑談をしに来ることもある。そのことを刹那は咎めなかった。単に気楽な話をするだけでも、双方のストレス発散や交友関係構築には多大な進展を見せるからだ。

ところで超がここで湯呑みから立ち上る湯気を眺めている理由だが、ある意味ではカウンセリング室の『本来の使用目的』に則った理由である。つまりは『相談』に来たわけだ。

今日は日曜日だが、基本的に校舎が無人となることはない。部活動にきている生徒もいれば、刻々と近付いている文化祭こと『麻帆良祭』に向けての準備をしている者もいる。そして当然の如く教員もいる。

「すまん、待たせたか？」

「全然構わないネ、刹那先生」

ドアが開いて刹那が入って来た。それを見て、超は姿勢を正すと笑顔でテーブルに置いてあった湯呑みを差し出した。

刹那は腰を落とし、礼を言ってからそれを受け取り一服する。

「こちらこそ申し訳ないネ、教師を日曜に呼び出すなんてしたくなかったケド、致し方なかったネ」

超は柔らかな笑みを浮かべた。それは彼女と初対面の人間でも、心からの笑みだと断言できるような優しく、深い笑みだった。演技ではとても出せないし、当然社交儀礼の域を超えている。

刹那は戸惑ったように頬を掻いた。超は時折、刹那にこのような視線を浴びせるようなことがあった。それは憧れや信頼を伴うが、それ以上にもっと情の籠った、そう、『家族』に向けるような視線だった。が、当の刹那には全く覚えがない。だからこそ、刹那は困惑していた。

「それで、一体どうしたんだ？」

刹那が催促するような口調を超に向ける。全く身に覚えのない他人から、家族に向けられるような視線で見られることはあまり心地良い事ではない。

「単刀直入に言うヨ、刹那先生　いや、『主君』<sup>ロード</sup>に力を貸していただきたいのです」

それに対し、超は訛り口調を突然変えて答えた。流暢な標準日本語が刹那の耳を震わした。

超という名の通り、彼女は戸籍上では中国出身のはずだが。  
が、それ以前に刹那は違和感を覚えた。

超が自身を『主君』<sup>ロード</sup>と呼んだこと、そして超の態度が原因だった。先程とは打って変わって、その雰囲気には優しさはほとんどない。真剣さと高貴さを感じさせ、濃厚ではないが高潔な覇気を纏った姿は普段の『超鈴音』からは微塵も感じられない。

いや、その表現には語弊がある。今、この瞬間だけ『超鈴音』というパーソナリティは『死んでいる』と言った方が正確だろうと刹那は見当付けた。

端的に言えば、今自分の目の前にいる者は『超鈴音』ではない。

「内容と理由、そして君の正体を話してもらいたい」

刹那はゆっくりと答えた。当然、普段生徒に向ける顔と声色ではない。

「私は未来からやって来た者です。厳密に言うと、『此处』<sup>わたくし</sup>と同列時間軸上の地球系日系火星国家から参りました。『超鈴音』は偽名ですし、出身国も中国ではありません。そもそも私の時代では『中国人』という概念自体がありません。

国家体系は大きく変わっていますし、混血が進み、私のように黄色人種<sup>ロイド</sup>の特徴を色濃く残す者自体が稀です。どちらかというと『地球人』と言った方が正しいでしょう……『火星』という概念もありません。地球人と特に違いはありませんから」

そこまで言うと、超は一度大きく息を吐いた。

「私の本当の名前は夜白<sup>やしる</sup>慧<sup>すれい</sup>鈴……貴方様の娘ですよ。正式には、貴方様が生み出した……神工生命体です。といつてもイチから生み出されたモノではなく、元『人間』だった私を主君<sup>ロード</sup>が少々手を加えていただいたのですが」

「は……?」

あまりのことに、刹那は珍しく呆けた表情を見せた。それを見て、超は軽く吹き出した。

「フフツツ、主君<sup>ロード</sup>のそんな顔を見ただけで、1000年を超える時間旅行は無駄ではありませんでしたね、フフツツ!……これを聞いたら、黄染<sup>きよめ</sup>に香南<sup>かなん</sup>とか『あの人たち』、悔しがるだろうなあ!」

そう言つて必死に笑いをこらえている超を軽く睨み、刹那はバツが悪そうな顔をして頭を掻いた。

「……で、目的は?」

「はい」

態度をガラリと変え、超は真剣な表情を浮かべた。無駄に公私がはつきりしている少女だ。あらかじめそうデフォルトされているのか



もしれない。

「貴方様は神です。今はまだ神力を十分使いこなせていませんが、そう遠くない未来には『創造』すら可能となります。」

貴方様はテストケースとしてこの『世界』を預かり、世界を管理…  
…というより不備を是正するために私『たち』を生み出しました」

「え？俺は君のような生命体を幾つも生み出したのか？」

「ええ。ああ、誤解を招いてしまったようですが、私たち単体にはそれほど力はありません。実力的には『特に制限のない上級神』程です。神ではないので『神眼』もありませんし、時間移動も私の固有技能です。ですので一つの『世界』を管理するだけでも、私のような存在が数人は必要です。」

輪廻さんやサク先輩たちも協力しているとはいえ、本来なら『世界』一つにつき、下級神や中級神が何十人も必要ですからね。

その証拠に、これを」

超はそう言うと、刹那にしか分からない程微量な神力を発した。

刹那は唸った。

それは彼の神力と全く同じだった。神力の質は永久不変。指紋のようなもので、完全に真似ることは創造と同じくらい難しい。

それ以前に『制限のかかっていない上級神』が十分強大な力だということに、当の超 いや、慧鈴は気付いているのだろうか。

本来なら下級神を除いた神は、創造神から色々と『枷』がはめられる。身勝手な行動や謀反を防ぐためだ。能力は抑えられている上に、特定の条件でしか発動できない者が多い。特に戦闘用の能力は、枷

云々の前に取り上げられている。よほどの緊急時でもない限り使えない。

「私の場合、創造目的は、『現地生命体のテストケースと時間跳躍による広次元世界監視』です。これはつまり、私の役目もそれであるということなのです。

いつものように世界の監視を続けていた私は、この時代の今年の6月22日　つまり麻帆良祭最終日ですが　に予期せぬ異常事態の発生を感知しました。その修復と排除のためにやって来たのです」

「予期せぬ異常事態？　つまりは、未来を変えるということか」

「ええ。ここで異常事態が起こる未来が選択されてしまうとそれが所謂『正史』となってしまう、未来がガラリと変わってしまいます。そうになると最悪、タイム・パラドックスによって私は消滅してしまいます」

タイム・パラドックスは所謂歴史干渉の影響というものだ。例えば、過去に戻って自分の父親を殺せば自分も死ぬというやつである。

歴史はその時代の人間などが創るモノで、人間の選択など必ずしもそうなるとは限らない。所謂『並行世界』というモノは無数に存在する。本来ならそれは完全に別世界だから、たとえ並行世界が消滅しても、周りが巻き込まれることはあり得ないのだが、稀に微妙に互いが干渉しあい、エラーが発生することもある。

神の端くれである刹那でも、それくらいは知っていた。

「ところが、肝心の異常事態がどういったものかわかりませんし、ここで『私が』バカスカ『神力』を撃ちまくるわけにもまいりません……『本来ならこの時代にはいない』私が干渉しすぎると、此処自体が『正史』ではなくなってしまうので……そんなことになれば結局、『正史』の是正は叶いません」

大仰に身振り手振りで説明する超。どうやらこちらが素のようだ。本来は、もっと明るくて仕事トークなど似合わない性格なのだろう。自分もよほどのモノ好きらしい。ここまで人間臭い神工生命体もありないだろう。

「まあそれでも、本来なら少し神力を使えば是正できるモノが大半ですが、これ程大げさなのは初めてです。となると、現地の協力が不可欠なのですが……」

「……そこで俺か」

「イエス・マイロード。貴方様やこの時代の輪廻さん、先輩方の協力がないと難しいです。私には『知識』はありますから、ロボット兵器くらいなら大量生産できますが……」

「……わかった、非力ながら、力を貸そう」

刹那は大きく頷いた。そして、超の手を取る。

「……ッ!?」

超の顔が朱に染まったことに、当の刹那は気付いていなかった。

帰り道、超は覚束ぬ足取りでふらふらと歩いていた。

「フフフフフ……フフフフフ……」

それはいつも通りの彼女『超鈴音』の独特の訛り口調だったが、その瞳は妙に輝き、頬は興奮に紅く彩られている。

「フフフフフフフ……まさか、主君ロードの近辺で異常事態エラーが起こるなんて思ってもみないチャンスだヨ……長期出張は嫌だったけど、主君ロードの傍にいられるなら無問題ネ……」

超は誰も歩いていない夕焼け雲が映える道を歩きながら笑う。輝いていた瞳は、次第にまるで曇天のようにどんよりと濁っていった。悪意など欠片もないが、多分目にした者は脊髄が凍りついたように震え上がるだろう。

「主君ロードの『平穩』を奪うことでしか異常事態エラーに対処できない自分の

無力さに憤死しかけたが、こうなったらとことん主君ロトに寄り添ってやるネ……そしていつか、主君ロトに逆らうモノ全てを根本から消し去ってやるネ！私はそのために、時間跳躍の能力をくれる様に懇願したのだから……」

空気を凍てつかせるような形相で、超鈴音、いや夜白慧鈴はくっくと笑った。

「今のうちに主君ロトに私の想いをアピールすれば、黄染や香南、そしてあの小生意気な硯璃すずいりとかにも大きくリードできるネ！『娘達ドクターズ』の中で一番になるのは私ヨ、絶対に譲らないネ！……フフフフフフフフ……」

1人の少女の笑いが、妖しげに響き渡った。

第28幕「夕陽、それは壊れた想いのブレイクダンス／Really・・・P」

すみません。

ですが超をこつというキャラにするのは、投稿前の初期段階から決まっております。

他の『娘』もいつかは登場させます。

#### 設定資料4（前書き）

投稿開始から早1ヶ月……お気に入りも300突破しましたし、感謝の極みです。

感想や質問、ネタは随時募集しております。

## 設定資料 4

綾瀬 あやせ 夕映 ゆえ

原作との変更点：

刹那の影響を色濃く受けているが、刹那に恋心は持つておらずあくまで尊敬の念で彼を見ている。が、刹那のことは深く理解しておりそれが恋心となる可能性は高い（28幕時点）。千雨と同じく皮肉屋で現実主義者、尚且つクールでものぐさな性格。

夜白家の一員だがあくまで補助戦力であり、情報収集や参謀役として働くことが多い。さらに戦闘も憑依体ベルツナで参加することが多い。

原作に比べるとかなりドライになっており、ともすれば冷酷ともとれる。が、仲間や親友を見捨てることはない。同じ補助戦力バックスタッフである千草や月詠とも仲が良い。

一般的な魔法使いの思想体系を嫌っており、他勢力の魔法使いはあまり信用していない。

戦闘能力：

実力的はサク達より少し下、準最強レベル（千雨といい勝負）。西洋魔術を扱えるが、アーティファクトが万能型のためにもっぱらアーティファクトで戦う。身体能力もそこそこ高く、並の敵なら体術であしらえる。また、特に組む相手はおらず、かといって単体で動くことも少ない。要するに、誰とでもコンビを組める万能タイプ。

また研究・開発熱心で、輪廻と共同で作ったオリジナル魔具を使用する。

『憑依体ベルツナ』

夕映と瓜二つのアンドロイド。夕映自身の精神を文字通り『憑依』させることで動かせる。意のままに動かせる上に様々な武装を搭載しており、戦闘能力は高い。夕映自慢の魔具だが燃費が悪く、最大30分の起動がやっと。なお、破壊されると自動で精神が夕映本体に戻る。特にリスクはない。



『ドラ・カクテル』  
『火炎瓶』

夕映が好んで使用するオリジナル魔具。火炎瓶だが、放たれた炎は魔力が供給された分だけ燃え続け、尚且つ使用者（夕映）が自在に操れる。おまけに温度も普通の炎の比ではない。

アーティファクト：『ボイタブル・アクティヴアーマー携帯用複合力場装甲』

黒色のスーツケースで、これを開けると発動する。要するに複数の平面状六角形力場を自在に組み合わせさせて強固な楯を形成することが出来る。展開範囲に制限は無く、数も夕映の魔力が切れない限りいくらでも張れる。エネルギーを跳ね返すのではなく、自動で装甲を傾斜・変形させて方向をベクトル変化させる仕組み。また、この装甲を投擲したりすれば攻撃手段にもなる。ちなみに装甲の色は薄いピンク。

サンレイ

性別：女

種族：飛龍の突然変異

年齢：不明

容姿：身長150センチ前後。溶岩のようなダークレッドの髪をボブにし、大きくぱつちりした瞳は燃えるように紅い。肌は東洋系。背中に2つの眼も鼻も耳も口もない、同色の髪と顔だけの小さい頭をくつつけている。正確には、小さい頭2つを、首の後ろ辺りからぶら下げている。制服は大抵麻帆良学園女子中等部の制服。本来の姿は三つ首の飛龍。

性格：自由気まま・軽度のバトルジャンキー

詳細：千雨の使い魔。炎を自在に操ることができ、体術にも優れている。力は並の古龍を凌ぐが、神獣で言う和高位の下くらいのランくらい。

夜白 慧鈴（超 鈴音）  
やしろう すれい ちゃお リンシエン

原作との変更点：

わけあって生き倒れていたところを未来の刹那に拾われ、神工生命体『娘達』の一員となる。仕事モードは少々仰々しく喋るが、プライベートでは明るく気楽な性格。

環境適性のテストケースと時間跳躍による広次元世界監視が主な仕事。

今作では、あくまで歴史の変換を『止める』側となって夜白家に協力を依頼する。

独占欲、というか功名心が強く、『娘達』の中で『刹那の一番』を狙っている。命の恩人ということもあり、刹那への依存度も高い。

また、『人間』をベースに創られた唯一の『娘達』。ちなみに誕生してから8番目の『娘達』。実年齢はすでに50を超えている。

戦闘能力：

あくまで調査・監視が本来の任務のため戦闘は本分ではないが、並の神なら容易く平服させる程の神力を持つ。が、あくまでこの時代（28幕頃）に来ている間は碌に力は使えない。が、格闘術に秀でている上に頭脳は『娘達』の中でもピカイチのため、自作した口ボツト兵器などを使用する。

『時間跳躍』

慧鈴の固有技能で時間移動が可能。時間移動自体に制限はないが、移動した先には様々な制限がかかる。

『歴史是正』

異常な歴史を修復する能力。軽いバグならこれを発動するだけで修復できるが、大規模なエラーとなると直接赴いてエラーを回復させ

なくてはならない。

『ドクターズ  
娘達』

正式に『世界』管理を任された未来の刹那が助手や補佐役、或いは代行役として生み出した神工生命体たちの通称で、全員が女性。『夜白』性が与えられている。ちなみに全員が女性体なのは、未来の輪廻たちが『刹那以外の男と仲良くしたくない』と行って反対した（輪廻たちは刹那を好きになる女性が増えることは特に気にしていない）ためである。

普通の神工生命体と違って能力に特に制限がなく、刹那に服従も強いられていない。そのため、眷属とは別モノ。

またすっかりとした自我を持ち、しっかりと成長するように設定されている。唯一慧鈴だけは人間がベースとなっており、他は全て刹那がイチから創造した。

全員刹那に好意を抱いており、たまに（刹那をめぐって）喧嘩もするらしいが基本的には仲が良い。

それぞれ担当している仕事が違っており、他『世界』では下級神や中級神、一部の上級神たちがしていることを行っている。担当している任務によつて各人が能力を設定されているため能力や実力はバラバラだが、少なくとも並の上級神よりは強い。制限がないためである。

ちなみに人数は慧鈴がやって来た未来の時点で28人らしい。ちなみに本来なら『世界』一つに80人は神が就くので、これでもかなり少ない方。

また、普段は全員がはなだ縹色を基調とした詰襟の軍服風コスチュームを着込んでいる。

全員身体年齢は10代前半から20歳ほど。

現在(28幕時点)判明している『娘達』ドクターズ

夜白<sup>やしろ</sup> 慧鈴<sup>すれい</sup>

8番目(8女)。現在超鈴音という偽名で過去の麻帆良学園に在学中。

夜白<sup>やしろ</sup> 黄染<sup>きぞめ</sup>

5番目(5女)。容姿・能力ともに不明。

夜白<sup>やしろ</sup> 香南<sup>かなん</sup>

14番目(14女)。容姿・能力ともに不明。

夜白<sup>やしろ</sup> 硯璃<sup>すずり</sup>

1番目(長女)。容姿・能力ともに不明。

## 設定資料4（後書き）

慧鈴（麻帆良在学中は超と表記します）が使用するロボット兵器については、本編登場後に記載します。

また、『ドクターズ娘達』の連中も登場した者から再び資料設定を書きます。

\*8は中国では縁起の良い数字。そのため超こと慧鈴は8番目にしました。

## お知らせ(という名の報告とアイデア募集)

始めまして、皐月二八という者です。

皆様方の応援や御指摘もあって、本小説の投稿から1カ月でここまで書くことができました。大感謝です。本当に有難うございます。

夕映のアーティファクトについて意見を下さった方、紆余曲折でこうなりました。御意見有難うございます。

この後もしつかり完結までもっていきたいと考えておりますので、これからもよろしくお願いします。

さて、突然ですが、28幕から『娘達』<sup>ドクターズ</sup>を登場させました。詳しい設定は設定資料4を御覧いただければ大体分かると思います。

流石に本小説で28人だすのは難しいのですが、番外編や狐と兄シリーズの別作品、次回作などには積極的に登場させていくつもりです。

そこでせっかく考えたので、皆様方の御意見を多いに反映させたいと考えております。『こういうキャラが良い』とか、『こんな奴はどうだ』とかいう方は、どんどん御意見お願いします。

よほどこちらの実力で不可能ではない限りは、或いは特別な事情がない限りは採用していくつもりです。

それでは、これからもよろしくお願いします。感想や質問お待ちしております。



第29幕「水面、それは波紋と透明な視線 / One . . . Stale Bask

今回も超がメインです。彼女の活躍も御注目ください。



麻帆良学園都市のとある一画に、とある杉の木がある。その近くを、一人の少女が歩いていた。

葉加瀬<sup>はかせ</sup> 聡美<sup>さとみ</sup>。中学生でありながら、自他共に認めるマッドサイエントティストである。彼女は杉の麓につくと、幹に触れて何やら呟いた。

すると葉加瀬の身体は光に包まれ、彼女は転移した。

転移先は、まさに『研究室<sup>ラボ</sup>』という言葉をそのまま具現化したような場所だった。運動場ほどのスペースのほとんどは機械やディスプレイ・計器に埋め尽くされ、生活感など皆無に等しい。壁はその6割は碁盤のように区切られたディスプレイが占めており、常に様々な情報を出力していて、一見オーロラのように輝いている。それらの機械が、正常に動いている証であろう。

葉加瀬は無造作に長方形の機械の上に乗せてあった、あまりにもこの場に似合わないレトロなコーヒー・メーカーを持ち上げ、同じように置いてあったカップに茶褐色の液体を注ぎ込んだ。昇り立つ湯気を眺め、一口飲む。

「……………じっつ」

独特の苦みが口の中に広がり、葉加瀬は顔を顰める。彼女にとってブラック・コーヒーは、『気付け薬』と同義語らしい。

彼女は頭を振り、床に落ちていた白衣を着て奥へと向かった。

そこには超<sup>チャオ</sup>リンシエン<sup>リンシエン</sup> 鈴音という偽名を使い、『現在』にきている少女<sup>やしろうすれい</sup> 夜白<sup>やしろ</sup>慧<sup>すれい</sup>鈴<sup>れい</sup>がいた。

彼女はデイスプレーから目を離して立ち上がった。

その服装を見て、葉加瀬は一瞬だが見惚れてしまう。

超が着ている服は、<sup>ライトブルー</sup>縹色を基調とした詰襟の服だった。軍服のようにも見えるが、所謂戦闘服とは別の、実戦向きではない儀礼用の正装の方だ。階級章はないが、左胸には紋章のようなマークと金色のローマ数字の8が刺繍されている。さらに銀色のバッジのようなモノも付いており、そこからも宝石のような勲章のようなものがごてごてとくっついている。スラリとした上と同じく縹色のスラックスに、磨きぬかれたブーツ。気品さはあるが、御世辞にも動きやすそうにはみえない。もっとも、当の本人は全く気にしていないのだが。超がこれを着込む時は、この『空間』 要は空間を歪曲させて別の空間を創るといふモノらしい。さぞかし葉加瀬の探究心を大いにくすぐったものに違いあるまい にいる時だけ、それも所謂『本気』の時だけだ。

超が言うには、このコスチュームは『娘達』<sup>ドクターズ</sup>の2番目（次女）が突然考えたらしい。それも、『チームつぼくコスチューム作ろう』という何とも安易な理由でだ。最初は遊びで着ていたが、『娘達』<sup>ドクターズ</sup>が増えていくにつれ、最初からこれを着込んでいる者も増えて何時の間にもやら正装になったそうだ。

「来たかイ、ハカセ。昨日はしっかり刹那先生と話をつけてきたヨ、協力してくれるそうネ」

「そうですね、それは重畳です」

葉加瀬は安堵の表情を見せると、超を見上げ　　葉加瀬は超より背  
が低いので必然的にこうなる　　微笑んだ。

現在、この2人は協力体制を結んでいる。

超は狂い始めた歴史の修正のため、密かに動いていた。が、刹那  
ちを抜きにしても現地協力者は必要だ。しかし、神や神獣でもない  
ものにそう容易く未来のことや自身の正体を話してもデメリットに  
しかならない。

最初は学園長を考えたのだが、やはりリスクが大きい。そこで超が  
目つけたのが葉加瀬聡美だった。  
善も悪も関係ない、ただ己の探究心のために行動するこの若き研究  
者に、超は純粹に興味を持った。

超の本名、夜白慧鈴だが、これも未来の刹那から貰った名前だ。本  
当の名前はもう捨てている。科学を呪い、絶望した日から。

が、『神力』という新たなエナジイを手に入れた彼女は、再び希望  
を見出した。それが、科学と神力の融合だった。超は研究者でもあ  
ったのだから。

その挑戦には、この時代の科学も大いに役立つ。むしろ過渡期にあ  
る『今』の科学の方が魔法とかと馴染み易いのではないか。そう考  
えた超は、葉加瀬に技術提供の代償として協力を依頼した。

葉加瀬は非科学的な事を嫌う。が、魔法や神力は、いづらか科学的

解明が可能なのだ。このマッドサイエンティストは、すぐにその案に飛びついた。

超はすでに最低限のことは葉加瀬に説明している。彼女自身が神工生命体『娘達』<sup>ドクターズ</sup>であることも含めてだ。そして他愛もない話を繰り返すうち、2人は真の意味でも親友となっていた。

超自身困惑していた。刹那や家族たち、同僚を除いて仲間意識など持ったことがなかったし、彼女自身、それを拒んでいた。

一方葉加瀬も、未来の世界を司る『神』という馬鹿げた話を聞いて、面白く感じている自分に驚いていた。

「がんばってる？」

そんな声を聞いて葉加瀬が振り向くと、闇色の長髪を揺らしながら夜白<sup>やししろ</sup> 輪廻<sup>りんね</sup>がひよっこりと顔を出した。そう、顔だけ出した。

ポカンとしている葉加瀬を放置し、輪廻はズルリと全身を出して辺りを見渡した。

「へーえ、結構凄いだねえ」

「もちろんヨ、貴女の『空間』の研究区画を参考に組み立ててあるからネ」

超はそう言つて輪廻に手を振る。

輪廻はそれに笑顔で返すとまじまじと超を見た。

「お兄ちゃんから聞いて驚いたけど、どうやって神力を隠していたの？今改めて貴女を嗅げば、お兄ちゃんの神力の香りがするけれど……」

「行つた時代で毎度毎度『眷属』とか術師に目を付けられるのはたまらないからネ、神力を隠す機能にも拘っているヨ……刹那さんの自信作で、流石の貴女も無理のようだネ」

「うーん、煌月もわかつてなかつたしねえ、これは凄いなあ……そうそう、ロボット兵器の方はどんな感じ？」

「それは凄いですよ、ほら……」

復活した葉加瀬がコンソールに向かって何やら操作すると、ディスプレイが切り替わった。兵器の外観図やテキストデータが次々と表示させる。

「これはまた……」

輪廻は半分苦笑しながら、顎に手を当ててディスプレイを凝視した。

「『夜白家』に加えて『コレら』って、ちょっと過剰戦力じゃあないかなあ……」

「ところがそうでもないんです、現地の一般人たちを巻き込むわけにはいきませんし、超さんが言うには『殺し過ぎるとかえって歴史是正ができなくなる』そうですので……それに、いくら私たちでも殺傷能力を完璧に複製して量産するのにも無理がありますしね」

「まあ殺すのは異常者<sup>イレギュラー</sup>だけで十分だしネ、それに肝心のソイツの具体的情報が皆目なのヨ……とにかく、麻帆良祭の間に『ナニカ』が起こるはず。過剰戦力など当然ネ」

「まあ、ケチをつけるつもりはないけど……ところでどうしてその口調なの？」

「コレ、『素』になると訛り口調にするまで結構大変なんだヨ……」

超はそう言つて肩をすくめた。

「それで、超は私たちの実力については知っている？」

「勿論ネ」

超は大きく頷き、ドン、と胸を叩いた。が、

「私たち『娘達』<sup>ドクターズ</sup>の製造にハ、これまでの主君<sup>ロード</sup>たちの戦闘記録が多

いに反映されているネ。共闘することこそ滅多にないが、それでも主の力くらいは頭に入っているヨ。とはいっても、私もこの時代に來ている間は能力は大きく制限されているネ。神力はこのサイズの『空間』創造がやっとだし、魔力も全盛期の『サウザンド・マスター』程度だし、身体能力は……武力ができるだけのちょっと強い人間少女ネ……」

そう言っただけで肩を落とした。

もともと、人間の基準なら十分に『最強』扱いされるだろうし、経験も比較にならない。恐らく、並大抵の相手ではひけを取らないだろうと輪廻は踏んでいた。

事実その通りなのだが、元々『ドクターズ娘達』は刹那の補佐役や代行役として生み出されたモノであって、戦闘用の兵士ではない。戦闘が本分ではない以上、超は自身がどれだけ強いかなど検証の範囲外であった。

少なくとも人間や大抵の神よりは強いことは確かなのだから、検証する意味が見出せなかったと言った方が正確だろう。

しかも超は万能タイプとはいえ、やはり本分は頭脳労働だった。

「……」

そんな超を見て、輪廻は苦笑することしかできなかった。





第29幕「水面、それは波紋と透明な視線 / One . . . Stale Base

もう暫く番外編やオリ展開が続きます。

現時点における『夜白家』勢力図（前書き）

ちよつとややこしくなってきたので、ここで夜白家のメンバーを纏めておきます。

## 現時点における『夜白家』勢力図

### 『夜白家』

魔法世界、旧世界の『裏』で広く名の通っている傭兵組織（と世間では認知されている）。連合の上層部には快く思われておらず、元老院は排除しようとしたことがあるが失敗、寧ろ反撃を受けて保有戦力や元老院に大きな被害を受けている。帝国、アリアドネからの依頼が最も多いが、依頼なら全て受けるというわけでもない。暗殺や護衛、紛争の調停から蒐集などを依頼されることが多い。

なお、同上の理由で連合側、及び麻帆良ではほとんど知られていない。名前を知っていれば良い方。

その規模や目的、戦力はほとんど不明だが、少なくとも受けて失敗した任務はない。しかし、今のところ最強の傭兵組織として広いパイプを持つ。

現在は関西呪術協会会長近衛 詠春より、木乃香の護衛及び魔法の秘匿という長期任務を受けている。そのため、主に麻帆良学園都市で活動中。

なお、本拠地は『空間』内にある。

### リーダー

夜白 刹那

### 構成員（主戦力）

夜白 輪廻  
夜白 煌月

桜咲<sup>さくら咲</sup> || Y || 刹那<sup>せつな</sup>

マナ || A || Y || タツミヤ

長谷川<sup>はせがわ</sup> 千雨<sup>ちさめ</sup> (+ 使い魔のサンレイ)

大河内<sup>おおこうち</sup> アキラ

バックスタッフ  
補助戦力

天ヶ崎<sup>あまがさき</sup> 千草<sup>ちくさ</sup>

月詠<sup>つきよみ</sup>

綾瀬<sup>あやせ</sup> 夕映<sup>ゆえ</sup>

相坂<sup>あいざか</sup> さよ

\* 他にも輪廻や煌月の眷属や配下神獣が属している。眷属や配下神獣は数万人いるが、全員主に裏方で働いている。

協力者

超<sup>チャオ</sup> 鈴音<sup>リンシエン</sup> (夜白<sup>やしほ</sup> 慧鈴<sup>すれい</sup>)

葉加瀬<sup>はかせ</sup> 聡美<sup>さとみ</sup>

『夜白家』と同盟関係の組織・国家

関西呪術協会

現在の長である近衛このえ 詠春えいしゅんと個人的友好関係にある。また、『強硬派』が一掃されたこともあって全面的に『夜白家』に好意的。

コスモエンテレケイア  
完全なる世界

正式に同盟関係にある組織。同盟内容は今のところ『相互不干渉』及び『相互協力』のみ。詳しい内容は今後協議される。

ヘラス帝国

『夜白家』が最も多くの護衛を受けているお得意さま。特に第三皇女とは個人的親交がある。

麻帆良学園

任務の遂行上、協力体制にある。

第30幕「小雨、それは不毛な怒りと蓮華の中／Post War・・・Eyes

マナとサクのお話ですが、番外編ではありません。

とあるタワー状の建物の一室の窓から、その少女は空を見上げていた。

マナ「A「Y「タツミヤは忌々しげに軽く舌を打つと、煙草の煙を吐き出した。

「……まったく、ついていない」

マナはそう言いながら、長大な銃身が特徴の狙撃銃の照準器を覗き込んだ。

「御転婆少女」という、彼女のアーティファクトで、彼女を「狙撃手」と呼ばせる原動力となっている。  
が、それでも

「雨は嫌いだよ」

マナの表情は何とも苦々しいものだった。

ある意味当然だろう。

言うまでもなく、狙撃手にとって雨はまさに悪魔だった。視界は狭まるし、雨粒や飛沫は照準器のレンズを濡らす。結界で雨を防ぐことも可能だが、そんなことをすれば外界と、正確にいえば外界の空

気とシャットアウトされてしまう。

日や天候・風速・場所などによって、空気の粘り具合とでも言おうか、気圧や気温・湿度は変わる。そしてそれは、弾道に些細だが多大な影響を及ぼす。

それらは機械で調べられることができるが、熟練の狙撃手は、液晶画面に出力された電子データや計器の目盛りよりも自身の肌や舌で感じる『勘』を頼る。

当然、マナを含む『狙撃手』という人種は雨天時や積雪時にも狙撃が可能。十分満足のいくレベルでの。なるよう訓練しているし、マナ自身、雨天時の狙撃は今回が初めてというわけではない。

実際の話、狙撃手が気候や標的のスケジュールに振り回されるのは確定事項だ。さらに同じ所で何度も狙撃をすれば射線で敵に見つかから、頻繁に待機場を変えなくてはならない。だからといって、敵が現れもしない場所に陣取っていても意味はないのだが。

それは、彼女の横で双眼鏡を覗いている相棒、桜咲<sup>さくらさき</sup>「Y」<sup>せいな</sup>刹那も同じだった。

狙撃銃、要するに狙撃用の小銃<sup>ライフル</sup>は当然だが、遠距離から敵を射止める。つまり狙撃。ための銃である。そのため、銃身は長く重く造られるのが通例だ。弾道を安定させるためである。

その結果、狙撃手は長く重い銃を構えて待機せざるを得ない。敵に近付かれたらお終いだ。

だから、狙撃手には大抵ペアが就く。そのペアは護衛は元より、観測<sup>ボット</sup>手も兼ねることが多い。というか、観測の方が主任務である。



ちなみに、観測手は、狙撃手の経験を持つ者が担当する。そのため、サクも狙撃は可能だが、あくまで少しかじったくらいだ。

あくまで魔具であり、既存の銃とは大きく異なる『御転婆少女』ヴァイルド・ファンゲとして、近接格闘戦や近距離銃撃戦に向かないことは同じである。

そこで、近接戦の専門家であるサクの出番だ。エキスパート

「私も雨はそれ程好きじゃない。いや、見る分には良いのだが……刃の錆の原因になるし、高速戦闘には邪魔だから……」

サクはマナに同意しながら、視覚妨害用の結界のチエックを行っていた。

剣士による高速の戦闘では、自身に当たる雨粒も立派な障害物であり、煩わしいこと敵わない。もっとも、雨は欺瞞や気配の隠蔽にも使えるから利点もある。

まあ、そんな都合を自然現象が考慮しているわけもないのだが。

ついでに言うと、煌月が降らせる『人工の雨』で大勢の敵が殺戮される光景を見れば、雨にそれ程好意を持たなくなっても無理はないが。

今回の任務は連合の元老院の抹殺だ。いや、正確に言うと任務では

ない。自発的な『行動』だった。

「最近ちよいと塵芥チリが五月蠅いから消してくる」

輪廻がそう言ったのを偶然耳にしたマナは、自分がやると言っただけを引く張ってここまでやってきたのだ。

パタゴニアで暴れられず、刹那とのデートもサク達の途中参加で有耶無耶になってフラストレーションが溜まっていたマナは、輪廻の「元老院の過激派の1人なんだけど、何でも夜白家　ってえいうかお兄ちゃんを邪魔だから潰そうとナニカしてるみたいでねえ、流石に煩わしくなってきたから殺ってくるよ」

という発言に静かにキレた。

彼女は基本静観派なので命令以外で動くことは少ないが、刹那に関することだけは話が別なのだ。それはサクも同じで、理由を聞いたサクは即座に頷いた。

輪廻が集めたデータにより、今日未明にその『標的』が外出し、2人が見下ろしている建物に向かうことを突き止めたのだ。別に殴り込みをかけても良いのだが、流石に元老院が白昼堂々頭と胴体を泣き別れされては連合、ひいては魔法世界を混乱させかねない。

マナ自身、魔法世界の混乱など知ったことではないが、それが原因で自分たちの、特に刹那の『平穩』が壊されては堪らない。

そんなことをするくらいなら、自決を命じられた方が、遥かにマシだった。

その点、狙撃なら『暗殺』に向いているし、犯人の特定も難しい。目撃されることもないし、されるほどマナもサクも優しくはない。

こういった要人の護衛には、大抵魔法使いが就く。それも複数、それなりに腕が立つ者が、だ。加えて魔法使い、それも魔法世界出身者は『狙撃』、それも『銃』を使ったモノには疎い。無頓着と言っても良い。

魔法使いの主流の武器は『杖』だ。それもあくまで魔法発動媒体として使うので、別に杖術を使うわけではない。魔法世界で狙撃のイロハを知る者など皆無に等しいのだ。

旧世界の軍相手なら、狙撃探知システムなどを警戒する必要があるだろうが。

しかし障壁を展開しているだろうから、あっさりとは成功はできない。障壁を破壊するか、展開している護衛を潰すか、障壁破壊用の貫通力が高い銃弾を使用するか。

マナが現在装填しているのは『速度変化弾』だ。弾速を極限まで高めれば、かなりの貫通力となる。仮に障壁を破壊できなくとも、衝撃により形を変えた障壁が再構成され、組み上げられるまでには数瞬かかる。

その『数瞬』という『隙』は、弾速から考えれば十分な時間だ。もっとも、命中しなければ意味はないが。

「狙撃の精度を高める方法は、なにも空気の質や風を読むことだけじゃあない」

マナはそう言って、サクの反応を待った。

「とうとう?」

絶賛暇潰し中のサクはすぐに反応する。

狙撃は基本『待ち』だ。となれば、集中力の維持や『暇潰し』は不可欠となる。そこでマナとサクは、こういう待ち時間には大抵雑談をして過ごす。

いくらベテランの狙撃手とはいえ、常に集中力を維持していることなど、生物の概念を突き破っても無理である。

無論マナが照準器スコープから目を話すことはないし、サクも周囲の警戒を怠らない。

「標的が個人の場合は、うん……パーソナルなデータとでも言うのか、癖とか仕種とか性格とか、そういうのを仕入れて考えるのさ。勿論、事前に相手の情報が手に入った時だけけどね」

「シミュレートする……ということか?」

「簡単に言えばそうだね。例えば歩いてる標的を撃つなら、歩幅や歩調を知っているだけで大分楽になる。有体に言えば、標的の情報は何つあっても困ることはない」

「ああ」

サクは納得したように頷く。彼女も一応基本的な狙撃スキルは習得しているから、すぐにその有利性に気付いた。

「感情的にはいい気分じゃあない。これから殺す相手を深く知ることになるからね。それが、刹那さんを狙う敵なら尚更さ……そんな屑のデータなんて、知りたくないと思いが拒む」

「感情移入はしないのか？」

「やめてくれ」

マナはウンザリとした声で面白半分に行ったサクの言葉を否定する。

「それほどウエットじゃあないよ、知っているだろう？」

当然のように言われ、サクは苦笑しながら済まないと思罪した。

彼女たちが仕事を終えるまで、あと一〇分もなかった。

そして元老院は、再び犠牲を増やすこととなった。

第30幕「小雨、それは不毛な怒りと蓮華の中／Post War・・・Eyes

今までマナの狙撃を詳しく描写していなかったなので、書かせていただきます。

第31幕「咀嚼、それは月の無い夜の底と漆黒の泥」(前書き)

夕映とかにも麻帆良祭で活躍の場をあげたいです。

武道会はどうしようかな……。



### 第31幕「咀嚼、それは月の無い夜の底と漆黒の泥」

『空間』の『主島』の研究区画は、地上と地下、さらには海底にまで大きく広がっている。

普段は、眷属たちが入り浸っているのだが、日常的に出入りしている者もいる。

私と千雨、そして夕映だ。

特に、夕映はオリジナルの魔具の製造に夢中で、休みはここに終始閉じこもっていることすらある。

夕映の発明には私や千雨も協力しているのだが、理論を教えれば跡は彼女は勝手にどんどん進めている。

私はドレスの上に白衣を着込みながら、地下研究区画の廊下を歩いていた。時々白衣姿の人間とすれ違うが、彼らはただの眷属、それも研究・開発専門のだ。余計な機能は付けていないので、碌に挨拶もせずすれ違う。

私自身、廊下で誰かと会うたびに挨拶するのは億劫だし、自分の奴隷のような存在と馴れ馴れしくする意味などない。眷属のコミュニケーション能力は最低限に留めてある。

「夕映、入るよ」

私はドアの前でノックすると、ドアが静かにスライドした。

「あ、輪廻先生」

机に向かつて電子出力されたデータを睨んでいた夕映、そしてその横で夕映と同じく白衣を着込んでいる千雨とアキラが振り返ってこちらを見た。アキラが笑顔で一礼してきたので片手をあげて返した。

「ん、アキラもいるの？」

「部活が休みだったから」

そう言って、アキラは興味深そうに観察していたフラスコ。中にはマリンプールの液体が入っている。視線を戻した。長身のアキラが棚の低い所に固定されたフラスコを凝視するためには背をかめねばならず、その隣では千雨が何かを啜えながら空中に浮かぶディスプレイを見つめている。

そして夕映は、長方形の机に視線を下していた。

夕映が見下ろしている机の表面は、それ自体が、巨大なタッチパネルとなっている。彼女はペンを使って、それに何かを書き込んだ。た。

「今日は、何をしているの？」

「新しい魔具の、術式構成だそうだ」

夕映に向かつて聞いた問いは、千雨が答えることとなった。

彼女が啜えているのは一枚のチップだった。啜えていると、眠気覚ましにミントの味と香りが口内に広がるチップだ。千雨はいつの間にか指で挟んでいた火のついていない煙草を弄びながら、机の表面を指で軽く叩く。

するとそれに反応し、机の表面にテキストデータが表示された。

「この前夕映が造った魔具で、『ロブ・テキーラ』ってえあっただろ？」

「違いますですよ、『ロブ・カクテル火炎瓶』です」

千雨の説明が入ったが、夕映が訂正した。

そもそも火炎瓶は大戦時にソヴィエド軍が使用した対戦車兵器で、『モロトフ爆弾』、或いは『モロトフ・カクテル』とも呼ばれる。元は手製の、要するに即席の兵器なのだが、存外に効果があったために広く利用されるようになった。最近では、暴徒が暴れた時に使う道具のようなイメージが出て来たが、元は立派な軍用兵器だ。

夕映のはそれに炎を操る術式、具体的に言うと私の『狐火』の劣化版の術式を組み合わせたものだ。劣化版とは言っても、それこそ『世界』ひとつは瞬時に焼き尽くす天狐わたしの狐火を元に行っているためそ

の威力は高い。  
オリジナル  
狐火のように数億度の炎は出せないが、それでも一点に集中させればそこらの炎系統の上級魔法よりはよほど強力だろう。

「ん、すまねえ。……まあとにかく、だ。これはそれをもっと小型化して、飛距離を伸ばすやつだな。輪廻先生は、擲弾筒てきだんとうって知ってるか？」

それを聞いて、私は軽く頷いた。

大戦時の日本軍独自の兵器（正確には違うのだが）だ。今風に言えば、軽迫撃砲とでもなるうか、或いはグレネードランチャーか。あえてざっくりばらんに言うと、手榴弾のようなものを飛ばす兵器だ。

私の反応に満足げに頷き返しながら、千雨は身振り手振りで説明する。その顔は若干やつれていた。

「この火炎瓶ロフ・カクテルは射程が短い。いくら気で強化しようとも腕力でブン投げる以上は射程はたかが知れているし、命中精度も悪くなる。炎を操って効果範囲を広げれば良いんだが、際限なく燃やしまくるわけにもいかねえし何より範囲が広がると炎が分散して威力が下がる。」

火炎瓶ロフ・カクテルの魅力は『一点集中攻撃』だからな。『面』ではなく『点』の制圧効果だ……『面』での効果を期待するんだったら、火炎放射器を造った方が手っ取り早いからな。『燃える天空』とかでも良いし。

理論的にはそれも可能だし制御も不可能じゃあねえけどよお、この

炎は威力が高すぎるんだ……雨季の熱帯雨林だって焼き尽くせる火力だからな、危険だ……」

千雨はそう言いながら額に手を当ててため息をついた。そして肩をすくめる。

「だからと言って、炎の威力を下げては元も子もねえからなあ。だったら、せつかくだから専用の発射器と弾を造ったらどうだってマナが……」

その様子からして、半ば無理矢理巻き込まれたのだろう。確認の意味でアキラに視線を移すと、アキラは苦笑しながら肯定した。

「発射母体はもう出来てる。後は弾……擲弾って言うていいのかは知らんが、その最終チェックだけだ」

「ええ。ちなみに射程は最大有効射程で一二〇〇前後です。最高射程はもつとありますですが、これくらいではないと命中は見込みですね。弾着と同時に一気に燃え上がる仕組みでして、同じようにその炎も操れます。使い分ければ色々できますよ」

千雨の説明を夕映が引き継ぐ。夕映は満足そうに微笑すると、再び机に視線を落とした。

「一二〇〇ねえ。……なかなか面白い戦い方ができそうだねーえ」

これでいい、と静かに思う。

夕映は参謀役だが、戦うことがないわけでもないだろう。

麻帆良祭で何が起ころうかは知らないが、万全の態勢を取ることには越したことはない。

絶対に、お兄ちゃんの邪魔はさせない。

私は改めて、その思いを確認した。

第31幕「咀嚼、それは月の無い夜の底と漆黒の泥」(後書き)

最近千雨やアキラが登場していなかったなので、こんな話にしました。

2人とも麻帆良祭で暴れる予定です。

**第32幕「水牢、それは深層心理の怪物と藁に縋る聖女」(前書き)**

麻帆良祭編はかなり変えていくつもりですし、長くなると思います。

伏線回はもう少し続きます。またしてもオリキャラ登場です。



### 第32幕「水牢、それは深層心理の怪物と藁に縋る聖女」

「『平和』とは戦争と次の戦争の幕間に過ぎない」

「戦争は政治の延長線である」

歴史を紐解くと、戦争について語っている『偉人』は多い。それが全て正しいわけではないかもしれないが、人類史と戦史がイコールで結べるという意見には賛成だ。

そんなことは私には関係ないが、それにお兄ちゃんが巻き込まれるのはごめんだった。

魔法世界にて『大戦』と呼ばれる争いが起こり、終結してから20年程。

忘却の彼方や歴史の闇に葬り去られるには、あまりにも短すぎる時間だろう。『終戦』も『戦後』もただの熟語に過ぎない。

未だに傷痕は深くまみれ、人々はありません『正義』と『平和』に酔っている。実際に戦った兵士や、家族や知人を失った者は今何を思うのだろうか。

私に人間の感傷などわからない。知りたくもない。永久とわに生き続け、ずっとお兄ちゃんを護り続ける私にはどうでも良いことだし、非難されても気にしない。

問題は、それがお兄ちゃんに飛び火することだ。

第一、戦後に敵討ちをしたくても、一体誰を討てというのか。その戦場の生き残り全員か、敵国軍人全員か、直接手は下していない指揮官か、阿呆な作戦を考えた幕僚か、会議室で怒鳴り合っていた政治家か、元凶たる『完全なる世界』か、それとも　一番多く殺した『英雄』か。

「もし、歴史が変わる原因が『それ』だったら……？」

私は小さく呟き、『世界樹』を見上げた。認識障害のおかげで、この富士山より目立つこと確実なスポットは麻帆良外では見えないし、麻帆良にいる『表』の人間も別段不思議に思わない。

が、見る人が見れば、この樹の『中身』に驚愕するだろう。

正式名称『神木・蟠桃』ばんとうというこの巨大な木は、まさに『世界樹』ワールドツリーと呼ぶに相応しい、神聖さ　神々しさを誇っていた。内蔵する膨大な魔力　私の心臓の半分くらいだが　は、それこそ世界一帯を包み込むこともできるだろう。

仮に、この魔力を制御する　魔力の奔流の矛先を自在に変えることが出来れば、それこそ『歴史変換』など軽いものかもしれない。大切な人が死んだという『歴史』も変えられるとすれば……。

「しかし、制御するためには高度な術式展開及び調整が必要です」

私の隣で同じように世界樹を見上げていた煌月が言った。

その通りで、いくら膨大な魔力があっても制御できなければ、術者にかかる負担はとんでもないもの。 喩えるなら、ナイアガラの滝の水量を身一つでまともに受け止めるような となる。

そんなことになれば、下級神とて『破裂』する。当然、人間なら肉片一つ残らないだろう。

いや、それどころか周囲は魔力の激流に飲み込まれ、水爆（水素爆弾）が玩具に見える被害を出すだろう。 もっともそれは、内蔵されている魔力『全て』を使った場合だ。

「仮に制御できたとしても、複雑な術式発動は不可能ですね」

「それはそうだけど、『単純な術式』が無害というわけではないでしょう」

「確かに」

煌月は小さく首肯した。その顔には焦りも恐怖も危機感も微塵もない。 まあ防げるだろうし、起こったら起こったで後から修正すればよい。 この『世界』を担当している神は文句を言ってくるだろうが、創造神アリスが抑えるだろう。 抑えなかつたら殺すが、し、別に私が出向いていって黙らしても良い。

それにその所為で被害が出て、お兄ちゃんや家族に被害が出なけ

ればどうでも良い。優しいお兄ちゃんはクラスの面子とかも護ろうとするだろうが、その時は、お兄ちゃんの望みを全力で叶えるだけだ。

「ですが、輪廻が言うとおり、戦争の『傷痕』が原因だとすれば、とぼっちりも甚だしいですね。刹那様は戦争には参加してません。その後の『修復』などには参加しましたが」

「全く同感」

私は首を振って肩をすくめる。

「刹那様には伝えておきましょう」

「そうだねえ。あーあ、カッタルイことになってきたなーあ。麻帆良祭と世界樹の発光現象が重なることはほぼ確実。『敵』が麻帆良祭中に行動を起こすとすれば、『それ』目当てでしか考えられない」

「それでは、アキラに世界樹を操らせるのはどうです?」

「博打だねえ。アキラは確かに力なら上級神クラスだけど、あくまで個体としては『人間』 いや、お兄ちゃんと仮契約したから『バクティオ半神半人間』というべきかな?……だからねえ。

下手すればアキラが乗っ取られるよ。まあ、引き離せばよいんだけど」

「そうですね、だったら輪廻が操れば良いのでは？」

「それも考えたんだけど、それは最後の手段かなあ。そんなことしたら私の神力の副作用で……コンフリクト衝突し合って何が起こるかわかったものじゃない。仮に上手く融合したとしても、世界樹の内臓魔力がえらいことになるだろうし……」

「そうですね」

全く残念そうに見えない煌月の淡々とした口調を聞きながら、私は闇色の髪を弄んでいた。  
そして顎に手を当て、暫し思案する。

「……うん、やっぱり必要かな」

「何がですか？」

煌月が何の期待も籠っていない瞳で私を見る。いつものことだから気にしないが、初対面の人からすれば、無愛想を通り越して無礼だろう。

もともと煌月が、お兄ちゃん以外の誰かの反応を気にするわけもないが。

「私たちと学園の緩衝材。それも、学園からすれば外部の人間で、尚且つそれなりに使える裏の人間」

「第三勢力、ではありませんね。『中立』ですか。表向きは」

「そう。そいつに遠回しにお兄ちゃんを補佐してもらおう。麻帆良祭時にお兄ちゃんや私たちが動きやすくなるように」

「成程。刹那様以下私たちは、学園とは同盟関係にあるだけで、学園に属してはおりません」

「そう。わざわざ学園の駒になってやることもないし、お兄ちゃんが誰かの下になるなんて、私が許さない。喻え、形だけのものでも」

「学園に危機があったら、私たちは動員されるかもしれない。でも煌月だって、お兄ちゃん以外の命令で動いたりしないでしょう？」

「然り」

「でも、私たちが『夜白家』のメンバーだということは、学園長や高畑教諭、マクダウエルくらいしか知らない。ていうか連合では『夜白家』はほとんど知られていない。だから私たちが学園長の指揮に入らないのを、他の魔法先生は不思議に思うかもしれない」

「そのための『緩衝材』ですか。では眷属か配下神獣を送り込みましょつ」

「そつだね」

私は念話でお兄ちゃんに許可を取ると、すぐに配下神獣を選別して呼びだした。1人で十分だから、しっかりと使える奴を呼び出さない。

すぐに私の命令に従い、1人の青年が現れた。

この国では未だに男尊女卑が根づいている。ポツと出の女性職員の話をもとに聞くベテランはほとんどいない。

「呼びだすのなら男性の奴で頼む」

というお兄ちゃんからの指示だった。

黒髪に黒い瞳、背丈は一七〇前後。浅黒い肌に黒いスーツと黒づくめの男だった。前髪は長く、左目が隠れている。浅黒い肌は一見健康そうだが、どことなく不気味さを感じさせる雰囲気纏っていた。

高位神獣『ヤタガラス』。時には幸福へと、時には破滅へと人々を誘う神獣だ。

彼は細い眼をさらに細め、膝きながら低い声で私に言った。

「お呼びですか、天狐様」

私は眷属や配下神獣には自身を『天狐』と呼ばせている。『夜白輪廻』はお兄ちゃんから貰った尊い名前だ。自分の奴隷が口に出して良い名前ではない。

私は軽く頷くと、目の前の奴隷に指示を飛ばした。

「麻帆良勤務中は独自に行動しなさい。指示は追って出すから。戸籍とかの面は私が適当にやっておく」

「は」

『ヤタガラス』 勤務中は黒碓氷くろすずい 九十九つくもと名乗る神獣は、静かに一礼した。



**第32幕「水牢、それは深層心理の怪物と藁に縋る聖女」(後書き)**

黒碓氷はもっぱら麻帆良教師の抑え役として活躍する予定です。

戦闘に参加させる予定は今のところありません。

第33幕「指針、それは赤色のウェーキ/Room・・・Total Dark

麻帆良祭編では、武道会はあくまで軽い描写に留めようと思います。  
主人公サイドが出る必要性もありませんので。

ていつか出ても瞬殺で終わりですし。

「……………退屈だね」

「言うな。私なんてもつと酷い……………さつきからひたすら、光学機器を見つめているんだからな」

『空』と聞いて、人々は何を思うだろうか。

大抵のものは美しい光景　雲海や、若しくはクリアな空、或いは星空などを浮かべるだろう。が、空で『仕事』をしている者にとっては、『空』とは『障害だらけの無空間』だった。

大河内<sup>おおこうち</sup> アキラもまたそうだった。仕事モードの彼女にとって、空は『仕事場』であり、決して絶景や娯楽を求める場所ではない。

空は確かに美しい。地面に近付くほど濁っていくが、麻帆良近辺の空は、六月の空気の中澄んでいた。

が、そこが人間にとって理想郷<sup>ユートピア</sup>かどうかは別次元の話だ。実際、この広い空に突然人間が放り込まれれば、たちまち地上か海上に激突してその生涯を閉じるだろう。

飛行機に乗っていても、乱気流にでも突っ込めばバラバラになるか火の玉となって墜落し、果てる。空は決して、人間の生存が確約された場所ではないのだ。

が、それが『唯の人間』ではなかったら。或いは、『唯の飛行機』

ではないナニカに乗っていれば。

アキラはシートに背中を預け、ヘッドセットに取り付けられているマイクに向かって半ば鬱憤の籠った声で叫んだ。

「……こちら哨戒空域02……異常無し……現在時刻は……」

『オツケー……確認したよ』

「くあー……面倒だ……」

アキラの隣でシートに深く座り、ちゃっかりヘッドセットを通じて音楽を聞いている長谷川<sup>はせがわ</sup> 千雨<sup>ちかめ</sup>がやる気の欠片も見えない声で愚痴をこぼす。

そんな相棒を横目で睨みつつ、アキラはふと周囲を見る。ごてごてした機械が自身を囲んでおり、時折ランプが点滅したり、ディスプレイが輝いていた。が、そのほとんどが、アキラには理解できないものだった。

が、それでも別段問題はない。アキラと千雨の仕事はこれらの機械の操作や整備ではなく 窓から周囲を見やることなのだから。

2人が乗り込んでいるモノは、所謂『哨戒機』、或いは『早期警戒機』と呼ばれる航空機だが、自衛隊や諸国軍のそれとは大きく異なる。

超<sup>チャオ</sup> 鈴音<sup>リンシエン</sup>こと夜白<sup>やしろう</sup> 慧鈴<sup>すれい</sup>と葉加瀬<sup>はかせ</sup> 聡美<sup>さとみ</sup>が構築した、未来世代技術<sup>オーバーテクノロジー</sup>がふんだんに使われている上に、そもそも哨戒・警戒『対象』が旧

世界の軍のそれとは違っている。

正式な型式番号はアキラも覚えていないが、取り敢えずアキラはこの航空機、というより空中移動機を『アローヘッド』と呼んでいた。文字通り矢じりの形状をしており、見る人が見れば、米空軍の『ロッキードF117Aナイトホーク』戦闘機（という名の攻撃機）にそっくりだと思うだろうが、この『アローヘッド』はそれを一回りほど小さくしたようなフォルムで、尚且つ速度も遅い。

要するに、全くの別物である。

速度が遅い代わりに、特殊揚力シールドを展開して所謂『空中停止』が可能となっている。他にも垂直に飛行したり、直角に曲がることも可能だ。ちなみにシールドのおかげでGはかからず、アキラ達の内臓が破壊されることはない。

そう、この哨戒機アローヘッドが哨戒『対象』としているモノは、決してマツハの速度で飛ぶミサイルや超音速機ではなく、飛行してくる魔術師や、地上を移動する魔術師、或いは彼らが従えし異形のモノである。

一応、機載武器庫ウエポン・ベイにはそれなりの武装が搭載されており、いずれも魔導式燃料で動く。この機体もまた然りだ。

が、『アローヘッド』の主な『武器』は魔法使いの展開する隠密用の結界や障壁、魔力波などの様々なモノを捉えるための各種センサーであり、これらが優先的に搭載されている。センサーの性能は高く、並のステルスなどもともしない。

おまけに遠くから夜白やしほ 輪廻りんねの魔力を随時補給しているので、実質

的な作戦可能範囲や航続距離はほぼ無限だ。各電子機器も自己判断システムや自己修復システムを備える。

超は主に戦闘攻撃機として製造したが、一部はこのような哨戒機に改造させられた。

本来なら、この機に搭乗員コックピット・クルーは必要ない。遠隔操作が可能だし、自律行動もまた可能だからだ。

だが、いくら科学が進歩しても、船の見張り員ウォッチが消えないのと同じように、決して人間の目を捨てることはできない。

人間の目はもつとも古く、もつとも信用出来る（と信じている者が多い）警戒システムなのだから。

もつとも、アキラと千雨にとってはたまったものではなかった。

彼女たちはその『目』の役目のため、貴重な休日の内数時間を、空の上で過ごす羽目になったのだから。

『夜白家』は、麻帆良の警備網を信じてはいなかった。

当然だろう。そもそも警備網が突破されるから、歴史を揺るがす『異常事態』エラーが起こるのだから。

そんな未来人（正確には未来神工生命体）の言質を取るまでもなく、麻帆良の警備網は隙だらけだった。いや、方針やスタイル、陣形については特に問題はない。学園側も馬鹿ではないから、当然の如く、難攻不落に近付けるために警備システムを構築している。

問題なのは、マンパワー人的資源の方だ。量も質も、御世辞にも揃っていると

は言い難い。

当然、学園側はそれを知っていた。が、その警備システムの問題はあまり取り沙汰されていない。

その理由は、『確かに盤石ではないが、今まで十分対応できた』からである。

つまり、『ある程度の危機』には対応できているということだ。事実、麻帆良では日常的に他勢力による攻撃が行われている。

関西呪術協会からの攻撃は、政治力が増して地位を高めた長、近衛このえ詠春えいしゅんが自粛を促し、逆らった者を容赦なく『粛清』したためにつきり減った（ちなみにこれによって西の戦力は激減したが、団結力が増して、さらに『夜白家』直伝の厳しい修行や教育カリキュラムを取り入れたこともあって、寧ろ西の戦力は増している）が、それでも無所属フリーや他国の魔法勢力の襲撃は収まることを知らない。

そんな中、未だに関東魔法協会、いや麻帆良学園が存続しているということは、つまりは麻帆良の安全は保たれているということ在意味していた。

ところが、さにあらず。

現に先日は悪魔が学園内に侵入し、ネギたちと一悶着あつた後で夜や白煌月せいかうげつに排除された。

これはつまり『今までよりも規模の大きい』或いは『より強者の』侵入には、少なくとも現在の麻帆良は無力であるという証明に他ならない。

『実際に侵入されただけで被害は出なかった』というのは言い訳に

もならない。麻帆良が学び舎である以上、そして生徒や住人の大部分が一般人である以上、侵入された時点で敗北確定である。チエックメイト

住人を人質に取られれば、動こうにも動けなくなる。侵入者を狩るどころか口出しすらできなくなれば、警備システムなどあつて無きのようなものである。

ましてや、今年は世界樹の発光現象が起こる。

この『発光現象』は、貯まりに貯まった魔力を世界中へ放出する時に起こる、簡単に言つと『ガス抜き』の世界樹版だが、問題なのはこの放出される魔力の行方だ。本来なら大気中に溶け込み、発散されて終わりなのだが、もし、それを悪用する者がいたとしたら。

『できるわけがない』と、一蹴するには重すぎよう。

その可能性に気付き、学園長以下学園上層部は色めきたつた。

しかもつい先日、警備システムの無力さが、改めて証明された。もし、かつてない数の侵入者が実力者が入り込めば、麻帆良は地獄となる。

さらにこの時、学園上層部は『超 鈴音』と『葉加瀬 聡美』を疑っていた。彼女らの周囲には、不自然な金の動きがあつた。

なまじ『麻帆良最強の頭脳』と言われている超だけに、学園側の危険意識を高めるには十分な効果があつた。

超は学園側に危険視マークされたことをサラリと受け流していた。自分は寧ろ学園側にとっては潜在的協力者だし、彼女もまた輪廻たちと同



様、刹那以外の誰にどう思われようが一向に気にしていなかったからだ。

そんな中、新任教師の黒碓氷九十九くろすいすいは、旧世界出身の実力者として麻帆良に勤務し、着々と他の教員や学園との交流を深めていた。

以上の理由で麻帆良学園は、警備網の強化に乗り出すことになる。が、早々すぐに強化できるわけもなく、麻帆良警備網強化計画は難航していた。

「……こちら哨戒空域ハートルエリア……あー……何番だっけ……05かな。哨戒ハートル空域05、異常無し……現在時刻は……」

『諒解、確認した、そろそろ巡航航路コースの最後だな、疲れているだろうし、悪いけど頼む』

「あ、刹那先生でしたか……大丈夫です、退屈でしたが、記録中だけ……起きて周囲を見渡していればよいので……眠り心地が良いですね、この機」

『退屈だったか？次からはコンピュータに暇潰し用のゲームソフトをインストールさせておこう』

輪廻に代わり、管制役を交代した夜白やしる 刹那せつなは本気で済まなそうに

言った。

それに慌ててアキラは取り繕うように言い訳を並べる。

その横で、だらしない姿勢で刹那特製のおにぎりをパクついていた千雨は、麦茶でそれを飲み下すとズレていたヘッドセットを付け直して刹那に言う。

「そいつあ助かる。ついでにDVDやCDも何枚か頼む……学園の警備の杜撰さはこつちも知っているから大丈夫だ、気にすんな」

『重ね重ね済まない』

「いって」

そんな2人の会話を横目に、アキラは最後の仕上げとばかりに辺りを見渡す。双眼鏡をズームしても、空には影も形も見えない。

地上はどうだろう。

アキラは身を乗り出し、下、というより地上を覗き込んだ。

「……なにもない、か」

アキラがそう言うのと、千雨は頷きながらタッチパネルに文字を書き

込む。

「……しかし眉唾ものだな。ホントに信頼できるのか、コイツのセ  
ンサー」

「……できると思うよ？何しろ超と葉加瀬が造ったんだし。まあ麻  
帆良祭までまだ結構あるからね、敵が見つからなくて当然だよ」

「まあ、そうなんだが……」

千雨はそう呟くと、大きく首を振った。

考えても、仕方がない……か。

千雨は再びシートに深く座ると、静かに目を閉じた。

第33幕「指針、それは赤色のウェーキ/Room・・・Total Dark

今回は、夜白家と麻帆良警戒網の話です。

今作の麻帆良は結構迅速に動きます。その警備システムがどうなるかは楽しみに。

第34幕「要請、それは可能で可憐な醜態 / Shout . . . in Down t

麻帆良祭までの準備編もそろそろ終盤です。

修学旅行のあとの西の描写です。

関西呪術協会総本山は、つい先日頃までは戦場の如き有様だった。それほどまでに喧騒だったのである。

何しろ『鬼神』を『何者か』に復活させられ、さらに『闇の福音』ことエヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウエルによって再度封印させられた。

西の『強硬派』はどう考えていたのか、少なくとも穏健派や部外者（他魔法関係組織）からして見れば、鬼神『リヨウメンスクナノカミ』を操ろうという考えは実に浅はかだった。

第一、人間に簡単に操れるようなソンザイが、『鬼神』と怖れられて神話に登場するほどの怪物モノであるわけもない。

近衛このえ 木乃香このかは無事だったが、それも『夜白家』が護衛の任に就いていたからの話である。

つまり西の『穏健派』は、今回何の役にも されこそ事後処理程度でしか役に立っていない。

もっともこの時、西の主戦力は大半が出払っていた。九州地方で妖あやしの一斉蜂起（というより宣戦布告）が起こっていたからである。が、そんなものは言い訳にすらならない。

関西呪術協会は、その名の通り関西を根拠としているが、此処で言う『関西』とは所謂京阪神地方（京都・大阪・神戸など）ではなく、より広い意味での『関西』、つまり畿内、山陰、山陽、南海、西海 詰まる所は所謂『西日本』（近畿・中国・四国・九州）のこと

である。

つまり関西呪術協会は、西日本全域を管轄としているのだ。

そして『管轄』していることは、単に其処に居を構えているという意味ではない。術師などを教育し、統率し、妖怪などの『異能』から一般人を護ることも当然『仕事』 いや、『義務』である。

確かに西は、元をたどれば関東魔法協会に対抗するための組織という色合いが強いが、戦争に熱中するあまり、自勢力圏内で妖が好き放題暴れていては意味はない。

もともと陰陽師も神鳴流剣士も退魔を生業としており、他勢力との戦争など二の次だ。

そして今年の四月、『強硬派』が決起 というより暴挙を起こし（正確には未遂だが、企てた時点で大問題である）京都は危うく壊滅しそうになった。

「自分たちの『御膝元』（京都総本山）すら安全を保証できず、しかも内部から犯罪者を出しておいて、東との戦争などできるものか！」

「そもそも木乃香お嬢様を護ったのすら、長が個人的に依頼した『傭兵』だそうではないか」

「そして『英雄の息子』だ。今の我々は、自分たちの内部問題すら自分たちで処理できない。それが証明されてしまった……面目丸つぶれも良いところだ」

「加えて『鬼神』を操ろうなど愚の骨頂だ。そんな馬鹿げた考えを持つ者が上層部にいた時点で、しかもそれを止めたのは犯罪者『闇の福音』では、我々は世界中の笑いものだぞ！」

「『内憂外患』とはこのことだ。せめて『内憂』をどうにかしないと、戦争どころか治安維持すらできない」

「幸いというべきか、長は一貫して親関東路線を維持しておられる。この際東への怨みつらみは棚に上げて、土台を固めるべきではないか……加えて『外患』も抑えられれば尚素晴らしい、戦争しても良いことなどないし……」

こんな意見が飛び交い、西の中で『穩健派』は多大な影響力を持つようになった。加えて、『強硬派』は天ヶ崎あまがさき 千草ちくさの供述によって、ほぼ根絶やしにされている。

西が必死になって『強硬派』の掃討に乗り出したのも、事後処理すら満足にできないとなれば、面目丸つぶれどころか、組織としての無能さを白日の元に曝すようなものだからだ。

近衛このゑ 詠春えいしゅんは、そんな現実を苦々しく思いながらも、これをまさに好機チャンスとばかりに組織の改革に乗り出していた。

詠春がまず頭を抱えたのは、人材の払底である。『強硬派』を残さ



ず『肅清』　そう呼ばれていることに、詠春自身は苦笑を隠せなかった　したために、西の戦力は減少していた。

しかも今回のことで、九州などの『僻地』で大事が起こった場合、京都などの重要拠点の護りが疎かになる事が実証された。

そんな詠春に協力したのが『夜白家』である。

夜白　刹那は西との、というより近衛　詠春との繋がりを大事にしていた。

そこで彼は、詠春に協力することに躊躇しなかった。

刹那の支援やアドヴァイスを受け、詠春はまず教育の改革に着手した。

これまでは各家系や流派が独自に行っていた呪術や武芸の教育を一元化し、しかも彼らを纏めて同じ教育機関・施設に放り込んだ。

当初は術の隠匿という問題や、各流派の軋轢により反対が多かったが、詠春はそれを一喝した。

「我々は手を取り合い、西を護らなくてはならないのです。なのに互いに術を隠匿し、碌に顔合わせもしないで、どうやって共闘しろというのですか！

陰陽道の各流派は元をたどれば同じです、今の我々に、『伝統』や『秘匿』、『栄光』という御座に胡坐をかいている余裕などありません……あと何回危機が訪れれば、貴方達はそれを理解するのですか！！」

普段の温厚な彼からは想像もつかない激怒ぶりに、抗議しに来た各

家系や流派の代表者達は黙る他なかった。

詠春は改めて、自身の甘さと不甲斐無さを痛感していた。そんな彼に、もはや温厚な紳士の仮面を被り続けるという選択肢は消えていた。彼は、自分の意見に反対する者は、全て排除することすら覚悟していたのである。

どうやら麻帆良のトップと同様、西の長も、夜白刹那という人間に深く影響されているらしい。

「同じ釜の飯を食わせていけば、流派の軋轢など自然となくなるでしょう。それに軋轢があるということは、それだけ切磋琢磨し合うということですよ」

刹那はそう言って、詠春にこの案を薦めたのである。

常日頃、家系や流派のいざこざに頭を抱えていた詠春は、苦笑しながらも頷いた。

刹那の案は、まさに西の内部闘争を逆手に取った案だからだ。

以前なら反対多数で実施されなかっただろうが、なにしろ今は西の実情を皆が理解していた。そう、事態はそれほどまでに逼迫ひっぼくしていたのだ。

危機が起こって初めて、皆が危機を認識したのだから皮肉なものがある。

ついでとばかりに詠春は、教育カリキュラムの一新にも着手した。それには刹那の意見が多いに反映されていたのだが、その効果はすぐに表れた。

今までは知らなかった他流派などに触れ、術師たちの多くが唯我独尊的な思考 『我々の流派こそが最強だ』という考えのことを捨てたのだ。さらに流派の術同士が融合するなどして、新たな術式も多く生み出されていった。

さらに今まで碌な力も持つておらず（現代戦ドクトリンに追い付いておらず）、『伝統があるから』という理由で勢力を保っていた流派や、他流派の良いところに見向きもしない石頭な連中は、一月と経たずに自然淘汰された。

嘗ては『秘匿のために他流派に術は教えない』と声高に叫んでいた連中は、実際に学んでいた生徒や師からは『石頭な時代錯誤共』と中傷され、非難されるようになった。

流派の消滅や統合を憂う者もいたが、『時代の流れ』とか、『西洋魔法に飲み込まれないためにはいた仕方なし』とかいう正論には敵わなかった。

しかも、これに味をしめた一部の『物好き』、というより『先進的な連中は、陰陽道と西洋魔術の統合すら考えていた。』

非難や反対をする者はほとんどいなかった。カルチャーショックとすべきか、関西の術師の間では、一種のセンサーシヨナルが起っていたのだ。

「今まで名前を聞いたこともない様な弱小流派の知識のおかげで、ウチの術は大分高性能になったぞ……使える新術もいくつか出来た……だとすると……」

「もしかしたら案外、陰陽道や神道術に合う西洋魔術もあるのでは

ないか？」

「これを機に、西洋魔術や魔法世界のことを今一度調べてみるのも良いかもしれないな……」

今まで関西呪術協会の者が西洋魔術や魔法世界を調査する時は、あくまで『敵対者』としての視点だった。

つまり調査内容は、あくまで『敵がこれを使った場合はどうするか』とか『これを打ち破るにはどうすればよいか』とか、手っ取り早く言えば『対策』や『打破』のためであった。

しかし、『呪術と融合できるかどうか』という視点で調査するのなら、話は全く変わってくるのだ。

そんなある日、総本山の執務室で筆を取っていた近衛詠春の前に、1人の秘書　ただし巫女服を着た　がやって来た。

「長、夜白刹様からお手紙です」

「夜白君ですか」

詠春は場に合わない蠟で封印が施された西洋風の手紙を受け取り、軽く驚きながらも、近くに合った漆塗りの棚の引き出しに入っ

たナイフを取り出した。

銀色の、これまた西洋風のナイフには術式が施されており、これで開封しないと術式が発動、無理矢理開封しようとした者を焼き殺すらしい。

詠春もそんな末路を遂げたくないし、部下や秘書にも勝手に開封することを禁じているので、幸いなことにトラップが発動したところを見たことがない。

ちなみに詠春が刹那に連絡する時に送る手紙にも、同様の術式が仕掛けられている。最初に合った時に、連絡用として刹那から渡されたものだ。

手紙の内容を一読して、詠春は一言唸った。

手紙の内容は、麻帆良祭最終日に世界樹の魔力を狙い、何者かが行動を起こす可能性が高いために、調査と、できれば予備戦力の用意を願いたいというものだった。

詠春は、考え込んだ。

調査については問題ない。

西の戦力再編によって、自分の手元には信頼できる調査員が何人かいる。

今回の発起人が西に潜伏している可能性もある。流石に西日本全てを調査するなど不可能だし時間もないが、『火の無いところに煙は立たず』の言葉通り、西の勢力圏内すべてを調べる必要などとも無い。大戦時に『完全なる世界』を追っていた詠春には、その程

度の知識はあった。

それに大義名分もしつかりある。世界樹の魔力が何者かに利用されれば、麻帆良だけの問題にとどまれない。麻帆良のバックである連合はもちろん、隣接する西にとつても無視できない。

悪用した者が、日本列島や世界の消滅などに使わないという、保証はないのだ。

が、戦力となると話は別だ。

『演習』とか『地理調査』の名目で戦力を派遣することもできるが、そんなことをすれば東との戦争の引き金になりかねない。

これが麻帆良学園からの正式な依頼なら話は違ってこようが、今回はあくまで『夜白刹那』個人の依頼である。

そして麻帆良も、部外者が入り込んできては邪魔なだけであろう。

そもそも東と西は、言うなれば相互不可侵同盟を組んでいるだけで、相互扶助の同盟など組んでいない。言ってしまうえば、西に東の危機に参戦する義務はない。

詠春個人の意見からすれば、東の危機を助太刀するのも吝かではないが、戦力には限りがあるし、東を敵対視はしていないとはいえず、味方だとは思っていない者は多い（そして事実味方ではない）。

しかし、刹那がそれを失念するとは考えにくい。

さらにあくまで『予備』戦力ということとは、実際に事件が起こったとしても即時投入されるといっわけではないのだろう。

少し考え込んだ詠春は、取り敢えず連絡用の呪符を取って通信を始めた。

第34幕「要請、それは可能で可憐な醜態 / Shout . . . in Down t

せつかなので西も絡めていきたいと思えます。

どう絡むかはまだ決まってはおりませんが。



第35幕「思惑、それは椿色の刃/Apart・・・Mated Princ

引っ張ってすみません。

麻帆良祭編開始です。

麻帆良祭が始まる数日前から、超<sup>チャオ</sup>リンシエン<sup>リンシエン</sup> 鈴音という偽名を使っている少女、夜白<sup>やしろう</sup> 慧鈴<sup>すれい</sup>は活発に動いていた。

彼女は学園に危険視<sup>マーク</sup>されること自体は不快に思っていなかったが、それでも少々鬱陶<sup>マウク</sup>しさを感じていた。

これが自分ではなく、あの夜白<sup>やしろう</sup> 香南<sup>かなん</sup>だったらどうなっていたことか……。

そう思い、超は苦笑した。

14番目（14女）である香南は、目下のところ、超のライバルの1人である。超が思うには、彼女には大きな欠点があった。実は香南は大の人間嫌いで、しかも異様に沸点が低い。もし、香南が数人の人間に『監視』されていたとしたら、即座に惨<sup>あ</sup>殺<sup>そひ</sup>始めかねない。

しかし、超も何も感じないというわけではない。

超は学園からの『誤解』を解く気はなかった。その方が学園に危機感を持たせるという意味で好都合だと思っただし、仮に襲撃を受けても人間にやられるほどヤワではない。確かに今の超には色々制限がかかっているのだが、神力が使えないというわけでもない。それに自作した武器もある。

『娘達』は多かれ少なかれ、刹那至上主義なところがある。それこそ平気で夜這いをする者もいれば、遠距離恋愛に徹している者もいる。

しかも超以外は全員神工生命体である。それも並の上級神より強い『異例』の、だ。

そのためどうしても、人間や部外者に対する感情が悪く　　というより淡白なものになってしまふのだ。

超ですら、刹那以外の人間から昼夜問わず監視されれば鬱陶しく思う。もつとも、それは当たり前前の感情だろうと言ってしまうえばそれまでだが。

それはともかく、超は不機嫌で塗り固められた表情を隠すことなく、ポケットから懐中時計を取り出した。取り敢えずは『カシオペア』と呼んでいるタイムマシンだ。とは言つても、チェコの職人が手掛けた高級時計に、超自身の神力を馴染ませただけなのだが。

もつとも超自身はこれを必要としていない。超の時間跳躍の能力に、発動媒体など不要だからだ。高速で目標座標軸の計算を完璧に行う必要はあるが、超の頭脳からすれば苦にならない。

では、なぜこんなものを持っているのかというと、一つは超の能力を隠蔽するため。言い換えれば、自分は『カシオペア』がなければ唯の人間というイメージを持たせるためだ。

そしてもう一つは、能力の受け渡しのためだ。実はこの『カシオペア』、魔力を込めれば誰でも使用が可能なのだ。超の能力は他人『だけ』を時間移動させることはできない。彼女はこれを使い、邪魔な駒を盤から退場させるつもりだった。

ちなみに超以外の人間が使えば、『麻帆良祭期間中しか使えない（正確には世界樹の魔力がピークになっていないと使えない）』、さらには『一度使うと24時間は使えなくなる』などの制限が付きまとう。

超はその『カシオペア』をネギィスプリングフィールドたちに渡すつもりだった。彼及びその一派にチヨコマカされると色々面倒事が増えかねない。

超は『カシオペア』を握りしめると、『韋天<sup>イテン</sup>』を使って姿を消した。

一方、学園側は色めき立っていた。もっとも、それは侵入者を警戒してのことではない。

世界樹には、とある伝説がある。

それは『学園祭中に世界中の麓で告白すると成功する』というものだ。青春真っ只中の学生の間で話題になりそうな話なのだが、実は伝説どころか本当である。というのも、内臓魔力がピークになった世界樹なら、生徒の『願い』を叶えることなど簡単な話なのだ。

相思相愛ならともかく、相手が断りたい場合や巫山戯<sup>ひんげ</sup>て告白した場合でも『叶って』しまうので大問題なのである。

もちろんだからといって、この告白防止に全戦力を使う必要などな

いし、使うまでもない。単に世界樹の周辺を哨戒し、告白に出くわせば阻止すれば良い。

それよりも危険なのは、いうまでもなく、世界樹の魔力を狙う不届き者である。

『彼』 『彼女』 かもしれないし、或いは複数かもしれないが、良心的な性格で、一般人に危害を加えないなどという保証はどこにもないのだ。

。しかも麻帆良祭期間中は国内、時には国外からも客が入る。

彼らが巻き込まれれば、魔法隠蔽という面からはもちろんのこと、人命的にも多大な被害を呼ぶ。

到底座視できる話ではない。

無論、襲撃者が来るのはあくまで可能性の話ではある。

が、連日連夜襲撃者と戦闘を行っている学園側にとっては、学園祭に襲撃が無いと決めつけるのはあまりに楽観的であった。

桜咲<sup>あざさ</sup> Y 刹那<sup>せしな</sup>とマナ A Y タツミヤの2人は、ベンチに座り屋台の焼きそばを食べていた。

麻帆良祭の前夜祭はすでに始まっており、いよいよ明日から麻帆良祭の開幕である。

もっとも前夜祭といっても、本格的な祭りといっても良いほどの賑わいではあるのだが。

「……ふう、世間は学園祭だというのに、女2人で景色を見ながら焼きそばか……」

「……言うなマナ、虚しくなるじゃないか。……確かに寂しいが、刹那さんに約束取り付けて、麻帆良祭後はしっかりデートしてくれるって言うってくれたじゃないか。

……これで、暫くは生きていけるよ」

サラリと危ない発言をするサクだが、マナは興味なさげに一瞥するだけだった。

「それは贅沢だろう？ 私だったら、刹那さんといえるだけで生きていけるが」

「まあ、そうだが……それでも望むことは悪いことじゃない……と信じたい」

幾分かブルーな気分になっているサク 単に刹那の傍に入れずに寂しいだけなのだが、彼女にとっては死活問題である を見つめながら、マナは呆れ顔でサクの肩を小突いた。

「そんなことを言っていないで、家族同士楽しもうじゃないか……祭りも戦闘戦ひも、な……」

「ああ……」

ペットボトルの茶を一口飲み、サクは急に真面目な表情になって頷いた。流石に仕事中に私情を持ちこむことはない。もつとも、食事中にそんなことをしても威厳の欠片もないのだが。

すでに『夜白家』はそれぞれ動きだしていた。

もつとも、彼らの本来の任務は近衛 木乃香の護衛である。だから夜白 刹那は木乃香を護り 傍から見れば、付き添いをしているだけなのだが 他の面々は各方面に散っている。

刹那が動く時は分身体に木乃香を任せるつもりだが、刹那は基本指揮を行う。これは今回に限ったことではなく、『夜白家』は大抵このスタイルである。

刹那の戦闘能力は低くはない。寧ろサク達に指導しているレヴェルなのだが、夜白 輪廻や夜白 煌月が強弁に刹那の戦闘参加に反対しているのだ。

「お兄ちゃんの手を煩わせるまでもない。だから、お兄ちゃんは指示を出すだけで良い……え？ 全然問題ないよ、全部殺すし壊すから。」

「……何なら、指揮だって私がしても良いけど。……とにかくまあ、『よほどのこと』がない限り、お兄ちゃんは指揮に徹してて。お兄ちゃんが戦場にいるなんて、私心配で心配で……早く終わらせたくて仕方無くなるの。」

そして、お兄ちゃんの前に現れやがった塵芥共を、凄く殺したくなるなーあ……………」

「その通りです。私たち2人がいる以上、刹那様の御手を汚させるような真似は致しませんし、害虫を刹那様ガイチュウに近付けるようなことも許しません」

輪廻と煌月がこう言ってしまうえば、刹那としては引き下がるしかなかった。

それにしても、輪廻が『よほどのこと』と判断するなど、一体どのような事態なのか。彼女なら『世界』全てが滅んでも、『些事』の一言で済ませてしまえそうだ。いや、実際済ませるだろう。

それもいつものように、艶やかな闇色の長髪を弄り、つまらなそうにしながら。基本輪廻は、刹那以外のことには無関心なのだ。

輪廻にとっては刹那が傷付けば『よほどのこと』だろうが、刹那が戦闘に参加しなければその可能性は著しく下がる。

そして実際の話、輪廻の指揮能力も低くはないのだ。もっとも高位以上の神獣は、多数の配下神獣を従えていることが多いので当然ともいえる。そもそも輪廻の存在レヴェルからすれば、刹那に従う必要性自体が無いのだ。

ところで麻帆良祭の最中には、『まほら武道会』というものが行われる。近年形骸化していたが、超が麻帆良祭を盛り上げ、『異常事エラ態』を隠蔽するため、そして襲撃者に何らかのアクションがあるかどうかを調べるために復活させたものだ。



超に参加を薦められた『夜白家』だったが、ほぼ満場一致で断った。『夜白家』のメンバーからすれば、そんな大会よりも『空間』内で訓練をしている方がよほど有意義だったし、レヴェルが違いすぎた。それに資金も困っていないから、優勝賞金を狙う意味もない。が、一応観戦はしておこうという話になり、これは綾瀬 夕映と長谷川 千雨の参謀コンビが担当することになった。2人共観察眼は確かだったからである。

ちなみに唯一参加しようとしていた月詠は、駄々をこねて暴れるも結局取り押さえられ、大河内 アキラに説教された。

ドン、と高い音を立てて花火が上がった。

前夜祭の時点で花火をあげるのだから、麻帆良祭のスケールがわかるだろう。何しろ学園都市全体で開催される祭りなのだから。

それを見ながら、マナは小さく呟いた。

「あゝ、刹那さんと一緒に花火を見ながらデートしたいな……」

欲望ただ漏れだったが、サクは小さく頷いた。どうやら、全く持って同意だったらしい。



第35幕「思惑、それは椿色の刃/Apart・・・Mated Princ

こんな感じで麻帆良祭編スタートです。

最近更新が遅れてきていますが、最低でも週に2話は更新していくつもりです。

ペースダウンして真に申し訳ありません。

第36幕「旋風、それは無言の閃き／Shape・・・Some Space

初日は主に学園側を描写します。

麻帆良学園の警備システムの一新にあたり、陣頭指揮を任されたのは夜白 刹那であり、彼の補佐に任じられたのは攻守のバランスがとれている実力者の瀬流彦教諭、そして警備システムの頭脳労働を担当している明石教授だった。

刹那は進んで協力した。なぜなら、麻帆良警備システムの強化は、『夜白家』の負担の減少を意味していたからである。そして刹那が提示した新案は、比較的速やかに近衛 近右衛門関東魔法協会理事の名義で連合に提出され、公認されている。

それと同時に、新案を実行に移すための装備・魔具や資材などが麻帆良に送られた。

実は麻帆良祭が開催される直前に、その新案のほとんどは実行され、点検なども済ませていたのだ。

その一つが、麻帆良学園都市のほぼ中心部にある空き屋を改造した作戦司令中枢だった。

刹那が最初に着手したのは、情報の一元化だった。これまでの警備システムでは総指揮を学園長が執務室（学園長室）で行っていたが、いくら監視システムを働かせていたとはいえ、所詮は執務室であり、全ての情報を円滑に収集し、管制するには不十分だった。

おまけに基本的に邀撃側は、それぞれ現場に飛んだ魔法教師や魔法生徒・警備員の自己判断だった。上（指揮側）も『向かえ』と命令するだけで、具体的な指示は出さない。

確かに、『戦場』とは流動的に動くものであり、イチイチ上の判断を仰いでいては仕方が無いし、そんな暇もない。また、単純な命令であればあるほど、部下が迷わないのも事実である。

が、これでは現場に任せ過ぎである。圧倒的多数の敵が多方面から攻めてきた場合、これでは指揮側・現場ともに混乱してしまう。

そこで刹那は、一見唯の空き屋にしか見えない建物を、指揮専用スペースに改造させた。しかも、その中枢は秘匿されている地下室にある。

ここには魔術的な監視網はもちろんのこと、監視カメラなどの電子ネットワーク的な情報も集中させている。これらの情報は麻帆良の財力にものをいわせて購入したコンピュータや、電子精霊たちが統合・管制する。

あとは、学園長若しくは指揮を代行する者が、その情報を周囲と協議して現場に伝え、指揮を取ればいい。

むろん、この施設は重要な戦略拠点だから、敢えて校舎から離れた空き屋に造られている。厳重に秘匿され、認識障害も何重にもかけている他、専用の結界まで展開している。

「戦力の増強が難しいのなら、情報収集力や管制能力を強化するほ  
かありません」

刹那はそう言って、会議室で力説した。

確かに戦力の増員は難しくても、その限られた戦力をどこにどう配置するかによって大分変わる。そしてそれには、迅速に戦況や状況を判断することが不可欠だった。

麻帆良祭初日、作戦司令中枢にて、警備網からの状況報告を受け取っていたのは、瀬流彦教諭と新任だが高い実力と頭脳で知られている黒礁氷くろさうすい 九十九教諭つくもだった。

この施設には大抵明石教授や、電子精霊の制御を行う式集院光教諭しゅうしゅうけいが腰を据えているが、襲撃も想定して、必ず戦闘員が常駐（有事及びその一歩手前では）していた。

瀬流彦教諭は若いながら、いや若いからこそか、刹那からの教えを迅速に吸収していった。どうやら学園側は、瀬流彦を刹那の後継者にするつもりらしい。事実、彼はそれなりに優秀の部類に入る人間だった。

「……………ん？」

昼食を取りながら祭りの様子を（カメラ越しに）眺めていた瀬流彦は呟いた。  
画面には平和な馬鹿騒ぎが映し出されていたが、そこに一瞬、不審な影が入るのを、瀬流彦は見逃さなかった。

「黒碓氷君、8番の録画映像を……何か入った」

「はいはい」

彼の隣でモニタを注視していた黒碓氷は、言われた通りにコンソールを叩いた。  
録画映像が巻き戻される。

「あ、そこで停止」

「はい」

浮かび上がった映像を、2人は肩を並べて睨みつけた。  
そこには

「……妖精？」

瀬流彦は頭を捻った。

かなり高速で移動しているのか、それとも光の屈折か何かを操っているのか、かなりブレてはいたが、それは羽虫のような羽を生やした人間に見えた。

「なんだこれは？ 妖怪や悪魔にあんなものいたか……？ いたと



しても、結界内では力が弱まるはずだから、あんな高速で移動（瀬流彦は、ブレている理由を高速で移動しているからだと判断した）  
できはしない……幻か？」

「まさか。監視カメラに、幻を映す機能が付いているとでも？」

呟いた瀬流彦に向かって、黒碓氷はある意味もつともな意見を返した。

「それもそうか……しかし、なんで魔術結界網は反応しないんだ？」

「侵入したのではなく、潜伏していた？」

「いや、刹那さんが術式を変更したおかげで、結界内に未登録の魔術反応があるだけで反応するはずだ……」

首を振った瀬流彦は、取り敢えず巡回中の者全てに連絡した。  
といつても、思念通話ではなく携帯小型端末である。思念通話は妨<sup>ジャ</sup>  
害の危険が高いと、緊急時以外は使われなくなった。

そんな瀬流彦の様子を眺めながら、黒碓氷は内心冷や汗をかいていた。

あれは眷属だ……おそらく、『はぐれ眷属』だろう。

黒碓氷は夜白やしろ 輪廻りんねの配下神獣だが、それでも高位の神獣である。そんな彼は、映っていた『異形アレ』が『神の眷属』だとすぐに分かった。そして感じた生物臭さから、おそらく『はぐれ』だと見当をつけた。

魔術監視システムに反応しなかったのは当然だろう。あの『はぐれ眷属』は魔術を使わず、神力で身を隠していたのだから。おそらくは幻術だろう。カメラに映ったのは、単に『アレ』が油断して制御を怠っただけに違いない。

参ったな。

黒碓氷は頭を掻いた。

眷属は大抵人間より強い。が、此処にいる魔法使いでも、戦い様によつては勝てるだろう。それよりも、『敵』に眷属がいるということの方が問題である。

単に人間に手を貸しているのか、或いは黒幕は神なのか。後者の可能性はまずないが、ゼロだと断言もできない。

自分に与えられた任務は、学園と『主』たちの緩衝材。もし、この眷属が天狐様（輪廻）の兄に手を出したら。

想像し、黒碓氷はブルリとその身を震わせた。

最悪、自分もとばっちりを受けかねない。あの最高位神獣は、配下

や奴隷の命などなんとも思っていないのだ。

現に、目の前で刹那が攻撃を受けたところを静観していたおかげで輪廻の怒りを買ひ、惨殺された配下神獣もいた。もつとも、配下を『道具』以下の扱いをしている神獣や神など寧ろ普通のことだ。黒碓氷自身もそうである。

取り敢えずは、天狐様に知らせよう。

黒碓氷はそう結論し、スーツのポケットに忍ばせてあった式神に触れた。

第36幕「旋風、それは無言の閃き／Shape・・・Some Space」

敵は完全にオリキャラです。

そこは注意してください。

第37幕「試合、それは限られた最条件 / S a w . . . A H o r r i f i c

武道会編はメインではないのでサクサク終わらせてます。

第37幕「試合、それは限られた最条件 / Saw . . . A Horrific

まほら武道会本戦は、麻帆良祭2日目に大々的に行われる。ある意味では、麻帆良祭最大の醍醐味メインイベントともいえた。

その観客席の中、普通は熱気と歓声に包まれ盛り上がっていて良いはずの場所なのだが、まるで氷柱が乱立しているかのような静かな場所があった。

二人の女子中学生が座っているのだが、なぜかひどく静かで、しかも空気が異様だった。

その少女のうち、能舞台リングから見て右側に座る小柄な少女は、本を読みながらポップコーンをつまんでおり、左側に座るクラス内ではともかく、全国的には長身の部類に入る少女はノートPCをタイプニングし、ヘッドホンで音楽を聞いていた。

おまけに二人とも、熱帯夜でもこうはならないほどのローテーションぶりだった。

観戦する気があるのかも怪しいが、それでも全く興味が無いわけではなさそうで、時折激闘が繰り広げられているリングを一瞥している。

「面倒だな」

「そうですね」

朝から幾度となく繰り返している会話の応酬を行いつつ、右側の少

女、綾瀬あやせ 夕映ゆえと左側の少女、長谷川はせがわ 千雨ちあめは不満げに互いを見や  
った。が、それも数瞬の間だけで、すぐに目の前の娯楽 といっ  
ても試合ではなく、本とPC に目を落とした。

2人の役目は麻帆良祭の観戦だった。侵入者が紛れ込んでいる可能  
性 そして何らかのアクションを起こす可能性を考慮したためだ。  
幸いなことに、一大イベントである麻帆良祭本戦中は、客のほとん  
どが試合会場こくに集まると言っても過言ではない。

言い換えれば、警備もやりやすくなるが、同時に試合会場に『異分  
子』が紛れ込む可能性が増えることを意味していた。

この2人だけで、何百何千と集まった観戦客、そして選りすぐりの  
参加者を見極められるのかというと、しっかり見極められるのだ。

参謀役というだけのことはあり、2人共観察眼は確かだった。それ  
に遊んでいるわけでもない。

実は千雨のノートPCは大幅な改造がされており、そのスペックは  
市販どころか軍用のそれを大きくしのいでいた。加えて試合会場に  
は様々な警戒網 魔力・神力・気などを感知する複合感知器センサーで電  
子網ネットワークが形成されており、その情報は逐一出力されている。

もっとも当然の千雨は、それを見ながらちやっかりゲームをプレイし  
ていたが。

そして夕映が持っている文庫本にも、実は侵入者を感知し、その情  
報を記録する機能を持つ魔具だった。彼女の自信作で、『番犬の書』  
というそのままの名前で呼んでいた。

とにかく千雨のPCには、常に試合参加者の繰り出す技の詳細はもちろん、参加者たちの気や魔力の巡りがそれこそゲーム画面のように表示されていた。

もちろん結界のおかげで、このことが周囲に不自然に思われることもないし、彼女たちの会話も不自然に聞こえない。

さらに2人には、もしもの時は『異分子』の排除ができる権限すら夜白 刹那から与えられていた。だから2人ともそれぞれの武器を持ち込み、いつでも動けるように待機していた。当然それは、観戦客は元より、試合参加者の猛者たちにも悟られはしていなかった。

ある1人を除いては。

「となり、よろしいですか？」

「ああ、アルビレオ＝イマ」

PCから目を離すことなく即答した千雨に、フードを深く被った青年は困ったように笑いながら肩をすくめた。

「今はクウネル＝サンダースで通っておりますので、本名ほんなで呼ばないでいてくれると助かるのですが？」

サンダースはそう言って、大仰にポーズを取りながら千雨の横に腰



を下ろした。  
そんな青年を見て、夕映はチラリと一瞥したが、すぐに本に視線を戻す。

「……それと、あなたとは初対面だと思いますが？」

「輪廻から聞いている……幼女好きのド変態だとな」

「これは手厳しい」

サンダースことアルビレオ、通称アルは大仰に驚いた顔をしながらフードを取った。長髪の好青年の顔が露わになる。

そんな彼を初めて見た千雨は、眉間にしわを寄せながら忌々しそうに舌を打った。

「っち……しかし、やっぱりあんた程の大物にはバレるのか……流石は『英雄』の重力魔術師だな」

「いえいえ、刹那から聞いていただけですよ……何でも、麻帆良祭中に藪蛇をつつく大間抜けがいると聞いたので。ぜひとも協力したいのですが、残念ながら、今の私では戦力にならないでしょう」

アルは刹那とは友人だった。というのも、無茶をしてボロボロになった彼を助けたのは刹那だったからだ。

当時のアルは回復不可能な程の重症だったが、刹那の『閉鎖の神眼』

で怪我の『元凶』、そして治らないという『現実』を閉じたために  
なんとか一命を取り留めたのだ。

アルの独白を聞いて、千雨はさらに不愉快そうに口元を歪めた。

「良く言っぜ。手っ取り早い回復を拒んだのは、あんただそつだぞ」

本来ならこの時、アルは完璧に回復するはずだった。が、それを彼  
自身が拒んだのだ。

「せつかく口実ができましたので、ちょっと隠居してきます」

そう言って彼は転移してしまった。あの状態で転移したのは流石だ  
ろうが、碌に礼も言わずに転移したアルに輪廻が激怒し、すぐに呼  
び戻された後手酷い折檻を受けたらしい。

そんなごたごたがあった後、結局アルは自然治癒に任せることを決  
断し、今は図書館島最下層部に籠って治療と研究を重ねていた。

「それにしても、その分身体ぶんしんの精度は流石ですね」

突如割り込んだ夕映はそう言っつて、アルを見つめた。

「フッフ、刹那の御蔭ですよ……彼には感謝してもしきれません」

目下のところ、アルの最大の研究テーマは刹那や輪廻の使う独自の術だった。

魔法使いというのは大抵、研究好きの変わり者が多い。アルビレオ  
「イマはその代表格といっても良いだろう。

実際彼は、魔法世界では最も有名な魔法使いの1人でもある。そしてその実力も本物だった。

療養中の身で、刹那から伝授された術の数々をマスターしている事実からも、それは容易に窺える。

「で？魔法使いの大御所様が何の用だ？ていうか、何で地上に出て来たんだ？……餌が欲しいのか？」

「……人を人里に下りて来た熊かなにかと一緒にしないでくれませんか？」

「いいじゃねえか、熊よりもよほど性質タチが悪いことは事実だろうに」

顎に手を当てて、否定できないと思ったのかアルは苦笑した。

「まずはネギ君ナギに父親からの遺言を伝えるためです。これくらいしか機会が無いでしょうし……」。

次に、刹那から聞いたことが本当なら、観戦させてもらいましょうかと思ひまして……フッフ、彼や彼の信者シンバの使う術はどれも興味深

いものばかりです」

「信者シンバとは失礼ですよ、サンダースさん」

「ああ、綾瀬さん……これは失敬」

アルはジロリと睨んできた夕映に頭を下げ、そのまま仮契約カードバクティオを取り出した。

彼のアーティファクト『イノチノシヘン』は、人間の能力や記憶を再生することができるアーティファクトだ。

それを見た千雨は少し表情を崩したが、すぐにだるそうな表情に戻った。

「成程、試合を利用して馬鹿げた親子喧嘩をさせるつもりか」

「そういうことです。結構負担がかかるのですが、刹那の御蔭で大分楽になりました」

次にアルは、ローブの袖から水晶がついたペンダントを取り出した。

「補給用の携帯魔力槽レイションか？ 私たちが持っているのと同じだな……輪廻リンのか」

「ええ、その通りです。一度でも実戦を経験した魔法使いは、ナギのような馬鹿魔力でも保有していない限りはこういった予備魔力を確保しておくものですが、特に輪廻さんのは素晴らしい。これを使

えば、瀕死直前までもっていかれても回復するでしょう。輪廻さんに頼みこんだだけの価値はあります」

「……よくOKしたな」

「土下座しても駄目だったので、刹那が言つと即答でくれました」

「……だろっな」

どこか哀愁漂うアルの肩を叩きながら、千雨は何度も頷いた。どうやら流石の彼女も、同情を禁じ得なかつたらしい。おまけにあっさり想像できるからさらに気まずい。

アルが席を離れた後、千雨はポケットに突っ込んであつた眠気覚まし用のチップを啜えると、周囲をぐるりと見渡した。

いつの間にか大会も終盤に入っており、周囲はますますヒートアップしている。

それにしても、面倒なことになってきたな。

千雨は荒々しく舌打ちした。

反乱を企てる者、というより 歴史に喧嘩を売る者。そして『夜  
白家』・超軍団・麻帆良学園・ネギー派・静観する姿勢を崩さない  
マクダウエル  
吸血鬼。

そしてこの期に及んで『英雄』の1人、アルビレオ＝イマだ。

当の本人は観戦するとか言っていたが、はっきり言って彼は信用な  
らない。悪人ではないが、仲間に平気で嘘を隠し通す男なのだ。

さらに他にも、隠れた駒がありそうな予感がした。

いずれにしても、面倒事になるのは確定だな……。

千雨はウンザリしつつ、刹那たちに危険が迫らないことを祈って  
いた。

口内に広がったミントの味が、いつも以上に苦く感じ、千雨は思わ  
ず顔を顰めた。

第37幕「試合、それは限られた最条件 / S a w . . . A H o r r i f i c

まほら武道会の描写はこれで終わりです。

サクとマナが抜けただけで、概ね原作通りに進んだと思ってください。

第38幕「深紅、それは染まりきりのルビィ / For . . . A M a n g l e r

最近忙しくなったので更新が遅れます。

申し訳ありません。



第38幕「深紅、それは染まりきりのルビィ / For . . . A Mangle

艶やかな闇色の長髪を弄りながら、夜白やしろ 輪廻りんねはおぞましい笑みを浮かべていた。  
そして小声で呟く。

「……捕まえた……」

次の瞬間、少女の手から爪が高速で伸び、『ナニカ』を壁に磔はりつけにした。

「あッ……」

小さく悲鳴が上がり、鮮血が四方八方に飛び散った。

輪廻はニヤリと笑うと、そのまま拳の連撃を叩き込んだ。尻尾で押さえつけ、高々と相手の身体を持ち上げる。

「……なんだ、あの時の『はぐれ眷属』じゃない……黒碓氷どれいの考えも、ちよっとは役に立つみたいだねーえ」

血を流しながら呻く相手は、かつて輪廻たちが撃退した『はぐれ眷属』ガウ＝シユレーメンだった。今は麻帆良学園男子高等部の

制服を着込んでいる。

先程までの表情とは一転し、急につまらなそうな顔になった輪廻は、尻尾の内一本を槍、というより注射針のように鋭く、細くしてシュレーメンの口の中につっ込んだ。

シュレーメンの体内に侵入した尻尾は彼の身体を掻き乱しながら、全身、そして脳を弄りまわした。

肉が裂け、骨が磨り潰れる嫌な音が響き、シュレーメンの身体は電気ショックを浴びた魚のようにビクビクと痙攣する。そして時折、思い出したように身体をあちこちから鮮血が吹き出て、地面に流れる。

最初は深紅だったその血は、だんだん濁り、ついには毒々しい苔色モスグリーンに変わっていった。そしてシュレーメンにも、羽虫のような羽が生えており、その肌は灰色に染まっていた。

「あ……………が……………ぐげッ……………」

「ふーん……………ああ……………成程ねえ……………」

淡々とシュレーメンの脳と身体から情報を読み取り、吸収しつくした部分は壊しながら輪廻は顎に手を当て、自身の頭に流れ込んでいた情報を吟味する。

数分後、身体の中『だけ』を壊されたシュレーメンの身体は地に落ちた。が、すぐに身体の再生が始まる。

ところが、輪廻はそんなことは一向に気にせず、シュレーメンから引き抜いた尻尾を一瞥し、

「……………うおえ……………ッ……………」

口に手を当て、小さく呻いた。

シュレーメンの血や組織がべったりとついた尻尾は、すぐにいつものようにふさふさの尻尾に戻った。

輪廻と刹那にしか視認できない尻尾だが、その色は彼女の髪に負けないほど、闇を切り取ったような漆黒の色をしている。付着していた血や組織は消えていたが、それでも不快感は消えなかった。

そしてこの9本の尻尾には、ある程度の自我がある。一本一本に、天狐1匹分の力がある尻尾は常に夜白やしろう 刹那せつなを愛し、求め……………刹那の敵を憎んでいた。

普段、輪廻はこの尻尾を伸ばし、硬化させて使うが、実は他にも様々な使い道がある。

天狐の尻尾は『万変の尻尾』とも言われ、ありとあらゆるモノに化けることができるのだ。

最も輪廻はあまり多用しない。

わざわざ刀に変化させなくとも、一度薙ぎ払えば『世界』ひとつは壊せるから、特に意味が無いと言った方が正確だろう。

まったく、気持ち悪い。

輪廻は吐き気を堪えながら、未だに再生途中のシュレーメンを見下ろした。

彼女の仕種はどこか妖艶だ。

刹那に甘えたり刹那を癒したりする時もそうだが、天狐キツネは人を誑かすのが得意なのだ。

「あなたの命の残量ストックはあと1かぁ……あんまり遊べないねえ……」

輪廻は残念そうにシュレーメンを見つめる。

別に完全に死んだ後も生き返らせればよいのだが、輪廻の中では塵コ芥掃除よりも重要な事がいくらでもある。

まずは刹那に情報を伝え、指示を仰ぐ。

許可が出れば、『敵』を皆殺しにする。もっとも学園側に実力を見せるわけにはいかないから、秘密裏に、だが。

「……あなたの植物の知識と幻術でも、世界樹アレは操れるようなモノじゃあないわよ……」。

まったく、これだから塵芥チリは……浅はかで、馬鹿で、雑魚で、気持ち悪くて、ウツトウシイうえに、ウザッタイ……お兄ちゃんを、どれ程煩わせれば気が済むの?」

興奮めした輪廻は、そのままシュレーメンの顔を踏み潰した。シュレーメンはあっけなく絶命し、彼を構成していた神力は拡散し、消えた。

麻帆良祭最終日。

その日は、学園側の混乱と怒声により幕を開けた。

学園都市内のあちこちに多数の悪魔が召喚され、学園内は一気に戦場と化した。

「何だ、これは!?!」

その日、司令中枢に詰めていたガンドルフィーニ教諭は狼狽した。ディスプレイは数百・数千体の敵の襲来を告げており、それは学園側の予想を遥かに超えていた。

「学園長!」

「うむ」

悲鳴を通り越して怒声に近い報告に、中枢の司令席に腰を下していた学園長は静かに頷いた。流石に経験が違うのか、彼は努めて冷静

だった。

「悪魔は決して良心的な者ばかりではない、民間人保護の結界を展開するのじゃ、あれは強力だが半日も持たぬ……その間に決着<sup>ケリ</sup>をつけねばなるまい。」

明石教授は敵の目的と正体の調査を、他の者は邀撃に入れ……ここが踏ん張りどころじゃぞ！」

その声に、学園側の教師や魔法生徒、警備員たちが一斉に動き始めた。

「『夜白家』たちは？」

学園長が小声で聞くと、タカミチ「T」高畑<sup>たかはた</sup>教諭に代わって学園長の傍らで待機している黒碓<sup>くろすい</sup>氷<sup>すい</sup> 九十九<sup>つくも</sup>教諭が学園長の耳元で囁いた。

「すでに行動を始めております、なお、『夜白家』は基本的に学園側には悟られずに共闘します……そして、超たちも行動を始めます」

「ふむ、超君たちはどちらの戦力なのかの？」

「少なくとも悪魔側からは敵とみなされているようです」

「ふむ……戦場では『敵の敵は味方』という論理がある。九十九君、

超君達を攻撃目標から外すように通達するのじゃ」

「御意」

黒碓氷は命令通り、学園側における『夜白家』との仲介役を務めていた。

『夜白家』について学園側で知っている人間は、彼を除くと学園長と高畑教諭だけであった。

そして学園長は密かに、『夜白家』に邀撃を依頼していた。

なお、『民間人保護の結界』は学園警備システムに新たに導入された新システムで、学園側で『関係者』として登録されていない人間を、問答無用で隔離する結界である。

おそらく生徒や一般教師、来訪者たちには、悪魔と魔法使いの戦闘を、学園都市全域で行われているショーにしか見えていないだろう。

そしてこの結界の開発者は、なんと超鈴音チャオリンシエンだった。

超が極秘で開発したこのシステムは、一旦メガロメセンブリア連合を経由して麻帆良に送り込まれていた。

当然、学園側はこのことを全く掴んでいない。

「なに、ベラルーシだって？」

学園都市の外側のレストランで近衛木乃香このえこのかとデート（という名の護

衛)をしていた刹那は、輪廻から連絡を受けていた。

『そう。今回のこの騒動、主犯は『ベラルーシ魔術同盟』という連合傘下の魔法組織だよ。おそらく、独断だろうね』

日本に関東魔法協会があるように、世界中(旧世界)に連合傘下の魔法組織は存在する。

ベラルーシ魔術同盟は、表向きはロシア正教傘下の組織だが、実態は魔法を研究する連合の組織らしい。

「ベラルーシって……あのベラルーシか？東欧の……」

『そう、本部はプレストにある』

ベラルーシ共和国。

別名白ロシアとも呼ばれる東欧の共和国である。首都はミンスクで、プレストはポーランドとの国境付近にある都市である。

なお、フランス西部に同名の湾岸都市があるが、そのプレストとは全く違う。

輪廻が言うには、ベラルーシ魔術同盟はロシア正教の皮を被った魔法組織だが、研究組織とは名ばかりの実験組織らしい。

『黒い噂しかないね、スベツナズ露特殊部隊の方がまだマシかも。非合法の実



験・研究・開発から暗殺まで何でもござれだよ。もつとも、大戦後には用済みとなつたらしいけど』

「用済み？」

『公式では『原因不明の事故』で本部が爆発し全員死亡。地元メディアでは宗教関係のテロだと結論されたみたい』

つまらなそうに言う輪廻に、刹那は顔を顰めた。

戦後になれば、自分たちが碌でもない実験をしていたという事実は汚点にしかない。そして戦争が終わつた以上、そんな研究に多額の資金を投資する意味などない。

ましてや終戦後の連合は酷く疲弊していた。人々は平和に酔っていたとはいえ、懐ふとこが、お寒い状況だったのも事実であった。

おまけに戦火は旧世界にも飛び火しており、連合の敵対組織や中立組織は手酷いとばつちりを受けてしまった。

当然、他組織の連合への感情は悪化し、いつ戦争が再発するかわからない有様だった。いや、今もそうである。

「それで、今回の指導者は？」

『ルサールカ』

「え？」

『えっと『ルサールカ』だって。魔術同盟では幹部は暗号名コードネームで呼ば

れるらしいよ。あと、『キト八』という幹部が来ているみたい』

「『湖妖精』<sup>ルサールカ</sup>と『誘拐者』<sup>キト八</sup>？そりゃまた大げさなコードネームだな」

刹那は思わず苦笑する。

「見つけられるか？」

『もちろん』

「よし、捕えろ」

『……殺さないの？』

「ああ」

『……オーケー』

輪廻の若干不満げな声とともに、携帯が切れた。

刹那は木乃香が待つているであろう席へ戻りながら、今後のことについて思案を巡らせていた。

「非法な実験か……嫌な予感がするなあ」

刹那は小さく呟いた。



第38幕「深紅、それは染まりきりのルビィ / For . . . A Mangled

すみません、これから先更新が遅れます。

敵の正体が明らかになりました。

娘達編第1幕「夜白硯璃の場合」(前書き)

今回は趣向を変えて、おまけの娘達編です。ドクターズ

ちよくちよく、こついつのも入れていききたいと思います。

## 娘達編第1幕「夜白硯璃の場合」

とある『世界』の、管理者のみが入れる空間。

そこはとても広いが、少女が歩いている場所は狭かった。

狭いとはいえ、大の大人が寝ころべられる程の幅の廊下だったし、大理石の廊下は朝日を浴びて輝いており、狭い場所特有の閉塞感は皆無である。

廊下は少女以外動く者は無く、その少女も無言で歩いているため、酷く静かだった。

少女は縹色ライトブルーの詰襟の服  
『ドクターズ娘達』専用コスチュームを着込んでいた。

背丈は170センチ後半。スタイルもかなり良く、美少女というより美人と言った方が適切だろう。

しかし、特徴的なのは、背の中ほどまで伸びた純白の髪と肌、そして瑠璃色ラピスラズリの瞳だった。

それだけでも目立つというのに、彼女は背中に巨大な斧槍ハルバードを背負っていた。浅葱色パールブルーの柄の長さは2メートルを超し、長く伸びた刃は不気味に輝いている。

彼女の名前は夜白やしやしろ 硯璃すずじ。

夜白 刹那せいなが造り上げた神工生命体『ドクターズ娘達』の1番目（長女）にして、統括と『支配』を担当する少女である。

硯璃は夜白 輪廻・夜白 煌月の特徴や個性を色濃く受け継いでいた。

その理由は単純で、硯璃は試作型という概念が強いからである。もつとも、だからといって性能が低いというわけではない。寧ろ、最も機能追加を繰り返しているため、戦闘能力などは姉妹一である。また、姉妹を統括するという製造目的のため、スペックは必然的に高くなる。

そして硯璃には、姉妹では一番長く刹那の愛を受けているという猛烈な 狂信的な自負心があった。

言い換えれば、姉妹で最も刹那を慕っているのは自分だという確信を持っていた。

そして、彼女は輪廻や煌月に良く似ている そう、似すぎていた。

「うーん……困りましたわ……御父様にどう説明したら……」

硯璃は自身の執務室に入り執務を始めて、開口一番こう言った。

彼女の執務室は、トンデモなく広がった。それこそ、小学校のグラウンドほどのサイズはあった。が、空きスペースはほとんどない。

部屋の大部分は様々なサイズに区分されたディスプレイや立体映像装置、そして幾つもの引き出しがついた巨大なキャビネットや本棚が占めていた。

さらに、恐らく神力で動くのであろう、人間界のいかなる機械にも似ていない、オブジェのような不思議な形状の器具が並んでいる。

それを除くと、後は漆黒の執務机と同じく黒いソファくらいしかない。そして部屋の片隅には、パキラという観葉植物の鉢が居心地悪そうに置かれていた。

仕事量なら刹那や煌月に匹敵するであろう硯璃の最大の任務は、管轄『世界』の『支配』である。

『支配』といっても、それはさり気無く軽く、誤った変化を是正する程度のものだ。もっとも硯璃は、全てを自身に跪かせ、消すことができる『世界覇者』という能力を持っているので、『世界』に大きく干渉することも可能だった。

そして硯璃は、その能力をフルに使ってより良い世界造りを目指していた。

つまり 全てが、自分の愛する父の思いがままになる世界。

刹那から莫大な権限を貰っている硯璃には、それが可能になるだけの力があつた。

「あそこでまた、予定外の反乱ですか……国の統治者の人選を誤つたようですわ、至急処分して、新しい統治者を輩出させなくては…



…」

ディスプレイを眺めながら、硯璃はため息をついた。が、すぐに明るい笑顔になり、ポンと膝を打った。

「そうですね、消せばよいのですね……御父様に逆らう逆らう戯<sup>たわ</sup>け者は、全て……そうと決まったら大変です、すぐに準備をし、わたくし直々に処分しなければ……。

嗚呼、愛しい愛しい御父様……すぐに硯璃が、戯<sup>たわ</sup>け者を消してさしあげますわ」

硯璃は瞳を輝かせながら立ち上がった。

口元は狂気に酔って三日月形に歪み、純白の頬にはほんのり朱が混じっていた。

同時に、彼女が脇に置いてあった斧<sup>ハルバード</sup>槍の不気味な輝きがさらに増し、獣の唸り声のような『声』が響いた。が、それは獣の声のようでもあり、亡者の絶叫のようでもあり、詩人の歌声のようでもあった。

「ウフフフ、愚かな愚かな戯<sup>たわ</sup>け者……そうですね、せっかく人間界に行くのですから、この際御父様の意思に歯向かいそうな戯<sup>たわ</sup>け者共<sup>ども</sup>を全て消しておきましょう。ええと……」

硯璃は立ち上がった姿勢のまま、高速で指を動かした。たちまち、ディスプレイに何百・何千もの人間の名前と顔写真が浮かび上が

る。

「あら、こんなにいるのでしたね……世の中、間違えておりますわ、全智全能の神である、御父様に逆らう馬鹿な馬鹿な者共が、こころもへばり付いているなんて……壊してやりましょうか、そうですね……壊してやりましょう」

嬉しそうな顔から一転し、硯璃はギチリ、と大きな音を立てて歯を食いしばった。バキン、と音とともに奥歯が砕け散った。瞳は紅く炎のように輝いている。

「惨たらしく惨たらしく……消して差し上げましょう、戯け者共……貴方達が存在している事実だけで、御父様への冒瀆です。これ以上、素敵な素敵な御父様への侮辱は許しませんわ……夜白硯璃の名にかけて」

そして、彼女は小さく笑った。

娘達編第1幕「夜白硯璃の場合」(後書き)

早いもので、ついに50話目となりました。

これからもどんどん書いていきますが、来週からテストですので若干遅くなります。

第39幕「予定、それは狂った時計／Brilliant・・・Hopel

遅くなつて申し訳ありません。

年末年始も更新は遅くなるかもしれませんが、御了承下さい。

なお、カクテル・パーティーはとある方からアイデアを拝借させて  
いただきました。有難うございます。

第39幕「予定、それは狂った時計／Brilliant・・・Hopel

悪魔の軍団が大暴れしている中、彼女は呆けた表情をしながら屋根の上に立っていた。

「こらまた……ドエライことになってきたなあ……」

和服の女性の名前は、天ヶ崎<sup>あまがさき</sup> 千草<sup>ちぐさ</sup>。

元関西呪術協会所属の呪術師で、今は『夜白家』に鞍替えしていた。藍色の振袖姿は本来なら目立つだろうが、麻帆良祭中ではそれほど目立たない。ましてや、今は学園都市のそこらじゅうに悪魔が出現し、魔法使いやロボット軍団と死闘を繰り広げていた。

成程、夜白はんが言っておった通りやな。戦争という三文芝居を見る観客席として、麻帆良<sup>まほろ</sup>は特等席や……。

千草は腕を組んで感心した。

つまりは、『敵』も麻帆良のどこかで『観戦』しているということだろう。

麻帆良学園は唯の都市ではなく、学園都市である。学園都市ということは、教育機関や研究機関を中心に発達している都市ということだが、これは単に経済やインフラ的な問題ではない。

当たり前の話だが、麻帆良の中心部には大学などの学校群が存在している。そしてそこには、教員や生徒が集まる。

そして生徒の出し物がメインである学園祭ともなれば、当然、店やイベントは学園中心部に密集する。

そうなれば、必然的に客も中心部へと引き寄せられる。

言い換えれば、広大な麻帆良学園都市とは言っても、人口密度が集中しているところは中心部だけとなる……特に、麻帆良祭期間中は、それはつまり、

「護りづらく、攻めやすい……ということやね」

中心部であろうとなかろうと、少なからず人が住んでいる。学園側は、その全てを護らなくてはならない。場所によって、民間人の安全や生命に優劣をつけるわけにはいかないのだ。

ところが『敵』は、唯中心部を目指せばよい。そうすれば『詰み』だ。民間人が密集する中心部エリアに、悪魔が一匹でも侵入した時点で学園側は敗北する。もっとも、民間人は結界により隔離状態にあるのだが、一〇〇パーセント安全とは言い切れない。

つまり此方は戦力分散という愚を犯さざるを得ず、『敵』は戦力の一点集中が可能となる。

「普通に考えれば此方が不利やるなあ……。『攻める方より護る方

が三倍有利（攻めるには護る方の三倍の戦力が必要）』という論理は、あくまで本職<sup>プロ</sup>同士の戦いでの話や……。

民間人が足を引っ張ると、護る方の利点はあつという間に崩れるからなあ……」

前回 スクナ復活 での失敗。

それは、自分に戦略のイロハがなかったことも一因だということに、千草は気付いていた。それから彼女は、夜白<sup>やしろう</sup> 刹那<sup>せつな</sup>に色々と教わっていたのだ。

同じ轍を踏むほど、阿呆なことはしたくない。

そんなこともあって、千草は（最年長だということもあってか）補<sup>バ</sup>助戦力の指揮役を拝命していた。

「ほんなら、こちらはどうぞすればいいんでしょうかー」

緊張感の欠片もない声で、千草の横で小太刀を構えていた月詠<sup>つぐよみ</sup>がヘラヘラ笑いながら千草を見た。

スクナ復活時と違い、この二人の仲はかなり良くなっている。今では千草は月詠の母親のような役になっていた。しかも、それなりに様になっている。

月詠は、得物を変えていた。

とはいっても、二本の小太刀であるということには変わりがない。

以前のものは訓練で折れてしまったため、『契約料』も兼ねて刹那<sup>せつな</sup>が夜白<sup>やしろう</sup> 輪廻<sup>りんね</sup>に頼んで造らせたものだ。

『玉兎<sup>たまうと</sup>』という、二刀一組の最高級品である。完全な月詠<sup>オーダーメイド</sup>専用だ。

「せやなあ……」

千草は天を仰ぎ、考え込むような仕種をした。  
今回、補助戦力　つまり千草、月詠、綾瀬　夕映、相坂　さよは、  
それぞれ違った役割を与えられていた。

千草が指揮、月詠が遊撃、夕映が偵察と千草の参謀、さよが回復薬による治療。

そして現在、夕映は接近してきた悪魔を次々撃墜しており、さよはそんな夕映に魔力の補給を行っていた。

夕映が開発したばかりの新兵器、カクテル・パーティ『火焰式典』は、簡単に言えば空中砲台のようなものだ。

最大八台を同時展開・制御が可能で、弾丸タイプのロブ・カクテル『炎症瓶』を斉射・点射する。

ところが予想以上に消費魔力が増えてしまい、それほどタフとは言えない夕映が長時間使用するためには、補給が不可欠となってしまう。

「『憑依体』も燃費が悪いですし、一体なんで私の造る魔具はこうなのですか……？」

夕映はそう言って嘆いたが、威力が高い分、多少のリスクは仕方が



無いと千草は思っていた。彼女も呪術で使うため、呪具には一通り精通している。効果や威力が高い強力な呪具であればある程、消費魔力が高いのは、ある意味では常識だった。

「ぜー……ぜー……」

「ああ、夕映はんがぴんちゃん、行ってやってやー」

「はいな」

月詠は目を輝かせながら、大きく跳躍して悪魔の群れの中へ飛び込んで行った。

『我流神鳴流……零鳴閃』れいめいせん

そして、数十体いた悪魔は瞬時に消えた。

それでは足りないようで、月詠は新たな獲物を見つけると、突撃していった。

「……銃剣付けた小銃持たせても、同じ事しそつやなあ……」コールドスチール

そんな月詠を見て、千草はポツリと呟いた。

「はー……は……あ……」  
『殲爆』と『連爆』、4回連発がやっとですか。……あー、携帯魔力槽は尽きましたし、戦果は微少……えーと、一〇〇〇にも満たないですか。非効率もいいところですね」

そんな千草の隣に、憔悴した表情で愚痴をこぼしながら夕映が座りこんだ。彼女は小脇に電子ボードを抱えており、どうやらそれに、戦果が記載されているらしい。

ちなみにこの夕映は『本体』である。『憑依体』は最大30分の駆動がやっとなので、使いどころが難しいのだ。対軍戦闘では、30分などあつという間に立ってしまふことも多い。体感的には短く感じるかもしれないが。

夕映は装備していた照準用のゴーグルをはずすと、ぐったりと背中から倒れ込んだ。

慌ててさよが駆けてきて、水筒からレモネード（いたって普通の味だが、疲労・魔力回復効果がある）を注いで、夕映に渡す。

小声で礼を言った夕映はそれを飲み干すと、着込んでいた黒いジャケットの内ポケットからキャンディを取り出して口に放った。甘酸っぱい味と香りが口内を満たし、夕映はようやく一息ついた。

「全く、学園側は揃って役立たずですよ……思ってたよりも迅速に動きましたが、実力が伴っておりませんね。下手すれば足を引っ張りそうです……面倒ですので、見捨てて良いですか？」

若干投げやり口調で、夕映が言うと、千草は苦笑しながら頷いた。

「少しくらいならかまわんやろ。というか、こちらは基本的には秘匿された存在や。『術師』として学園側と接触するわけにもいかへんやろ」

「じゃあ、さり気無く気付かれないように助けると？余計面倒です。悪夢です。もう見捨てます」

「いや、だめですよッ！」

もう我関せずと言わんばかりに寝転がる夕映に向かって、さよは慌てて喚いた。

が、聞く者は皆無だったし、当のさよもそれを自覚していた。

何だ、これは。

その頃、超チャオ鈴音リンシエンは背筋に冷たいものを感じていた。

『敵』が襲撃してきた。

これは良い。寧ろ予定通りである。悪魔を召喚したのも想定内だった。足りない戦力を召喚で補うのは、西洋魔術や陰陽道、ケルト魔術などの数多くの魔術系統からして見ても、常套手段と言えるものだ。

召喚術はそれほど高難易度の術ではない。無論、呼び出すモノにもよるが。

その点、今回呼び出された悪魔は下級ぞろいで、所謂『爵位持ち』（高位の悪魔は爵位を持っている）の悪魔はほとんどいない。

それこそ、連隊指揮官や大隊指揮官クラスにしか、爵位持ちはいない。

そして数少ない爵位持ちも、もっぱら指揮に専念しているらしい。

ところが、超という偽名を使っている少女、夜白やしろ 慧鈴すずいは慄然としていた。その理由は単純だった。

何なんだ、この数は!?

そう、悪魔軍団の数だった。その数は千どころか、万を超えていた。

どうやら一斉に召喚されたのではなく、何次かに別れて逐次召喚されたらしい。しかも倒されて消滅した悪魔の後、それを補うように、新たな悪魔が召喚されていた。

この規模は、超スケールの予想を越えていた。

落ち着けッ。夜白やしろ 慧鈴すずい!!

超は自身を叱咤し、頭を抱えた。

今、彼女がいるのは『空間』内の統制室だ。彼女のロボット軍団  
その数は5000程 をコントロールするための部屋である。

「くっ……一体なんで、どうしてこんなことに……。これだけ大規模な異常事態なら、後世の歴史に大きな変化が起こるはずなのに……。  
……。  
そうだったら、もっと大きな戦力を用意して……。骸亜がいあに頼んで、彼女の私兵である『蹂躪軍団』コンキスタドルを連れてきたのに。……。あ、あ、あ、そうかあ……。」

訛り口調ではないことに気付きもしないほど狼狽していた超の表情は、一瞬にして憎悪と怒りに染まる。  
瞳は紅く染まり、紅い螺旋がくるくると廻っていた。

「邪魔するんだな……。私と刹那さんを……。刹那さんを邪魔するつもりなんだな……。フッフッフ……。根本ソウスから……。かき消える……！」

そして、超はコンソールを叩きながら喚き散らした。喉から血が噴き出るかと思うほど絶叫し、いや、実際に血が噴き出た。  
飛び出た血は空中に静止したまま蠢き、時折赤黒く輝きながら波打っていた。

「はあ……はあ……ちいッ……ホディ素体がちよとおかしくなた力、まあ、仕方無いヨ……」

『超鈴音』の訛り口調に戻った少女は、飛び出た血を口の中へ『回収』しながら不気味に笑った。

「もう一切の容赦はしないネ……刹那サンに逆らうとどうなるカ……エラーデータ…思い知れ、異常者共」

最後まで恐ろしいほど低く呟いた超は、笑みを崩さずに天井を眺めた。

第39幕「予定、それは狂った時計／Brilliant・・・Hopel

超は人間がベースとなっているので、たまに不具合が生じます。

次回も遅れそうですが、よろしくお願いします。

第40幕「氷結、それは消えた心／Know・・・Red Quark」(前書)

冬休み中は更新できないかもしれません。

なるだけペースをあげたいのですが、どうしても遅くなってしまう、申し訳ありません。



第40幕「氷結、それは消えた心/Know・・・Red Quark」

超<sup>チャオ</sup>リンシエン 鈴音は一息つくと、苛立たしげに立ち上がって、後ろを振り向いた。

事態が自分の予想を超えていたことは、この際どうでも良かった。

許せないのは、それでも独力では收拾をつけることができない自分の非力さだ。彼女の能力は強力だが、使いどころが難しい。強制的に歴史を戻しても、それが彼 夜白<sup>やしほ</sup> 刹那<sup>せつな</sup>にとって『最善の歴史』になるかどうかはわからない。

刹那にとっての最善の歴史となつて、刹那や家族以外の誰がどうなつても、彼女は知ったことではなかった。

「 そう思うだろう？ 骸亜 」

「 ……ん 」

超が狂気に口元を歪ませながら振り向くと、そこに一人の少女が立っていた。

艶やかな黒髪をポニーテールにしている、毛先だけ白い。前髪が長いせいで両目は隠れてしまっているが、肌は白く、整った顔立ちから美少女だとわかる。身体は細く、身長は超よりかなり高いが、スタイルは輪廻に負けず劣らず良かった。

少女は、超と同じ服　軍服風コスチュームを着込んでいた。

『ドクターズ娘達』の3番目（3女）である夜白やしほ骸亜がいあである。

骸亜の担当は『時間』と『境界』。月日や四季なども制御するほか、生者と死者の管理も行う。娘達では最も多忙であり　最も刹那から離れている者の一人だ。

そのため、能力の副産物的な話ではあるが、彼女にも時間跳躍が可能である。最も歴史の是正はできないから、ほとんど無駄な能力であった。

が、今回は違った。

「……………それで、僕を呼び出すなんて……………しかも、こんな戦地トコロに。

仮にも姉なんだから……………もっと労わってくれても……………良いと思う……………

……………第一

「

「刹那さんに　主君ロードに手をあげる輩がいる、のに？」

小声で謡うように文句を言う骸亜にぐつと顔を近づけ、彼女を見上げながら超はニヤリと笑った。

それを聞くと、骸亜の表情が一変　いや、豹変した。

「何だつて！？　巫山ふみやま戯た奴もいたものだ、『この時代』にはまだそんなのがいたのか。……………信じられない……………実に不愉快だ」

髪が逆立ち、朱色の瞳が露わになった。どんよりとしたその瞳は、腐ったザクロのようにどろどろに濁っている。

そして、急に饒舌になった骸亜は、華奢な身体に力を入れ、背を屈めて超を見る。

「……………それで、僕はどうしたらいいんだい。……………コンキスタドール『蹂躪軍団』を呼んで……………ナノサイズの肉片も残らず『蹂躪』……………してあげれば……………いいのかい？」

静かになったが、明らかに楽しそうにしている骸亜は、再び謡うように  
うな　眠気を誘うような　声で超に囁いた。

夜白骸亜は輪廻のサディスティックな部分を色濃く受け継いでいる。彼女は刹那に逆らった『反逆者』を蹂躪尽くし、殺すのを何より好んだ。

骸亜は仕事柄、刹那の傍にすることは難しい。激務なうえに、現世と冥府を頻繁に行き来しなければならぬからだ。そのため遠距離から刹那を思うだけに留めていることが多いが、彼女もまた、生粋の刹那至上主義者だった。

ちなみに普段刹那の傍にいないため、超からライバル扱いはされていないらしい。

そんな骸亜の言葉に、超は首を振って肩をすくめた。

「それも考えたんだけど、やっぱり大きく介入するのはマズイから…… 悪魔を奴隷にしてくれないかな」

「…… 成程、藪蚊ヤブカの羽音が…… 五月蠅いようだね…… 奴隷化なら、硯璃すずりの『支配』でやるのが…… 手っ取り早いけど…… ま…… いつかあ……」

そして、骸亜は妖艶な 輪廻にそっくりな笑みを見せ、嗤った。

「蹂躪してやる…… 何もかも」

「ん〜…… ころころのを、『暖簾に腕押し』ってえ言つのかなあ」

「さアな。 ったく面倒だ」

悪魔を倒しながら、大河内おほい アキラと長谷川はせがわ 千雨ちゆめは暢気に言い合  
いをしていた。

アキラは小首を傾げながら、千雨はぶつくさ文句を言いながら戦っているのだから緊張感の欠片もない。

悪魔は消したそばから新しい悪魔が召喚されている。世界樹の魔力が借用されているのは明らかだったが、だとしたらこの数でも少な

い。

つまり、『敵』の狙いは悪魔の大量召喚だけではない。

まったく、何だつてんだ？

『エクス・ピンセット工芸神の指先』を振り回し、悪魔を解体しながらも、千雨の頭は常に思案に没頭していた。

悪魔の動きは統一こそされていたが、拙い。否、正確に言うならば本気さが感じられない。

本気でこちらの排除を狙っているような雰囲気ではない。が、だからといって防御に集中しているわけでもない。第一、向こうから攻め込んできておいて防戦も何もないだろう。

だが、どうにも詰めが甘い気がする。『あと一步』を出さないような、ポーカールで言うはずと様子見をしているような……。

「……様子見をしているような？」

千雨は一瞬にしてフリーズした。身体中の血が瞬時に凍りついたような、脊髄を引っこ抜かれてカチカチに凍りついた鉄柱を差しこまれたような、そんな不快感が千雨を襲った。

が、数瞬フリーズした頭は、意思とは関係なしに猛烈に回転し始める。

まさか。

そんな。

いや、しかし。

そんな千雨に、一匹の悪魔が襲いかかった。

くそっ。

悪魔に武器を振りかざしつつ、千雨は絶叫した。

「どうして気付かなかった、ド畜生ッ！！……大河内ッ！！」

叫び声で名前を呼ばれたアキラは、慌てて振り向いて千雨を凝視する。

「悪魔はすぐに仕留めるんだ、こいつらの仕事は私達の撃破や足止め、ましてや時間稼ぎでもない……情報収集だ！！」

「世界樹の魔力、まだまだ余裕ね」

「もちろん」

とある場所、麻帆良学園都市のどこかに、一組の男女が立っていた。その内の一人、三角帽をかぶり、紫色のローブを着込んだ、いかにも魔女風の女性が横を向く。

それに答える様に、同じく紫色のローブを着込んだ長身の男が力強く頷いた。が、視線は大乱闘を見つめるばかりで、女性の方を見向きもしない。

ブロンドのウェーブが特徴的な女性は、それに不満気に鼻を鳴らすと、両腕を天に掲げて詠唱を始めた。それは召喚場所を特定するための詠唱だった。

「……さて、『夜白家』の能力はあらかた『覚えた』し……頃愛かしらね、『誘拐者』」

『誘拐者』と呼ばれた銀髪の男はもう一度頷いた。

「……では」

女性は再び詠唱を始める。

しかし、

「あがけるところまであがいていいよ。……お兄ちゃんの敵が、絶望に染まる姿は、滑稽だから」

いつの間にか、女性の後ろで闇色の長髪を弄っていた少女が、女性の耳元で囁いた。



第40幕「氷結、それは消えた心／Know・・・Red Quark」(後書

引っ張ってすみません。

首謀者の登場でした。

次回から戦闘です。

第41幕「円卓、それはコアの殲滅/Nymph・・・Hard Depress

久しぶりの輪廻と煌月の戦闘シーンです。

瞬間、夜白やしろ 輪廻りんねの『見えない尻尾』が動いた。

空気が振動する音と衝撃が辺りに響いた時には、すでに結界にて隔離された広大な戦場が、見えない巨人の手で振り回されたようにシエイクしていた。

ブロンドの髪を揺らしながら、『湖妖精ルサールカ』という暗号名コードネームを使用して  
いる女性は大きく身を引いた。

引きながらも、彼女は速やかに詠唱を続ける。キン、と鉄琴を叩いたような音とともに、無数の悪魔が輪廻に向け襲いかかった。全員爵位持ちだった。

それを見て、輪廻は一言呟く。

「……………くだらない」

次の瞬間、全ての悪魔は肉片の一片もなく粉微塵となった。そのまま輪廻の9本の尻尾が襲いかかるが、

カリーチニヴィ・タルナーダ  
『茶色竜巻』

炸裂音とともに、湖妖精ルサールカの周囲をくすんだ茶色の風の楯 とう

より竜巻が囲みこんだ。  
しかし、輪廻の尻尾の一撃には耐えられず、数瞬も持たずに四散する。

「チイツツ！」

竜巻を発生させた張本人である『誘拐者』は、ロープを翻しながら舌を打った。

尻尾の追撃は終わらない。輪廻の尻尾は、いつだって獲物を逃がさないのだ。

「湖妖精ルサールカ。俺の『茶色竜巻カリーチニヴィ・タルナーダ』が効かねエ、強敵だぞ……」

誘拐者キトハの忠告に軽く頷く湖妖精ルサールカ。

彼が風系統の達人であり、同時にベラルーシ独特の魔術に秀でていることは、湖妖精ルサールカも当然知っていた。

だからこそ、彼の術をペーパー・クラフトを潰すかのように、あっけなく崩した輪廻の尻尾に警戒を強める。

一方、輪廻は『敵』がベラルーシ語ではなくロシア語を話したことに少々違和感を覚えながらも、サディスティックな笑みを浮かべながら、尻尾を操り湖妖精ルサールカを狙っていた。

もちろん本気ではない。輪廻の趣味は基本的になぶ鬮り殺しだ。

『ギリエーズナヤ・ノイシ  
鋼鉄水の短刀』

「あ、痛っ」

ルサールカ湖妖精は出し惜しみなどしなかった。

水を召喚し、細かな砂鉄を高濃度で混ぜ、ウォーター・カッターのように獲物を斬る大技で、輪廻の尻尾を斬り落そうとする。火花が散るが、輪廻の尻尾からわずかに血が流れ出た。

が、ノイシ短刀はたった一撃を放っただけで砕け散った。

「ッ!?!」

それだけで、ルサールカ湖妖精の驚愕を誘った。

当然、輪廻はそれを見逃さない。

少し血が流れたものの、彼女の尻尾は健在で      しかもまだ、8本

の尻尾が無傷だった。

その尻尾がルサールカ湖妖精に打ち込まれた。

殴られ、身体を抉られ、貫かれ、吹き飛ばされて、ルサールカ湖妖精は屋根の上  
上に転がった。

「くそっ」

誘拐者が駆け寄ろうとするが、

「ぐあッ」

脇腹に強烈な蹴りを叩き込まれ、吹き飛んでいった。

輪廻の横に、夜白煌月が着地する。

「来てたんだ。学園の警備は良いの？」

「そんな事は些事です」

煌月は黒いスーツ姿で、両手に拳銃を持っていた。

「ああ、そっか」

輪廻はそこまで言って、湖妖精を見下ろした。

すぐに、身体が再生した湖妖精の伸びた腕が、輪廻に襲いかかった。

「やっぱり人外かあ、軟体型の実験生命体だね、ウザッタイなあ」

「ぐッ……」

輪廻はその腕を掴み、大きく振って地面に叩きつける。

「魔法と科学の混成体ハイブリットか、大方、細胞を伸縮させる作用を持つウィルスか何かたちに、性質の悪い魔術を込めた……そんなところかなあ」

他人事のように、いや、実際他人事なのだが、輪廻はつまらなそうに闇色の長髪を弄った。

「それで、そっちの男は」

『カリーチニヴィ・タイフーン  
茶色台風』

「『雷雨独奏』……やけに頑丈な身体ですね、さしずめ、鋼体型スティール・モデルと言ったところでしょうか。おなじく、ベラルーシ魔術同盟の生み出した産物おもちゃでしょうね」

煌月キトハが誘拐者キトハの猛撃を軽くいなしながら、冷静に囁く。  
誘拐者キトハは不快そうに顔を歪めたが、どうやらそれが煌月の癪に障ったらしい。

「一番不快だと感じているのは、貴方ではありません。……刹那様です……消えてください」

誘拐者<sup>キトハ</sup>の顔に銃口を向けた煌月は、相変わらずの無表情だった。そして、煌月は何の躊躇いもなく引き金を引いた。

轟音とともに、誘拐者<sup>キトハ</sup>の身体が弾け飛ぶ。首から上は無数の肉片となって消滅したが、すぐに再生が始まった。

「成程、回復機能も付いているのですか」

妙に感心しながら首肯する煌月を、輪廻は湖妖精<sup>ルサールカ</sup>の腕を踏み潰しながら一瞥した。

そのまま輪廻は、湖妖精<sup>ルサールカ</sup>の耳元に顔を近づける。

「……私に血を流させたのは褒めてあげる。でも、最低でもお兄ちゃんくらい強くなければ、私の尻尾は斬り落とせないよ……すぐに再生するけどね。」

貴方達の目的なんて知らないし、どうでも良い。どうせ、実験で死んでいった仲間の甦生と、魔術師への復讐だろうけど……」

「……………!!」

湖妖精<sup>ルサールカ</sup>は碧い瞳を見開き、燃えるような視線で輪廻を睨みつけた。が、輪廻は寧ろ嬉しそうに、湖妖精<sup>ルサールカ</sup>に微笑みかける。



「でも、お兄ちゃんに迷惑かけるのは頂けないわね。それさえしなければよかったのに……まあ、貴方達も私達のことを知っていただらうし、注意を払っていた。だからこそ、私達のことには情報収集兼威力偵察くらいに留めたし、お兄ちゃんにも特に手を出さなかった。違う？」

……本当なら貴方達を殺したい。唯で死なせはしない。だって、お兄ちゃんに迷惑をかけたんだもの。お兄ちゃんだよ？私の、たったひとりのお兄ちゃん。地球に流れ着いた私を拾って、ご飯をくれて、身体を洗って、拭いて、撫でてくれたお兄ちゃん。私の正体を話しても、私を見捨てないでくれた……名前までくれたお兄ちゃん。

……私はお兄ちゃんを愛してる。お兄ちゃんの望むことは何だって叶えてみせる。身も心も捧げて、甘えて、尽くして……そしてお兄ちゃんを護ってみせる。傷付けさせないし、汚れさせない。

お兄ちゃんを煩わせるモノ、傷つけるモノ、侮辱するモノ、全てを許さない。汚らわしい塵芥チリクソは潰す。徹底的に、二度と沸かないように。後悔と絶望と苦痛だけしか感じないように」

そこまで言った後、輪廻は頬を紅く染め、恍惚とした笑みを浮かべて自身の頬に両手を添えた。

「そして、私はお兄ちゃんに支配される。お兄ちゃんの奴隷となつて、蹂躪される。私はお兄ちゃんを支配したくない。されたいけどしたくはない。……だから、お兄ちゃんの命令は絶対服従。

……お兄ちゃんに褒めてもらいたい。撫でてほしいし、微笑んでほしい」

実は輪廻は、夜白刹那やしるせつな専用の被虐性愛者マソヒストである。彼女は刹那に、支

配されることを望んでいた。傷付けられても良かった。彼女にとって、それは刹那が、自身を求め、自分に想いをぶつけてくれていることに他ならないからだ。

もちろん輪廻は、刹那がそんな事をしたがる性格ではないことくらい理解していたし、仮にやってしまったら、刹那が少なからず自責の念に苦しめられることを知っていた。だからこそ、当の刹那にも内緒にしているのだ。

ちなみに煌月はその事を知っている。煌月はマゾヒストではないが、輪廻の気持ちもわからないわけでもなかった。煌月もまた、刹那に身も心も捧げていたからだ。

刹那の『妹』を自称している輪廻と違い、煌月は（戸籍上は刹那の家族だが）あくまで刹那の『従者』であり、『所有物』であることを望んでいた。だから、輪廻の気持ちは理解できた。

「私はお兄ちゃんの全てを知っている。私の瞳は常にお兄ちゃんだけを見つめ、耳はお兄ちゃんの声だけを聞いて、鼻はお兄ちゃんの匂いだけを嗅いで、口はお兄ちゃんの周りの空気だけを咀嚼する。舌はお兄ちゃんだけを舐めるし、尻尾はお兄ちゃんだけを包み込む……わかる？お兄ちゃんが私にとっては全てだし、お兄ちゃんの『命令』くらいならカントンに想定できる。つまり……お兄ちゃんが、貴方達の抹殺を認めない事なんて、百も承知だったのよ」

「その通りです」

頭部が完全に再生した誘拐者<sup>キトハ</sup>を引きずりながら、煌月が輪廻の元に歩いてくる。

「認……め……ない？」

喉が潰れているのか、少々聞き取りづらい声で湖妖精ルサールカは聞き返した。彼女の身体は依然としてボロボロだった。正確に言つと、回復や再生はしていたのだが、少し回復すると再び輪廻が湖妖精ルサールカを殴り、蹴り、踏み潰していた。

「そう、刹那様は害虫ガイチュウ 貴方方の消去をお認めになりませんでした。しかも、わざわざ輪廻だけでなく、私にも直接命令しております。もつとも、想定内のことではありませんが」

誘拐者キトハの身体を無造作に湖妖精ルサールカの横に放り投げ、煌月は携帯を取り出した。

「刹那様、突然の御電話を御許してください、煌月です……ええ、湖妖精ルサールカ並びに誘拐者キトハ両名、捕獲しました……いえ、それには及びません。私達が輸送します。はい……勿体無き御言葉です……はい、輪廻も一緒に。あ、はい……」

煌月は輪廻に向かって、携帯を投げた。

輪廻はそれを取ると、笑顔を咲かせながら携帯を耳に押し当てた。

「もしもし、お兄ちゃん？ うん、ラクな命令しんめいだったよ……私？

もちろん行くよ。お兄ちゃんの傍以外に、私の居場所なんてないよ……オーケー」

輪廻は携帯を煌月に返すと、今度は狂気ルサールカの笑みを浮かべて湖妖精を見下ろした。

「……最初は、お兄ちゃんの命令を敢えて無視することも考えたんだけど、貴方達がお兄ちゃんに直接兵を送っていないことに免じて、チャンスあげるわ。

……お兄ちゃんに会って事情を話し、速やかにこの場を終息させなさい……お兄ちゃんに暴言の一言でもはいたら、その瞬間に殺すわ」

輪廻はそう言って、絶望に顔色を失くす湖妖精と誘拐者キトハを見下ろした。殺意と侮蔑しか籠っていない瞳は、彼女のオッドアイを漆黒の闇に染めていた。

第41幕「円卓、それはコアの殲滅／Nymph・・・Hard Depress

何とかここまで書けました。

次回もなるだけ早く仕上げたいです。

番外編第5幕「白翼の穹は二度燃える／MY・・・Abject Saga」

今回は少し趣向を変えて、サク（桜咲YY刹那）の過去編です。

オリジナル成分を多量に含みますが、そこは御了承下さい。

山の中で、一人の少女がフラフラと歩いていた。

ボロきれ同然の着物を身に纏い、汚れた白髪を山風になびかせ、紅の瞳には様々な感情、ただし負の感情のみが込められていた。所々泥がついた白い翼は、死んでいるかのようにピクリとも動いていない。アクセサリにも見えるかもしれないが、立派なホンモノである。

「……………」

少女はフラツと一際大きくふらついたまま、前のめりの姿勢になって倒れた。受け身を取ろうともせず、起き上ろうともしなかった。

暫くそのままにしていた少女は、思い出したように、背負っていた風呂敷から竹の水筒を取り出した。

一口飲み、ふう、と息を吐く。

少女の名は桜咲さくらさき 刹那せつな。人間と鳥族のハーフで、『禁忌』とされる白翼を持って生まれたために迫害され 生まれた里から、放逐された化物バケモノだった。

「……………」うち、これからどないすればええんやろ」

そう言つて呟いたまま、少女はごろんと仰向けになつた。

持っているものは、風呂敷と水筒と僅かな金銭。生きていこうにも、これではどだい無理な話である。ましてや、妖の住処あやしのど真ん中に位置する、地図にも載っていないような里ですら、自分の扱いはこれなのだ。

一度都会に出たらどうなるか。

もつとも、都会がどんなところなのかも、何処に都会があるのかも少女は知らない。

ましてや、ここは『奴ら』のテリトリーだ。『半妖』まがいの存在とはいえ、『連中』が見逃してくれる保証などどこにもない。自分があっけなく『御馳走』となつて、妖共の腹を満たすシーンが簡単に想像できた少女は、思わず顔を顰めた。

人間としては、尊厳も何も無い死に方や。……ヒトじゃないけど。

軽く自虐したところで、少女は再び思案する。が、幼い少女に解決の糸口が見つかるわけもない。彼女は早々にそれを放棄する。

桜咲刹那は、年の割には聡明だつた。

生まれた頃からの迫害や暴力の嵐が、彼女のパーソナリティの形成に、悪い意味で尽力したからに他ならない。それなりに知恵をつけ



なければ、やっていけない世界だった。  
子供の時から諦めていたし、恨んでいた。  
何を諦めていたのか知らないし、何を恨んでいたのかも知らないが、  
とにかくそうだった。

この日のことで、少女は諦めているコト、そして恨んでいるタイシ  
ヨウを幾つか増やした。無自覚の内だが、彼女の中ではどんどん溜  
まっていた。

「……………ふう……………」

だからこそ、少女はそのまま目を閉じた。少女は、ついに生存まで  
諦めようとしていた。胸の奥に、蠢き続ける憎悪を溜め込んだまま。  
が、後に少女は感謝することになる。

この日、この場で追放した里と、この山道ルートを歩いていた自分にだ。

そして、少女は生まれて初めて

神に感謝した。

「……………あ？」

夜白やししろ 輪廻りんねは僅かに眉をひそめ、隣を歩いている青年の袖を引っ張  
った。

「どうした、輪廻」

「ナニカいるよ、半妖みたいなのが」

「ふむ」

輪廻の報告に、当惑するかのように夜白やしろ 刹那せつなは、首を傾げた。

「煌月」

「承りました」

刹那が呼ぶと、彼の後ろをスーツ姿で歩いていた夜白煌月やしろ くらつきの姿が消えた。

そして、一〇秒程で戻ってくる。

長身の美人である煌月は、右脇に少女、そして風呂敷を抱えて戻ってきた。

「お待たせして申し訳ございません、刹那様。49体程の害虫ガイチュウ ああ、妖のことですが が刹那様、そしてこの少女に群がろうと  
していたので、些か時間を食いました。  
この少女ですが、どうやら鳥族とのハーフのようですね」

「あ、何だ、煌月が始末しちゃったんだ……私もしたかったのに……」

…塵芥掃除<sup>チリ</sup>」

「輪廻は掃除<sup>クレンジ</sup>に時間をかけますからね、急を要するようではありませんが、時間は節約するに越したことはありません。刹那様を煩わせるモノなど、あつてはなりませんので」

不満そうに闇色の長髪を弄る輪廻に、煌月は涼しげに返す。いつものことなので、当事者二人を含めて誰も気にしない。

「そうか、有難う」

刹那はそう言って、煌月の頭を撫でる。煌月は、うっすらと頬を紅く染めると、深々と一礼した。

「輪廻、二の口の治療を」

「はい、お兄ちゃん」

言われた通りに少女の治療をする輪廻。彼女の表情を見て、すぐに刹那は輪廻の頭を撫でる。

「……あつ……んん……ふふ、お兄ちゃあん……嬉しい……」

熱い吐息を吐きながら、輪廻は刹那に抱きついて尻尾で包む。

「……………治療は？」

「終わったよ」

どうでもいいと言わんばかりの口調で、刹那に笑みを浮かべる輪廻に、刹那は苦笑した。

「……………取り敢えず、『空間』で休ませるか。本家（近衛家）まではちよいと距離があるし、転移で行っても『向こう』（関西呪術協会総本山）が混乱するだけだしなあ。敵襲だとカン違いされても……………困るしなあ……………」

「……………ちゅっ……………れる……………使えない奴らだねえ、潰そっか？」

刹那の頬に、キスしつつ妖艶な仕種で舌を這わせていた輪廻は事も無げに言った。

相変わらず、刹那以外にはどこまでも淡白な輪廻に、刹那は苦笑で返す。

「それはマズイって……………とにかく、行こう」

「はぁーい」

「承りました」

刹那が言うと、輪廻と煌月はそれぞれ答えた。そして、三人は同時に消えた。

『空間』のとあるホテルのベットにかつぎ込まれた少女は、丸一日後に目を覚ました。

少女は、些か周囲の光景　洋風の寝室　に驚いたが、すぐに、近くにあったソファに寝転がっている青年の仕業だと直感した。

桜咲刹那は寝間着姿の自分に再び驚いた後、遠慮がちに青年へと近づき、顔を覗き込む。

「はい、ストップ」

瞬間、彼女の首に手がかげられた。

慌てて振り向くと、少女の目に、漆黒のドレス姿の美少女が微笑んでいた。ただし、自分の首を軽く絞めながら。

「貴方、何?……お兄ちゃんに、何しようとしたの?」

美少女は、妖艶な笑みを浮かべながら少女の耳元に顔を寄せる。

「……桜咲……刹那です……その、唯……御礼がしたくて……」

「セツナ？　へえ……お兄ちゃんと同名なんだ。異性同名ってえやつだねーえ……ムツカツクなあ。

あ、御礼ならしっかりしてね。お兄ちゃんに無礼を働くのなら、殺すから」

そう言つて、輪廻は不愉快そうに口元を歪めた。

瞬間、少女は震え上がる。

結局、夜白刹那が目を覚ますまで、少女は夜白輪廻に睨まれながら、事情を話すことになった。

「……そんなにいけないのか？この翼……少なくとも、禍々しい漆黒の翼よりはマシに見えるが」

「いえ、翼ってというか……その、白翼は……異常なほどの強者の象徴でして……」

事情を説明した後、少女は刹那とともにバルコニーで寛いでいた。

少女は戸惑っていたが、すぐに慣れた。  
何より、目の前の青年が『人外』の存在であることに、ひどく安心した。今度は感じたことの無い安心感というか、嬉しさに戸惑うことになったが。

「桜咲……刹那……うん、自分の名前を呼んでるみたいで、何かヘンだな……桜咲……サク……」

「えっ？」

少女は瞬きして、刹那を見上げた。  
何故か、全く違和感がなかった。寧ろ言いようのない安心感と幸福感があった。

「よし、サクだ……これから、君はサクだ」

笑顔を見せた刹那に、少女　サクは、頬を染めながら頷いた。

番外編第5幕「白翼の穹は二度燃える／MY・・・Abject Saga」

来年まで更新できないかもしれません。

帰省中は更新できないので。

申し訳ありませんが、御了承下さい。



第42幕「指揮、それは滑稽な溺者 / Sole . . . With Rust」(前)

お久しぶりです。

相変わらずですが、細々と更新していきます。

## 第42幕「指揮、それは滑稽な溺者/Sole...With Rust」

マナ「A「Y「タツミヤにとって、夜白やしろ 刹那せつなが『思慕』の意味での敬意の対象だとすれば、夜白やしろ 煌月こうつきは、『純粹』な意味での敬意の対象だった。

そうなった経緯は単純で、煌月が武器の専門家エキスパートであり、その彼女に師事していたのがマナなのだ。

それは単に、マナが煌月の戦術を受け継いでいるという意味ではない。マナのパーソナリティには、刹那ほどではないが、煌月の影響を受けていた。

煌月は、どこか不自然な従順性を持っていた。

主人に仕え、命を受けるためだけに生み出された『眷属』と重ね合わせてしまうほど、彼女は刹那に従順すぎた。

比較論からすれば、夜白煌月と夜白やしろ 輪廻りんねの忠誠心の高さは変わらない。

マナ「A「Y「タツミヤや桜咲さくらさき「Y「刹那はもちろん、長谷川はせがわ 千雨ちあめや大河内おほこうち アキラと比較したとしても、同様のことが言える。それなのに、なぜ煌月『だけ』が不自然すぎる程、刹那に従順に見えるのか。

それは、彼女の性格 ということより処世術に起因していた。

煌月は、徹底して『我』を隠す。言うべき時には言い、行動する時には行動するが、彼女が『日常』において、我を通すこと 例えれば、自ら刹那に具申したり、刹那の命令を待たずに行動したりする

ことは滅多にない。

元々、偶然刹那に保護　麒麟きりんの姿だったため　された煌月は、刹那の手足となることを自ら望んだ。煌月は何時だって、刹那に尽くしてきたのだ。

しかし未だに刹那に、煌月の心境を察することは至難の技だった。それは輪廻を除く周囲も同じだったが、長く煌月の指導を受けていたマナには、何とか察することができた。

マナの考えるところでは、煌月のパーソナリティは極めて異質だ。

刹那を求め、刹那の従者となることを望んでいるにも拘らず、それを表情や行動にほとんど出さない。羞恥の念があるわけでも、遠慮しているわけでもない。それは、例えば決して猟銃を持たず、唯唯畏を仕掛けて、しかもそれを放置しているだけの猟師にも似ていた。

簡単に言つと、こつなる。

夜白煌月は、決して欲しいものを得るために、率先して動くことはない。

私だったら、そんなことはしない。

隣に直立不動の姿勢で立っている煌月を流し眼で見ながら、マナはそんな事を考えていた。

そう、そんなことはしない。刹那に頭を撫でてもらい、褒めてもらうためなら何だってする。刹那との時間が過ごせるのなら、相棒サウだ

って利用する。刹那の手足となり、彼の願いを叶えてみせる。

何とも腹黒い考えだが、それについてはお互い様だった。なぜならサクも、相棒<sup>マナ</sup>を家族で親友で相棒であるのと同時に、恋敵<sup>ライバル</sup>だと認識しているからだ。

しかし、煌月は違う。

マナですら見惚れる程の美貌と群を抜くスタイルで刹那に迫ることもない。正確には無いわけではないのだが、大抵の場合、煌月は無自覚であるし、いくら煌月にも性欲はある。し、輪廻のように甘えることもない。

千雨のように不器用に陰から心配することも。当の本人<sup>オノタ</sup>が聞けば全否定するだろうが。しなければ、アキラのように奥出になることもない。

多分、目の前のコレも、そういう類のモノだろうな。

マナは心中でそう呟き、恐らく同じ結論に至ったであろう、自身の左隣にいたサクと顔を見合わせ、ほとんど同時に肩をすくめた。

夜白<sup>やししろ</sup> 骸垂<sup>がいあ</sup>は、よく知る二者に一礼しながら言葉を紡いだ。その、相手の眠気を誘うような、どこか浮世離れた謡うような口調に、

褐色の少女とサイドテールの少女が面喰らったのを見て、骸亜はますます面白そうな笑みを作る。

「はじめまして……ドクターズ娘達』が三女……夜白 骸亜です……以後……よしなに……」

仮にも悪魔の軍団が踊り狂い、魔術師たちと戦闘を繰り広げている激戦の最中にも拘らず、あまりにも、空気の読めていない言い回しだったが、誰も気にしていなかった。

咎めたところで、聞くような相手ではないと、肌で感じ取っていたからだ。

骸亜の口調は、確かに眠気を誘う、フェアリー妖精かローレライ魔女のそれだったが、彼女から溢れ出る雰囲気、それを台無しにしていた。マナとサクは何とか平然としているが、今にも卒倒しそうだった。

夜白 骸亜の、怨念を芯まで吸い尽したような、毛先だけ白い漆黒の前髪にほとんど隠れた、腐りきったザク口のように濁った瞳からは、憎悪以外の感情など、一切感じられなかった。

白すぎる肌と相まって、彼女の容姿・雰囲気は、かなり不気味だ。

輪廻も闇色の長髪に輝く白い肌を持っているが、彼女の場合、不気味さよりも、妖艶すぎるスリル蟲惑的な美が優先されていた。

ところが骸亜という少女では、美貌よりも遥かに不気味さが勝っていた。しかし、醸し出している憎悪を引っ込めれば、美少女であることは確実だった。

要するに、近寄りがたいのだ。

「貴方が骸亜ですね、超からは聞いています」

そんな中、淡々と言える煌月は流石だろう。サクとマナは、心の中で盛大に安堵の溜息を吐いた。

流石に今の彼女たちに、上級神を超える性能スペックを持つ神工生命体と四つに組む力など無い。目の前で嗤ワラう（笑うではなく嗤う）少女が敵なら、命を捨てることも考えただろうが、味方に挑んで玉砕するつもりなど、この二人にはさらさらなかった。

「ううえへへ……へへ……へへ……へへ……へへ……へへ……  
へ……挨拶もそこそこに……。  
ここの悪魔共は任せてもらっても……いいのですね……？」

「ええ。どの道刹那様が決められているのです。ならば、私が反対する道理などありません」

口が裂けるのではないかと思うほど、口を横に広げた骸亜に、煌月は即答した。

「……わかった……」

形だけの敬語を止め、骸亜は急に真面目な雰囲気となり、サクとマ

ナを仰天させた。

不気味さは瞬時になりをひそめたが、今度は血が流れる程歯を喰いしぼり、先程の数倍の憎悪が込められた目で、夜白骸亜はぐるりと周囲を見渡した。

「……父上に五月蠅く纏わり付く……ヤツカ藪蚊共め……僕の能力は『時間』と『境界』。

……まあ、『時間』の方は……『境界』の、副産物みたいな……ものだけだ」

小声で歌うように呟き、骸亜は軽やかなステップで、ダンスを踊るように歩きだした。ギチリ、と音とともに、周囲の世界が一瞬にして変質した。

「僕は、硯璃のように直接的な『支配』は……できないけど……『上』と『下』、『奏者』と『楽器』の『境界』を……明確にすることなら……できる」

「そうか」

誰に聞かせるのでもなく、サクが息を飲みながら呟いた。

「彼女は、全てを操れるのか。自分を『上』にするという……『境界』を引くことで」

「勿論例外はある……硯璃のように完ぺきではないし……」

骸亜はどこからか指揮棒を取り出して、大きく振った。一斉に悪魔の動きが止まり、全員が臣下の礼を取った。  
骸亜は小さく微笑む。

「嗚呼、有難う……こんな僕にツイテくれて、有難う……本当に、アリガトウ……」

涙を流しながら、謡うように悪魔に語りかける骸亜の姿に、サクとマナはゾツとした。

間違いない。骸亜は、モノを操ることに 跪かせることに、快感を覚えている。無理矢理服従させ、屈辱に塗れた相手<sup>まみ</sup>を嗤い、悦んでいる。

サク達はそう思ったが、それは間違いだった。いや、当たらずとも遠からずだった。

「有難う……でも……」



微笑んでいた骸亜の表情が、憎悪に彩られていく。

「  
父上に迷惑掛ける蠃蚊ヤブカなんて、いらなんだよ！！  
！！！！！！！！」

その瞬間、全ての悪魔身体の一部が潰れた。ぐちゃりと潰れ、ゴキユ、と嫌な音を立てて、その一部分が消えた。悪魔の身体に『境界』を引き、分断させた後、次元の狭間に、墮として潰したのだ。

途端に、悲鳴が上がる。

痛みあまりに起こった絶叫のフルコーラスは、学園都市中を包み込んだ。

しかし、骸亜はそれに歯牙にも掛けなかった。微風の音を聞いた、年頃の少女の仕種を見せる。が、刹那の時間が過ぎ、再び絶叫した。

「実に五月蠅いな！！！！ 父上は今、今回の首謀者の蠃蚊ヤブカを尋問中だ。

もし、この汚い羽音を聞いて、父上の集中が途切れてしまったら、どうしてくれるつもりだ……。どこまでも、羽音の五月蠅い奴らだ」

骸亜の口から呪詛が放たれるたびに、悪魔の身体が少しずつ壊れていく。最初は大きかった悲鳴も、ほとんど止んでいった。喉を潰されたか、そんな気力も無くなったのだろう。はたまた、恐怖のあまり、声すら出せないのかもしれない。

今、麻帆良学園都市にいる全ての生命の行方は、夜白骸亜が握っているのだ。

いや、正確には握ってすらいない。恐らく骸亜にとって、刹那の敵の生命を握るほど、汚らわしく、屈辱的なことはないはずだからだ。すぐにでも、放りだして洗い流したいモノに違いあるまい。

悪魔たちの断末魔を聞きながら、夜白骸亜は芝居がかった動作でがつくりと膝をついた。

そして大仰に、刹那がいるであろう方向に両手を伸ばすと、絶叫した。

「嗚呼、父上、父上、父上、父上、父上、父上、父上、父上、父上、父上、父上えええ……御免なさい、こんな……こんなおぞましい羽音を聞かせてしまって、本当に御免なさい……でも、僕は、父上の御役に立ちたいのです、父上に会える機会なんて滅多にないから……」

嗚呼、父上、父上が私に父上に会う機会が少ない任務を与えたことを悔やんでいることを、僕は知っています。ですが、悲しまないでください。父上のためなら何でもします。

父上の元を離れ、地上を飛び回る蠓蚊を見つめ、その魂を運び、管理するような任務でも、父上のためなら苦でもありません、ですから、父上……父上ええ……うう、う……ええへへ……」

壊れたように叫び、猛り狂い、泣き叫び、嗤った後、骸亜はスックと立ち上がった。後ろを振り返る。

「……何をしている……はやく、父上に連絡しよう……この時代の父上にも……会ってみたいし……ね」

謡うように囁いた骸亜の朱色の瞳には、無表情の煌月と、呆然としているマナとサクの姿が映っていた。

一方、それを遠くから眺めている者がいた。

しかし、それは文字通りの意味での『遠く』だった。具体的に言うのと、麻帆良どころか、埼玉でもなく 群馬県の、とある森からだった。

「うおう……コイツはおったまげたわ。ひよっとしなくても、ウチら必要なかつたんちやう？」

一人の男が言うと、もう一人の男が、不機嫌そうに言った。

「八<sup>やくわ</sup>鍬、お前はそれでも西の術師か？……まあいい、平和ボケした東の阿呆共の、慌てふためく姿が見たかったのだが、予想以上の大事になったな。長の予測は正しかったか」

「平和ボケって……危<sup>こもり</sup>づく内部崩壊を起こしかけた関西<sup>ウチ</sup>呪術協会が言えた義理でつか？……晦日はん」

八鍬と呼ばれたバンダナを巻いた、いかにも今風の若者のような少年が不服そうな目を向けると、眼鏡をかけ、書生風の格好をした長身の青年が、人を喰ったような笑みを見せた。晦日という青年は、どうやらその風貌と違って、真面目を擬人化した様な性格でもなさそうである。

「阿呆やったのは埃を被った『遺物』共だ。未来ある若者じゃない」

「はあく、オレが言うのもあれやけど、あのにかいどう式階堂家の跡継ぎがこんな人とは……」

「なんの。時代は変わりつつあるんだ。これからは協調と自衛の時代さ。我々関西呪術協会は、関東魔法協会と敵対はしない。が、屈服もしないのだ。

長はその分良くやっている。魔法使い共は、特に連合はとつつきにくい相手だ。普段は人懐っこそうな笑みを浮かべているが、俺達が邪魔になると判断するやいなや、襲いかかってくるだろう。あんな奴ら相手に、戦争だの、融和だのと一つのことにはしか目がいかない『遺物』共が務まるものか」

「うへえ、酷い時代に生まれて来たもんですなあ」

「何を言っているんだ八鍬。お前も八鍬家の息子なら、陰陽師として生きていくことになるだろう……無関係ではいられんぞ」

「わかっとなりますよ」

あからさまにムツとした表情で、バンダナ少年は口を開いた。

「一応は、土御門家つちみかどの遠縁を名乗っておりますんで」

第42幕「指揮、それは滑稽な溺者 / Sole . . . With Rust」(後

今回は骸亜の活躍(?)と関西の動きです。

次回もよろしくお願いします。

テストが近くなってきましたので、暫く更新できなくなるかもしれません。

申し訳ありません。

桜咲<sup>ちくらのけ</sup> Y<sup>せしな</sup> 刹那と関西呪術協会には、浅からぬ関係がある。いや、因縁とも呼べるかもしれないが。

彼女は烏族とのハーフである。

『烏族』とは、俗に言う『天狗』のことだ。そして天狗は、基本的には関西 比叡<sup>ひえい</sup>・大峰<sup>おおみね</sup>などを根城にしている。

人間と烏族との関係は、今のところは友好的だ。積極的に交流があるわけでもないが、対立もしていない。元々天狗は、妖怪というよりも、『山の神』つまりは崇拜の対象としての側面も持つ。

本来なら、サクも西に属するのが筋だったのかもしれない。しかし、運命のいたずらか、彼女は夜白<sup>やしろ</sup> 刹那<sup>せしな</sup>に拾われた。

自身を捨てた里に怨みが無いわけではないが、サクにとってはすぐにどうでも良い些事となった。

刹那に甲斐甲斐しく育てられ、夜白<sup>やしろ</sup> 輪廻<sup>りんね</sup>や夜白<sup>やしろ</sup> 煌月<sup>こうつき</sup>に鍛えられ、マナ A Y タツミヤという親友兼恋敵兼家族ができ、サクは十分幸せだった。

しかし、サクと西の関係は千切れなかった。いや、千切らなかつた。

『夜桜流』。

サクが家族とともに生み出した、我流の剣術であり、『神鳴流』を



含む数々の流派を取り入れた術である。

彼女の場合、使うのは混じり気のない殺人術である。元々、刹那の手足となれるなら、外道か正道かはもちろん武具・戦術にそれ程拘りの無いサクにとって、伝統と格式にまみれた神鳴流は肌馴染むものではなかったが、得た物は大きかった。

京都神明流は、千年以上の歴史を誇る、本物の剣術である。つまりそれだけ、洗練され続けたということだ。さらに、それだけ長い間、必要とされ続けたということも意味する。

事実、神鳴流は今でも、決して弱小な流派ではない。

さらに、サクは陰陽道や神道術も使用する。そのほとんどは、刹那が輪廻から伝授されたものであるが、関西呪術協会にも優れた術は数多くある。

根が生真面目で、鍛練熱心なサクが、それらに興味を持つことは、ある意味必然だった。

「……………へっ？西から八鍬やぐわと貳階堂にかいどうの者が来ている……………」

だから刹那から連絡を受け取った時、サクはすぐに、増援の正体を想像できた。

夜白やしろう 骸巫がいあと煌月、そしてマナとアジトに向かっていたサクは、小首を傾げ、屋根の上を疾走しながら器用に携帯電話を耳に押し当てていた。

まだ、悪魔は全て消滅したわけではなく、残党　　といっても万を

超えているのだが　　が麻帆良学園都市中に広がり、戦闘を繰り返して  
いた。

空気中の魔力素がひっきりなしに、拡散・結合・実体化を繰り返して、  
精霊達は乱痴気騒ぎのようにあちらこちらを行ったり来たりとし、  
魔術師たちの召喚オーダーに  
応えていた。

それに、科学の賜物たる銃弾や誘導弾ミサイルが加わっているのだから、素  
人目に見ても、現時点でここは『乱戦』であることがわかるはずだ。

しかも、さらに一般人達の歓声や声援が、都市中を山彦ゲストの様に轟い  
ている。

当然、そんな中では思念通話など役に立たない。防音結界サイレントで遮音し  
なければ、自分の隣を疾走しているマナの射撃音と叫びすら聞こえ  
ないのだ。

サクは、こうしなければ刹那の声が聞こえないことに苛立ちを隠せ  
ずにいた。

『雑音』の元を消し飛ばしたい衝動に駆られるものの、何とか抑え、  
サクは聞き返す。

「詠春様が、救援要請リクエストに応えてくれた、ということですか……」

『そうなるな。まさか、専門家プロの術師が来るとは思わなかったが…

…』

刹那の声が耳を震わし、サクは、サイドテールを揺らしながら首を  
捻った。

「しかし、先方に失礼ですが、今更何か役に立つのでしょうか……  
僅か二人の術師ですよ……相手は悪魔とベラルーシですし」

「それが役に立つ。特に隠蔽ではな」

「『隠蔽』……ですか……？」

「そうだ。件の事件、実に大規模だ。目撃者は何万、何十万にもなるかもしれない」

「しかし、それは西洋魔術師の仕事でしょう？」

西洋魔術が魔法の秘匿に躍起になっているのと同じように、陰陽師たちもまた、術を秘術として隠匿している。『異能』の秘匿は、古今東西良くあることだ。

当然、連合や麻帆良にも、『それ』専門の部隊や人材がいるはずだ。魔法が普遍的なものになった場合、無視できない混乱や悲劇が多発する（と大多数が予測立てをしている）と考えている以上、当然のことと言えた。

言うまでもなく、魔法の公開（所謂『魔法バレ』）は旧・魔法世界問わず重罪である。

サクは任務シユトに関しては極めて合理的トライである。

彼女は言外に、東の尻拭いに西が出るのは不条理だと語っていた。そして事実、その通りである。

『そうだ……と言いたいたいところだが、連合、そして麻帆良の連中は、こういったことは苦手だし、経験不足だ』

刹那がウンザリしたような声色で言うと、サクは思わず頭を抱えた。馬鹿みたいな話だが、それは考えてみれば当然だった。

多くの西洋魔術師が『本国』と呼ぶメガロメセンブリア連合は、魔法世界に存在している。当然、魔法世界では魔法は当然のモノとして存在している。勿論、魔法の隠匿にイチイチ気を使っている者などいない。

そして、魔法世界と旧世界の交流は、活発とは言い難い。二つの世界を行き来する者はそれほど多くないのである。加えて、旧世界の連合傘下の魔法組織は、大抵閉鎖的だ。

例えば麻帆良学園は、一種の閉鎖型都市である。外界とシャットアウトされ、その技術力は大きく違う。言い方は悪いが、日本国内でありながら日本の法が通用しない。治外法権地域とも言えなくもない。

そして、強固な認識障害魔法が働いているため、喻え校舎のど真ん中で魔法を連発しても誤魔化せる可能性すらあるのだ。

そしてネギィスプリングフィールドの出身校メルディアナは、そもそも森の奥深くにあるので一般人との接触機会そのものが皆無である。

こんなバラそうにもバラせない環境にい続ければ、自然と秘匿意識

が薄れてしまう。

だからこそ、悲しいまでに教本マニユアル通りの対処法しか取れないのである。  
一般される人側の人権や意志など、見事に無視した形の、だ。

そして当然、その教本マニユアルには、四桁とか五桁・六桁の一般人にバレ（  
そうになっ）た時のことなど、阿呆らしすぎて書かれていない。

そんな不甲斐無い西洋魔術サイドはともかく、呪術サイドはまだい  
くらかマトモだった。

元を辿れば、土着的と言おうか、地域的なのが陰陽道・神道の特徴  
である。一般人の生活にも、陰陽道は大きく関わっている。宗教が  
自由なこの国では、仏教か神道かで揉めることもない。

そのため日本固有の陰陽道や神道術は、すっかり一般人でもなじみ  
深いものとなってしまったのである。何しろ明治維新までは、平然  
と陰陽師が公職についていたり、そもそも天皇（皇室）が『祭まつりごと』の  
象徴だったのが日本なのである。

要するに、この国では術師と一般人との境界線が実にあやふやだ。  
民間人で鬼とのハーフとかも平然という（本人は自覚していないだ  
ろうが）程である。だからこそ、秘匿には人一倍神経を使う。

そこまで考え、サクはため息をついた。

「……わかりました。何か、こちらから接触しましょうか？一応、  
両家ともに面識はあります」

『いや、大丈夫だ。向こうに任せよう……ああ、謝礼くらいはするがな』

「はあ……」

『それより、ヘラルーン魔術同盟サンの尋問も終わりそうだ。いよいよ終盤だぞ』

「承知しました……どうします……アキラ達の援護に向かいますか」

『いや、そのままこっちに合流してくれ』

「はい」

尋問ではなく、拷問の間違いではないかと思いつつ、サクは頷きマナの方を向いて、ハンドサインをした。それを見たマナは笑顔で返し、後ろを追ってきている煌月と骸亜に向かって大声で伝えた。

携帯をポケットに突っ込んだサクを見て、マナは尋ねた。

「ところでその……八鍬と貳階堂ってえ何なんだい？」

「関西呪術協会に属する、術師の名家だ。陰陽道の最高峰トップ土御門家の遠縁で、通称『八家』と呼ばれている……」。

家名には、それぞれ数字が入っていて……え〜と確か、いちかわ吉川・貳階堂・三門・四十雀・五重・六海・七喜田・八鍬の八つの一族だ。

ちなみに八鍬は術隠蔽、貳階堂は情報収集や読心の術に優れているとされる……陰陽道の才能は、家系……というより『血』に依存す

ることが多いからな」

そう言って、サクはやれやれと肩をすくめるジェスチャーをする。

「長も、それだけ本気で介入するつもり……だということだと思っ  
が」

第43幕「同調、それは箱詰め of 異分子 / Celli . . . Mad Square

次回も遅くなりそうです。

麻帆良祭編はもう少し続きます。



第44幕「視界、それは極めつけのエチュード」(前書き)

テスト前の現実逃避です。

論述形式はキツイですね。

## 第44幕「視界、それは極めつけのエチュード」

私は湖妖精ルサールカと誘拐者キトハを見下ろしていた。

そこは、『空間』の地下区画にある『拷問室』だ。

もつとも、そんな大層な拷問器具　アイアン・メイテン　鋼鉄の処女とか　があるわけではなく、飛び散った鮮血が映える、“白い部屋”だ。天井、壁、床、全てが白く輝いていて、ドアも純白。家具もない。

でも、私が好きな部屋の一つだ。

私は、お兄ちゃんの敵を懲るのが大好きだからだ。

だが、今は横にお兄ちゃんがいる。お兄ちゃんの目の前で、塵芥ユミが拷問されるシーンを見せるわけにもいかないし、湖妖精ルサールカと誘拐者キトハの二人は懸命だった。

命の捨て所を上手く判断している。まあ、どうでもいいけど。

お兄ちゃんは携帯を閉じて、私に耳打ちした。

お兄ちゃんの吐息が髪と耳にかかり、悶えそうになるが何とか堪える。

私は無表情を装いながら、軽く頷いた。

「悪魔がほぼ根絶やしにされたよ……爵位持ちは全滅。後は下級悪魔魚しか残っていない……これまでだね」

私が事も無げに言うと、縛られ、床に座っている二人は観念したように俯いた。

「……ベラルーシ魔術同盟は、確かに一度解体されたわ。でも、それも数瞬の間だけ。有志が結託して、再び活動を始めた。その一環が」

「世界樹の奪取　か」

湖妖精<sup>ルサールカ</sup>の独白を、お兄ちゃんが受け継ぐ。

「ええ……貴女が指摘したとおり、私達は魔術同盟の検体よ。湖妖精<sup>ルサー</sup>も誘拐者<sup>キトハ</sup>も、元々は検体名に過ぎなかった。でも、生き残りは全員検体だけ。私達には最初から名前なんてないし、戸籍だってない。だったらいっその事、それを暗号名<sup>コードネーム</sup>にする方が手っ取り早いわ」

疲れ切った表情で、湖妖精<sup>ルサールカ</sup>は独白を続ける。

その横では、誘拐者<sup>キトハ</sup>が苦々しい表情で、口を閉じてそっぽを向いていた。

喋ることはないと言わんばかりの態度に、私は片眉をあげた。

「　ぐっッ！　！」

「……調子に乗るな」

私はその顔に蹴りを入れ、倒れた誘拐者キトハの顔をさらに踏みつける。

「お兄ちゃんをナメているの？……貴方の命はお兄ちゃんが握っている。お兄ちゃんが許可さえ出せば、私はすぐに貴方を殺す。まあ、正確には殺し始める　　だけどねーえ……。」

大体、貴方程度のソンザイが、お兄ちゃんに跪かないなんて、どういっつもり？

巫山ふざけ戯るなッ！

私は激高し、足を高く上げた。

何度も、何度も踏む。踏み潰す。顎を蹴飛ばし、頬骨を壊し尽くし、頭蓋骨を踏み砕く。

汚い鮮血が、私の白い太腿にかかるが、それに嫌悪したり嘔吐したりする余裕などなかった。

私の我慢は、そろそろ限界に達していた。

修学旅行でゴタゴタに巻き込まれ、麻帆良祭でもこの様だ。一体何時になったら、お兄ちゃんに平穩が訪れるというのだろう。お兄ちゃん、平穩以外何も望んでいないというのに。それでも、周囲を護り、捨てられたドブ猫には手を差し出してしまふ人だというのに。

巻き込まれたくて、巻き込まれているわけではないのに。

見捨てられるほど、冷酷になれないだけなのに。

私にとっては麻帆良も、教師という立場も、お兄ちゃんを煩わせる

敵としか思えなかった。

お兄ちゃんに止められているが、その怒りは決して消えない。

いくらお兄ちゃんに甘えても、抱きついてても、キスしても、それは私のお兄ちゃんへの無限の愛を成長させるだけの行為に過ぎない。

そしてお兄ちゃんを愛せば愛するほどに、敵への怒りは増していく。そして私のお兄ちゃんへの想いには、上限など存在しない。無くなることも、減ることすらあり得ない。

本当に全てが煩わしかった。

こんな『世界』に送り込んだ創造神<sup>幼女</sup>も、麻帆良も、人間も、この目の前で血を撒き散らしている塵芥<sup>ゴミ</sup>も、この『世界』そのものも、何もかも疎ましく、煩わしく、憎い。

……お兄ちゃんの命令さえなければ。

消えてしまえ。

「輪廻ッ」

「ッ」

お兄ちゃんに大声で呼ばれ、私は思わずお兄ちゃんを軽く睨んだ。睨んでしまった。

そしてすぐに、自分の行為に気付き、愕然とした。思わず自身の目を潰したくなった。

酷い自己嫌悪に陥り、思わず、膝をつきそつになる。

私は乱暴に頭を掻くと、慌ててお兄ちゃんの元へと思った。

身体のおちこちに血がついていることに気付き、急いで消した。

私は謝罪しながら、お兄ちゃんの胸に擦り寄った。

その暖かさと匂いに触れ、頬を紅く染める。

しかし、私は目聡く、青褪めて震えている湖妖精ルサールカを見つけた。

「……何をしているの？ お兄ちゃんが待っているんだけど」

冷めた目で震える女を見やると、湖妖精ルサールカは震え上がって、慌てて喋り始めた。

「わ、う、事情は貴女の推察通りよ 実験で死んでいった、仲間たちを救うため、世界樹ユグドラシルの力が必要だったの。

……戦争中、前倒しにされた研究は、無茶な開発日程スケジュールの所為で成功するものも成功しなくなっただわ。多くの仲間が死んでいった。勿論、最初から成功する見込みもないまま、強行されたものもあつた。そしてまた、多くの仲間を失った……。

……なのに、なのに戦争が終わるやいなや、私達は用済みとなつた  
「……」

「五月蠅い」

「あぐツ!!!」

私は、涙を流して絶叫する湖妖精ルサールカの顔に、回し蹴りを喰らわした。

「お兄ちゃんの耳を、オゾマシイ声で汚さないでくれる？ 吠えるなら、塵芥チリに相応しい場所で吠えて頂戴。

……そもそも」

「輪廻。頼むから、話の腰を折らないでくれ。俺は気にしていないから」

「はい、お兄ちゃん」

苦い表情で私の肩を叩くお兄ちゃんに、私は心中でため息を吐いた。

お兄ちゃんの優しさを否定するつもりなんてない。でも、だからといって、お兄ちゃんが汚れる必要などないというのに。

やっぱり、拷問室こんなんじむに連れてくるんじゃないなかった。ここは命令を破つても、お兄ちゃんを入れさせなければ良かった。

珍しい誤判断ミスに、私はお兄ちゃんに隠れて舌を打った。自身の白い指が、あわよくば、私の白い首を絞めようとする。

見えない尻尾の一部は怒り狂った龍神。その力は龍神など比較にもならないが、の様に蠢き、残りの尻尾はお兄ちゃんに擦り寄り、甘えている。

お兄ちゃんは、そんな尻尾を撫でてくれていて、その感触に、思わず声をあげたくなってしまう。

こうでもしないと、（自身への）怒りでどうにかなくなってしまいそうだったからだ。

私はお兄ちゃんに、蠱惑的な笑みを浮かべることで、何とか、平常心を保っていた。



第44幕「視界、それは極めつけのエチュード」(後書き)

テストまで一週間。

やばいです。

たぶん更新は、テスト後となります。

新連載のLaLa7もよろしくお願いします。

第45幕「愛情、それは裁かれた想い / Purgatorial . . . Pain

ようやくテストが終わりました。

更新を再開します。

関西呪術協会の呪術師による、大規模な隠蔽術式が発動する中、夜や白しろ輪廻りんねと大河内おおこうちアキラ・長谷川はせがわ千雨ちさめの三人が、“事後処理”に入っていた。

アキラが『レインボウ・アーク虹色枢』の『藍』の力で、大規模な精神干渉術を発動させ、千雨がそれをサポートする。

そして、輪廻が、

「久しぶりに、いこうかな」

輪廻はダラン、と力を抜いていた姿勢から、急に両手を天に突き出し、顔を空へと向ける。

艶やかな闇色の髪が揺れる中、漆黒に染まった九本の見えない尻尾が大きく伸び 太くなった。

「ぐっ……」

千雨はその圧力に、意図せずして膝をついた。汗が止まらない。心臓を鷲掴みにされ、爪を立てられているような感覚に、千雨は必死に呼吸をしようと喘ぐ。

隣ではアキラが、顔を顰めて、しかし両足でしっかりと立って輪廻

を見つめていた。

ビル以上に大きくなった尻尾は、陽炎のように揺らめきながらしかし、異常なまでの圧迫感を放ちながら蠢いていた。

無表情で、ガラス玉のような瞳でそれを見つめていた輪廻は、少しずつ言葉を紡いでいく。

「私の名前は夜白 輪廻。夜白 刹那せしなだけに全てを捧げるモノ。

私の名前は夜白 輪廻。夜白 刹那のためだけに生きるモノ。

私の名前は夜白 輪廻。夜白 刹那だけを愛し、夜白 刹那だけに愛されるモノ。

私の名前は夜白 輪廻。夜白 刹那だけの楯となり、矛となり、奴隸となり、手足となり、道具となり、愛玩物となり、妹となり、女となり、雌となり、天狐となり、善となり、悪となり、願いとなり、悪夢となるモノ。

お兄ちゃんのためなら何でもできる。何だってしてみせる。お兄ちゃんが見たいモノ全てを献上し、お兄ちゃんが望まないモノ全てを壊す……嗚呼」

輪廻は恍惚とした表情となり、オッドアイに涙を浮かべる。

「そのためには、『世界』なんてイラナイ。餌もイラナイ。戦争も、正義も、麻帆良も、何もかもイラナイ。

私は、最低だ。最初からこうしていればよかつたんだ。何で、何で放置していたんだろう？あんなモノを。“膨大な魔力”？お兄ちゃんにそんなモノ必要なの？天狐わたしがいるのに？……イラナイ、そんな

もの必要無いッ！」

突然顔を空に上げ、輪廻は天に向け絶叫した。

空気がさらに壊れ始め、千雨とアキラの二人は、とうとうその場に崩れ落ちた。指一本動かせない。自分が死体にしか見えない感覚に、二人は心の底から凍りついた。それでも、精神干渉術は発動している。

アキラと千雨の精神力や忍耐力が凄いのではない。この二人の頭の中からは、すでに術のことなど吹き飛んでいた。では、なぜ発動しているのかというと、輪廻が、アキラから、術の操作権を奪っていたのだ。

尻尾はとうとう、麻帆良全域に広がるのではと思うほどに大きくなった。尻尾は、まるで輪廻の感情の高ぶりを象徴しているように激しく蠢いている。

輪廻の頭は冷静だった。が、彼女自身の心が怒りを抑えられなかった。

元より輪廻は、刹那に関する事で、我慢したり抑えたりするつもりなどない。

彼女の中では、全てが刹那より優先されることなど有り得ないのだから。

しかし。



それが何より恐ろしく、千雨の顔色は青を通り越して白くなっていた。

「足りないわ」

輪廻が叫ぶと同時に、未だ数万ほど残っていた悪魔が、一斉に消えた。跡形も残らず消えた。と、同時に。

「足りない、お兄ちゃんへの愛が全然足りないッ!!」

『世界』が、軋んだ。

「足りない足りない足りない、この程度で、この程度で私はお兄ちゃんを愛しているなんて……戯言<sup>ザレコト</sup>を。馬鹿だ、私は唯の馬鹿だ……捧げ足りない尽くし足りない甘え足りない愛し足りないッ!!! もっと、もっとお兄ちゃんに触れていないと、もっと感じていないと……嗚呼、許して、お兄ちゃん……出来ない妹<sup>ドレイ</sup>で御免なさい……お兄ちゃんを本当に愛しているのなら、あんなモノ、ほっといていたわけがない……足りなかったんだ、愛が。想いが……フツッ。私のお兄ちゃんへの愛は無限。これからも大きくなり続ける。そうなればいいんだ。

大丈夫。今度こそうまくやる。もう、お兄ちゃんの日常に……誰も入れるものか」

軋み、叫びをあげた『世界』の中で、千雨は今更ながら、刹那に黙ってこんなことをしたのを後悔した。

輪廻がここまで暴走するとは思わなかった。

輪廻の力を駆使すれば、刹那たちに悟られずにこんなことをするのは容易だ。

浅はかだった。こうなると、もう刹那しか止めることはできない。自分もアキラも、指を立てることすらできない。

というより、寿命が減っていること確実だ。比喻ではなく、本当にこのまま、ミイラとなってしまふのではないか。そんな馬鹿げた考えが浮かぶほど、冷汗は止まらない。アキラを見ても、完全に死人の顔色になっている。

自分もそうなっているだろう。

そして、再び千雨は必死になって眼球を動かし、視界に輪廻を捉えた。

そして、千雨は全ての感情を自らの意思で消した。

これ以上、恐怖と後悔に耐えられなかった。それ程のモノが、視界の中で蠢いていた。





「なあに、お兄ちゃん……愛してるよ。今まで以上に、これからも」

それは、一切の他意も無い、愛だけの笑顔だった。

第45幕「愛情、それは裁かれた想い / Purgatorial . . . Pain

輪廻でもミスはします、という話。

これで麻帆良祭編は終了です。

これからは、番外編や後日談をやっていきます。

番外編第6幕「モザイク・ワールド/Think・・・Lost A・M」(前)

<sup>ドクターズ</sup>  
娘達に関する補足のようなものです。

番外編第6幕「モザイク・ワールド/Think・・・Lost A・M」

「フウ……………」

『空間』内の大浴場で、マナ⇨A⇨Y⇨タツミヤは湯船につかり、疲れを癒していた。  
が、その顔はどこか不満げだ。

「……………どうしたのですか？」

それを マナの表情と、彼女の肢体を交互に見た綾瀬あやせ 夕映ゆえが、  
怪訝そうに小首をかしげる。  
それを一瞥し、マナは呟いた。

「面白くない」

「……………はい？」

「ああっ、面白くない……………」

マナは忌々しそうに舌を打ち、天井に視線を移した。

「刹那のことか？」

長谷川 千雨が、これまた不機嫌な表情　　つまりは普段の表情で  
マナを見る。

すると、ようやく夕映と千雨に見られていることに気付いたのか、  
マナはバツが悪そうな仕種をすると、小さく頷いた。

マナが怒っている理由は、刹那にあった。

夜白 刹那は、湖妖精と誘拐者の二人をどこかに送還すると同時に、  
桜咲Ⅱ YⅡ 刹那を引き攀れ、関西に向かってしまったのだ。

マナとしては、刹那にゆっくりして欲しかったし、何より、サクだけ  
が刹那と一緒にいることが気に喰わない。

「幼稚だとは理解しているのだが……こればかりは、な……」

本人にも自覚はあるらしく、マナは肩をすくめた。が、それが文字  
通りの意味でのポーズ　つまり更生する気は元々ない　である  
ということとは、誰の目にも明らかだった。

「しかし、輪廻先生も煌月さんも連れて行かないのは珍しいな」

千雨がそう言うと、夕映が同意だと言わんばかりに頷く。

夜白 輪廻と夜白 煌月。

刹那を護る最強の楯の内、二人とも刹那から離れるというのはそう  
そうない。というより、無い。

「私もあの人と一緒になってから大分経つが……こんなことは初め  
てだ」

夕映と千雨よりも、刹那と共にいる時間なら比較にならないほど長  
いマナも、戸惑ったように瞑目する。

「輪廻さんも煌月さんも気配が感じられないし……いや、気配を消  
すことくらいはあの二人にとっては朝飯前だが……超……いや。今  
は夜白<sup>……</sup>慧鈴<sup>……</sup>だったか。慧鈴の気配も感じない。まあ、色々と話をし  
ているんだろうが」

「話？」

「ああ」

今まで清聴に徹していた大河内<sup>おおいち</sup>アキラが聞き返すと、マナは頷き、  
推測と事実を述べる。

「輪廻さんと煌月さんには、“話し合い”を徹底的に隠す癖がある  
んだ。まあ、どうでもいい話 例えば暗殺の話とか は普通に  
するんだけど、重要な……二人同士の会議は徹底的に邪魔が入らな  
いようにする。刹那さんにすら内緒にする。

あの二人がああする時は大抵刹那さん絡みだ……おおよそ、今後の

刹那さんの護り方について話し合っているだろうな」

その一言に、千雨とアキラは顔を青褪めさせた。

先程の、輪廻の怒りを思い出したからだ。

実は、誰も気付いていなかったが、自身の甘さとミスに激怒していたのは輪廻だけではなかった。

煌月もまた怒り狂っていたのだ。煌月は輪廻の様に猛り狂ったりはしなかったが、怒りの度合いは輪廻と大差なかった。

勘弁してくれ。

千雨は頭を抱えた。

輪廻は世界樹を飲みこむと同時に、『夜白家』以外の者の世界樹に関する記憶を消した。世界樹は、最初から無かったことにされたのだ。

「あれはイライナイ。汚らわしい……汚らわしすぎて消しちゃったよ、お兄ちゃん」



輪廻はそう言って、刹那に飛びついていた。

「あんなお兄ちゃんトミの敵を呼び寄せただけの樹なんて邪魔なだけ。大丈夫だよ、私が護ってあげる。護ってみせる。もう……もう、こんなミスは二度としない」

刹那は呆然としていたが、どうしようもなかった。世界樹を復活させるような芸当など輪廻にしかできないし、それを輪廻が了承するわけもない。

結局刹那は、輪廻に抱きしめられ、顔を舐められ、キスされながら、輪廻のことを許すしかなかった。元より、輪廻に悪気があったわけでもない。

刹那が許した以上、輪廻に何を言っても無駄だ。彼女の頭の中では、世界中の全人類の意見よりも、刹那唯一人の意見の方が優先される。優先しなければ、刹那を愛していることにならないし、刹那に尽くしているともいえない。自分が刹那を愛している以上、全てにおいて刹那を優先しなければならぬ。

夜白 輪廻は、本気でそう思っている。

今回のことで、輪廻は自分が無自覚に甘くなっていた事を自覚しはずだ。そして、そんな自分に怒りを爆発させた。今の輪廻なら、刹那に話しかけた人間全員を消すことすら平気でやりそうである。

千雨は唸ったが、刹那の行動が、間違っていたとも思えない。

輪廻は刹那の説教はきちんと聞くと、反省もする。

千雨は直接見たことはないが、刹那に説教されたり戒められた輪廻は、それこそ絶望に染まりきった顔で猛省し、酷すぎる自己嫌悪に陥るものの、必ず同じ過ちは繰り返さないらしい。

しかし、刹那に無断でこんなことをした事で輪廻を怒ることはできない。なぜなら刹那は、輪廻に何の“枷”もはめていないのだから。報告の義務も、事前に指示を仰ぐ義務も、逐一許可を取る義務も与えていない。それだけ、刹那は輪廻を信用しているということだ。

だから刹那は輪廻を怒らなかつたし、ならば千雨も輪廻に文句を言えない。というか、怖くてそんな事したくない。

「……………邪魔するよ……………」

思考の海に浸かっていたところを引きずり出され、千雨は大浴場の入口を見た。

夜白 骸亜が、完璧なプロポーションを隠しもせず立っていた。

「……………ん、まだ帰っていなかったのか？」

かなり失礼なマナの一言にも、骸亜は小さく微笑しただけで済ませた。

慧鈴曰く、『娘達』は刹那に関する事以外は基本的に怒らないらしい。それこそ、自身を汚されたりでもしない限りは。

娘達は刹那が造った神工生命体で、人格のほとんどは、輪廻か煌月が素体となっていてらしい。その理由は、単にすでに把握しているため、設定させやすいからだそうだ。

が、それはあくまで基本、“枠組み”だけであり、その後の性格には刹那の教育や、周囲が影響していく。そのため、全く同じ性格の姉妹はいない。

「……骸亜さんに、聞きたい事があります」

夕映が拒否は認めない、と言った顔で骸亜を見つめた。

「……何だい……どうぞ……」

いつも通り、眠気を誘うような声で答える骸亜。髪に隠れた朱色の瞳が、夕映を捉えている。

「……娘達とは……何なのですか？」

沈黙。

全員が沈黙している中、骸亜が答える。

「……夜白刹那<sup>父上</sup>によって……造られた神工生命体……だよ。何度も言った通り……本当の話さ……」

「そこではありません」

夕映が首を振る。

「言い方を変えます……何で、刹那先生を……愛しているのですか？」

「愚問だね。父上は僕らの全てだ……僕らの祖であり、主人であり、家族であり、父であり……全てだ」

「……その想いは、本物なのですか？」

夕映が言った瞬間、骸亜の顔から表情が消えた。空気が凍り、室温が一気に下がる。

「……何が言いたい？」

謡うような口調は、すでに消えていた。

夕映は一瞬身を震わせるも、意を決した様に言った。

「それは……最初から備わっていた……輪廻先生達の……」

「違う」

「ッ」

夕映は息を飲んだ。

いつの間にか、目の前に骸亜の顔があつた。キスが出来る程の距離に、骸亜の怒りに歪んだ顔があつた。腐った果実を鍋に入れ、掻き混ぜたような瞳が夕映を映している。

千雨、マナ、アキラが慌てて立ち上がり、構えを取ったが、

「動くな」

の声で動けなくなった。身体が、瞬時に役立たずとなった。

「……夕映さん、それは違う。断じて違う。この“想い”は、父上に育て上げられ……共に過ごし、笑い合い、抱き合い、撫で合つたことで芽生えた想いだ。

父上は、最初から愛を植え付けるような真似はしない。絶対にしない……父上をこれ以上、誹謗するような真似は許サナイ。

……父上の『従者』ミニステル・マギ程度のブンザイが……あまり粹がるな……粹が

るなッ！

父上は僕たちを愛してくれる。だから僕たちも父上を愛する。尽くす。支える。護る……異論は認めない」

「……すみ、ませんでした」

ようやくそれだけ言った夕映は、そのまま湯船に身を沈めた。

「……フフッ。わかってくれればいいんだよ」

骸亜はそう言って、嬉しそうに笑った。

番外編第6幕「モザイク・ワールド/Think・・・Lost A.M」(後

骸亜はひとまず出番終了で、未来の世界に帰ります。

超こと慧鈴は残ります。が、出番はあまりないかもしれません。

第46幕「小聲、それはちぐはぐな誓い／About・・・After Tr

60話目となりました。

総合評価も1,000を超え、正直予想以上です。

これからも宜しくお願いします。



関西呪術協会総本山の会議室には、何十人も人間が集まっていた。全員和装に、所属する一族や血族・流派を示す家紋マークが刺繡されている。

長である近衛このえ 詠春えいしゅんが壇上に座り、彼を挟むようにして上級幹部若しくはそれらの付き人などが向かい合って座っている。

上級幹部はその半分近くが若い。前回の内乱で、“老害”が大量に減ったおかげだった。

頭目が失脚した一族は、代理乃至若頭というべき人間が、代わってこの場に集まっていた。

関西呪術協会は、その性格故に“血統”を重んじる。優れた呪術や神道術・陰陽道は、先天的　つまり、“血”の濃さで決まることが多い。

勿論、優れた術師の子孫が優れているとは限らないし、祖先が誰だろうが実力が高いものもいる。が、一族・血族の者のみ扱える“血統術”と言うべき術が存在し、しかもそれらの術は強大であることが多いこともまた事実である。

そして、強大な“血統術”を持つ一族は、代々組織の上役つわやくを拝命することが多い。無論当の本人達も、それと政治的手腕があるかどうかは別問題であることは自覚している。

そのため、彼らは政治的手腕を発揮し出した長　近衛　詠春に期待を駆けていた。

彼らは組織の上役であり、上役である以上、政治的要素に少なからず触れなくてはならない。唯力が強いだけの者にとっては、それが苦痛で仕方が無いのである。

近衛 詠春にとって幸いなことに、再編成された上役で、詠春に敵対しようとする者はほとんどいなかった。というより、興味が無かったと言った方が正しい。

それが、より中央（総本山） ひいては自分の権力を高めようと躍起になっている詠春にとっては、有り難いことである。

が、少なからずの例外も存在する。

詠春がホツとしたのは、権限が高い『八家』は全員（というより全構成員）が、最悪でも中立 最良で自分を全面的支持してくれているということだ。

しかし、総本山のこの政治家共が集まる時に醸し出される特有の空気 “水面下で火花が散っている空気” は、相当修羅場を潜っていないと慣れない。

桜咲<sup>おひやく</sup>＝Y＝刹那<sup>せつな</sup>もその一人である。

サクは終始不機嫌だった。

今回の件についての報告、そして八鍬<sup>やくわ</sup>家と式階<sup>しきかい</sup>堂家の者を援軍として送ってきた事への礼を兼ねて、夜白<sup>やしやく</sup> 刹那<sup>せつな</sup>は、サクを連れ立って、西の総本山までやって来ていた。

刹那が近衛このえ 木乃香このかの護衛に就いている事は、上役は全員知っており、全員がそれに肯定的だった。中には部外者（傭兵）の刹那に木乃香を任せることを糾弾した者もいたが、

「じゃあ、貴方が護衛に就いていれば、木乃香お嬢様を護れたのですか？」

と言われれば黙る他ない。

修学旅行で、『夜白家』が木乃香を護つたのは疑いようもない事実であるし、その時西が役立たずだったのも明らかである。

現在、近衛 木乃香については、

『高校卒業後、改めて彼女に“裏”の存在を伝えて訓練させ、長を継ぐかを確認させる。なお、伝えてから継ぐかどうかの決断には猶予として三年与える。

A・継ぐと答えた場合

中立である『夜白家』が近衛木乃香の訓練を行い、その後はアリアドネに留学させる。以後、近衛 詠春他上役が補佐をしつつ実務を行い、六年後に正式に近衛 木乃香を関西呪術協会長とし、近衛詠春は相談役となる。

B・継がないと答えた場合

近衛 木乃香と関西呪術協会の縁を完全に切り、何人たりとも呪術師として近衛 木乃香と接触することを禁ず。ただし、近衛 木乃香が術を学ぶ事を望んだ場合はその限りではない。そして次期後継者は全一族・血族・流派による不正なき厳粛たる投票により決める。

\*上記の事はすでに決定事項であり、不服がある者は関西呪術協会長近衛 詠春及び『八家』代表吉川当主いちがわに直談判し、代案を提示しなければならぬ。その代案が長及び『八家』当主全員が納得できた場合のみ変更する。』

ということになっていた。

そこは良い。納得できるし、そもそも部外者である自分は文句を言えるような立場ではない。

許せないのは、木乃香の修行の担当が『夜白家』に無断で丸投げされていたということだ。

勿論サクは木乃香が嫌いなわけではないし、彼女の修行を手伝う気満々である。

それに木乃香の修行を任せるには、現状では（信用面で）刹那以上の適役がいけないのも理解している。

が、『夜白家』が 夜白刹那が“厄介事の押し付け役”となっているかのような現実に、サクは怒りを隠せずにいた。

これを輪廻が聞けば激怒するだろうが、（西にとっては）幸いなことに、総本山くわんぽんに彼女は来ていない。

流星の輪廻も、木乃香を“刹那の敵を呼ぶ餌”扱くわいいしないだろうが、気分が良くなるわけもない。

サクは廊下で刹那の帰りを待ちながら、夕凧の鞘で床をコツコツ叩いていた。  
機嫌が悪い証拠である。

全く、刹那さんのことを何だと思っているのだ……詠春様も詠春様だ。事前に相談くらいはしても良いだろうに……ああ忌々しい、叩っ斬ってやるのか……。

流石にサクも、総本山の会議場の真横で殺気を迸らせるような真似はせず、瞑目して無表情を装っていた。

が、それを見つめるサクとは顔見知りの呪術師や神鳴流剣士、巫女からすれば、どう見ても虫の居所が悪い。いや、本当なら居所が悪いどころか憤死しそうなのだが、流石にそこまではわからなかった。というより、直視する勇氣などなかった。

いつそのこと、本気で暴れてみるか？上役の二丁三人は消せるやろ。化物一匹が暴れたくらいじゃ壊れないだろうし……うん？壊れるか？ここの結界はスカスカだからなあ……ん？いや、無理か……絶対刹那さんに止められる……あの人に怒られて、暴れ続けられる自信が無いわあ……。

常日頃から輪廻と煌月に教えられ、自身も刹那にどっぷり依存している事を自覚しているサクに、刹那に逆らう考えなど毛頭なかった。

サクは腹黒い事を平気で考えつつも、常時周囲を警戒していた。本来なら、ここに常駐しているはずのプロに任せるべきだろうが、油断は禁物だし、何より暇である。

最初は会議室で喋っている刹那の横で控えているつもりだったが、刹那から止められた。

半妖の彼女を、快く思っていない者は多い。

もともとサクは、刹那以外の評価や視線など気にもとめていないのだが、それでも“空気”を悪くする事は良い結果を生まない。

そして、何よりサクは政治家の雰囲気を嫌悪していた。

ああいう場に留まるのは、サク自身良い気分ではない。そのため、サクは不承不承ながら折れた。

「サク」

「あ、はい」

いつの間にやら隣に立っていた刹那を見て、サクは小さく破顔一笑した。

「どうなりましたか？」

「ん、話は帰りの新幹線でしょう」

「谅解いたしました。切符は手配してあります……あれ、詠春様とお話にならないのですか？」

対外的な目がある時は、サクは刹那の従順で生真面目一頭な従者を演じていた。

恭しく礼をした後、サクは小さく小首をかしげる。

「ああ、今日はちょっと時間が悪い。あとで連絡してくるそうだ」

「して……くるですか……少しは、誠意があるのでしょうかね」

怒りと軽蔑しか込められていない瞳を細め、サクは顎をさすった。

そんなサクの頭に、刹那の手が、ポンと置かれる。

刹那は苦笑しながら、サクの頭を撫でた。

「そう言っつな。詠春殿にも色々ある……さあ行こう。ようやく一息つける。サクやマナたちとデートの約束もあるし、輪廻も煌月も結構自分を責めていたからな……」

撫でられた頭をさすり、頬を薄く染めたサクは、歩き出した刹那の後を目で追った。

「悩んでいるみたいですが、貴方さえいれば、私達は何もいららないのですよ……」

サクは小さく呟いて、父親であり、愛する人を追いかけていった。



第46幕「小声、それはちぐはぐな誓い／About・・・After Tr

次回はどうしようかな……。

御意見・御感想は常に募集しております。

誤字を御指摘してくださる方、有難うございます。そういうのはしつかり訂正していきたいです。

番外編第7幕「硝子のライフ／Break・・・Exchange Life」

慧鈴（超）と娘達ドーターズの話です。

マナ「A「Yタツミヤは困惑していた。

夜白 刹那せいなが京都から帰還すると聞き、駅まで迎えに行こうかと考えながら『空間』の湖付近をうろついていると、突然湖の中から人  
正確には少女 が出て来たのだ。

しかも、藍色の振袖を着込んでいる。

マナと比べても遜色無い、寧ろ勝っているスタイルに、不自然なほど白い肌。そして、純白に輝く髪は背の中ほどの長さだ。瑠璃色ラリスラズリの瞳は輝いている。

どことなく、夜白やしろう 煌月こうつきを彷彿とさせる雰囲気 つまり、どことなく冷めた雰囲気と、夜白やしろう 輪廻りんねに似通った雰囲気 つまり、外面は大和撫子な雰囲気が混じっている。

とつさに腰の拳銃に手が滑りかけたマナだったが、『空間』の創造ホス主である輪廻に無断で入れる者がいるわけもなく、そして敵なら、輪廻が許可を与えるわけがない。

少女は全く濡れていない身体で水面を歩き、マナの前まで歩いてきた。

強いな。少なくとも、私一人よりは。

そう結論したマナは、“敵対の意思なし”<sup>ジエスチャ</sup> という意思表示も兼ねて、両手をひらひらさせた。

少女はどこからか煙管<sup>キセル</sup>を取り出し、一息吸う。

そして、無言のままマナに手を出した。マナはそれを見て、顔を綻ばせる。手には、マナ<sup>ハイライト</sup>好みの煙草が握られていた。

「あ、悪いね」

マナは無難な返事を返しつつ、煙草を一本抜き取る。啜えると、これまたいつの間にもやら火がついていた。

野外で初対面の振袖少女と一対<sup>サン</sup>一で一服というシチュエーションを暫く満喫した後、少女は瑠璃色<sup>ラピスラズリ</sup>の目を細めた。

それは、輪廻が部外者に向けるような 値踏みと侮蔑の感情が込められつつも、それを隠そうとしている視線だった。

実際、ストレートな長髪（ただし白）といい、白すぎる肌と言い、少女は輪廻とよく似ていた。が、背丈は輪廻より高く、スタイルも寧ろ煌月よりだった。

「<sup>ドーターズ</sup>娘達、かい？」

マナの中でその答えが浮上したのは当然だろう。

「ドーターズ  
娘達」。

今より未来の刹那が生み出した、『世界』管理補佐用の二八人の“娘”。性格や人格は輪廻達をベースとしていると夜白やしろう 慧鈴すれいから聞いていたマナは、目の前で紫煙を吐く少女をそう推測した。

「ええ、マナさん……長女やしろが夜白やすしろ 硯璃すずりと申します。宜しくお願  
いいたしますわ」

“清麗高雅せいれいこうが”と言おうか、“鮮美透涼せんびとつりよう”と言おうか、“優美高妙ゆうびこうみょう”  
が適切だろうか、そんな雰囲気を纏った女性は、優雅に微笑した。  
女のマナでも、ゾツとくるような気品があった。

「やはり知っているか マナ=Y=A=タツミヤだ。宜しく」

マナも社交辞令程度に挨拶を返す。

「どうしたんだい？というより、時を越えられるのは慧鈴がいはか骸亜がいあく  
らいだと聞いていたんだが……」

「まさか。愚妹に出来る事が、長女わたくしにできないとでも？時空間を跪  
かせれば栓も無い事ですわ」



行為が完全にマフィアか何かのそれであるが、彼女がやると、それすら気品がある。

「あら、相変わらなず姉に対する態度が成っておりませんわね、しかも下品な悲鳴まであげて……見苦しい。貴女のような下賤な者が、御父様の娘を仮にも名乗っているとは……嘆かわしい限りですわ」

呆然とするマナを尻目に、というよりガン無視しつつ、硯璃はわざとらしくため息を吐く。

「ぐつ、アンタが無理矢理引つ張るから……っていうか、何のためにここに来た！？主君ロードに何をやる気だ！？」

「人聞きの悪い事を……わたくしは夜這いを仕掛ける浅ましい愚妹あなたたちとは違うのです。勿論この時代の御父様の御顔を拝見し、このわたくしを味見していただきたい気持ちはありませんが……本日は任務おしごとですわ。」

……馬鹿で愚鈍で下品な愚妹を連れ帰るといふ……大切なお仕事です。暢気に御父様おやさまとの日々をしていた貴女と一緒にしないでくださいいな」

「本音唯漏れだッ！……っていうか、仕事は！？“支配”と“統括”が任務のアンタに休みがあるわけ……」

「失礼な、有給を消化しただけですわ……。貴女と違って、わたくしは有効に活用しております。問題もありましたが、そんな些事は

黙らせましたわ。

もともと此方に来る時に、制服ではなく振袖しほくに着替えましたが」

「溜ロケまった有給の全てを主君に甘えるためにつか」

「それが有効活用で無ければ何だというのです？ はあ、貴女のような、碌ロクに御父様を愛していない愚女が近寄るのだから、御父様も大変ですわ……」

この一言は聞き逃せなかつたらしく、慧鈴は憤怒の形相で力づくで起き上り、硯璃の喉笛を引き裂こうとした。  
が、

「戯タラけが “ 戯タラけ者へ命じる。 ” 跪ヒザマスケけ」

「ぶっ！！」

ようやく上げた顔も上半身も、再び地面に叩きつけられた。

「何度やっても無駄ですよ。わたくしの『世界覇者』の力から逃れる事は叶いませんわ。

誰しも御父様に跪き、御父様の靴を舐めることになるのです……。汚らわしいですから、そんなこと許しませんけど」

そんな光景を見ながら、マナは思った。



性質タチが悪い。

マナの想像通り、夜白硯璃は、輪廻と煌月を足して、それを高慢にしたような性格をしていた。

清楚な雰囲気はこんな時にすら消えず、彼女の高潔さに磨きがかかっているが、寧ろそれがギャップを生み、高慢さもより引き出されている。

夜白硯璃。夜白刹那に他者を跪かせることを己の使命と化し、刹那と輪廻・煌月などを除く全てを“戯け者”と断する少女。

夜白硯璃の力は『世界覇者』。全てを跪かせ、全ての存在を指定できる。誰も彼女の“命令”から逃れる術を持たない。彼女に“死ね”と命じられれば死ぬしかない。死に方を選ぶ権利すら与えられない。

そして今まで彼女に マトモな死に方を“命じられた”者など一人もいない。

骸亜程ではないにしろ、硯璃もまた加虐性愛者サディストである。

「それよりも、とっとと帰りましょう。本当なら愚妹したっぱにやらせる予定でしたが、貴女が身分不相応にも御父様の傍にいとわかったの

で、慌てて不肖、夜白硯璃が直々にここまで来たのです。で、来てみたら案の定。

……全く、念のため御父様から許可を取りましたが、愚妹がこんなことにこんなに時間をかけていたとは……しかもいつの間にもやら骸亜まで呼んで。

身勝手な行動は憤みなさいな……とつとと帰りますわよ」

「うっ  
」

時間をかけていた　つまり麻帆良留学時から今まで　事は本当なので反論できないし、実は骸亜を呼んだのも独断、それも急になので、未来の『世界』で多少の混乱（歪み）が起こるのは必至だった。

そしてその歪みを修復するのも、硯璃の仕事なのである。

硯璃もまた、刹那の役に立つ事を生き甲斐とし、刹那に尽くす少女である。そんな彼女が仕事で手を抜くはずが無く、そんな時に妹に一人は長期間任務に戻ってこなくなり、もう一人が突如外出すれば流星の彼女も頭を抱える。硯璃は多忙で、これに余計なトラブルが加われば、正直投げ出したくもなる。

が、彼女が刹那からの命令を放棄するはずが無い。<sup>オーダー</sup>

一〇〇%以外の結果を求めるはずが無い。

妹のミスに、目をそむけるはずが無い。

「すでに『世界』管理に少なからずの悪影響が出ておりますわ。勿論この時代の事も大事ではありますが、それにのめり込み過ぎてわ

たくし達の時代にまで悪影響ができれば、本末転倒でしょう？  
少しは自覚をお持ちになつてくださいな。貴女の様な愚妹でも、御父様は必要としているのですから」

真摯な口調で説教された慧鈴は、いつの間にもやら支配から抜け出ていた。それに気付いた慧鈴は急いで正座をする。

硯璃は妹を“愚妹”呼ばわりし、高圧的な態度で接する事も多いが、刹那にすっかり教育を受けている。つまり、真の意味で悪人ではない。  
妹を護る義務感もあるし、長女である自覚もある。

「 申し訳ありませんでした、硯璃姉様」

こう言われれば、慧鈴も謝罪し反省するしかない。

本来なら、麻帆良祭が終わった時点で帰還しなければならなかった彼女だが、刹那と共に過ごしたいという誘惑に負け、なかなか帰れないでいた。

それは彼女の自分勝手な行動であるし、そのせいで姉に迷惑をかけた。

無論硯璃も、そんな慧鈴の心境は痛いほど理解できる。

だからこそ、わざわざ色ボケじみた返しをしていたわけだが……言うまでも無く、味見して欲しい云々は、彼女の本心である。

慧鈴の態度を一瞥した硯璃は頷くと、正座している慧鈴の後ろで煙草を吸っているマナの方を向き、丁寧に頭を下げた。

「マナさん、申し訳ありませんが、一身上の都合により、愚妹もろとも御暇させていただきますわ。」

慧鈴のことは安心してくれと御父様や輪廻さん達に宜しくお伝えしてください」

「……早いな。もう行くのか」

「ここにいれば未練が残るでしょうし」

流し目で慧鈴を見る硯璃に、マナは返す言葉も無いのか苦笑した。

そして、二人は消えていった。

番外編第7幕「硝子のライフ／Break・・・Exchange Life」

慧鈴が帰還いたしました。

番外編くらいで、また出番があると思います。

第47幕「螺旋、それは誘れた正夢 / Hat . . . Eerie Sight」

魔法世界編の構成がまだはつきり決まっていないので、更新が遅れるかもしれません。

タン、と銃声が響き、乾いた飛翔音が後に続く。

「あ」

発信源である銃を構えた少女、マナ「A」Y「タツミヤは、啞えていた煙草を落としかけた。

「撃っちゃったよ」

「いや、凄くわざとらしいんですけど」

放たれた銃弾を平然と避けたロングヘアの少女は、目を閉じたまま不愉快そうに眉をひそめた。角が生えており、亜人であることが窺える。

少女はため息をつきながら、脇わきに抱かかえていたモノを使った。

殺風景な草原に、白い円形テーブルと椅子が現れた。

少女はどこからか同じく白いティーポットとカップを取り出し、マナに椅子を勧める。

ポットを傾けると、薄い茶色の液体がカップに注がれ、紅茶特有の香りが周囲を満たした。

「悪いね、ブリジット」

「今は、“調”<sup>ツウ</sup>と呼んでくれませんか？いくら貴女が相手とはいえ、一応任務で来てますので」

困ったように小首を傾げ、自身を調<sup>ツウ</sup>と呼んだ亜人少女、ブリジットは脇に抱えたモノを下した。

「なんだ、そんなものをまだ持っていたのか」

マナがせせら笑うように言うと、ブリジットは明らかに機嫌が悪くなった。相変わらず両目は閉じたままだが、整っていると言っている顔立ちは歪んでいる。

「捨てるつもりですか？私と刹那<sup>セツナ</sup>様を繋ぐ、目に見える貴重な絆なのです」

ブリジットは「戻れ」<sup>アヘアット</sup>と呟き、それをカードに戻した。

仮契約カード<sup>バクティオ</sup>である。彼女はカードを愛おしげに見つめ、抱きしめる。

それをどこまでも不快気な表情で睨みつけていたマナは、紫煙を吐くと諦めたような口調で言った。

ついでに煙草の火を消し、紅茶を一口飲む。



「そつちの調子はどうだい？まさか、『コスモエンテレケイア完全なる世界』に入っていたとは思わなかったよ」

「私もあの時は別件で動いていましたから、『わたしたち完全なる世界』が『夜白家』と同盟を組んでいたなんて知りませんでしたよ……知っていたなら、真つ先に会いに行きましたよ」

“ブリジット”……正確にはそれすら本名ではなく、彼女の本名は“ブリジット＝ヤシロ”。夜白刹那やしろせつなが拾った戦災孤児で、“家族”的な意味ではマナとサク（桜咲＝Ｙ＝刹那）の後輩に当たる。

刹那に拾われた彼女は、マナたちと同じように夜白輪廻やしろしんねや夜白煌月やしろくわげつぎ、そして刹那自身から鍛えられたが、ある日突然

「私はまだまだ力不足です。このままでは、刹那様の娘として従者として示しがつきません。そのため、少し修行してきます。適当に世界を廻つたら戻りますので」

そんな事を言つて出で行ってしまったのだ。

本来なら刹那達に修行を見てもらった方が何倍も効率的なのだが、ブリジット曰く『自分一人で生きていけるようにならないと、いざという時必ず刹那様を頼つてしまう』らしい。

それから五、六年は経っているわけだが、彼女は元々才能があつた。近・遠距離問わず戦え、頭も悪くない上に戦略眼もあり、植物（とスキル）（というより木）を操れる特殊能力がある。

加えて、彼女のアーティファクトは、結構強力なのだ。

刹那達が修行をつけている事もあって、その実力は折り紙つきである。

マナ達より少し下、というくらいだろうか。

『完全なる世界』でも、十分やっていけたらうことは、想像に難くない。

「任務については順調です。重畳じゆうたうすぎて怖いくらいです……あ、そうそう、刹那様から何か御命令はありませんでしたか？ あればすぐにでも実行いたしますが」

「特に何も聞いていないが。それに、刹那さんだったらわざわざ私を通す必要が無い」

「それもそうですね。この前も、久しぶりに会ったお祝いとして色々送って来てくれましたし」

ブリジットは複雑そうに顎を撫でた。

「本当なら**貶花様**おとしはなが連絡役としてくるはずでしたが、何しろ相手が刹那様なので……無理を言っただわってもらいました」

「貶花？」

「幹部の一人ですよ、幹部の中では一番の新人です……あ、私は幹

部ではありませんよ？ あくまでフェイト様の補佐役にすぎませんので。

ついでに報告しておきますが、せっかくなのでフェイト様にもクテイオ契約をしていただきました」

「二重ドブル仮契約か……無茶な事を」

「刹那様から頂いたアレがあれば容易い事です。フェイト様は呆れていましたが……戦力が上がるのは良い事です。これで、刹那様を護れる力が増えました」

どうやらブリジットにとっては、フェイト「アーウエルンクスすら自身の野望のための道具にすぎないらしい。勿論フェイトもそれは承知だろう。喩え自身を駒としてしか見てなかるうとも、イエスマンよりは余程役に立つ事は明白だからだ。

しかも聡明なフェイトなら、ブリジットがわざわざ『完全なる世界』を敵に回すような真似をするわけが無いことくらいすぐにわかる。ブリジットが求める力は刹那を“護る”力であり、敵を“滅ぼす”力ではないのだから。

彼女　ブリジット「ヤシロの思考は単純明快だ。

彼女は、輪廻たちとは大きく異なる。

敵を“始末”するのではなく、刹那を“護る”。

しかしそれは、敵を殺さないという意味ではない。

唯、護ることに主眼を置いているだけだ。受け身な考え方だが、それが彼女のスタンスだった。

「よく平気でいられるね……私だったら絶対にできない。刹那さん以外と仮契約バクティオだなんて……考えるだけで怖気が走る」

「くすくす、刹那様を護るためなら、この程度の事は我慢します……。あ、キスはしていませんよ？」

胸を張るブリジットだが、それ程自慢になるのかは本人にしか分からないだろう。

「それより、いつ『夜白家』こしちに合流するんだい？」

理不尽な敗北感に苛まれたマナは、慌てて話題を変える。

紅茶を飲んでいたブリジットは軽く頷くと、

「刹那様からの御命令がおり次第合流するつもりです。すでにフイト様からは許可をとってますし」

「ここ魔法世界で、大きい花火を打ち上げるそうじゃないか」

「“計画”は最終段階に入っておりますから、私がすることはあまりありません。敵勢力の殲滅くらいは勝手にやってくれるでしょうし。」

刹那様以下『夜白家』われわれには手を出さない、寧ろ我々は潜在的同盟組

織と思っているようですね」

「『世界』の管理は神の仕事だし、輪廻さんが脅していたからどうにでもなる。これは運命という名の茶番だよ」

「茶番ですか……いいですね。やる分にはゲンナリしますが、見る分には最高です」

「全く同意だ」

マナは何度も頷き、憐れむような表情で言った。

「ま、精々『英雄の息子』様には頑張ってもらおう。幕間で踊ってしまえばそれで仕事は終わりだ。『魔法世界の崩壊』……そんなことは、とつくにありえないことになっている。

“崩壊”は起こらない。『完全なる世界』の行動も唯のポーズさ」

「ポーズ？ 要するに、単なるパフォーマンスということですか？」

「ああ、記録上、誰かさんが魔法世界救済のために動いたという証拠が何としても必要なんだよ。

そうしなければ、“崩壊”の前兆すら見抜けなかった御偉い方……帝国上層部とか元老院はいい面の皮だ。だからといって、“崩壊”しかけるのは隠しようが無い」

「そんな時、『英雄』ナギィスプリングフィールドの息子が仲間を率いて“聖戦”<sup>ジハード</sup>を起こし、見事に“崩壊”を止め、それを企んだ“悪の組織”を討ち滅ぼした……。

なんて素敵な英雄譚でしょうか……ああ、成程」

「ああ……大衆が熱狂するのに十分なストーリーリイだな、感動のあまり涙が出るよ」

二人は皮肉気に嗤い、視線を交わし合う。

美少女二人が邪悪の笑みを見せながらティー・タイムをしている様は何とも不気味である。

「そして人間の西洋魔法使いは、原則的に連合に属していますから」

「連中が彼を散々持ち上げた後、手柄を全て横取りするのは目に見えているな」

マナが口を三日月形にしながら言うと、ブリジットは大げさに頭を抱えて首を振った。同情しているようだがまったくもってわざとらしい。

「はてさて、どうなることやら？」

「決まっているだろう？ 勝利の女神は、常に刹那さんにだけ微笑むのよ」

その後、心底楽しそうな声が辺りを震わした。  
嬌笑カウシウシウシだった。



第47幕「螺旋、それは誘れた正夢 / Hat . . . Eerie Sight」

ブリジット（調）の戦闘スタイルは、大分原作からかけ離すつもりです。

というより、彼女は元々両組織の二重スパイとするつもりだったのですが、『完全なる世界』との関係が思ったよりも良好になったためにこんな立ち位置になりました。



第48幕「天秤、それは苦し紛れの金粉と鉄屑」(前書き)

来週辺りから実家に帰省しますので、更新できなくなるかもしれない  
せん。

## 第48幕「天秤、それは苦し紛れの金粉と鉄屑」

「リン姉様」

木乃香このかが私に話しかけて来た時は、はっきり言って嫌な予感しかなかった。

お兄ちゃんから関西呪術協会の新方針を聞いた時から嫌な予感はしていたが……結論から言うと、木乃香は関西呪術協会の長を継ぐことになった。

本来木乃香には、高校卒業から決断まで三年の猶予が与えられるはずだったが、結局それは御破算となった。

『八家』の勢力下に無い一部が猛反対し、『早急に決断を出すべし』と（詠春に）直談判したためだ。反対派は意外と多く、粘り強かった。

西の戦力は増強傾向にあるため、関東魔法協会とは拮抗　いや、  
凌いでいる。

が、東にはメガロメセンブリア連合という巨大なバックが存在する。  
“国家”そのものを相手取るには、人材・勢力範囲・政治力・協力  
組織　何もかも足りない。

“新世代”関西呪術協会を率いるには、長や（一部の）現西上役は  
年を取り過ぎていて　それが、彼らの主張だった。

彼らからすれば、新体制を築いた詠春ですら“老害”だったらしい。

はた迷惑な事に、彼らの主張はそれなりに筋が通っていた。

「今の西の長に、力など必要ない。必要なのは“血”と“政治力”だ。そして前者はともかく、後者は簡単には養えない……成人を迎えてからでは遅い」

というのが彼らの主張だ。

厄介な事に、これまで政治に全く関わっていなかった者が長に就任しても、現場は混乱するだけだという事は、詠春自身が（不十分な形ではあるが）証明してしまっていたのだ。

その結果がこれだ。

木乃香は自身の“本当の”立場を教わり、決断を強いられることになった。

自身の見通しの甘さに切腹しかけた詠春を叩き潰した私達に、木乃香はあっさりと長を継ぐ旨を伝えてきた。

もつとも軽く二週間は部屋に閉じこもりあれこれ唸っており、明日<sup>あす</sup>菜<sup>な</sup>やサクに苦勞をかけたらしいが。

後は当初の予定通り。

この“予定”自体が西の独断であり、私としては大変気に喰わないのだが　お兄ちゃんも納得していたので、仕方なく私も承諾した。木乃香は私達に呪術や戦略その他を伝授されることとなったわけだ。

「あ、あの……リン姉様……」

「……お兄ちゃんとの仮契約バクテイオはナシだよ」

私がそう言うと、木乃香は見る見るうちに悲しそうな表情になっていった。

「どうしてなん？　せつちゃん（サク）やマナちゃんだってしてるやん、うちかて……その、セツ兄様を」

「そ……う……い……う……こ……と……じ……ゃ……あ……な……い……ん……だ……よ」

私は頭を抱え、木乃香の顔を見据える。

彼女がお兄ちゃんを慕っていることくらい知っているし、それが恋愛感情だということも気付いている。

そのこと自体には問題ない。お兄ちゃんは、あまりにも魅力的すぎるのだ。幼い頃から顔見知りである木乃香が、そう言う感情を持つたとしてもおかしくないし、それを否定しようとも思わない。

でも、木乃香とお兄ちゃんバクテイオの仮契約を、許すことはできない。

「木乃香は次期関西呪術協会トップなんだよ？」

……その次期トップが、“中立”のお兄ちゃんミニステル・マキの従者というのがま

ず大問題。まあお兄ちゃんが従者ならまだ何とかなる……かもしれないけど、そこは『夜白家』のスタンスに関わるし、何より私が許さない。

そして、西のトップが西洋魔法の仮契約を結んでいる事も問題。体裁的に大問題。西洋魔法と呪術をミックスさせようとする代替的な連中もいるにはいるけど、どこにでも頑固者はいるからね」

「……………」

今にも運命を呪いそうな表情で苦悶している木乃香を見る。頭では嫌というほど理解できているが、心では納得していない……そんな表情だった。

「……………どうしても、だめなんか？」

「お兄ちゃんに師事する時点で限界なんだよ……悪いけど、これ以上お兄ちゃんを西に食い込ますわけにはいかない。

貴女だって、自分の都合でお兄ちゃんに迷惑をかけたいの？ 西と東の権力闘争に、お兄ちゃんを巻き込みたい？」

藁にも縋る様な表情で聞いてきた木乃香に、ピシヤリと言いつつ。

我ながら卑怯な言い方だ。

これでは木乃香は いや、お兄ちゃんと関わりのある全ての女性は、引き下がるしかない。  
引き下がることしかできない。

「……もつとも、仮契約以外ならできるけどね」

「……へっ？」

「相手と主従関係若しくは均等関係を結び繋がる術　それは、何も西洋魔法にしかないわけじゃあないからねーえ」

私が悪い笑みを見せながら言うと、木乃香は顔を輝かせた。

仮契約が問題なのは、仮契約が西洋魔法であること。そして、主従関係を結ぶ契ちやくであるということだ。

もつとも『仮契約』で結ばれる契に明確な主従関係はない。寧ろ相互扶助の対等関係なのだが、名称が『魔法ミクステル・マキ使いの従者』であることから分る通り　伝統的に魔法使いの方が主として扱われがちである。

それは魔法使い特有の“魔法原理主義”とでもいうもので、何千年もの歴史によって培われてきた“伝統”だ。

しかし、そのような契約系の術は、陰陽道にも日本神道術にも存在する。

そして一方通行な契約ではなく対等な契約ならば、何の問題も無いわけだ。

私がそう暗くらに示唆しそくすると、木乃香は踊り出さんばかりに喜んだ。

「“書庫”に行つてきます」

木乃香はそう言うと、礼もそこそこに部屋を飛び出していった。

“書庫”は『空間』の主島にある施設で、図書館島の電子書ヴァー  
ジョンのようなところだ。あらゆる書物は電子データ化され、電子  
化できないものも無理矢理データ化している。中央管制コンピュー  
タにアクセスすれば、5秒とかからず必要なもの全てが揃う。

元々はサクヤマナ・ブリジットの修行用のために造ったものなので、  
検索した術の習得方法や儀式に必要なものも（実物として）すぐに  
用意されるという親切設定となっている。

最近では千雨ちゆや夕映ゆえも足を運んでいるので、最近になって拡充させ  
た。木乃香が突撃していても、まだ余裕があるはずだ。

それにしても、どうするべきか。

私は自室で抹茶を飲みながら、思案に思案を重ねる。

前回の失敗から、私はようやく立ち直った。

もうあんなのは御免だ。これ以上、お兄ちゃんの日常に土足で入り込ませるわけにはいかない。

幸いな事に、『完全なる世界』とは上手くいっている。ブリジットが向こうに食い込んでいたのは嬉しい誤算だ。

まあ、上手くいっていなかったら潰して終わりだが。

いっその事、もっと積極的に駒を増やす事も考えたが、流石にお兄ちゃんが納得しないだろう。

魔法世界の危機が去ったら、とつと旧世界に引っ込んでのんびりするくらいしか妙案が無い。

お兄ちゃんが殺戮を望んでいない以上、魔法世界も東も西も全て消すのは不可能だ。手段や方法はいくらでもある（極論さえ言えば、尻尾を一振りして『世界』を壊せば済む）が、実行は出来ない。

結局はお兄ちゃんの命令を無視しない限り、完全にお兄ちゃんの『平穩』を護る事は不可能なのだ。今更になって気付くとは、自身の軽率さと盲目ぶりに怒りを覚える。

でも、お兄ちゃんの命令には逆らいたくない。

結局私の方針は、現れた障害を、できるだけ迅速且つ完全に排除すること落ちて着いた。

だが、いざとなったら私はお兄ちゃんの命令を無視し、お兄ちゃんのためだけに全てを壊してやる。

私は湯呑みに茶を注ぎながら、その時の光景を思い浮かべて悦びの笑みを浮かべていた。





第48幕「天秤、それは苦し紛れの金粉と鉄屑」(後書き)

刹那と木乃香の契約についてはまたいずれ。

**第49幕「警告、それは逃避と恐怖のコンポート」(前書き)**

明日から実家に帰省するため、更新を一時停止します。

御意見・御感想は随時募集しております。

## 第49幕「警告、それは逃避と恐怖のコンポート」

私は尻尾の先に青白い炎　　“狐火”　　を燈し、それを軽く振った。

ふよふよと浮かんだ狐火は横に広がると、ポン、と小さな音を立てて弾け飛んだ。

そしてそこには、お兄ちゃんの三人目の“娘”であり“従者”でもある少女、ブリジットが立っていた。ただし全体的に青白く、所々透けている。

『きつねび 狐火・まよいきが 迷戯画』

対象者の精神の一部を一方的に呼び出す召喚術で、発動中、対象者の方には特に自覚は無い。が、術が切れるとその間培われた記憶が“本人”に還元される。

「あ、輪廻様……お久しぶりです。」

いたって動じることなく、優雅に礼をするブリジット。この辺りはお兄ちゃん（と私と煌月）の教育の賜物だろう。

「うん、久しぶり。お兄ちゃんから『無理はするな』って伝言ね」

私が言うと、ブリジットは相変わらず両目を閉じながらも顔を綻ばせた。『身に余る光栄です』と言うと、そのまま頭を垂れて臣下の礼を取った。

つくづく、皆似た者同士だと思う。いや、サクやマナ、ブリジットはお兄ちゃんや私達が親代わりだったのだから当然か。

とにかく、仕事モードでは（お兄ちゃんの）忠臣となるのが『夜白家』メンバーの特徴だった。

もっとも長年行方知れずだったブリジットは、色々あってメンバーが増えた新生『夜白家』ではどのようなポジションかは決まっていない。『完全なる世界』との連絡・調整役となるだろうが……ブリジットはそういう役には向いていない。

ブリジットは頭は悪くないし、戦略眼もある。脳筋でもなく、慎重で滅多な事では暴走しない。つまりお兄ちゃん絡みでは暴走するという意味だが、し、お兄ちゃんの従者を名乗るに見合う実力も持ち合わせている。

しかし、これはお兄ちゃん以外の『夜白家』全員にも言えることだが、彼女はああ見えて我が強い。特に、お兄ちゃんの事に関しては妥協しない。

私としてはそれで満足だ。逆にブリジットが弱腰になりすぎて『完全なる世界』の意向を伝えるだけの“伝書鳩”になられてはこっちも困る。

こちらが承諾できないなんてわかりきっている事をイチイチ伝えられ、お兄ちゃんの耳に入れる事は（お兄ちゃんの）時間と（お兄ち

やんの（労力の無駄遣いもいいところだ。

煩わしくてしょうがない。

だったら、最初から交渉沙汰にならないようなことは、門前払いしてくれの方が有り難い。

まあ、おしゃべり人形やデユナミスアーウエルンクスにおとしばな（先日画面越しでだが挨拶を交わした）といった幹部達に、わざわざ断られるとわかりきっている提案を出してくるような酔狂な趣味が無いと信じたいが、どうもあの連中は、そういった“実験”を平気でやりそうで困る。

私や煌月が、見ただけで激昂するような事案を、冗談抜きで挙げてきそうだ。

私もそんなことになって、ついカツとなって連中を皆殺しにして、お兄ちゃんの予定をご破算にするのは御免なのだ。

元々私は、自分の感情を抑え込むという行為が得意ではない。

結果としては自身の故郷を滅ぼしたし、幾つかの『世界』で被害を出した。

もっともそれは生まれたての頃の話で、少し経った頃は普通に制御できた。が、特にする必要は感じなかったから敢えてしなかった。

自分以外などどうでも良いと思っていたから。

創造神幼女が死のうが『世界』が滅びようが関係なかったから。

最初の頃、私は『世界』に何の興味も持たなかった。

持つ必要性を感じなかった。

でも、それもお兄ちゃんと出会って全てが変わった。

最初の頃は、『世界』はこれほどまでに美しく、素晴らしいものだ  
と思っていた。お兄ちゃんと私を会わせてくれた『世界』に感謝し  
たし、お兄ちゃんを生んだ『世界』に賛辞を送った。  
が、それは間違いだった。

今思い出しても、赤面ものの恥ずかしさだ。

お兄ちゃんとの時を重ねていくにつれ、私はいろんなモノを見て来  
た。

時にはお兄ちゃんが、暴力をふるわれた事もあった。

あの時は生まれて初めて激怒し、すぐに殺しまくったが。

お兄ちゃんが馬鹿にされる事も、頭が良すぎて苛められた事も、両  
親がいらないのをネタにされ、嗤われた事もあった。

そしていつの間にか、それらの報復 塵芥掃除ユキをする事が当然の  
こととなった。

そうして汚らわしい血を被り続けていくうちに、私は知った。

『世界』が美しいなんて嘘だ。私は、とんだ思い違いをしていたの  
だ。

美しいのはお兄ちゃんだけだった。お兄ちゃんが美しすぎて、本来汚い『世界』ですら綺麗に見えていたのだ。

そう、お兄ちゃんだけが美しい。お兄ちゃんだけが素晴らしい。お兄ちゃんだけがカッコイイ。

それに気付いた時、私は自身の愚かさに、心底嫌気がした。

あまりに神聖な存在に出会ったから、その周りのモノまで綺麗だと信じ込んでしまったとは……軽く三日はへこんだのを、今でも覚えている。

『世界』は、お兄ちゃんが住まうには余りに不釣り合いで汚れている。どこまでも汚れ切っている。

だからこそ、よってたかつて『世界』はお兄ちゃんにその汚物にまみれた牙をむくのだ。

お兄ちゃんの敵が生まれ、お兄ちゃんを傷付ける。

勿論私はそれを静観などしない。するつもりもない。

「だから      キライなんだよ、『世界』も神も、お兄ちゃん以外の何もかも」

「……………」

私が無意識に吐き捨てた一言に、ブリジットは怪訝そうに小首を傾げる。



それに気付き、何でも無いと首を振ってブリジットを見つめる。

「お兄ちゃんとの仮契約バクティオは生きているから、アーティファクトは使えるんだよね？」

「コレですね……。はい、使えます。今でもお世話になってますよ」

懐から取り出したカードを恍惚とした笑みで穴が開くほど見つめるブリジット。……。そう言えば彼女には、仮契約カードバクティオを眺めてはトリップする癖があったっけな……。

彼女はそれを遮られるとキレる。殺気を当てられればまだいい方で、前にそんな愚をやらかしたKYを、根やら何やらで造ったリアル“アイアン・メイテン鋼鉄の処女”にぶちこんだこともあった。

「このアーティファクトは凄いです。まさか輪廻リンカウ様の真似事が出来るとは思っていませんでした……。それを含め、刹那様には感謝しております」

「うん、いいものが手に入ったよね」

マナの『御転婆少女』ワイルド・ファンクやサクの『変幻刀・羽羽斬』へんげんとうなど、お兄ちゃんの従者のアーティファクトは規格外な（私が言えた義理ではないが）モノが多い。

お兄ちゃんお兄ちゃんは神の中でもトクベツだし、そもそも神と人間（亜人）

の仮契約バクテイオ自体がそうそう滅多にあるものじゃあないのだから無理はないのだが。

「それで、本日の御用件は？」

「うん……貴女、『夜白家』との連絡役も兼ねているのでしょうか？」

「ええ、そうですね。……フェイト様には許可をいただきましたし、当初連絡役に就くはずだった販花様も喜んで交代してくださいましたが……何か？」

「んー……アーウェルンクスに伝言を頼みたくて」

「承りました。文面はどのように？」

「一言……いや二言で良いよ……」

私は一息つき、ブリジットを見据える。

「お兄ちゃんをあまりアテにするな。お兄ちゃんを巻き込めば殺す」

私がそう言つと、ブリジットはニヤリと笑った。心なしか、彼女はかなり興奮しているように見える。

「 承りました」

「じゃあ、召喚終わり」

私が指を鳴らすと、ブリジットの姿はポン、と湿気った爆竹の様な音と煙を立てて消えていった。

**第49幕「警告、それは逃避と恐怖のコンポート」(後書き)**

魔法世界編の展開がちょっと詰まっていますので、ちょっと更新が遅れ気味ですね。

申し訳ありません。

## 次回作原案\*娘達の世界造り(仮)\* (前書き)

震災にも負けず、桜の舞う季節を頑張って歩いていきましょう。

お久しぶりです。約一カ月、更新を停止していた事をお詫びします。申し訳ありませんでした。

今回は、本作『燈し語』の次回作の原案を少し考えてみました。相変わらず『ネギま!』の世界で、刹那や輪廻、煌月、サクやマナ達がいらない世界に娘達ドクターズが行き、『世界』管理を任されたらどうなるか という話です。現段階では、『燈し語』後はこのような話を執筆させていただくつもりです。

御意見や御感想は、随時募集しております。

## 次回作原案\*娘達の世界造り(仮)\*

会議が好きな人間はそうそういないし、会議室が好きな人間もそう  
そういないだろう。

そもそもなぜメディアが発展している現世において、わざわざ特定  
の場に赴き、面と向かって議論を重ねなければならないのだろう。  
議題内容が的外れだったり、大した価値が無いものならばなおさら  
だ。

そのような、抱く事は決して罪でも不誠実さの表れでもない苛立ち  
を少しでも和らげたいのか、その部屋は清潔で、綺麗で、輝いてい  
た。  
ストレス

純白の床と三〇人は囲めそうな純白の巨大円形テーブル、そして同  
じく純白の椅子はライトで照らされていた。

が、それは輝いているとは言っても目が痛い様な輝きではなく、も  
っと淡い輝きである。

そしてテーブルのそこかしこにはティーポットやバスケットが置か  
れ、室内は甘い香りで満たされている。

しかし、その甘い空気に浸っている者などその場には皆無だった。

かといって、会議室にありがちなギスギスした空気も、白熱した議  
論が交わされた後の熱っぽさも無い。

三〇近くある椅子に座っているのは、統一されたライトブルーの軍服風コス  
チュームに身を包んだ少女達だ。

ある者は二メートルを超す長身、ある者は小学生ほどの小柄。

ある者は黒の長髪で、ある者は銀髪。

はつきり言つて、服装以外は共通している外見的特徴が皆無に近い少女（或いは美女・幼女）達の態度は様々だった。

ある者は興奮した様に頬を朱に染め、握りしめた拳は天に突き上がらんばかりだ。またある者はニヤリと笑い、目を光らせて喉を鳴らしている。

他にも互いに食い入るように見つめ合いながら小声で話し合っている者、独り言を呟きながら天を見上げ微笑む者、小さく拍手をしながらニヒルな笑みを浮かべる者、半分机に身を預けて声高に喋り出す者。

詰まる所、少なくともウンザリしたり、ボケつとしたりしている者はここには居ない。

また、一人一人の目の前に置かれた其々の好みの飲み物や、バスケットに入っているビスケットに興味を示す者もない。

それらは唯、湯気や甘い香りを立ち昇らして存在を知らせるのみである。

「宜しいですか？もう一度、説明いたします」

そんな中、少女達の反応を観察していた少女　純白の長髪を背の中程まで伸ばし、瑠璃色ラピッドブルーの瞳で一同を見渡す少女の声が響いた。

途端に、全員が静かになつて姿勢を正す。別に彼女の質問（というより“命令”）に反応したわけではない。彼女の“能力”により、

強制的に口を閉じられ、座らされただけである。

それでも反論は出て来ない。少女の瑠璃色ラピスラズリの瞳は凍てつくような冷たさや侮蔑の感情が込められていた。

これ以上彼女の癪に障る言動や行為をすれば、ここから叩き出されるどころか存在ごとく消されること確実である。

純白の髪を揺らしながら、夜白やしろう 硯璃すずりは、優雅に紅茶を一口飲む。

それにつられ、少女達はようやく喉に液体を通し始めた。

暫くして、硯璃 『娘達ドクターズ』の長女が徐おもむろに口を開いた。

「現在、御父様は、主にこのこととその周辺『世界』のいくつかを任されています。が、ここにまた新たな『世界』が加わることになりました……その意味は明白。御父様の御負担が増えるに増えるということですよ」

その発言に、一同の態度が厳しくなる。

彼女達『娘達ドクターズ』は、夜白やしろう 刹那せつなを補佐するために生み出された特工生命体だ。だから、自分の仕事や負担が増えることについては別にどうでもいいし、寧ろ歓迎できる。彼女達の存在意義は、刹那の役に立つことだ。負担を背負う事が刹那の役に立つのなら、いくらでも背負うだろう。

しかし、刹那の負担が増える事は容認できない。そんなことがあつてはならないのだ。

刹那の身に何かあれば、彼女達は、一斉に腹を切るだろう。無論、その原因となったモノを鬼籍に送りこんでからだが。



「アリスは何をしているんだ……我々に喧嘩を売っているのか？」

誰かが小さく呟き、全『世界』を管理している神々のトップである創造神（最高神）に怒りをぶちまける。それは、その場にいる全員の想いを代弁していた。

しかし、誰も立ち上がって喚き散らしたり、武器を持って飛び出したりはしなかった。

彼女達は例外なく刹那至上主義者である。刹那の障害となるモノは決して許さず、座視せず、容赦などしない。

それでも全員、期待を込めた瞳で硯璃を見つめている。

その表情は様々だが、半分以上が妖しい笑みを浮かべている。同情と侮蔑が入り混じったような笑みだ。

唯一、硯璃の左隣に座る、柚子色の髪と翠玉色の瞳、そして片眼鏡エメラルドが特徴的な少女だけが、苦笑を浮かべながら流し眼をしていた。

その期待に応えるように、硯璃は整った顔を不敵に歪める。

「もちろん、あの小生意気な幼女には折檻してきましたわ」

それが引き金となり、含み笑いや嘲るような笑い声が室内を満たした。そんな不気味な光景が終わった後、硯璃は再び一同を見渡す。

「しかし、あの雌<sup>どれい</sup>餓鬼はどうしても人手が足りないと言ったもので  
すから……代わりに、そう、御父様の代理として、我々『<sup>ドクターズ</sup>娘達』が  
その『世界』を仕切ることになりました」

“刹那の代理”。

その言葉は、刹那を補佐することに無上の喜びを覚えるファザコン  
娘達にとっては、あまりにも甘美な一言だった。

「……ふう、ようやく完成いたしましたわ。この『世界』のもう半  
分、『<sup>ムンドユス・マキクス</sup>魔法世界』が」

わたくしは小さく呟いて、人工物など欠片も無い荒れ地を見た。

そしてわたくしの横には、わたくしより少々背が高く、細身の少女  
が立っていた。純白のショートヘア。そして両目を、同じく純白の  
包帯で覆い隠している。

「そうですね硯璃。まずは、この地に生命を吹き込み、育てていか  
なくてはけません。『創造主』の権利はすでに貴女がもっていま  
すから、次女にはサポートするくらいしかできませんけど」

「その通りですわ穹斐<sup>そらひ</sup>。さあ、全てが御父様に平伏する『世界』を……それにしても、わたくしは何と名乗れば良いのでしょうか？まさか本名で『世界』を統治するわけにはいきませんか……」

それに何より、夜白硯璃という御父様から頂いた尊い名前を多用し  
たくはない。

わたくしが首を捻っていると、次女の穹斐が思いついたように言っ  
た。

「あ、次女に良い考えが……。創造主の権利が与えられているとい  
うことで、『物造主<sup>ライフメイカー</sup>』というのはどうでしょう？」

彼女があっけらかんと言った一言に、わたくしは思わず頷いてしま  
った。

「物造主<sup>ライフメイカー</sup>ですか……。ふふ、悪くはありませんわね。御父様の生涯  
の奴隷たるわたくしに相応しき名前。

……さて、では始めましょうか」

「諒解。諒解。この『世界』には、どんな“可能性”があるのでし  
ょうかね……」

「さて……そろそろ国を造りましょうか。取り敢えず、御父様に平伏する奴隷共の国を一つ……後は、人間や亜人に任せましょう」

わたくしは紅茶を飲みながらそう呟く。

まずは拠点を確保すること。すなわち、わたくしたちが支配する国を造ることが先決だ。それ程規模は大きくなくても良い。御父様

“神”を信仰する宗教国家で、それなりに他の国、そして旧世界にパイプが持てるような国にすればよい。

造る方法も簡単だ。そういう風に人間を誘導し、頭の中に神への信仰を刷り込ませればよい。

コミュニティはやがて国家となる。

後はわたくしなり妹なりが法律リールを造り、その国の主権を手にいれればよい。

「いよいよですか。父さんに忠誠を誓うモノだけの国が、ついにできるのですね！」

「そ、穹斐姉さん、少し興奮しすぎ……」

「そういう魅柚みゆずの姉貴は嬉しくないのか？」

「そ、それは……」

「で、国の名は？」

「そうですね……」

わたくしは暫し考え込み、不敵に笑いながら一同を見渡した。

「御父様……すなわち“神”の国。“神国”<sup>しんこく</sup>というのはいかがでしょうか？」

「こちらは神国重機動艦隊。これ以上の争いは無意味である。連合国際戦略艦隊と帝国艦隊は即座に戦闘を中止せよ。我が国には連合と帝国の戦争を仲裁する用意がある」

「司令官殿ッ、連合の戦艦が本艦に向け砲撃を開始しましたッ。帝国の艦隊は反転、戦域より離脱していきます……」

「やんぬるかな、か。仕方が無い、全艦、砲撃用意ッ！  
神国はこれより、連合との戦争状態へ突入するッ！」

『……ザ、ザ ……臨時ニュースを……ザ……ます。現在……ザ ……ロメセンブリア上空……神国艦隊と竜騎兵团による攻撃が』

「帝国の軍勢は、すでに首都の鼻先まで迫って来ている……」

「元老院はどうして戦争を止めないんだ、俺達は犬死にか!？」

「全てが、御父様の掌の上。……精々踊り、足掻きなさいな……  
…愉快な愉快なピエロ共」

次回作原案\*娘達の世界造り(仮)\* (後書き)

『燈し語』では大戦とかスル してましたから、こつこつのが書き  
たかっただけです。

blankも兼ねて、投稿させていただきました。

第50幕突破記念「夜白輪廻の愛と隷従と鮮血の決意」(前書き)

今回は50幕記念として、輪廻の刹那への普通(?)の心境のお話です。



## 第50幕突破記念「夜白輪廻の愛と隷従と鮮血の決意」

私は最高位神獣『天狐』。詰まる所、キツネだ。

お兄ちゃんと初めて会った時もキツネの姿だったし、お兄ちゃんと会う前の数千世紀の間も、ヒト型になる事はあまりなかった。

家族を失い、一人ぼっちになった後、未練がましくふらふらと生きていたが、お兄ちゃんと会おう前の事はあまり覚えていない。

それ程価値のある記憶ではないからだ。お兄ちゃんが傍にいない記憶など何の価値も無く、そんなモノを頭の中に留めるくらいならさっさと忘れて、お兄ちゃんとの日々や、お兄ちゃんの一挙手一投足を記憶する。

お兄ちゃんが私を見た時間とか、お兄ちゃんがこれまで何回手を動かしたかとか、何回キスを交わしたかとか。

私の記憶能力とて無限ではないから、覚えられる事にも限りがあるのだ。まあ、完全記憶能力に近いのだが。

話を戻すが、とにかく以前の私は普段はキツネ姿で、ヒト型になる事もなかなかなかった。

そしてお兄ちゃんと出会って、自分の正体を話した時に、とっさにヒト型になった。それが、今の姿をより幼くした姿だ。

それから一日と経たないうちに、私は激しく後悔した。理論上、私はどんな姿にもなれる。男にも女にも、少年にも老婆にもなれる。髪も、顔も、声も思うがままだ。

なら、もっとお兄ちゃん好みの姿になれば良かった。少なくとも、事前に調べれば良かった。

今の姿を、お兄ちゃんは好きだと言ってくれらるだろうか。いや、言ってくれらるに決まってる。でも、それは本当に 本心に、心からの言葉なのだろうか。

しかし、それは杞憂だった。馬鹿馬鹿しくて、憎たらしい。まだ初々しかった頃の私の話だ。まだ、お兄ちゃんを完全に信じ切れていなかった頃の私。

お兄ちゃんは、何度も私を綺麗だと言ってくれた。

さらさらで艶やかな長髪が綺麗だと。

輝くオッドアイの瞳が綺麗だと。

澄んだソプラノ・ヴォイスが綺麗だと。

雪より白く滑らかな肌が綺麗だと。

桜色の柔らかかな唇が綺麗だと。

すらりとした脚が綺麗だと。

闇から切り取ったような九本の尻尾が綺麗だと。

成長してからは（というより成長させてからは）、大きくて形の良いい胸が綺麗だと。

それは間違いなく、お兄ちゃんの本心だ。美辞麗句でも社交辞令でもなく、口説き文句でもない。唯の事実確認だった。

結果として、お兄ちゃんは私の姿を気に入ってくれた。

なら、私もこの姿が好きだ。お兄ちゃんに捧げるに相応しい、この身体が好きだ。

たまに塵芥を漬した時に、汚らわしい血やら肉片やらを浴びて汚れてしまうが、その度に丹念に洗い、常に綺麗にしてきた。

お兄ちゃんに身体を捧げお兄ちゃんに私の味を教え込み、私もお兄ちゃんを味わう度に、私の身体はますます綺麗になっていった。

と知っている。

自身が美人だとの自覚はあるが、そんなことは些事だ。お兄ちゃんに好かれ、愛されるのならそれでいいのだ。お兄ちゃんだけの身体なのだから。

とはいえ……私の身体は、純粹にお兄ちゃん専用で無くなった事も何回かある。

今思い出しても身の毛のよだつ話だが……お兄ちゃん以外に触れられた時。特に男だったら、もう最悪だ。

家族はともかく、他のソンザイに触れられるなんて許せない。その穢れは放置できない。

だからその度に、私は私を殺した。

一度自身の肉体を殺し、消滅させ、“穢れ”る前の状態に戻して再構築する。同時に身体に少々手を加え、お兄ちゃんの好みニーズに少しでも近づけさせる。例えばより肌を滑らかにするとか。より完璧で、より綺麗な身体を手に入れるのだ。

一度でも穢れた身体では、お兄ちゃんに近寄る資格すらない。私の身体は、常にお兄ちゃん一色で染まりきってなくてはならないのだ。

元々キツネは欲望に忠実で、ヒトを誑かすのが得意なのだ。私にも、その程度の知識と技術はある。

お兄ちゃんは、最初の頃はたじたじだった。お兄ちゃんと出会った初日には　つまりお兄ちゃんが六歳の頃から　いきなりお兄ちゃんにディーブなキスを堪能させた私だ。お兄ちゃんに引かれるのも無理はない。初めて身体を捧げた時も、半分私が襲った様な形になっってしまった。

まあ、お兄ちゃんが大きくなるまで、ずっと堪えていたのだ。我慢の限界だったし仕方が無い。

……まあ、そこら関係の話はここまでとして。

お兄ちゃんのことなら数千世紀は語り続けていられる私だが、一口に“尽くす”といっても色々ある。

それに私自身人間の事など碌に知らなかったし、お兄ちゃんの好みも趣味も、嗜好だって分からない。

無論、そんなことはお兄ちゃんの頭の中を覗けば簡単に判明するのだが、そんなことはしたくなかった。

そして時を過ごしていくうちに決めたのが、お兄ちゃんを護ること。

お兄ちゃんの敵のいない世界を生み出し、お兄ちゃんだけの理想の<sup>ゲンジツ</sup>世界を造ること。お兄ちゃんが苦しまず、悲しまず、涙を流す事のない世界を、お兄ちゃんに献上するのだ。

そして、お兄ちゃんに隷属し、あるとあらゆる願いを叶えること。

お兄ちゃんは遠慮していたし、必要無いとも言ってくれた。でも、それでも私はお兄ちゃんを悲しませたくないし、何よりお兄ちゃんの役に立ち、必要とされたい。

褒められたい。撫でられたい。抱きしめられたい。愛されたい。

……これはついだけで、罵られたい。できれば、ボコボコに痛めつけられたい。

結局は唯の自己満足かもしれない。欲望を満たしたいだけなのかもしれない。でも、私がお兄ちゃんを愛しているのは確かなのだ。此の世で確定している、唯一つの事象であって、絶対なのだ。

トコトンお兄ちゃんへの愛に染まりきっているのだ、私は。もう、お兄ちゃん以外に何の価値も見出せないくらいに。価値があるとすれば、それはお兄ちゃんの役に立つかどうかの価値だ。

お兄ちゃんの役に立つかどうかだが、全ての存在の価値を示すバロメータなのだ。故に、お兄ちゃんの役に立たないモノに、存在する価値など欠片もない。

最近、その手のモノが異様に増えてきている気がする。目下のところ、それが悩みどころだ。お兄ちゃんが優しいため、排除に動くわけにもいかないのだから厄介だ。

そして、私はお兄ちゃんの足枷にしなければならない存在を憎み、そんな連中にも慈悲を与えるお兄ちゃんに惚れ直し、そしてお兄ちゃんの慈悲で生かされている存在をさらに憎む。

お兄ちゃんの慈悲で生き延びている奴らが、それなのに、お兄ちゃんに感謝の言葉一つ言わない奴らがどうしようもなく憎くて、殺したくなる。

そんな奴らが溢れていて、つまりは『世界』はどうしようもなく汚れているのだ。

そんな『世界』から、お兄ちゃんを護るのも私の使命だ。心と体を擦り減らし、時には傷付けられたお兄ちゃんを私は癒し、甘える。そうすることで、お兄ちゃんは少しでも笑ってくれる。微笑んでくれる。

一日の疲れには、存分のキスとハグを。

傷付けられた痛みには、甘美な快樂と幸福を。  
そして 塵芥<sup>ユミ</sup>には、血の制裁と永遠の苦痛を。

塵芥<sup>ユミ</sup>掃除は、当然お兄ちゃんのケアより優先されるべきではなく、私はお兄ちゃんが傷つけられた場合は、舌と唇と手でお兄ちゃんを癒し、尻尾で塵芥<sup>ユミ</sup>を拷問する事が多い。

傷付けられた所に舌を這わせ、身体を押し当て、お兄ちゃんを安らぎの彼方へと送る。その合間に、尻尾で塵芥<sup>ちりあくた</sup>をひたすらに殴り、斬り刻み、いたぶり、鬨る。

大体一京回（10の16乗）程丁寧に時間をかけて殺した後、お兄ちゃん癒しタイムをひとまず中断し、私が直々に塵芥<sup>ユミ</sup>を殴り、蹴り、とにかく拷問する。

これが、お兄ちゃんを傷付けられた場合だ。

直接手を出していなければ、もう少しは寛容になる。お兄ちゃんに土下座でもして謝れば、一秒ほどは拷問時間を短くしてあげてもよいのだ。たぶんお兄ちゃんは許すだろうが、私は決して許さない。

現に今まで、お兄ちゃんが私の拷問を止めようとした事は何度かある。

が、私にも譲れないモノはある。お兄ちゃんの命令でも、これだけは聞けない。

だから、そんな時は私の口や胸などでお兄ちゃんの口を塞いだりするなどして、お兄ちゃんを黙らせる。

ちよつとでも本気を出して誘惑すれば、お兄ちゃんなど簡単にノックアウトできるのだ。気絶するくらい、ハードなキスを味合わせれば良い。キツネの技術は伊達ではないわけだ。

塵芥<sup>ユミ</sup>は決して逃がさない。生かさない。許さない。

お兄ちゃんのために。絶対に。

お兄ちゃんが許しても、私は絶対に許さない。

「……という感じでね、私はお兄ちゃんに尽くしていくんだ」

「うわぁ……」

「どうしたんだい千雨？これくらい普通じゃないか、なあサク？」

「ええ。尊敬できますし、実際に何度も見てますからね。輪廻さんが、焦る刹那さんを押し倒してキスの嵐を浴びせているところとか、反論しようとする刹那さんを抱きしめているところとか。そう言えば、煌月さんはそういう事はしませんよね？」

「はい。私はあまり刹那様と肉体的行為は行いませんし、刹那様が止める間もなく仕留めますので」

「……いやいやいやいや、お前ら何平然と聞き流しているんだよ。おい、アキラ、お前も何とか言えよッ」

「……でもさ千雨」

「ああ？」

「羨ましいよね？」

「……………ああ」





第50幕突破記念「夜白輪廻の愛と隷従と鮮血の決意」(後書き)

次回は久しぶりに、マナとサクのお話にしようかと思えます。

第50幕突破記念「クロス・ガアンド・ソード」(前書き)

今回はマナとサクのお話です。

## 第50幕突破記念「クロス・ガアンド・ソード」

サクこと桜咲<sup>さくらさき</sup>Ⅱ YⅡ刹那<sup>せつな</sup>とマナⅡ AⅡ YⅡ タツミヤ。

この二人は、戸籍上は夜白<sup>やしる</sup> 刹那<sup>せつな</sup>の“娘”である。親権は刹那が持ち、当の本人達も合意している。つまり、名実ともに二人は夜白家の一員である。

そうになると、サクとマナは姉妹となる。それはブリジットⅡヤシロも同じなのだが、今はブリジットのことはひとまず置く。

二人の共通点はそれだけではない。マナは半魔人<sup>ハーフ</sup>で、サクもまた半<sup>ハ</sup>鳥人<sup>トリ</sup>。年齢も同じだ。

そんなこともあってか、この二人は仲が良い。いや、仲が良いというよりも、『気が合う』と言った方が正確かもしれない。

必要以上に接したりはしない。任務では相棒<sup>パートナー</sup>として、家では姉妹<sup>パートナー</sup>として、彼女達は互いに接してきた。

二人は刹那を“父”とは呼ばない。

自分達は護られる“だけ”の存在ではない。刹那の隣に並ぶ、いや、前に出て楯となり矛となる存在だと、彼女達は証明したかった。それが、自分達の存在意義<sup>存在意義</sup>だと信じて疑ってない。

二人は刹那から人の心と温もりを学び、夜白<sup>やしる</sup> 輪廻<sup>りんね</sup>と夜白<sup>やしる</sup> 煌月<sup>こうつき</sup>から戦闘と理念を学んだ。

以前から片方は戦場で銃を取っており、もう片方は地獄の渦中にいた。さらに幼い頃から叩き込まれた。そのせいもあってか、二人のパーソナリティは随分と歪<sup>よこしま</sup>だった。

要は、刹那と輪廻、そして煌月のパーソナリティをサクとマナの上オリジナルに放り込み、ぐちゃぐちゃになるまで混ぜて煮込んだような感じだった。

礼儀正しく、誠実で、狂信的な愛と忠誠心を秘め、どこかが歪み、何か壊れ、それでも一途だった。

それでも、彼女達は輪廻ほど、刹那への想いをアピールしない。しかし、それと想いの強さは別問題である。

そしてその歪んだパーソナリティは、互いに補完し合っていた。サクに無いものはマナが持ち、マナに無いものはサクが持っているのだ。似ているところはよく似ていて、似ていないところは正反対。それが、サクとマナだった。

桜咲「Y」刹那にとっては、自分自身の存在価値はひどく不定だった。

刹那が自身を大切にしている以上、自分には何らかの価値があるのだろう。が、それが彼女自身にはさっぱりわからなかった。

長年孤立し、誹謗や暴力の的だった彼女にとっては、自身の価値など底辺もいところだったし、興味も無かった。そもそも、自身の価値を自身で考察したところで意味などない。

対して、マナ「A「Y「タツミヤにとっては、自分自身の存在価値は確定すぎていた。

夜白刹那の道具であると早期に割り切り、そうなるように動いてきた。そのために、刹那は自分を捨ったのだと、自分は刹那に捨われたのだと信じた。

戦場では似合わないし、ガラでもないが、現実主義者のマナは生まれて初めて“運命”を信じ、天を仰がんばかりの気持ちを覚えた。

そして、二人は同じことを決断する。経路は違えど、結論は全く同じだった。

刹那が自分に価値を認めている限り、自分は刹那の手足となる  
う。

純白の翼を持つ剣士は刀で。  
褐色の肌を持つ闘士は銃で。

剣士は右を。  
闘士は左を。

刀は前を。

銃は後ろを。

夜白輪廻に敵わなくとも。

夜白煌月に及ばなくとも。

完璧に護ろうなど、大それたことは考えていない。

でも、せめて弾よけくらいなら。

せめて、ほんの少しでも。

「あーもー、こっ恥ずかしいッ！」

長谷川<sup>はせがわ</sup> 千雨<sup>ちさめ</sup>は洗面を造りながら、気取った調子で片膝をつき頭を<sup>うづ</sup>

垂れる<sup>た</sup> 所謂“臣下のポーズ” を取るサクとマナの頭を引

叩いた<sup>たた</sup>。

「「あ た つ  
」」

頭を押さえ、サクとマナは苦笑半分、非難半分の表情を、呆れつつも赤面している千雨に向けた。

「お前ら、何恥ずかしい事やら喋くって、終いには演劇みたいなポーズとってんだよッ！ 見てるこっちが恥ずかしいじゃねえか

「!!」

「何って……奉公と服従の誓いですよ」

「桜咲イ、お前真顔で何言ってたんだ!? あとタツミヤ、お前も何願ってんだよッ!」

千雨のツツコミも何処吹く風で聞き流し、カラカラ笑うサクとマナ。そんな二人を見て、悠然としている相棒<sup>アキラ</sup>。

そんな何時もの光景を眺めながら、千雨は今更ながら、目の前の少女達が外も中も壊れている事を自覚するのだった。

第50幕突破記念「クロス・ガアンド・ソード」(後書き)

花粉症が酷いです。

講義も始まりますし、モチベーション下がるのでホント辛いですよ。  
ね。

次回は本編に戻ります。

『完全なる世界』サイドを中心に。



第51幕「環境、それは白と黒と紅のステンドグラス/Contrast」

本作では、『完全なる世界』の構成員の性格・容姿・能力・役割・メンバーなどがかなり原作よりかけ離れており、その目的や組織的意義も変わっております。

ぶっちゃけると、キャラ崩壊が多々あります。

そのところを留意しておいてください。

## 第51幕「環境、それは白と黒と紅のステンドグラス/Contrast」

△ソドウス・マキウス  
魔法世界のとある場所に、一人の少女が立っていた。

漆黒のゴシック風ドレスを着込み、尖った角を耳のように生やしているロングヘアの少女の名はブリジット・ヤシロ。『完全なる世界』コスモエンテレキアでは“調”入声と名乗っている少女だった。

彼女 この場ではブリジットと呼ぶが は、周囲を確認すると持っていたモノ マスケット銃のようなものを掲げた。火打石式フリントロックの、二メートルに届こうかという長大な銃身は、伝統を感じさせる雰囲気を感じながら青白く輝いていた。

が、これは見た目に反して、マスケット銃ではない。というか、火器ですらない。

夜白やしろ 刹那せつなとの仮契約バクテイオ時に手に入れた、彼女にとっては我が身以上に大切なものだった。

「便利ですよねえ」

ブリジットの横に立つ、エルフのような耳が特徴の少女、栞しおがその光景を眺めながら一言呟いた。

栞はブリジットと同じ、フェイト・アーウェルンクスの従者ではあるが、彼女同様フェイトにそれ程忠誠を誓っているわけでも、『完全なる世界』に興味があるわけでもない。

そのため、この二人は好んで行動を共にしていた。そして、ブリジットは一応準幹部扱いでありしかも客将のため、栞はブリジットを

自身の上司としても扱っている。

しかもブリジットが好感を抱いたのは、栞のパーソナリティだった。彼女はある意味達観していた。一言で言えば、彼女は流されるままの性格だった。

フェイトに連れられたのも、流されるまま。フェイトの従者となったのも、唯の気まぐれ。世界がどうなるのかも、無問題。

ただ、何かしていればそれで良い。

善事だろうが悪事だろうが関係ない。自分で決めた事でも、他者から押し付けられたことでも良い。

とにかく、何かしていたい。

それが栞こと、ルーナという少女だった。

そんな栞は、ブリジットにとってはとても有り難い存在だった。ブリジットは組織に属していながら、夜白刹那に忠誠を誓っている。そのことで、組織の同胞から敵視された事も一度や二度ではない。

無論、ブリジット自身も組織の連中を、真の意味で味方だと思った事は無いのだが、それでもギスギスした空気で仮にも同胞の者達といがみ合うのは、心休まるとは言えない。

しかし、そんなことは栞には関係なかった。

寧ろ栞は、一人の男に忠誠を誓うブリジットの生き方を称賛してい

た。自分では、決してできない生き方だったからだ。

何しろブリジットの忠誠は、“狂信”や“狂愛”とも言える（といふより、そうとしか言えない）ものであり、それはフェイトの従者達と比較しても“異常”だった。

「ええーと、確か……」ファントム・スピリタス『有限の夢幻創造』でしたっけ。ホント、何でも屋ですよねえ」

「刹那様からの送り物ですからね。このくらいは当然でしょう」

さも当然といった表情で、ブリジットは引き金を引いた。トリガ

カン、と音と共に銃口から何かが飛び出した。

ぐにゆぐにょと動くそれは、瞬時に地に着くやヒトの形を成し、完全に人となった。

それは、黒服を身に包んだ青年だった。フードを深く被っており、顔色はわからない。

「『アイゼンハイム樹液人形』、任務を与えます」

冷めた口調でブリジットが命じると、黒服男は大きく一礼した。

「今から命じる者を、暗殺しなさい。まずは連合高等技術官アイヌルヴ・マイケーン氏、次は」

全て聞き終わると、黒服男は転移術で消えていった。

「ホントに凄いですねえ、物質は元より、生物すら創造できるなんて。しかも、自身より弱いなら相応の実力者すら創造できるときた。『ライフメイカー』も真つ青ですよ」

感心したような口調で、栞はブリジットを見つめた。

「しかも、調ってフェイト様並に強いじゃあないですか。だから生み出したアレの実力も自ずと高くなる。おまけに生み出した生物はある程度自律し、半永久的に動ける。ほぼ生命創造ですよねえ」

「いえ、それ程大したことではありませんよ、アレは唯の駒以上の働きはできません。刹那様の小指程度の働きもできない、唯の木偶デクです。暗殺対象が塵おほいてに等しい存在だから、使える程度のモノでしかありません」

ブリジットはそう切って捨てた。その口調はひどく辛辣で、表情は何が気に喰わないのか、不満気に歪んでいた。が、すぐに笑みを零す。

「ですが、刹那様の役に立てるのなら、アレにもそれ相応の価値が生まれます。砂時計の底に残った最後の一粒程度の価値でしょうが」

ブリジットのアーティファクトの一つ、『ファンタム・スピリダス有限の夢幻創造』は、有体に言えば“創造装置”若しくは“変換装置”である。

彼女の民族固有能力として、樹木の根などを操る力があるのだが、このアーティファクトはその延長線上とも言うべき効力を持つ。

簡単に言うと、このアーティファクトは“樹液”を元に、あらゆるモノを創造することができるのだ。物質、生命、固体、液体、気体と何でも創造できる。但し、大規模なモノを創造するには大量の樹液を必要とする上に、ブリジット自身の実力によって創れるモノやレヴェルが左右される。

マスケット銃型のボディの底の部分に、樹液を入れた増槽のようなタンクを設置し、創造したいモノを思い浮かべながら引き金を引く。

その樹液は、別段“樹液”であるなら何でも構わないが、ある程度の違いはある。そのためブリジットは大量の樹液を採取しては、彼女専用の『空間』にて貯蔵している。

無論、自然を愛する一族出身の彼女は、単に乱伐するのではなく、取った分より多くの木々を創造し、同じように『空間』内に植えて育てている。

そんな彼女特製樹液は、彼女の魔力をモロに浴びながら育った木から採れる所為か、このアーティファクトと相性抜群で、より強力で高度なものも創造できた。

そしてブリジット自体の実力も、最低でもマナやサククラスであり、フェイトにも引けを取らない。

つまり実質上、ほとんど制限はない。

流石に輪廻のように、『世界』そのものを創造できたりはしないが、それでも大抵のものは創造できる。

「やろうと思えば、どんなものでも創造できるんですよ……一人で軍団だって創れますよ」

「創ったところで意味などありませんが、まあ、イエスですかね」

たいして興味もなさげに、ブリジットは小首を傾げながらも肯定する。  
彼女からすれば、刹那以外の評価など大した意味を持たないのだろう。

「……で？」

ブリジットはもう一度小首を傾げながら、栞を見た。

「あ、はいはい」

その視線を受け、栞は下げていたバツクからファイルを取り出し、数枚のペーパーを捲めくった。

「それらの“処理”おかたづけはもう済んだと仮定して……次はあ……え」と、これと……あ、これはもう消えたっけ……あ、これですね。予定日は、48時間後です」

「面倒ですね」

ブリジットは苛立たしげに、ポケットの中から煙管キセルを取り出して啜えた。ちなみに火はついていない。単に、マナと同じく刹那に憧れているだけで、実際に吸うのは苦手な彼女は啜えるだけだ。

「一気に塵は、土に還せば良いものを」

「いや、それができれば苦勞はしませんよ」

栞は即答し、首を横に振った。

事実、上フエイトがそう決めている以上は、いくら強かろうが準幹部のブリジットがどうこう言っても仕方が無い。無論、従者に過ぎない栞にいたっては、反論どころか口出しさえ無理である。

おまけに、フエイトの意向ならすなわち『コスモエンテレケイア完全なる世界』の意向で



あり、ならば言うことはない。

仮にその方針が原因で何らかのトラブルやミスが起こったとしても、それは自分達の責任ではない。

“作戦”でのミスなら、現場にいるブリジットや栞達も責任を負う。が、“方針”でのミスならば、責任を追及されるのはその方針を決めたお偉いさんだ。

そんな中堅官僚みたいな事を考えつつ、栞はブリジットの指摘を否定した。

「奴らも、同僚を次々失ったら少しは警戒するでしょうよ、どんなぼんくらでも」

「警戒されたところで、何ができるといいます?」

ため息を吐きながら、ブリジットは頭に指を当てた。『頭が痛い』と言わんばかりである。

「さあ?」

栞は肩をすくめた。別にブリジットをいらつかせようとしているのではなく、本当に見当もつかなかったのだ。

「あれらとは住む世界が違いますし、わかりたくもありませんね」

それに、と前置きし、栞はシニカルに微笑んだ。

「どうでもよいじゃありませんか。推察も推考も仮定も考察も必要ありませんよ。唯々、上に言われた通りにしてましょーうよ。色々考えることにアタマ使わないで済みますし、責任は取らないで済みますし、良いこと尽くめですよ」

ヘラヘラ笑う栞を横目で睨み、ブリジットは本日最大のため息をついた。

第51幕「環境、それは白と黒と紅のステンドグラス／Contrast」

\*アイゼンハイム：2006年公開（日本では2008年公開）の  
米映画『幻影師アイゼンハイム』より

最後に、ルーナ（栞）ファンの方々、申し訳ありません。ウチのルーナはこういうスタンスです。

第52幕「曇天、それは目を背けたい薔薇色煉獄」(前書き)

最近、どうも更新ペースが下がり気味です。ですが、絶対完結までもっていきますので、よろしくお願いします。

## 第52幕「曇天、それは目を背けたい薔薇色煉獄」

私は電話は嫌いだ。

というより、お兄ちゃんを除く誰かから通信を受けるのが嫌いだっ  
た。

あの、プライベートなど知った事かと一方的且つ無意味に自己主張  
しながら、不快な音を撒き散らす機械を、叩き潰したい衝動に駆ら  
れたのは一度や二度ではなかった。

私の場合、人間の耳とお兄ちゃん以外には見えない漆黒の獣耳の二  
つがある。普段は意識的に使い分けているのだが、突発的になる音

電話の着信音とか は両方の耳に入ってしまう。

おまけに両方の耳ともに、普通の人間や普通のキツネよりもよほど  
ハイスペックなのだ。なまじ聴覚が良いと、音量も不快感も何倍も  
膨れ上がる。

念話などの通信でも同じことだ。突然頭の中で鳴り響いては、お兄  
ちゃんの事だけを考えるためにある私の思考に罅ヒビを入れる。中断こ  
そされないが、色褪せてしまうことには変わらない。

それは目の前に本物のお兄ちゃんがいたのなら、億の言葉を持って  
謝罪したい程の不敬であり、不徳だった。怒りを向けようにも、流  
石に大人げない。怒鳴り散らして、お兄ちゃんに呆れられたくはな  
い。

人間の文化にどうこう言うつもりが無いが、もう少しはマイルドな  
着信音でも良い気がする。

そして、さらにその電話の相手や内容が不快なものだったらもう最悪だ。イライラする。

「だから、何度も言わせないでくれませんか？」

私はテーブルを指でコツコツ叩きながら、携帯を潰さんばかりに握りしめた。

「私も煌月も、いや桜咲やタツミヤだって、兄の傍を離れたりしませんし、兄以外の命令に従う真似などいたしません」

『いや、しかしのお』

電話越しの学園長の声が、ひどく不快気に私の耳を震わした。そろそろ限界だった。口から火が漏れそうなのを堪えながら、私は苛立ちを含んだ声をあげる。

「ああもう話にならない。煌月に代わります」

私は一方的にそう告げると、真正面のソファで長い脚を組んで、紅茶を啜っていた執事服姿の美女　煌月に、携帯を放り投げた。いつも通りの無表情の煌月はそれを取ると、別に抗議もせず携帯を一瞥した。

「はい、夜白煌月です。……魔法世界ですか？ スプリングワールド副担任補佐が……いえ、断らせていただきます……理由ですか？ 刹那様の御傍を離れるわけにはいきませんので……はい。優先すべきは刹那様の意向と安全ですので……」

煌月は淡々と無表情で言っているが、有無を言わせぬ口調だった。

当たり前の話だ。

学園長曰く、ネギを始めとした連中……ネギ、明日菜を始めとするメンバーが魔法世界に赴くらしい。その補佐を頼まれたのだが、はっきり言って御免だった。

そもそも、意図が良くわからない。

魔法世界はある種の“無法地帯”だ。日本国のような、治安の良い福祉国家ではない。大都市には奴隷制度が平然と残り、魔法原理主義者の魔法使い共が踏ん返り、少しでも都会から出れば、盗賊や犯罪者が跋扈している危険区域だ。

ましてや、旧世界出身者が歓迎される場所ではない。

そんな場所に、年端もいかぬ新米魔法使いと（元）一般人の明日菜らを行かせればどうなるか、分らぬ道理はないはずだ。あの御老体とうとうボケたらしい。

最近の明日菜はお兄ちゃんの影響もあってか、かなり思慮深くなっ

ていた。そんな明日菜が、魔法世界行きをあつさり承諾するとは考え難いが、恐らく魔法世界の知識に乏しいのだろう。

魔法世界の治安や現状などを突き付ければ、恐らく明日菜も速効で首を横に振るに違いない。

旧世界で言うなら、紛争地帯にピクニックに行くような愚行だからだ。

そして同様に、ネギも知らないのだろう。元々あの少年は慎重で、リスクな真似を好む思考回路は持っていないはずだ。ましてや、生徒を巻き込むなどの愚策は犯さない……と思う。

おまけに夏休みを利用してウェールズに行き、“ゲート”を通るつもりなら、長居する気は最初からないのだろう。

マナやサク、それに『コスモエンテレキア完全なる世界』は、ネギを担ミニステル・マぎ上げられた英雄にするつもりなのだろうが、お兄ちゃんの意向は……まだ良くわからない。お兄ちゃん自身、まだ私に具体的な指示を出していないし、まだ考えあぐねているのかもしれない。

べつに、お兄ちゃんが結論を出す必要なんてない。お兄ちゃんとネギだったら、当然前者の方が何倍も大事だ。

だから、お兄ちゃんの平穩のために、ネギを生け贄にしるというのなら、すぐにでもする。

が、それをお兄ちゃんが望まないのならばどうなるか……何にしる、お兄ちゃんにとっての“最善”を捧げるのみだ。

だというのに、ネギ自らが棺桶に足を突っ込むような真似をすると



は。

唯でさえ、こっちは木乃香の修行まで背負わなければいけないというのに。

近い将来、木乃香は人脈造りも兼ねてアリアドネ に赴くはずだ。その時は、木乃香の護衛は関西が担当するはずだが、ふとした拍子に木乃香に危険が迫らないとも限らない。そんなことが無いために、木乃香にはある程度の実力や知識を身に付かせなければならぬ。

あとで関西呪術協会から、木乃香の教育について四の五の言われたくはないし、言われる事はお兄ちゃんへの侮辱に繋がる。言わせはしない。

「それ程少年の身を案じているのなら、行かせなければ良いのでは？」

学園長は、現在ネギの修業先となっている麻帆良学園都市のトップであり、関東魔法協会の理事でもある。

そこにネギがやってきた以上、ネギの修行内容や監督する権利、そしてネギの安全保障責任なども、自動的にメルディアナから学園長に引き継がれるはずだ。

つまり学園長が“ノー”と言えば、ネギは従うほかはない。曲がりなりにも学園長は、ネギの麻帆良における保護者であると同時に上司なのだから。

「そのような悠長な事を言っている場合では……はあ？」

煌月にしては珍しく……そう、とんでもなく珍しく、素っ頓狂な声をあげた。

但し、相変わらずの無表情だが。命を持ったばかりの蠟人形の方が、もう少し表情豊かだと思う。

煌月は携帯を一旦耳から放し、私の方を向いた。

「連合元老院から、直々の命令がきているそうです。「ネギ」スプリングフィールドが望むならば、関東魔法協会は全力を持って彼を魔法世界に送迎すべし」と

今度は私がぶつたまげる番だった。

「元老院は気でも違ったのか？」

私からこれを聞いたお兄ちゃんは、開口一番そう言った。  
まあ、誰でもそう思うだろう。

「この時期にそんな命令を寄こすか？ それもそんなピンポイントな……」ネギがこの時期に、魔法世界に行きたがる事を知っていた』と言っているようなものだぞ？ 学園長殿でなくとも警戒するだろう」

「おそらく、元老院の思惑が外れたからではないでしょうか」

煌月が当惑気味のお兄ちゃんの顔色を窺いながら、お兄ちゃんの前にはティーカップを置きつつ言った。滅多に自分の推測を言わない煌月らしくなかったが、たぶん当惑するお兄ちゃんの心を気遣ったのだろう。煌月はああ見えて、気遣いとかが上手い。お兄ちゃん限定だが。

「現在、ネギ少年は慎重に、着実に修行段階を一步步踏んでいきます。彼の少年は“教師”という表向きの業種を最優先にし、“魔法使いとしての”修行はかなりのスローペース、しかし着実に効果が表れる者です。それは一見にして地味ですが、ヒトは急速に強くなると、力に溺れ、ムラも酷くなります。そう考えると、妥当な修行法とも言えるでしょう。伝えに聞くところ、少年はあの吸血鬼マクダウエルや神多羅木<sup>かたろぎ</sup>教諭などから手解きを受けているそうです。一般論を言わせていただきますと、“下地の完成なくして、高みには登れませんから”

トレイに乗せてあったミルクフィニーユをお兄ちゃんの前に置き、煌月は再び自分の推測を述べる。淡々と説明口調で話すその言葉には、かなりの説得力があった。

煌月は自身の意見は言わないが、それは考えつかないわけではないのだ。唯、お兄ちゃんの見解を最優先にしているだけだった。

「それもこれも、刹那様の教育の賜物でしょう。あの少年は変わりました。元々物静かで力を渴望するタイプには見えませんでした。……また一般論を言わせていただきますが、子供にありがちな背伸びしたくなる欲求が、赴任直後には溢れていました。

しかし、今やそれは微塵も感じられません。身分不相応にも己の生命まで餌としていた業火は、今や不純物無き清らかな清流の前に、穏やかな灯火となりつつあります。

それは、元老院にとって想定外だったのでしょう」

つまり、こうだ。

連合の元老院としては、ネギがもつと『英雄』に憧れて背伸びをしまくり、力に貪欲になると踏んでいた。

しかし蓋を開けてみると、ネギは律儀に修行をこなしていたが、それは無茶や背伸びも無い堅実で着実な方法だった。

それでもネギの実力が高くなることには変わらない。寧ろ後者の方が危険はないし、確実だ。

しかし、今すぐにもでも担ぎ上げられる“ニューウェーブ次代の英雄”を欲する連合……元老院はそうもいかない。

何しろ『英雄』と呼ばれる『アラルブラ紅き翼』のメンバーのうち、子供を残しているのはネギの父ナギあおやま「スプリングフィールドと青山詠春（現近衛詠春）のみ。そして残された子も、ネギと木乃香の二人だけだ。

加えて木乃香は関西呪術協会の配下であり、しかも（オフレコだが）

関西呪術協会の次期トップが確定している。そしてメセンブリーナ連合と日本国関西呪術協会の仲は良好とは言い難い（というより、連合が一方的に“格下”と決めつけている）。

いや、仮に関係が良好だとしても、次期トップを他組織である連合の“客寄せパンダ”にできるわけもない。となれば、連合に残された駒はネギのみということになる。

しかし今のままでは、仮にネギが『正義の魔法使い』ミニステル・マギを志すにしても、彼が本格的活動を行い、世間がそれを認知するまでどれだけかかるか。

そもそも魔法使いの活動とは、裏方が多いのだ。

医療活動、救助活動、治安維持活動から知識の伝授などが大半で、元々大々的に宣伝され、勲章を授与されるような存在ではない。しかも、こういった仕事ですら“稀”で、大抵は鍛練や研究にのめり込む者が多い。

そもそもある程度の知識と処世術を身につけた魔法使いは、自身のネーム・バリュー認知度が上がる事を嫌う。顔写真や名前、得意とする術式系統や戦闘スタイルが有名になる事など、デメリットにしかならない。フリ所属なしなら客寄せのために認知度は必要だが、連合などに所属している魔法使いなら認知度に関係なく仕事は貰えるし、研究室なども与えられる。

無論有名になれば資金も増えるが、同時に命の危険も増える。賢い者が力に自信が無い者は、表に出ることを嫌うものなのだ。

言わば“縁の下の力持ち”。

国民や市民に認知される事も無く、社会に貢献して終わるのが、魔法使いの本懐とも言える。

つまり連合が掲げる『正義の魔法使い』像は、魔法使いの本来のあり方と最初から矛盾しているのだ。

それに気付いている者は、一人は二人ではないはずだ。

話を戻すが、ネギは今のままでは、元老院好みの『英雄』にはならない。そこで、テコ入れされる可能性も高い。

“テコ入れ”　つまり、ネギを認知度が上がらざるを得ない舞台まで引つ張り上げて、否が応でも活躍させる。そして、それを大々的に宣伝して、ネギが連合所属の“英雄の息子”であることをアピールしまくる。

人々は感激し“英雄の再来”と狂喜乱舞し、ネギのバックである連合は、その地位を盤石のものとする。

そして、ネギの人氣が元老院を揺るがしかねないレヴェルまで達すれば切り捨てるのだ。

では、その舞台とは何か　手っ取り早いのが、『戦争』だろう。

その戦争も、ネギが魔法世界に来なければ“対岸の火事”で終わってしまう。

ならば元老院は、是が非でもネギが魔法世界に滞在せねばならないことになる。

「わからなくてもないが、連中、そこまで短絡的で阿呆だったか？」

しかし、それは元老院の都合だ。

麻帆良学園側からすれば、そしてネギの母校メルディアナと故郷ウエールズからすれば、元老院の権力固めのために陰謀に巻き込まれてやる義理は全くない。

ましてや、麻帆良からすれば教員、メルディアナからすれば生徒、そしてウエールズからすれば村の数少ない生き残りであるネギを、“客寄せパンダ”（というより“神輿”）にするつもりなど毛頭ない。

大体修行中のネギの身柄は麻帆良の管轄下であり、いくら元老院が横槍を突っ込んできても、それに従う義理などない。

学園長以下麻帆良側からすれば、

「だったら最初から連合が面倒みる！ 麻帆良で修行すると決まっ  
た以上、麻帆良を蔑ろにする元老院があれこれ口を挟むな！」

と言いたいところであり（もともとネギの修業先が麻帆良になったのは学園長側の陰謀なのだが）、それは“職権乱用”に他ならない（麻帆良がどうこう言えた義理ではないと思うが）。

それ以前に文面からして「送迎すべし」であり、完全に命令口調である。いくら麻帆良が連合の配下組織とは言えこれは酷い。というか、拙い。

旧世界の各魔法協会が持つ自治権を、真っ向から全否定したような

“電文”だった。

学園長が困り果てるのも無理もない。ここで学園長が激怒すれば、単に学園長の首が飛ばされるだけだ。そして、後任として元老院の息が掛った者が来れば、今度こそネギを護る傘は吹き飛んでしまう。

拙すぎるが、ダメージは大きい。

一言で言うなら、『考えナシ』の策に、麻帆良は悲鳴をあげているのだ。お兄ちゃんも流石に予想外すぎた。

なにせこのタイミングでこんな指令を出してくれば、『ネギをさっさと取り込みたいからはよ超越せや』と言っているようなもので、さらに言うなら『近々何か陰謀引き起こすぞ』と公言しているようなものだ。

捨て身と思った方が、まだ信じられる。

元老院を追いこみ過ぎたか……私は若干後悔しながら、お兄ちゃん  
の言葉を待った。

そして、この報復は絶対にしてやると誓った。



第52幕「曇天、それは目を背けたい薔薇色煉獄」(後書き)

次は学園との協議編です。

**第53幕「射線、それは不可視で醜い希望」(前書き)**

今回は麻帆良学園との協議編です。

オリジナルの魔法教員や魔法生徒が数人が登場しますが、モブですので気にしないでください。

また今更ですが、学園側所属の魔法使いにも、実力や性格、思考回路に原作とはかけ離れた独自設定があります。  
キャラ崩壊もあり得ますので、注意してください。

### 第53幕「射線、それは不可視で醜い希望」

私とお兄ちゃん、そして学園警備員の煌月とサク、マナが大会議室に来る頃には、すでに10人から20人ほどの“裏”の“関係者”達が集まっていた。

大会議室は通常、職員会議で利用されるのだが、ここは“裏”専用の方の大会議室であり、言ってしまうえば“隠し部屋”だ。

しかし、その広さは表の大会議室とほぼ変わらず、20人以上が揃って座っても、まだ椅子とスペースに余裕があった。

集まっているのは、魔法教員と魔法生徒、警備員たちだ。学園長以下麻帆良の首脳部と、判断力・実力共にそこそこ兼ね揃え、尚且つ、先走ったり暴走したり、組織全体の意向を無視するような“馬鹿”もいない、所謂“中堅”の連中だ。

ついでに言うと、この手の会議では、魔法生徒も魔法教員や警備員並の発言権が与えられる。……勿論、聞きに徹し、精々質問位しかない魔法生徒が大半なのだが。

円形に置かれた長机の一つに学園長が腰を下し、彼を挟むように高畑教諭と黒碓氷が座っている。高畑と黒碓氷はペーパーの資料を見ながら、時折示し合わせたかのように目配せしている。恐らく会話でもしているのだろう。

ちなみに私が黒碓氷に与えている任務は『学園との折衝』だけなので、別段行動を制限していないし、報告の義務も与えていない。だから当人は、結構自由にやっているだろう。

私達が腰を下すのを確認して、部屋の隅で配膳台ワゴンを引いていた少女が、五人分のティーカップを私達の目の前に其々置いた。

確か……そう、佐倉愛衣さくらあいのという魔法生徒だ。

ガンドルフィーニ教諭の班に属し、一時期お兄ちゃんが修行を担当していた女子中学生だった。確か、戦闘系と言うよりは補助系の方を得意としていたと思う。お兄ちゃんに古今東西様々な補助術形態を教わってから、密かに一流術師エキスになっていた。

当の本人も、随分とお兄ちゃんにご執心だった気がする。

お兄ちゃんが礼を言うと、佐倉は頬を赤らめて何度も頭を下げ、動揺しながら危なっかしい手付きで配膳台ワゴンを押していった。

訓練されたホテルのボーイが見れば、顔を顰めること間違いなしだ。配膳台ワゴンを教室の隅まで持っていた佐倉は、カップの残り数がゼロであることを確認し、学園長に『全員が揃った』という（意味らしい）ジェスチャをしながら小走りたかねで自身の席……私の隣に座っている、佐倉のパートナーである高音たかねⅡDⅡグッドマンの横に座った。

それを確認した学園長が全員の顔を見渡し、大声で話し始めた。

「諸君、このような時間（大体8時前後）に、それも急な集まりじやったが良く来てくれた……感謝するぞい。そこで、本題じゃが……」

議題は勿論、元老院からの爆弾宣言、いや爆弾命令のことだ。集まっているメンバーも、すでに大体の内容を聞かされているのか、一様に暗い表情か呆れ顔か、はたまた我関せずと言った顔をしている。

無理もない。

ちよつとでもマトモな思考回路を持つ人間なら、元老院の命令がいかに無茶で、尚且つ巫山戯たモノかすぐ分かる。

元老院を狂信的に支持する者ならもつと別な反応をするだろうが、そういう輩は話をややこしくさせるだけだし、元老院の指示に従うように学園長に迫るのは目に見えているので、最初からこの場と呼ばれていない。

ましてや、旧世界の一組織である関東魔法協会の構成“関係者”に、根っからの魔法世界出身者はあまりおらず、寧ろ少数派だ。旧世界、特に日本国出身者が多勢を占めている。

そういつた連中は、魔法世界への滞在経験こそあるが、連合への帰属意識などほとんど無いし、ましてや雲の上の存在である元老院への忠誠心など、皆無に等しい。

それは当然で、魔法使いは、己の理念や目的のために働いているのであって、連合の私兵ではないからだ。まあ、“連合の犬”と見られても仕方が無い連中もいるのだが、旧世界にはその手の連中はごく僅かだった。

「問題は、元老院の指示通り、ネギ少年を始めとする……え」とお

……“英国文化研究部（仮）”でしたっけ……ん、違ったかな……  
まあ名称は兎も角、長つたらしいのでもう“英研”と呼ぶことに  
しますが……その英研の渡英を許可するかです」

黒碓氷が面倒臭そうにネクタイを緩めながら、一同を見渡した。

途端に全員、『何を当たり前な』といった顔をする。  
まあ、普通だつたら許可するだろう　渡英で済むならば。

本来なら、女子中学生＋子供教師のみの出国が許可されるかは妖  
しい。

が、行き先がネギの地元であるウェールズならば話は別だ。夏休  
みを利用しての文化研究目的のための旅行ならば、それは学業に当  
てはまる（そのため費用も学園負担となる。部活動なのだから当然だ  
）。

そして、ネギは副担任補佐とはいえ正式教師であり、（麻帆良では）  
問題らしい問題はない。

「ですが、魔法世界となると、断固として反対せざるを得ませんな  
」  
ガンドルフイーニ教諭がそう言うと、ほとんどの者が一斉に頷いた。  
ちなみに彼は私の隣の隣、佐倉の横に座って唸っている。内心では  
怒りを抑えているのがすぐにわかる雰囲気醸し出しており、彼の  
隣に座っている佐倉、そして瀬流彦教諭がチラチラと、彼の顔色を  
窺っていた。

ちなみに私の左隣からはお兄ちゃん、煌月、サク、マナ、葛葉くすのはとつこ刀子教諭、神多羅木教諭かたしろぎ……といった順番で並んでいる。

普通なら、ガンドルフイーニ教諭の意見を押し通すべきだろう。魔法世界に一度でも行ったことがある者なら、旅行気分ですら、それも子供だけで行ける場所ではないと知っているはずだ。

魔法使いの実力には、ある意味年齢は関係ないので未成年者でも仕事につけるし、渡航許可も下りる。が、だからといって奨励されているわけでもない。

「連合が何を言ってきたても、結局彼（ネギ）以下女子生徒の保護責任は我々にあります。ここは、その命令に逆らっても阻止すべきです。」

そもそも命令にはネギ君のことは書かれています。従者及び同伴者についての言及は、いっさいなされておりません」

「僕……いや、私も同感ですね。ネギ君が何を考えているのか知りませんが、傍から見れば、死に急いでいるようにしか見えませんし……。連合は、ネギ君を使い潰す気か」

「案外、本当に潰す気か」

瀬流彦教諭の言葉を遮るようにして、お兄ちゃんがボソリと言った。綺麗でよく通る、重みのある声は全員の鼓膜を震わし、ほとんどの者をゾツとさせた。

「どついついことかね、刹那君」

「言葉通りの意味ですよ、神多羅木教諭。そうすれば、彼らはスプリングフィールド教諭を“保護”する、絶好の機会が生まれます」

“保護”。

その言葉の本当の意味を理解したのか、全員が押し黙った。

「くつだらねえ。唯の人取り合戦じゃねえか……胸糞悪いな」

中立派　つまり、ネギをそれ程擁護していないし、『英雄』を神聖視していない教員が小さく呟いた。

公式の場で、上層部を批判した一言だったが、議長役の学園長すら諫めなかった。

たぶん全員、同じような事を考えたからだろう。

その心境を口にした、宵磨森羅教諭よいとせしむらびをチラリと見ながら、その横に座る大学生の魔法生徒が小さく呟いた。

「それで、元老院は何をやらかすつもりなのか……まさか……」

それは、一学生が考えることでもないし、麻帆良という下部組織の考えることでもない。でも、その少年は最悪の結末を考えついたのか、顔を青褪めてブルリと震えた。

組織が英雄を求めるタイミングというのは、おおよそ決まっている。



それは国家などが分裂しかけ、動乱が起き、危機が迫り、市民の団結が叫ばれる中で、市民が高揚しないとき　だと、前にお兄ちゃんが言っていた。

リーダーと英雄は少し違う。

英雄は、後世でも伝えられ、その威信に支えられているからこそその英雄なのだ。

それが必要なのは大抵時代の節目　つまり、“戦争”か“革命”だと相場は決まっている。

「？川君、そんな戯言を……。まだそうと決まったわけではありませんし、仮にそうだととしても、言ったところで仕方が無いでしょう」

葛葉教諭が鋭い目で諫めるが、？川と呼ばれた青白い顔の大学生は、少しムキになったのか言い返した。

「そうじゃなきゃあ、英雄の忘れ形見を竈に放り込むような命令するわけないでしょう……」。

勘弁して下さいよ……僕は戦闘員じゃないってのに。戦場でナイフを見ただけで、失神しちゃいます」

後半は愚痴だったが、前半の部分は言い返すことができないのか、葛葉教諭は低く唸った。

「……様子を見ますか？」

高畑教諭が珍しく、強気（というより大胆）な意見を言った。

「元老院がネギ君をどうするか、少々泳がせてみませんか？どの道期間は夏休みの間だけです。アクションを起こすにしても、大した真似はできません」

「危険ですな、教員とは……いえ、『英雄』とは思えません」

宵磨教諭が鼻を鳴らして踏ん返り返った。熊の様な巨体のため、今にも座っているパイプ椅子が吹き飛びそうだ。

実際パイプ椅子は、嫌な音を立てて軋んでいる。頭に音が響くから、勘弁してほしいものだ。

何とも傲慢な宵砥教諭の態度に、高畑教諭はムツとしたように目を細めた。険悪な空気が流れる。

「……色々理由を付けて、ネギ君の帰還を渋るかもしれませんが。もしかしたら、強引にネギ君らを足止めするかも」

教員同士の議論が勃発しそうだったので、佐倉がおずおずと手を拳げながら発言した。

「それは、たとえばどのような？」

グッドマンが鋭く言うと、佐倉は少々しどろもどろになりながらも言葉を続けた。

「……えくと、治安維持上の問題を楯にして軟禁したり……ゲートを不能にするとか……」

それを聞いて、ガンドルフィー二教諭が目を剥いた。

「ゲートは、二つの世界を繋ぐ唯一のルートといっても過言ではない……それが通行不能になると、我々は魔法世界に何の干渉もできなくなるぞ」

「確かに……。文句を言っても、どうにかなる話でもありませんし……例えば戦争……といかなくても、クーデター、テロ、大規模な事故や、凶悪犯の脱走などで戒厳令が発令されても、ゲートは封鎖されます。いや、唯故障を装えばよい話ですな」

明石<sup>あかし</sup>教諭が静かに言う。

教授が肯定したところで、真実味は増したからか、会議室に、嫌な空気が立ち込める。

私はお兄ちゃんをチラリと見たが、お兄ちゃんは佐倉の意見に感心

したのか、腕を組んで頷いているだけだった。  
……流石というべきか、いや、最初からその考えを疑っていたのだ  
ろう。

「……ちよつと待つて下さい、論点がズレてやいませんか？今は、  
ネギ少年らの渡英を許可するかどうかを考えましょうよ」

眠たそうに頭を掻いている、白衣を着た女性が苛立たしげに言った。  
『さつさと終われよ』と言わんばかりの顔だった。  
それを見て苦笑したお兄ちゃんが、

「そうですね。憶測は後でいくらでもできます。どの予測が当たる  
にしろ、スプリングフィールド教諭らが大そうなことに巻き込まれ  
ることはないは変わりありませんし」

と言って、その白衣女性に頭を下げる。  
それを見て一瞬カチンときたが、私はその白衣女性、小野<sup>おのちか</sup>近養護教  
諭を一睨みするだけに留めておいた。もっとも、このぬらりくらり  
とした女は、その程度では堪えないが。

その後も議論は続いたが、結局は元老院の指示に従わないよう、ネ  
ギの渡英にさり気無く邪魔を入れ、魔法世界入りだけは最低でも阻

止めるように決まった。

くたくたになった私達が帰る頃には、もう日付が変わろうとしていたことだけ明記しておく。

### 第53幕「射線、それは不可視で醜い希望」(後書き)

今回登場したオリキャラは、元々麻帆良サイドのキャラとして出す予定でしたが、ややこしくなりそうだったので封印したキャラ達です。多分、もう出番はないと思います。

#### 一応設定資料

宵磨 よいとぎ  
森羅 しんら

性別：男

容姿：スーツ姿で、熊の様な巨体。かといって肥満というわけではなく、かなりガタイがいい。肌は浅黒く、顔は厳つい。茶髪をウルフヘッドにしており、瞳の色は金色。

備考：魔法先生の一人で、男子大学部担当。豪胆だが猪突猛進ではなく、策士でもある。格闘技の使い手で、近接戦の腕はタカミチにも劣らない。そのため、タカミチをライバル視しており、彼の意見にケチを付けるところも目立つ。が、タカミチの実力は素直に認められている。連合の掲げる『正義の魔法使い』像に疑問を抱いており、『英雄』を“民衆の空想の産物”と切り捨てる。ために、連合から目を付けられており、麻帆良に左遷されてきた。

?川 いづながわ  
安芸 あき

性別：男

容姿：男としては白すぎる顔に黒の長髪、たれ目で瞳の色は黒。背

丈は170程で、かなりのヤセ形。

備考：男子大学部工学部三年。戦闘よりも、優れた判断力を駆使して参謀役や補助役のポジションを得意とする魔法生徒。武器は杖で、典型的な魔法使いタイプ。だが、杖は仕込杖で短刀が隠されている。が、剣術は申し訳程度。頭脳明晰なため、首脳部の末端に所属している。修行及び担当は宵磨で、彼を補佐することも多い。

小野近 おのちか  
墨 すみ

性別：女

容姿：黒の長髪で、左目を前髪で隠している。いつも眠たそうな目をしており、瞳の色は黒。白衣を着込んでおり、ヤセ形。肌は黒い。備考：女子高等部の養護教諭。治療魔術師だが、専門は解毒及び毒薬製造。会議がトコトン嫌いで、面倒臭がり屋だが、腕は確か。輪廻の殺気を（かなり軽めだが）受け流せる、数少ない人間。ドの付くヘビー・スモーカーでもある。

なんか最近、詠春さんがどんどん重要ポジションになっていってる  
気がします。最初は唯の依頼役だけだったのに、どうしてこうなっ  
た……。



「…………ふう…………」

『夜白家』では主に参謀や後方支援を担当する少女は、目の前を躊躇なく進んでいる少女に声をかけた。

綾瀬あやせ 夕映ゆえ

「あの、桜咲さん…………」

「ん？どうした？」

桜咲さくらさき「Y」刹那せつなは涼しげな顔で振り向き、顔色の優れない夕映を不思議そうに見つめる。

「いや、あの……………こうって……………随分と危険なところじゃあないんですか？」

「ん？……………ああ」

小さく首を捻ったサクに、“何か”が近付き 消えた。  
足元には、猛獣とも怪鳥ともつかない怪物が、バラバラになって横たわっている。

「……愚問でしたね、忘れてくださいです」

夕映は首を振り、大きくため息を吐いた。

しかし、すぐに全く知覚出来なかったサクの剣筋にゾツとし、冷や汗が一気に流れる。元々夕映は戦闘タイプ、それも接近戦タイプではないのだ。スタイルこそ違うが、魔法使いの戦闘法に極めて酷似している。

すなわち、遠距離からの殲滅戦である。

つまり、夕映自身の身体能力は『憑依体<sup>ベルツナ</sup>』や魔具を使うか、気で強化しない限りは常人のそれと大差ない。サクの殺気と剣筋に、耐えるというのが酷であろう。

震える夕映にうつすらと微笑みかけたサクは、光り輝く剣を持ち上げて凝視した。

淡い光を放ち、神聖な雰囲気を纏った剣は『変幻刀<sup>へんげんとう</sup>・羽羽斬<sup>ハハキリ</sup>』。彼女のアーティファクトである。

「『玉蔓<sup>たまかずら</sup>』という。刀から視認不可・探知不可の“枝”を無数に伸ばし、ドーム状の“圏”を形成する。不要にそこにいったものは、糸より細く、業物より斬れる“枝”に斬り刻まれるというわけだ……。 “夜桜流”の守衛術の一つだよ。

そしてこの『羽羽斬』は、私が“斬りたいモノ”だけを斬る。だから、夕映まで包む事も可能だ」

「……聞いてませんよ、ていうか、私も護ってくれているなら最初からいつてくださいます！」

「すまないな、この技は“大食い”だから……。常時展開、しかも二人分となると結構疲れるんだよ……。だから、面倒でね」

汗一つかいていない顔で言われても説得力が無い、という言葉を読み込み、夕映は辺りを見渡した。

殺風景な光景が永遠と広がり、荒野が廃墟くらいしか見えない。後は、恐ろしい姿をした魔獣が餌を求めてうろついているくらいしか、生命の存在を感じさせない。

「ここは魔法世界危険区域中の危険区域、ケルベラス溪谷に近いからな。ハント好きな物好きくらいしか訪れない。そしてそんな希少種な連中も、到着して五分後には腹の中だ。遺跡発掘に来るやつは、大樹林の方へ行くだろうし……」

「大樹林のすぐそばに、荒れはてた荒野があるわけですか……」

「この辺りは魔力素がなく、精霊も死に絶えている。魔法も気も使えない……。魔法使い連中にとっては鬼門もいいところだ。もっとも私達は別だが」

「つまり……」

「ああ」

サクはそう言って、口元を歪めた。

「隠れ家には、最適ってことだ」

彼女の手には、木彫りの鍵が握られていた。

夜白 刹那せいなを始めとする『夜白家』は、魔法世界での任務や非常時に備え、幾つかの拠点を持っていた。その全てが夜白 輪廻りんねが創り出した『空間』にあり、入口は様々なところにある。

今回、サクと夕映は、エルジウム大陸にある拠点から、外に出ていくというわけだった。

彼女達の目的は、簡単に言うと“下見”だった。

ネギ達が万一にも魔法世界した時に備え、魔法世界のあちこちを見て回っていたのだ。地理や空気などを把握し、ある程度の人脈を造り、迅速な対応が可能となるくらいには。

無論、『夜白家』は前から魔法世界で動いており、ある程度のことと呼ぶには広大すぎるが、人脈もあつたが、念には念をだ。

特に、ネギパーティに親友の宮崎みやまきのどかがいる夕映は積極的に動い

ていた。彼女に危険が及ばないように、夕映は出来る限りの保険は掛けておくつもりだった。

ネギ「スプリングフィールドはのどか達が同伴することを喜べなかったが、のどかは一度決めると決して折れない。意外と行動力も度胸もある少女なのだ。“恋は盲目”という言葉を具現化したような性格なのである。

本人が引き下がらなければ、元々おしが強いとは言えないネギは、渋々ながらも首を縦に振るしかない。

そのため、基本インドア派の夕映が動いているのだが、だからと言って彼女一人ではどうにもならない。

そこで、旧世界・魔法世界ともかなり名前は売れているサクが、護衛兼案内役として同行していた。

幼い頃から魔法世界に出入りしていた彼女は、魔法世界の地理も風土も把握していた。そして刹那の顔に泥を塗らないためにも必死に学んだおかげか、交渉術や話術、処世術もかなり身につけている。

“武道派”のサクだが、決して武道以外は不得手というわけではないのだ。

メイドが行う様な雑務は勿論、プロの外交官が行う様な、交渉術も持ち合わせている。もっとも、それが好きか嫌いかは話は別だが。

「夕映、この大陸には“グラニクス”という都市がある。メセンブリーナ連合所属の自由交易都市だ。……位置は辺鄙だが、そこには魔法世界中の商人が集まる。同じように“情報”も集まる……。『英雄の息子』と従者がやってきたなんて噂が立ったら、たちまちこ

ここに届く。……………モラルは低くて治安は悪いが」

地図を見ながら、サクは説明を続ける。

まったくガラにもない、これじゃあ探検隊の隊長みたいや…………。ウチは刹那さんの手足でいる方が合っているのになあ…………。

そんなことを考えながらも、彼女の顔はいつも通り凛々しく、真剣だった。

「商人は“国家”ではなく“利潤”に従うからな。…………そこらの情報屋よりかは余程当てになる」

「…………そういうことです」

「あ」

サクのすぐ横から、抑揚も感情も無い声が響いた。飛行機のアナウンスの方が、まだ感情が籠ってそうな声だ。つまり、

「煌月さん」

夜白 煌月の声である。  
黒スーツ姿の、透き通るような白に近い透明の髪を揺らす美女は、サクと夕映の方をチラリと見た。

「どうしたのですか？」

「迎えに来ました」

それだけ言って、煌月はサクと夕映の首を掴んだ。

「「え？」」

瞬間、三人は消えた。耳に聞こえない雷鳴と雷光を残して。

煌月は準最高位神獣『麒麟』である。スピードだけなら、『天狐』すら軽く凌ぐ存在だ。そのため彼女からすれば、一瞬で魔法世界から旧世界麻帆良学園まで移動することは、それ程難しいことではないのだが。

「ふう……刹那さんからお呼びがあったのなら仕方ないな……」

学園側に実力を悟られぬよう、煌月は能力の大部分を隠している（それでもタカミチ「T」高畑<sup>たかはた</sup>教諭以上の実力を見せているのだが）。その気になれば、水も雷も無尽蔵に生み出せ、操れる煌月も、格闘術に秀でた魔法使いくらいにしか思われていない。

そのため、結界内にいきなり転移するのは問題だった。万が一にも悟られる危険がある。

そこで煌月達は、まずは学園付近に転移し、その後電車で麻帆良中央部へと移動した。

「今回、私の行動は自発的なものだったから……。刹那さんには一応言っただけだったし……。心配掛けてしまったかな」

「あ、言っただけなのですか？」

てっきり刹那が夕映を気遣い、サクを同行させたと思っていた夕映は、驚いたようにサクを見た。

「ああ……。そもそも夕映、刹那さんに言っていなかったらどう？」

「い、いや……。言うまでもないかな、と思いましたが……。私の個人的な目的ですし……。」

夕映は今回の魔法世界行きは、刹那に相談せずに独断で決めたこと



だった。その後準備中に、サクが同行を願い出たのだ。自身の戦闘能力の低さを自覚している夕映は、あっさりとサクの申し出を受け入れた。

どうやら夕映の計画（？）を察知したサクは、刹那に連絡して自分が同行すると進言したらしい。そして、刹那は許可した。

「私は刹那さんに命令されるのを待つだけのロボットでも、暴走する低脳な獣でもない。あの人の負担や悲しみを事前に取り除き、あの人の願いを叶える手足だよ」

皮肉気にそう言うと、サクはバツが悪そうに目をそらす夕映を鋭い目で見た。

「……何も全てにおいて刹那さんの許可を取れなんて言わないが……少しは刹那さんの性格も考えてくれ。何も言わずに夕映が消えて危険な目に遭えば、あの人は自分を責める。」

……そして私達は、あの人を悲しませるモノを例外なく許さない」

濃厚な殺気を込めた瞳で、サクは夕映を睨みつけた。

「私も、マナも、輪廻さんも煌月さんも千雨もアキラも決して……あの人の敵を、許さないんだ」

夕映は必死に何度も頷いた。実力的には、夕映は到底サクに敵わな

い。煌月クラスは論外で、抵抗もできない。  
その気があれば、サクも煌月もあっさりと、夕映の首を刎ねられる。  
殺気の籠った視線に耐えつつ、夕映は自分の軽率さを悔いた。

一方煌月はそんな二人を眺めながらも、止める気はさらさらないうで、無表情を崩さずに本を読んでいた。

「刹那様、唯今戻りました」

「戻りました、刹那さん」

「ただいまです」

「…………ン、お帰り………… お疲れ様、煌月。首尾はどうだい、夕映、サ  
ク」

「身に余る光栄です」

「………… グラニクスは何とか…………」

「そうか………… 中断させてしまって済まないが、少し………… 妙な事にな  
ってきてね」

帰還した三人を労った刹那は、煙管キセルを置いてため息をついた。  
部屋には輪廻と長谷川はせがわ 千雨ちさめと使い魔サンレイ、大河内おおこうち アキラ、

そして、この時間は麻帆良の茶屋で働いているはずの天ヶ崎あまがさき 千草ちくさまでいた。

全員机に向かい、ティータイムを満喫しているが、剣呑な雰囲気  
が立ち込めている。少なくとも、喜べる事態ではないようだ。

「……………元老院から“再命令”が届いたそうよ」

不機嫌さを隠そうともせず、輪廻が小さく呟いた。それに続く形で、  
刹那が小さく呟いた。

「「ネギ」スプリングフィールド及びその従者は魔法世界へ赴く場  
合、メガロ重騎兵に護送させよ」だそうだ」

関西呪術協会総本山、近衛家のとある一室にて。

「……………馬鹿な……………」

一人の男が、肩を震わせていた。その表情は憤怒、当惑、驚愕など  
あらゆる感情が混ざり合い、震える腕は上等な和紙で書かれた手紙  
を、握りつぶさんばかりに力が込められていた。

そう遠くない未来、現職から外れることになるであろう長、近衛このえ詠春えいしゅんである。

彼は愛娘の修業先になるであろうアリアドネー、そして魔法世界の各所に密偵を放っていた。“密偵”とはいっても、関西の間人であることは公言しており、“次期当主の安全確認のための治安捜査”を名目に、堂々と調査活動を行っていた。

その密偵の一人……元老院の動向のために放っていた者から、麻帆良宛に元老院が送った命令書の内容が送られてきたのだ。

「こんなことが、許されるとも……」

ネギ本人は兎も角、彼の従者はつい最近まで一般人だった者が殆どだ。実力も経験も、魔法世界行きに必要な何もかもが足りない。

加えてこれは、遠回しにネギの従者の随伴を強制しているようなものだった。

「ネギ君の従者たちの安全や人権を、何一つ考えていないのか……？何を考えているのだ元老院は……」

……もう悲惨な戦争は終わったんだぞ。あの戦争で、どれだけの犠牲が出たか……そして、何が得られたか……何も得られてはいない。戦争とはそういうものなのだ……仮に得ても、そんなものに何の価値があるというのだ、未来を紡ぐ子供たちの命以上の価値が、戦争にあるとでもいうのか……なぜわからない……」

詠春は泣いた。彼は、元々戦争を止めるつもりで魔法世界入りした

わけではない。自分はそんな褒められるような精神など持っていないし、持つ資格も無いことくらい承知している。

しかし、戦争を止めるために尽力したことは事実である。最後は、そのために戦っていた。

それで得た平和も、二〇年程度しか持たないし、今度の自分は見ていることしかできないのかと思うと、詠春は悔しさのあまり、唯泣いたのである。

「くそ、関西には魔法世界とのパイプが無さ過ぎる……私個人のモノを使うしか……。そうだ……」

彼は呟くと、はやる気持ちを抑えて筆を取った。

「迷惑をかけることしかできませんが……本当に申し訳ありません、夜白君」

独り言を呟きながら、詠春は墨汁に浸した筆を走らせ続けた。

第54幕「迂回、それはまともな狂言/W a g g e r . . . L i n e o f C

次回から新章に突入します。

ご意見ご感想は随時募集しております。

## 設定資料5（前書き）

今回は『娘達』<sup>ドクターズ</sup>の設定資料（替鈴除く）<sup>すれい</sup>を含めたオリキャラ、そしてブリジットの設定資料です。

## 設定資料 5

夜白 やししろ 硯璃 すずり

性別：女

種族：神工生命体（特級）

年齢：自由自在（普段は17歳程の姿になっている）

『娘達』ドクターズでの立ち位置：長女（リーダー）

管轄：支配と統括

容姿：純白の長髪を背の中程まで伸ばし、肌も白く、ラピスラズリ瑠璃色の瞳が特徴。背丈は170程で、スタイルも完璧。ハルバードを背負っていることが多い。私服は藍色の振袖を好む。

性格：大和撫子（妹や無関係者に対しては傲慢）。お嬢様口調で話すが、刹那や輪廻以外の相手に対しては高圧的で、見下したように喋る。刹那至上主義・ヤンデレ（超強）。

能力：

『世界覇者』レオニダス

ありとあらゆる存在を跪かせ、全ての存在意義を指定できる。誰も彼女の命令に逆らうことはできない。それは生物に限らず、神や自然さえ従わせられることができる。他にも物理的法則、次元、現象などすら操る事が出来る。また、彼女に存在意義を定められたものは、その意義の範囲内では行動できなくなる（例えば「歩くことしかできない」と指定されると、文字通り「歩くこと」しかできなくなる）。

“覇者の戯れ”タルタロス

対象の肉体・精神のコントロールを奪い、意のままにする。無機物や死体にすら有効。



夜白 やししろ 穹斐 そらひ

性別：女

種族：神工生命体（特級）

年齢：自由自在（普段は15歳程の姿になっている）

『ドクターズ娘達』での立ち位置：次女（副リーダー）

管轄：意志と空間

容姿：純白のショートヘアと白い肌を持ち、両目を純白の包帯で覆っている。硯璃より長身だが、胸は少し控え目。私服は白いローブ。常に分厚い本を抱えている。

性格：割と常識人で、姉のストッパー役。但し、刹那に関しては一切自重しない。大の“観察”好きで、ものごとの“可能性”を測るのを好む。刹那至上主義・ヤンデレ（強）。

能力：

『ストライプス・アガベ無形紡手』

他者の意志や空・空間・無像などの「目に見えないもの」全てを操り、生み出すことができる。元は硯璃の『レオニダス世界覇者』を補佐するための能力。

夜白 やししろ 骸亜 がいあ

性別：女

種族：神工生命体（特級）

年齢：自由自在（普段は16歳程の姿になっている）

『ドクターズ娘達』での立ち位置：三女（冥界管理）

管轄：時間と境界

容姿：毛先だけ白い黒髪をポニーテールにし、肌は白い。前髪で目は隠れているが、朱色の瞳を持つ。瞳は腐ったザクロのように輝く。背丈は一七〇程で、プロポーシオンも完璧だがヤセ型。私服は黒い

シャツとジャケットにカーゴパンツ。

性格：刹那以外に対しては超弩級のサディスト。普段は眠気を誘う、謡うような口調で話す。遠距離恋愛心棒者。刹那至上主義・ヤンデレ（超強）。何かを“縛る”・“操る”ことが大好き。

能力：

『フィッキング・ボーター境界創造』

ありとあらゆる「境界」を引くことができる能力。「生」と「死」の境界を引いたりできる他、「上」と「下」の境界を引くことで万物を操ることも可能。尚、彼女が引いた「境界」は彼女にしか見え  
ず、解除も彼女にしかできない。

『コンキスタドル蹂躪軍団』

彼女が管理する冥界から死者を呼び出し、軍団を形成する。その数は無限であり、敵を殺せばさらに増える。尚、呼び出した死者は彼女の神力を喰らうことで無制限に強化され、彼女だけにつき従う。肉体は死んでいるため痛みを感じず、疲労することも無い。“壊れ

”てもいくらでも再生可能。自我はない。彼女曰く「オモチャ元藪蚊の兵隊」。

ブリジット＝ヤシロ（調しん）

原作との変更点：

『コスモエンテレイア完全なる世界』の準幹部兼客将で、本来は『夜白家』所属の人間。サクやマナとほぼ同時期に刹那に拾われ、刹那に心酔している。性格は刹那や輪廻に影響を受けており、敵を「塵」に喩え、「土に還す」などの言い回しを良く使う（輪廻や煌月が敵を「塵芥」・「害虫」扱いしていたから）。敵に対してはかなり冷酷で、静かにキレるタイプ。輪廻の影響か、黒を基調としたゴシックドレスを好んで着る。

刹那に憧れ、木製の煙管キセルを啜えることが多いが、煙草の煙が苦手な

ため、啞えるだけ。また、輪廻から楽器を教わっているので演奏はかなり上手い。

現在は『完全なる世界』に協力しつつ、『夜白家』との連絡役として在籍している。

戦闘能力：

純粹な格闘術や剣術・杖術などを使いこなす（近接戦の実力はサクに少し劣る程度）他、民族固有能力として植物の根などを操れる。この技も、原作より強威力かつ広範囲となっている。補助系統の術にも精通しており、所謂“何でも屋”のポジション。だが、本業は後方からの攻撃や友軍補助である。

『韋天<sup>イテン</sup>』

彼女の『韋天』は植物を媒介としており、植物がある所なら負担ゼロで移動可能。

アーティファクト1：『<sup>ファンタム・スピリタス</sup>有限の夢幻創造』

見た目は2メートル程のサイズのマスケット銃だが、実態は別モノ。“樹液”を媒体にして様々なものを創造できるアーティファクト。

原料はブリジット特製の木々から取られている。気体や液体も創造でき、生命体も創造できる。大規模な創造であればある程、大量の樹液を必要としている。しかしブリジットは『空間』内に樹液のタンクと倉庫、そして樹木を設置しているため、いつでもどこでも補充が可能。

『<sup>アイゼンハイム</sup>樹液人形』

ブリジットが生み出した兵士。黒服を身に包み、フードを深く被っている。やろうと思えば軍団単位で運用できる。自我や感情はなく、ブリジットのみに従う。命令が終わると自動的に消滅する。

アーティファクト2：『<sup>フィディクラ・ルナーティカ</sup>狂気の提琴』

フェイトIIアーウェルリンクスとの仮契約で入手。ヴァイオリン型のアーティファクト。効力は原作と同じだが、音色は普通に綺麗である。

ガウ＝シュレーメン

性別：男

種族：神の眷属（現はぐれ眷属）

年齢：不明

容姿：黒の髪に黒い瞳。眼鏡をかけており、肌は少し黒い。迷彩柄のチノパンと黒のジャンパーを着込んでいる（麻帆良祭時は本校男子高等部制服）。しかし、それは人間時の姿で、本来の姿は羽虫の羽を持つエルフのような姿。肌は灰色。

性格：打算的・傲慢

## 設定資料5（後書き）

次こそ新章突入です。

ちなみにヤンデレレベルは弱？中？強？超強？極です。輪廻と煌月は極。

第55幕「理念、それは唐紅の湖に沈む苔石」(前書き)

今回、再び(三度?)輪廻が暴走(?)します。

急展開で申し訳ありません。

第55幕「理念、それは唐紅の湖に沈む蒼石」

「……………ウットウシイ」

私はドアを閉めた直後、そう呟いた。

結局あの後、報告のみで別段会議とかはせずに休憩時間ティール・ブレイクを過ごした。ここまで来ると、もうどうでもいいという思いが強くなってくる。

でも、それ以上に…………お兄ちゃんは、疲れていた。

隠そうとしていたけれど、そんなことはすぐにわかる。煌月も、マナ達も、伊達にお兄ちゃんだけを見つめ続けていない。

事前に予測できることだった。

私はまだ、フヌケテいたのだ。

もはや、そんな自分に対して怒りも沸かない。麻帆良祭の時に、自分への罵倒は出し尽くしてしまった。

このままでは、お兄ちゃんは疲れ過ぎて…………本性が出てきてしまうだろう。

理論超然とした優しいお兄ちゃんではなく、我儘で、臆病で、自己中心的で、原始的なお兄ちゃん。

私はそれでもいい。でも、お兄ちゃんは必死に隠している。見られることを怖れている。

だったら、私はその想いを叶えるだけだ。そのためには、

「……邪魔だなあ……」

麻帆良も魔法世界もネギも元老院も全てが邪魔だ。度し難い。救うつもりなんて最初からないが。

もどかしい。

お兄ちゃんさえ、お兄ちゃんさえ許可するのなら、すぐにでも潰してやるのに。最高の苦痛と最悪の悪夢を味合わせ、地獄がぬるま湯に思える恐怖を味合わせてやるのに。

私の中の狂気を、存分に見せつけてやれるのに。

「……あ……」

マズイ。

止められなくなってきた。

これじゃあ、なかなか許可を出さないお兄ちゃんに苛ついているみたいじゃあないか。

まさか。あり得ない。そんなことはあり得ない。

しかし、どうしたものか。お兄ちゃんは陰ながらネギをサポートしているし、3-A生徒にも気にかけている。

サクヤ千雨以外にも、明日菜や那波・明石など、お兄ちゃんに気がある生徒の顔が何人も浮かぶ。

お兄ちゃんは優しい。優しいから、私が人を殺すのも好まないし、生徒達が傷付くのを嫌う。



「……………まてよ」

私はふと思った。

ネギ達が、魔法世界に行かなければ万事解決するんじゃないか……  
そうなるようにすれば……。……  
連合からの、元老院からの直接命令を、無視できるほどのことが起  
きれば……。……。

そうだ。

そうすればよかったのだ。

一石二鳥じゃあないか……。……。

何で、何でこんな簡単な事に気付かなかったのだろう。私はお兄ち  
ゃんへの愛ばかりか、思考力すらいつの間にやらどこかに置き忘れ  
てしまったのだろうか。

「あ、はははははははははははははははははははははははははははははは  
はははははははははははははははははははははははははははははははははは  
はははははははははははははははははははははははははははははははははは  
はははははははははははははははははははははははははははははははははは  
……………」

私は小さく震えた。

喜びだ。お兄ちゃんの忌まわしき苦痛を　小癩にも、お兄ちゃん  
に苦痛を与えている原因を、塵芥を排除できるといふ喜び。お兄ち  
ゃんに尽くせるといふ悦びだ。

「  
煌月」

「はい」

私の横に煌月が立っている。その顔は無表情ながら、心なしか笑っているようにも見えた。

私は煌月に耳打ちする。

「……成程。わかりました、刹那様には私から言っておきましょう」

「頼んだよ」

「はい。その代わり」

「わかっているよ」

私は微笑みながら、転移術を発動した。

「永遠の苦しみと、深淵の嘆きを与えてあげる」

実に簡単な事だった。

連合で 魔法世界で、ネギ達が行けないようなことが起こればい

いのだ。

それは、ゲートを不能にするという安直な方法に頼らずとも良い。

喻えば　そう、ネギー行の出発を渋れるくらい、恐ろしいことが魔法世界で起これば。

私は首都メガロメセンブリアの、とある建物　主に連合直属兵の教育を行う施設の上空までいた。

中にいるのは全員兵士、それも腕利きの教官か、訓練途中のエリート候補ばかりだ。

余程運が悪くなければ、死ぬことはないだろう。

お兄ちゃんのためにも、出来る限り犠牲は減らさなくてはならない。本音を言うと、今すぐ皆殺しにしてやりたいが、お兄ちゃんのお意思是至上にして至極。出来る限り　そう、お兄ちゃんに直接逆らいでもしない限りは、殺さないようにしなくてはならないのだ。

私は尻尾の内一本を、髪を払うかのような仕種で横に薙いだ。

それだけで境界は破壊され、基盤は砕け、地盤は割れて、建物は崩壊を始める。同じように、連合の軍関係の施設を適当にリストアップして、同じように尻尾で崩し、潰していく。

手ごたえもなにも無く、退屈な作業だったが、お兄ちゃんのために働いているという使命感と喜びが、私をどこまでも滾たぎらせる。歓喜の雄叫びをあげ、涙がこぼれ落ちそうになるのを何とか堪える。

最後に、元老院の内、特に目障りな数人を選んで始末する。彼らを補佐する高官もだ。

“始末”と言っても死なないようにしてから、目を潰して抉って耳を削いで鼻を折って唇を千切って皮を剥いで骨を折って肉を斬り裂いて殴って蹴って潰して内臓も取り除いて潰して手足を関節毎に斬り落として最後に顔面を穴が開くほど殴り続けてから『空間』に放

り込むだけだ。

この程度では準備運動にもならないが、時間が無かったからこのくらいに留めた。

まだ一回も殺していないし、一京や一垓がい(10の20乗)回くらい殺したところで、この怒りは収まらない。

連中はお兄ちゃんの作戦や予定をご破算にし、お兄ちゃんの貴重な時間を無駄にし、お兄ちゃんを疲れさせた。その代償は、地獄に落ちてもまだ余りある。

それと、ストレス発散も兼ねてメガ口の重騎兵と戦闘を行ってみたが(勿論変装して)暇潰しにもならなかったので、全員失神させておいた。

まさか極限まで手加減したキック一発で身体が二つに分かれるとは思ってなかったので、慌てて治療したけれど。どうやら思った以上に、ストレスが溜まっていたらしい。

「帰ったら煌月誘って模擬戦しよう、わりと本気ガチで」

思わずそう呟いたのは、仕方がないことだと思いたい。

元老院の連中とかには、別に尋問とかせずに唯苦しめ、痛みつけた。連中の浅はかな考えなど知りたくも無かったし、そんなことに私の頭を使いたくなかった。おぞましくて読心術も使いたくない。何より、連中の汚らしい声を聞くのは御免だった。

『空間』の拷問部屋はすぐに一杯になったので、残りは適当に『空間』内で其処らへんに生えていた木に鉄棒で打ちつけておいた。無論、出血はしないようにしてある。出血死などぬるすぎる死に方は、

たった一回でも許さない。

「まったく塵芥共は、何度も命乞いをして……見苦しいけど、滑稽ね……。殺してあげるわけがないのに」

私はそう呟くと、斬新な、だが決して美しくはないオブジェとなった人間を見つめて薄く笑う。今すぐにも拷問を再開したいところだが、そんなことは後でいくらでもできる。

携帯を取り出し、番号をプッシュしてから耳に当てる。魔法世界では、下手な思念通話よりも逆に携帯の方が盗聴されたり逆探されたりしないものなのだ。数回のコールのあと、

『……はいもしもし、こちらはコズモ……じゃなかった、老舗のピザ屋『ザ・ワールド世界』です』

フザケ巫山戯たセリフと共にやる気のない声が聞こえて来た。

「……………ツギ栞、アーウェルンクスに代わってくれる？ というより、何で貴方がブリジットの携帯に出ているの？」

『あ？ なんだ、コスモエンテレケイア『完全なる世界』に用ですか……どうも、え〜と輪廻さんですね、初対面の時以来ですね。あの人はちょっと立てこんでてまして……フェイト様ですね？ ちょっと……お待ちを……あ、

環、そのパイ皿とってくれる……あゝもう、サラム食べるなって  
え……………」

雑音が響く中暫くして、あの男の声が響いてきた。

『代わったよ』

「お久しぶりねおしゃべり人形……残念なことに生きているようね」

アーウェルンクス

『ああ。貴女もいつも通りの様だね、冗談が好きなようだ』

「“いつも通り”？……私の何を知っているの？私を知っているのはお兄ちゃんだけ。……殺すぞ」

『……言葉の綾さ。それでどうしたんだい、トラブルかい？』

「私に解決できないトラブルが、貴方に解決できるわけないでしょう……報告よ。」

ちよつと連合の施設を壊して、元老院と高官拉致したから」

『ふうん……………ネギィスプリングフィールド達を、魔法世界に行かせないつもりかな？』

「察しが早くて助かるわ。私はどうでもいいけど、お兄ちゃんがそれを望んでいるの。……嫌だとは言わないわよね？」

『ん…………こつちとしては彼は脅威にならなければどちらでもいいし、寧ろ関わってくれない方が有り難いのだけれど…………わかった』

「そう、じゃあ……。」

それと私は冗談は嫌いよ。お兄ちゃん以外のはね」

そう言つて、私は携帯を切る。お兄ちゃん以外の男の声が、電話越しに響いてくるのははつきり言つて不快だった。

「わかつた……？」

携帯をポケットにしまいながら、私は小さく呟いた。

「……………オモチャ玩具風情が何様のつもりだ。わかる必要などない。どいつもこいつも、唯唯お兄ちゃんに跪いていれば良いんだ……………」  
『あなたたち完全なる世界』如きが、お兄ちゃんの神聖なるお兄ちゃんの意味に足を踏み込もうなど……………巫山戯けやがつてエ……………」

蠟の翼で身分不相応にも太陽に近付いたイカロスのように、深淵なる鮮血の牢へと墮ちればいい。

「やとと……………」

ここまで大規模なテロが起これば、連合も動く他ない。

元老院の失踪（死亡）までは隠蔽できても、流星に幾つかの施設の倒壊は隠せない。何しろ大勢のメガロ市民が目撃している。報道管

制を敷こうにも、人々の噂は止められない。噂は誇張や変形を繰り返し、伝染する。

こうなると、連合は対策を取らされるだろう。

すなわち戒厳令の発令と、犯人を逃さぬためのゲート封鎖だ。

仮にそうならずとも、今回の事が麻帆良の耳に入れば 抜け目のない学園長の事だから、恐らく本国×カロに独自の情報網を構築しているだろう 麻帆良はそれを理由にネギ達の魔法世界行きを中止できるし、連合がいちやもんをつけてきてもつつぱねることができる。

これで、お兄ちゃんの心労も少しは軽減するだろう。ネギや明日菜達が、魔法世界に行かなければウェールズに行っても特に問題は起こらないはずだ。

帰ったら、お兄ちゃんをたっぷり癒してあげよう。

そう思うと、私の顔は自然と綻んだ。



第55幕「理念、それは唐紅の湖に沈む苔石」（後書き）

これで本当に解決したのでしょうか？  
輪廻は手痛いしっぺ返しを受ける予感。

ちなみに栞のピザ屋発言は、たまたまピザ作りの最中に電話が来たから。本作の栞は飄々としている不思議キャラです。  
ブリジットはこの時、奥でパスタを切っていました。

課題が出たので、更新は少し遅れそうです。哲学パネエ……。

第56幕「石塔、それは盤石な蛾の城 / Steeple . . . Crisis

輪廻の策はどう転んでいくのか……。

刹那と同じように、輪廻も完璧ではない……とらじんとすね。

「仕方ないよ、あいつらは……最大の禁忌を犯したのだから」

夜白<sup>やしろう</sup> 輪廻<sup>りんね</sup>は気だるそうに言うと、ソファに寝転んだ。

「……いや、ほんま独断専行は勘弁してくれへんか？」

そんな天狐を疲れた様な顔で睨む和装の女性   あまがさき 天ヶ崎   ちぐさ 千草は、  
玉露を飲みながら目の前に広げられた和紙の手紙を見下ろした。

それは関西呪術協会の会章が施されており、西からの正式な文であることを意味している。

近衛<sup>このえ</sup> 詠春<sup>えいしゅん</sup>からの、『夜白家』への正式依頼だ。前金として、金一封が入っている。厚みからして、かなりの額だろう。

「……」「ネギィスプリングフィールド以下従者達が魔法世界に行くことを余儀無くされた場合、ヘラス帝国かアリアドネーに送り、生命の安全を保証してもらえよう交渉したい。仲介を求む」……要約すると、こんなところやな」

千草はそう言うと、ふう、とため息を吐いた。感心でも呆れでもなく、率直な驚きによるものだった。

「本来なら、麻帆良がすべき依頼をしてきて、しかも前金が金一封……おそらく、西の総意じゃあないやろなあ。……ってえいうことは、金は詠春はんの私費かいな。へえ〜……」

「詠春かあ……。お兄ちゃんが大切に思っている人だから殺さないけど、これは……わざわざ私達に頼むかなあ……」

輪廻の他者の評価基準は、“夜白 刹那の役に立つかどうか”或いは“刹那に危害を加えないかどうか”である。しかし、それだけではない。

彼女の中での他者への評価基準で、重要なファクタとなるもの……それは、“刹那との関係”だ。

刹那が大切に思っていたり、刹那が尊敬していたり刹那が友達だと思っている人間の場合、輪廻は、無条件で誠意を持って接する。

刹那とて、人を見る目はある。寧ろ、ヒトに一切合切興味のないしそもそもヒトではない（刹那は神だが元は人間である）輪廻より備わっている。

無論、輪廻も完璧に心を許すことはないが、最低限の敬意は払う。

彼女の目の前で玉露を啜る、千草もその一人だ。刹那が千草を受け入れていなかったなら、輪廻は千草を叩き出していただろう。無論、叩き出された千草が死体かどうかは輪廻の匙加減の問題である。

輪廻が麻帆良の教師陣や生徒に、ある程度の礼儀をわきまえているのも同じ理由だ。もっとも、刹那の妹として、あまり悪い印象を与

えるわけにはいかないという都合もあるのだが。

逆に言えば、刹那が警戒していたり憎んでいる相手は無条件で、輪廻にとっては排除すべき“敵” いや、“塵芥”となる。今のところ、それは『完全なる世界』及び元老院となるだろうか。

輪廻からしてみれば、蟻を潰すかのようにいつでも殺せる相手だが、だからといって警戒を解くことはしない。

「詠春はんも、ただの“交渉”に留めるつもりはないやろなあ。おそらく、西とパイプを持たせるつもりや。転んでもただでは起きん、ということか」

千草は近頃、組織のトップらしい狡猾さを身につけた詠春のことを思い、密かに泣いた。

もう少しだけ早く長としての手腕を発揮してくれたなら、強硬派らかてこんな手段はとらなかつたのに。

もつともあの内乱で強硬派は一掃されたからこそ、詠春は辣腕を発揮できるようになったともいえるのだが。

恐らく詠春の狙いはネギ一行の安全を確保するだけでなく、“監視”の名目で西の人間を投入し、あわよくば帝国がアリアドネーに西の支部を設置する腹だろう。

いや、そうならなければ、単に詠春の行動はネギを擁護するのみに

なつてしまい、西全体が納得しない。

「妥当と言えば妥当なだけだね。『夜白家』は帝国とアリアドネーからの依頼を主に受けているから、パイプはいくらでもあるし」

帝国第三皇女テオドラを始めとする皇室・政府関係者、アリアドネー総長セラスを始めとする騎士団に自治政府関係者……『夜白家』と関係を持つ者は多い。

無論、刹那達が頼み込めば『英雄』近衛詠春との面談のセッティングくらいは容易だろう。

一方で、麻帆良 すなわち関東魔法協会は、相変わらず連合の要求をつっぱねて元老院を苛立たせていた。

何と元老院は、未だに以前の命令を撤回していない。

それどころか、「ネギー一行の修業先をメガロメセンブリアに変更せよ」とまで言ってきていた。

これは、輪廻にとつて誤算だった。

これでは、無茶ぶりがさらなる無茶ぶりになっただけである。

流石の夜白輪廻も怒る以前に呆れるしかなかった。同時に、彼女は自身の目論見が崩れ去ったことを悟った。

彼女は刹那に土下座しかねない勢いで侘びた後、刹那直々に今は静観するようお願い渡されることになる。

「元老院の頭は複雑怪奇つて……笑えないなあ……」

刹那直々の命令を破る気力は、今の輪廻にはなかった。

一方麻帆良も流石に今回の命令には、堪忍袋の緒が切れた。

「現在、メセンブリーナ連合首都メガロメセンブリアは“謎のテロ事件”により多数の損害が出ており、治安が不安定である。そのような場所に、ネギ達を送るなど言語道断！」

学園長以下教師陣は激怒して、元老院からの命令の電文を破り捨てた。

実際、元老院の対応を除いては、輪廻の思惑通りに事が進んでいた。首都メガロメセンブリアの防衛力は事実上壊滅し、メガロが誇る警備兵や重騎兵は、治安維持どころか倒壊した施設の撤去に駆り出される始末。

市民の方はすわ、戦争の再来かとパニック寸前……日本で言うなら“二・二六事件”の帝都東京のような有り様となっていた。

輪廻の書いた台本通り、連合軍部は首都及び首都近郊のゲートに封鎖線を設置、厳重な警戒態勢を敷いている。

また、元老院は戒厳令を発令した。

“戒嚴令”とは、非常時に立法・行政・司法を政府から軍部へと委譲される特別法のことを指す。

しかし連合の場合、軍部のトップも元老院議員が兼ねていた。つまり結局は、国防担当の元老院議員の権限が（一時的に）強められたにすぎない。

一方でヘラス帝国は、今回の件は無関心を貫いている。

下手に藪をつついて、テロ事件への帝国の関与を疑われてはたまらない。それに実際、帝国は無関係である。

事実、連合の血の気が多い者は、真つ先に『これは帝国による宣戦布告だ！』と帝国に攻め入る事を主張していた。

が、流石にこの機に乗じて帝国に攻め入る馬鹿はいなかった。大体首都が丸裸となっている現状で、対外戦争を仕掛けるのはあまりに無謀だ。

それでも、両国の国境は緊張状態になりつつある。連合が犯人が国外逃亡する恐れがあるという理由で、国境に膨大な軍を派遣したからだ。

流石にそこまでされると、帝国軍部も重い腰を上げざるを得ない。国境付近の国民に対し、「テロリストが国民を人質にする恐れがある」として疎開命令を出した。

が、帝国の本音は“テロリスト”ではなく“暴走した連合兵”であることは明白だった。連合が、言いがかりを付けて帝国国民を拘束・虐殺することを怖れたのである。

帝国国民は、嘗て連合が「兵を匿っている」とか「スパイと内通し



ている」といった理由で、帝国や中立国の集落を焼き打ちしたことを忘れていなかったから、軍部からの勧告にあっさり了承。寧ろ我先にと雪崩なだれを打って避難しはじめた。

多数の軍艦や軍用列車が動員され、終いには竜騎兵団ドラゴンライダーの竜まで駆り出された。流石に戦争を経験した世代も多かったため、避難は迅速に行われた。

市民が巻き込まれた市街戦の凄惨さは、兵役に就いていた元帝国兵や軍の古参兵は嫌というほど知っていた。

今の魔法世界は、このような状態にあった。

下手をすれば連合・帝国の両軍が国境で衝突　戦争となる可能性すら出て来たのだ。

そのような場所に、新米魔法使いのネギと、元一般人の従者達（3 - A生徒）が行けばどうなるか……最悪の場合、最前線に送り込まれる可能性すらあった。

「悔った……連中、とつとと神輿を得るつもりだ」

輪廻はそう言って、小さく舌を打った。

いつのまにか、千草の横に腰を下していた長谷川はせがわ　千雨ちゆめと大河内おほいし　アキラが、そんな輪廻の顔色を窺いながらも会話に加わる。千草が

淹れたのだろうか、二人の前には湯気が立つ湯呑みが置かれていた。

「恐らく魔法世界では、元老院の権威が落ちているんだろうな。議員は次々と死亡。首都はテロに見舞われる。これで、失墜しない方がどうかしてるわな」

千雨は暢気に、だが忌まわしげに自論を述べる。

「焦ってマトモな判断がとれなくなったと見れるな。さっさとあの餓鬼の存在を宣伝して、市民を熱狂させたいんだろ」

「それってマズイんじゃないかな」

アキラが顔を顰める。玉露の味のせいではないだろう。

「“窮鼠猫を噛む”とはよく言ったものだ、短絡過ぎて笑えねエーッ」

千雨はそう言って切って捨てた。

「このままじゃあ、ネギ先生達を拉致することも考えられるね……」

アキラも口調は冷静だが、怒っているような焦っているような、呆れているのかわからない顔をしている。

そしてアキラの心配は、完璧とはいかなくとも的を得ていた。

首都メガロメセンブリアの二画にある世界間関所<sup>ゲート・ポート</sup>。そこに、厳重に護衛された一人の男が足を下した。

護衛しているのは、明らかにゲートを警備している兵とは装備も気概も異なる。それでいて、正規兵にはない冷酷さを醸し出す兵士。メガロ重騎兵である。

そんな光景に困惑しつつ、ゲート警備の責任者らしき軍人が、護衛されたスーツ姿の男に敬礼しつつ話しかける。

「キューブリック議員……御言葉ですが、このような情勢下に旧世  
界に赴くのは……」

「危険があるのかね、中佐」

「いえ……」

中佐は言葉を濁す。

危険はない。

寧ろ、危険度ならメガロの方が遙かに高い。

が、この男　元老院議員で、魔法使いの教育を担当する高等教育監ストレンジラヴ＝キューブリックは、魔法使いの教育、さらには軍の訓練までその管理下に置いている。

そして、先日のテロ事件では軍の訓練施設・教育施設が破壊された。そのような時に、軍の教育の最高責任者が旧世界に行っていないものか　警備責任者の中佐は、そう尋ねている、いや、抗議しているのだ。

お前に、責任者に逃げられた現場の気持ちがお前のか、と。

しかし、そんな中佐の心境は百も承知（のはず）なキューブリックは、敢えて中佐に的外れな疑問を呈した。

これは言外に“黙れ”と言っているのだ。

そう解釈したサインラヒル中佐は、押し黙って部下に目で合図する。民間人のゲート管理者はすでに退避しているため、臨時で管理役をやっている部下は頷くと、ゲートを操作する。

「目的地は日本国　麻帆良学園都市だ」

ジェームズウッド＝サインラヒル中佐はそう言って、キューブリック議員に無言の抗議をする他なかった。



第56幕「石塔、それは盤石な蛾の城 / Steeple . . . Crisis

キューブリックの名前の由来については、わかる人にはわかると思いますが、突っ込まないでください。

特に他意はありません。

第57幕「阿咩、それは白銀の琴と碧い月／Fiercely・・・Juggat

今回も学園サイドにオリキャラが出て来ますが、モブですので気にしないでください。

学園VS元老院　やばい、碌な事にならない気しかない。

「そうか、とうとう直接乗り込んできたかの」

麻帆良学園女子中等部にある学園長室に、数人の学生服姿の男女が集まっていた。

その数は五人。全員“関係者”で、麻帆良に属する魔法生徒だ。しかし、この五人は魔法使いと言っても戦闘を担当しているわけではない。彼らの専門は偵察・監視・探知。

地味な役割だが、集団が組織的且つ計画的に戦闘を行うには不可欠な人材である。

どこの戦闘集団でも、実際に戦闘を行ったりそれを補佐する者を優先し、兵站担当や偵察担当を軽視しがちである。それは、人材不足になりがちな麻帆良も例外ではない。彼らは学生だが、麻帆良の貴重な偵察人員だった。

彼らの役目は普段なら、結界内に侵入してきた敵勢力の探知と把握なのだが、今は学園長近衛このえ 近右衛門このえもんより直々に密命を与えられていた。

ゲートの監視である。

夜白やしほく 輪廻りんねが世界樹を消滅させたため、それに併設されていたゲートも消滅した。

そしてここにいる者からは、世界樹の存在は消えている。つまり、最初から“なかったこと”にされているのだ。



結果、ゲートは麻帆良の右端に設置されたことになっている。無論、一般人の与り知らぬことではない。

学園長は、元老院の再三な催促を尽く握り潰していた。抗議もしたが、元老院からの圧力は増すばかりだ。

そこで学園長は強硬手段　すなわち元老院の来日を警戒し、国内のゲートを見張らされているのだ。もっとも、日本国内のゲートは麻帆良のゲートのみであるのだが。

「ええ。元老院議員が一人と、おっかない神経質重騎兵が六人程」

皮肉と嫌みしか籠っていない声色で、代表者らしき男子高校生がおどけたように言った。それを聞いて、一歩下がったところで直立不動の態勢だった生徒四人が噴き出す。

どうやらここにいるメンバーで、元老院に好意的な者はいないらしい。無論、学園長と後ろに控えるタカミチⅡⅠⅡ高畑教諭と黒碓氷たかはた九十九教諭つくもも含む。

現に、控えている生徒達は念話で、護衛なしでは安全大国日本の学園にも来れない元老院を嘲り合っていた。

「間違いありません、高等教育監ストレンジラヴⅡキューブリック氏です」

その中の一人、蒼い長髪を伸ばしっぱなしにしている長身の男子高校生が、淡々と言った。

「学園長、？<sup>あおのたひ</sup> 埜旅君の記憶能力と観察眼は間違いありません。彼なら、下手な指紋認証より余程ガードが固いし、正しく認証できます」

彼の横に控える小柄な女子高校生が、胸を張って断言した。そんな彼女と違い、？ 埜旅と呼ばれた生徒は終始クールだった。彼は『癖です。』と控え目に呟くと、まるで命令を待つロボットのように直立したまま停止した。

良い意味でも悪い意味でも、秀才・鬼才・天才・奇才が集まるのが麻帆良学園だ。下手に訓練を受けた本国出身者よりも、潜在能力や実力が高い者も珍しくはない。

この生徒 いや、彼ら五人もその中に含まれるのだろう。

「ふむ……<sup>あかま</sup> 紅魔君、？<sup>みどりつき</sup> 埜旅君、<sup>からき</sup> 翠月君、<sup>みくろ</sup> 空螺黄君、ごくろうじやった。たった今より、君達に与えたゲート監視の任を解くぞい」

「<sup>ボナス</sup> 報酬ははずんでくださいよ」

紅魔と呼ばれた代表格の生徒がそう軽口を叩くのを皮切りに、五人は退出していった。彼らも学生だ。魔法使いとしての任務以外にも、華の夏休みにやるべきことは無数にある。

子供たちが姿を消した学園長室で、学園長は立ち上がった。

「……では、本国の石頭を怒鳴りつけに行こうかの」

ストレンジラヴ「キューブリック議員を出迎えたのは、瀬流彦せりゅうひこ教諭とガンドルフィーニ教諭だった。二人とも、どう見ても誠意の籠っていない形だけの笑み 所謂“業務用スマイル”というヤツを見せながら、恭しく礼をする。

そしてキューブリックもそれに応え、長く白い顎鬚を撫でながら微笑んだ。言うまでも無く、こちらも形だけのモノである。

「わざわざこんな旧世界の極東まで、よくおいで下さいました」

「……ふん、どうして儂がここに来たのか、わかっておるだろう？」

「……若輩の私には、見当もつきませんな」

瀬流彦は面目無さげに頭を搔く。どこまでもわざわざらしい仕種に、キューブリックの額に青筋が浮かんだ。

が、瀬流彦はどこ吹く風だ。優男風の見かけと違い、案外胆力のあつてからは色々経験を積み、さらに実力を付けていた。

「学園長がお待ちです」

一方のガンドルフィーニも、瀬流彦を諫めることなく涼しい顔で言った。

そのままキューブリックと護衛は、客間へと案内された。護衛の重騎兵と教師陣は別室で待機し、客間には学園長とキューブリックだけとなる。

「ややこしいことになってきましたね」

瀬流彦はそう言って、ネクタイを緩めた。首元には汗が溜まっっている。

「全くだ……。学園長に任せるほかはないな。我々は下っ端中の下っ端なのだから」

ガンドルフィーニも流石に堪えたのか、缶コーヒーの中身を一気に飲み干した。

「もし、学園長が……飛ばされたら？」

『何を』とは瀬流彦は言わない。わかりきっているからだ。彼ら二人は、人気のない廊下の隅で向かい合っていた。

ガンドルフィーニは、沈痛な面持ちの瀬流彦に缶コーヒーを渡し、低い声で唸った。

「その時は、ネギ君と生徒たちを護るため……戦うこともやむなしだな」

「……連合を敵に回す、と？」

瀬流彦は、あまり驚かなかった。ある程度予想は出来ていたことだ。

元老院が直接乗り込んできては、魔法協会は自治権を失った。虚<sup>ケ</sup>仮にされたも同然だ。こんなことがまかり通つては、それこそ元老院の独裁が比喻でも嫌味でもなく 事実となる。

「厳しい戦いになります。元老院が我々がネギ君を人質にしているとも言えは……連合市民は、こぞつて我々を討つことに是を唱えるでしょう」

「うむ……メルディアナを味方につけたとしても厳しいだろうな」

二人がこんな会話を交わしている時点で、連合に自由が無いことの証明なのだが……そんなことを気にしている余裕は、今の麻帆良に

はない。仮に気にしたとしても、それはもはや動かし難い事実だ。

「ああ、就職先を間違えましたよ」

「全くだ。上を敵に回さなくては、給料ももらえないとはな」

二人が吐いたため息は、缶コーヒーの湯気と混ざって消えていった。

「どっと思っっ？」

「どっっ、とは？」

打って変って女子中等部学生寮のとある一室では、二人の少女が話し合っていた。桜咲<sup>さくらさき</sup>Ⅱ YⅡ 刹那<sup>せつな</sup>とマナⅡ AⅡ YⅡ タツミヤである。

「斬って刻んで焼いた方がいいか？」

「いや、ハチの巢にして竜の餌にする方がいいだろう？」

サクは黒を基調とした袴姿、マナは黒のジャケットを羽織っている。それだけならともかく、二人揃って完全装備だ。サクは夕凧<sup>ゆづかぎ</sup>を腰に

差し、背中には弓矢を装備している。煌月が自作した特製品だ。  
一方でマナは数種類の銃火器を装備し、対戦車銃まで背負っていた。  
おまけに話している内容は、恐ろしいことこの上ない。諭えるなら、  
今から行動に移す革命軍の戦士のような雰囲気纏っている。

それも道理でこの二人、かなり怒っている。怒りすぎて、かえって  
冷静になるくらいだ。

刹那からは静かにするよう言われていたが、これでは輪廻でなくとも  
命令無視して始末したくなる。

「元老院あこいんは、自重じゆうじゆうという言葉を知っているのか？いや、それ以前に  
自治という言葉を知っているのか？」

「魔法学校に高等教育監を乗り込ませるとは……馬鹿か……いや、  
馬鹿の方が兆倍マシだ……」

二人はちゃっかり学園長室に取り付けた盗聴器から流れる声（とい  
うより罵り合い）を聞きながら愚痴愚痴文句を言い合っていた。

「輪廻さんの気持ちが改めてわかったよ……」

夜白輪廻やしろんに思いきり侘びられた夜白やしろ 刹那せつなは、夜白やしろ 煌月くわげつから事前  
に聞いていたこともあって、怒る事も無く輪廻を慰めていた。

サクモマナも、輪廻が刹那に謝罪するのは兎も角、土下座しかねな

い勢いで輪廻が侘びるのは見たことが無かったので、仰天した。

彼女は自分の行動が、とんでもない誤算を生んだ事を後悔していたのだ。

刹那は責めたりせず、輪廻の頭をひたすらに撫でて慰めていた。元々、刹那は事なかれ主義で 家族をもっとも大切にしている。輪廻が自分のためにやったことなら、どんな結果でも受け入れるつもりだった。

もっとも、刹那もある程度は予想できたことだった。あまりにも図に当たりすぎて笑えないのだが。

しかし、サクとマナは知らない。

今回のことで、再び刹那の優しさに触れた輪廻の中で、刹那への想いがさらに膨れ上がっていることに。

それが、ルーレットに新たな玉を投げ込むことに。

「…………お兄ちゃん」

夜白輪廻は、自室のベットに座りながら小さく呟いた。

彼女の中で、もっとも価値のある言葉。ある時から、ひたすら胸に刻み込んでいた言葉だ。



輪廻は虚ろな瞳で窓の外を眺めながら、先日刹那にずっと撫でてもらっていた頭をさすった。その度に、忘れてはならない温もりが彼女の全身を包み込む。

そしてそれ以上に、刹那に迷惑をかけた自分が呪わしい。許し難い。雪ぎ難い。度し難い。

そしてそれ以上に、麻帆良にまで乗り込んだ塵芥チリを殺してやりたくなるが、それは駄目だ。刹那から、静観するよう言われているのだから。

麻帆良  
お兄ちゃんの居場所にまで上がり込んでくるとは。

まるで蛾だ。

美しく、輝かしい誘蛾灯ひかりに誘われてやってきた、愚かで見下げ果てた昆虫。

誘蛾灯ひかりに焼かれるにも拘らず、浅ましい欲望と身分不相応な羨望によつて誘蛾灯ひかりに近づく蛾。

そう思うと、輪廻は不快気に小さく舌を打った。その顔は怒りと憎しみに歪み、決して狂愛する兄には見せない表情を形作っている。

本当に狐火で燃やせれば、どれだけ溜飲が下がることか。

しかし、今は雌伏の時だ。敬愛する兄が実に寛大な事に、愚かな蛾に僅かながらの猶予を与えたのだ。

力を溜めておこう。たっぷりと、じっくりと、確実に処理でき

るように。

輪廻にとって、元老院は塵芥<sup>ゴミ</sup>だ。ゴミとは、対決する存在でも、挑む相手でもない。

駆除し、駆逐し、潰し尽くし、二度と沸き出さないように微塵も残さぬ存在だ。

いざとなればいつでも潰せる。潰せと命令されたなら、即座に駆除にかかるだろう。

輪廻は、スルスルと動く九本の漆黒に染まりきった尻尾を撫でた。

大丈夫だよ、すぐに新しい塵芥を消せるから。

殺気を漲<sup>みなぎ</sup>らせた美しい尻尾は、彼女の心境を表すかのように蠢いていた。

第57幕「阿咩、それは白銀の琴と碧い月／Fiercely・・・Jugate

そろそろ千鶴とか夕奈とかを刹那サイドに絡ませたいなあ……とか思っています。魔法世界にネギ達が行く日は来るのでしょうか。

一応設定資料

紅魔 あかま 晴夜 せいや

性別：男

容姿：紅い髪を短く刈りそろえている。瞳の色は緋色。長身で筋肉質な体型。

備考：男子高等部三年。体育系な容姿と異なり、実際はかなりの頭脳派。携帯型の小型偵察衛星を複数魔力で制御し、偵察や情報収集を行う。メカニックとしても優秀。

? 埜旅 あおのたび 罪信 つみのぶ

性別：男

容姿：蒼の長髪に蒼い瞳。長身。前髪が長いせいで、目が殆ど隠れている。

備考：男子高等部三年。完全記憶能力を持ち、一度見た者は忘れな。特にヒトの顔は瞬時に把握し、記憶できる。また、観察力にも優れており、一目で対象者の身体的特徴は大体把握できる。

みどり みどり グリンヒ グリンヒ 舞 舞 せりつ せりつ とき  
碧 II G II 翠月

性別：女

容姿：緑色の髪をボブカットにしている。瞳の色はエメラルド。小柄で童顔。背も低い。

備考：女子高等部三年。アメリカ人とのハーフ。帰国子女。気配を隠匿する術や、サーモ・グラフィックのように温度を視覚する能力を持つ。？ 禁旅に恋心を持っており、猛烈にアプローチ中。

空螺黄 からぎ 漣一 れんいち

性別：男

容姿：金髪を短めにし、瞳の色は金色。体型は少々肥満型。

備考：男子高等部二年。麻帆良に籍を置く数少ない陰陽師で、式神の遠距離操作術に長けている。式神の視界と自分の視界を共有することができ、それを使ってあらゆる場所へ潜入・偵察できる。

深黒 みくろ 眞帆 まほ

性別：女

容姿：黒髪をツインテールにしている。瞳の色は黒。左目に常に黒い眼帯を付けている。長身で細身。

備考：女子高等部一年。自身の身長を二メートル大から十センチほどまで自在に変えることができる独自の魔法を使う。サイズが変わっても身体能力に変化はない。紅魔とは恋人関係にある。

第58幕「琴線、それは輝く憎悪と呪いの体現」（前書き）

最近、輪廻と刹那の絡みが書けないなーと思って書きました。

学園長と元老院の対談は、実はたいした見せ場もありませんので力ツト。腹の探り合いが罵り合いにエスカレートしていくだけです。

しかも老体同士の口げんかって……見せる要素ゼロですしね。

第58幕「琴線、それは輝く憎悪と呪いの体現」

ぐしゃり、と音と共に、口から血が零れ落ちる。

「……………フウ  
ッ」

やはり、落ち着くには、自分の心臓を握りつぶすのが一番だ。

ちなみに私は体内に複数の“魂”を持つので、心臓が潰れた程度では死なない。それに、瞬時に再生する。が、痛みは感じる。この痛みが、頭を冷やすにはちょうど良い心地良さなのだ。

お兄ちゃんが悲しむ姿を想像しても良いのだが、お兄ちゃんの悲しむ姿は　寧ろ怒りの感情がわき起こることの方が多い。自分で妄想して自分でキレては世話が無いのであまりやらない。

ついでに、細胞に働き掛けて身体の細部を造り変える　よりお兄ちゃんの好みニーズに近いようにより美しくより強く造り替え、身体に力を溜めながら……私は小さく息を吐いた。

口から放たれた呪いと憎悪が込められた息は、すぐに蒼い炎　“狐火”となって昇華する。

私の力は、日々“進化”している。生まれてからは数千世紀、全く変わらなかった力は、お兄ちゃんと出会ってからは急激に　それこそ、昨日の私を瞬殺できるくらい　強くなっていた。

お兄ちゃんへの愛がその原動力となる。私の能力の一つ 『実現』が、無意識に発動していたのだ。強くなること、美しくなることを望み、それが私を“進化”させる。

現に、誕生当初から創造神など比較対象にもならなかった私の力は、その“誕生当初の私”を、雑魚呼ばわりできる程膨れ上がっている。

そして私の“進化”のスピードは歯止めが聞かない。留まることを知らない。

お兄ちゃんへの愛が日々増しているのだから、“進化”のスピードも日々増している。

ちなみに煌月は『実現』の能力は持っていないが、私から見ても凄くと思える程鍛練を重ねていて、日々“進化”を遂げていた。

そして私は毎日、自身の“進化”を自覚しながら生きているのだが……満足したことなど、万が一にもない。お兄ちゃんを護るための力はそれこそ無限だ。あればあるだけ良い。ありすぎて困る事はない。お兄ちゃんという至上の存在を護るためには、力はいくらあっても足りない。

しかし 今、求められている力とはそんな力ではないのだ。

敵を殺す力でも、世界を造り返す力でもない。

“権力” それも、政治的権力を退ける、言論・政治的地位などの“力”だ。

私は、人間の心理や精神などの知識はない。知ろつとも思わなかった。お兄ちゃん以外の存在について、知ろつと思つこと自体が私にとってでは苦痛で不快だった。

組織的なモノの知識に関しても同様だ。お兄ちゃんが誰かの下に就くなど、認められようわけも無い。だから、ずっとお兄ちゃんに無所属であるよう進言した。

が、今は私がそれを放棄した代償により、お兄ちゃんが苦しめられている。お兄ちゃんが気にかけているモノが、貪欲で下賤な獣共の前に引きずり出されようとしている。何という様だ。

何という失態だろう、夜白 輪廻ともあるうものが。

“夜白 輪廻” お兄ちゃんから貰った大切な名前が、泥に塗れてしまうほどの失態。

そう思うと、怒りのあまり叫びそうになる。

猛り狂った想いを鎮めるため、強硬手段を取らざるを得なかった。

九本の尻尾は触れたモノを呪う（比喻ではない）憎悪のオーラを放ちながら、スルスルと蠢いている。先日一本一本お兄ちゃんに撫でてもらい、ようやく落ち着きを取り戻したばかりだというのに。そう思うと、先日の光景が甦ってくる。

必死になって侘びる私に、お兄ちゃんは怒鳴るわけでも諫めるわけでもなく唯、頭と尻尾を撫で続けてくれた。暖かな掌の感触は忘れ難く、私は至極の喜びを我慢せねばならなかった。

それでこの謝罪の念を押し流したい誘惑を堪えつつ、今すぐお兄ちゃんに抱きつきたい衝動を抑えつつ、私はひたすらに詫びた。そうしなければ、自分で自分を殺しそうだった。お兄ちゃんへの想いが暴走しそうだった。



まさか、連中がここまで露骨な手を使ってくるとは思えなかった。突然の暴風によって、私が切った手札は吹き飛んだのだ。短慮な手を使われたが、私自身も短慮だった。予測できなかったのがおかしいくらい単純で、それ故に強力な手札だ。

もつとも、私にかかれれば容易く打ち破れる手札にすぎない、が、お兄ちゃんが私に静観しているよう言った時点で、私はがんじらからめにされた。

そのこと自体は全然構わない。お兄ちゃんによる束縛は、私にとっては快樂だ。

だが、目の前の塵芥チリを処理できないのはなかなかどうしてもどかしい。

ならば、私に出来ることは一つだ。

私は立ち上がると、お兄ちゃんの部屋へと向かった。

ちよつどお兄ちゃんは部屋にいるはずだ。

私は小さくノックし、お兄ちゃんの了承を得てからドアを開けた。

「ああ、輪廻か……」

お兄ちゃんは疲れた表情でベットから起き上がった。髪はぼさぼさだし、顔色も若干悪くなっている。

カツと頭が熱くなるのを自覚するが何とか堪える。意図的に怒りの息を甘い吐息に替え、私はお兄ちゃんにそつと抱きついた。胸に頬ずりして、思う存分甘える。そして、お兄ちゃんを癒す。

私の身体からは、お兄ちゃん限定の癒しオーラが放出される。さらに抱きついたりすることで、私の無限の神力が少しずつ、お兄ちゃんの中へと流れ込むのだ。その神力は、言わば私の分身。お兄ちゃんを中から癒し、疲労や体調不良も回復させる。

私に出来ることは、お兄ちゃんを癒し、支えること。

「り、輪廻」

「大丈夫」

戸惑った様に私を見るお兄ちゃんの頬に舌を這わせ、私は妖艶な仕種でそつと呟いた。

「何も、何も心配いらないよ……お兄ちゃん」

お兄ちゃんはそのような私の頭を撫でてくれる。

「輪廻」

「はい」

私はお兄ちゃんを見つめる。神妙な表情のお兄ちゃんの黒い瞳が、私の顔を映していた。

「消すしか、ないのかもしれない。俺の頭は、そう言っている。だが……連合は、元老院を失っても容易には再生しない。

腐った実を落としても、“根本”が腐っていてはどうにもならないだろう。新しい野心に塗れた者達が元老院に成り代わるだけだ。国の方針はそうそう変わることはない……。 “戦争”でも起こらなければな。

だが、その“戦争”は下らん遊戯だ。傷口が再び開くだけのこと、意味などない。

歴史的意味も、価値も、理念も、誇りも何一つない。全くもって救えない戦争だ」

私はお兄ちゃんに抱きつき、身体と尻尾の柔らかさや暖かさを堪能させながら聞き入っていた。

「馬鹿らしい。関係ない。……そう言つのは簡単だ。が……教師になつてしまった以上、生徒は護らなくてはな」

お兄ちゃんは自嘲気味に微笑む。

その顔を見て、私は胸が痛んだ。

ここでキレルのは簡単だ。外に飛び出して、邪魔者を全て消すのは造作も無いこと。

それこそ、尻尾だけでも出来ることだ。私はここで、お兄ちゃんにひたすらキスを味合わせているうちに終わる。

その間に九本の尻尾が穿ち、殴り、斬り刻み、吹き飛ばす。その程度の些事だ。

だが、私は微笑みを崩さない。今にも歯軋りしそうだが、それでも今は、お兄ちゃんを癒すのが先決。

お兄ちゃんの話に口を挟むような無様な真似を、私がするわけがない。

「……まいったな。俺は、麻帆<sup>こい</sup>良での教師生活が大好きになってしまったようだ」

お兄ちゃんはそう言って頭を掻く。

そんなお兄ちゃんが微笑ましくて、私はにつこりと笑顔を見せた。

「だったら護ってあげる。お兄ちゃんも、お兄ちゃんの麻帆<sup>こい</sup>良も全部全部護ってあげる。そして」

私はお兄ちゃんの耳元に近付き、そつと呟いた。

「それを邪魔する煩わしい塵芥<sup>ちり</sup>は、みんな潰して消してあげる」

「……輪廻は……はは、いつもと同じ、か」

「私は、変わらないよ？」

苦笑するお兄ちゃんに向け、私は上目遣いに小首を傾げた。

「ひたすらにお兄ちゃんだけを愛する天狐<sup>キツネ</sup>。それが私 “夜白輪廻” なのだから」

スツと指を空に走らせる。

途端に、私の指先の軌跡に蒼白い炎が迸った。

その系の様に細長い狐火はうねると、クネクネと動いてそして消える。

「『狐火<sup>きつねび</sup>・炎琴狂<sup>えんきんくるい</sup>』 つと。まったく、余計な手間を……」

この技は攻撃技ではない。

何かというと “支配技” だ。

あの目には見えない程拡散した“狐火”は、対象の頭の中 脳に入り込み、余計な思考だけを消す。

今回の対象、キューブリックとかいった元老院<sup>ヨミ</sup>が自覚していない内

に、私にとって都合の悪い思考だけを焼き尽くす。いつてみれば、“思考だけを焼く炎”。それが『狐火・炎琴狂』だ。

キューブリックだか誰だかはどうでもいいが、その高等教育監は魔法学校の人事を一手に握っている。

つまり、学園長の首を飛ばすこともできる。

が、私としてはそれは困る。

連合　　というより元老院は『夜白家』わたしたちにいい顔をしていないのだ。

学園長の後任に連合でそれなりの地位がある者が赴任してきて、『夜白家』に気付けばどうなるか。体の良い駒が出来たと喜ぶか、疎ましく思うかのどちらかだろう。まったくもって愚かしい。

が、それではお兄ちゃんの居場所がなくなってしまう。

仮に私達に対して中立的でも、木乃香護衛のために来ている私達は受け入れられないだろう。詠春とパイプがある学園長だからこそ、私達はこうして麻帆良にすることができのだから。

だからあの塵芥チユキの思考を誘導　　学園長を首にしようとする思考だけを焼かせてもらおう。

そうすると低脳な塵芥チユキはどれだけ学園長に罵詈雑言を浴びせても、首にするという考えが浮かばない。絶対だ。

ネギ達を如何いかにこうするかについては元老院エロウイン全体の意向だろうから、あの塵芥チユキ一匹の頭を弄りまわしたところでもうにもならない。

つい先程咄嗟に思い付いた技だが、上手くいきそうだ。

憐れな塵芥が。いつの間にもやら支配されてお兄ちゃんの台本の上で踊っている滑稽な姿を、その醜悪で下劣な姿を麻帆良に曝してしまえ。

私はニヤリと笑つと、自室のベットに寝転がった。

「……殺したいなーあ……」

ボソリと呟く。

本当なら、とつくに禁忌に触れた罪を味合わせてやりたいところだが、最近はお兄ちゃんに言わずに独断でやってもあまり良いことにならない。

それに、もうお兄ちゃんは大丈夫だろう。

流石に、お兄ちゃんのお精神が危険な事になってたら、私は怒り狂いながら塵芥に殴りかかっていただろう。

が、今のお兄ちゃんはまだ大丈夫だ。癒してあげれば、まだ追い込められはしない。

そのお兄ちゃんがOKを出さない以上は仕方がない。

「……今は待つ、か……。フッフッフッフッフッフッフッフ……。お兄ちゃんのためなら、輪廻は　私は、どんなことでも耐えてみせる。だから　」

口から小さな蒼白い炎を吐きつつ、私は囁くように言葉を吐いた。

「いつか、ちゃんと殺させてね？」



第58幕「琴線、それは輝く憎悪と呪いの体現」(後書き)

どう展開させていこうか……迷いますね。

取り敢えず、元老院とのいざこざは今回でひとまず決着予定。

御意見、御感想は随時募集しております。

第59幕「沈殿、それは泥草の骸と朽ち果てた生者/Er...Lazy D

今回は少し短めです。

煌月と木乃香の話。

ところで私は勝手に一話5,000文字前後を目安としているのですが、これって長すぎますかね？

もう少し短くした方が……いや、長くしても問題無いんですかね？  
御意見お願いします。

夜白 輪廻がキューブリックの頭を弄り、加えてちよつとした“仕掛”をしておいた頃。

夜白 刹那を守護するもう一人の従者夜白 煌月もまた、独自に動いていた。

天狐と違って麒麟である煌月に、他者を化かす能力も操る能力も無い。

しかし、空気中の“電磁波”や“水分”ですら支配下に置く雷と水の支配者である煌月には、他にもいくらでもやりようがあった。対象を常時監視することもできるが、今回煌月が打った手は少々異なる。

つまり、煌月のもう一つの能力である『絶対選択権』を使い、元老院の政治力が旧世界にまで及ばないように『書き換えた』のである。こうすれば、元老院達は旧世界に強引に触手を伸ばそうという発想が生まれなくなる。さらに仮に伸ばしても、旧世界の人間は拒否するしかできなくなる。

しかも『書き換えられた』内容は、輪廻でも手を加えることができないし、そもそも誰も知覚出来ない。

『絶対選択権』は、麒麟の“白銀種” つまり煌月だけが持つ特殊能力だ。

彼女はこれを駆使すれば、創造神も天狐も支配することができる。もともと、輪廻ならば無意識に抵抗できるかもしれないが。

刹那は抵抗不可だが、事前に準備すれば何とか防げる。

「……………」

“能力”の行使が済んだ煌月は、ソファに座りこんで長い脚を組んだ。ティーカップを口につけ、紅茶を一口飲む。

その表情はいつも通り無表情で、刹那でも彼女の腹の内を探るのは至難の業だ。

しかし、先程まで彼女の心は荒れに荒れていた。彼女自身、元老院の行動（無茶）が予測できなかった事に腸が煮えくり返っていたのである。

それを（何とか）察知できた刹那に慰められて今は落ち着いていたのだが、それでも完全に鎮火はしていない。

煌月はティーカップにコニヤックを一滴足らすと、鬱憤を晴らすかのように一気に飲み干した。

「……………あのー、煌月さん？」

その後ろでは相坂<sup>あらいざか</sup> さよが、給仕のように控えている。現に彼女は割烹着を着込み、さらに三角巾を被っていた。そしてティーポットを両手で抱えている。

「……………何でしょうか？」

いかにも煩わしそうに、煌月はゆっくりとさよを見る。  
さよは苦笑と恐怖がないませの表情を返しながら、小声で諫めるように言う。

「ひ、ひとまず危機は去ったのでしょうか？問題無いじゃないですか」

「危機？」

煌月は、さよが抱えていたティーポットを取って、さよを一瞥した。

「おかしなことを……危機など来ておりません。害虫一匹の襲来など、殴り潰せば済む話……些事に過ぎません。手が汚れるのは非常に癪ですが」

煌月は辛辣に吐き捨てると、再びカップに紅茶を注ぐ。

さよは困ったような顔のため息をつき、心の中で刹那の名を連呼していた。助けを求める意味で。

近衛 このえ 木乃香 このかは笑顔を崩さず、湯呑みを置いて一息吐いた。

額に青筋が浮かび、こめかみがピクピク動いていなければ、万人を和ませる笑みとなっていただろう。

彼女が現在居るのは女子中等部の寮室ではなく、麻帆良中心部にありとある建物の中だった。

そこは表向きは和菓子屋だったが、実態は関西呪術協会の出張所

小さな支部のようなものである。女性を中心とした店員達は全員連絡員兼木乃香の護衛、そして関東魔法協会の監視役だった。

これは麻帆良祭後、悪魔の大量襲撃を理由に近衛このえ 詠春えいしゆんが学園長を説き伏せ、設置させたものだ。無論、表向きでは、開店したばかりの絶品和菓子屋として（主に女生徒の）注目を集めていた。

そのため都合な事に、この建物に木乃香が入ったところで何の疑念も抱かれない。

店員しか入れない様な場所 休憩所みたいな部屋には遮音結果などが敷かれ、部屋の中には何とも優雅な花が花瓶に入って置かれている。豊部屋で、室内は素人が持つわびさびのイメージをそのまま具現化したような感じだ。

もつとも木乃香と向かい合っている店員 女性陰陽師は、今すぐこの部屋から……いや、麻帆良から逃げ出したい誘惑と戦っていたのだが。

「……つまりこういうことかいな……ネギ君を連れて来いと連合のモドロク 耄碌共が騒がしいから、牽制も兼ねてウチの次期長就任を国内外に発表する……と」

「はい」

店の名前が書かれたエプロン姿の女性陰陽師はそう答えた。流れよ  
うとする冷や汗を気力で止め、恐怖におびえる表情を出すのを必死  
に堪えていられるのは訓練の賜物であるう。

もっとも彼女は、まさか女子中学生を前に訓練の成果を出す羽目にな  
るとは夢にも思わなかっただろうが。

近衛 木乃香は近衛 詠春の娘。

それは調べればすぐわかる事だし、隠す必要もない。血統を重んじ  
る関西を始めとした日本国の呪術・宗教結社は、跡継ぎに当代の娘  
や息子が選ばれることなど珍しくはない。  
関西の上層部は概ね賛成しているし、他の組織に首を突っ込まれる  
ような問題ではない。

「……………刑部葵 捷歌さん」

とてつもなく低い声で名前を呼ばれ、女性陰陽師は身体が縮こまる  
のを必死で堪えた。彼女にもプライドくらいある。魑魅魍魎と戦う  
天下の陰陽師が、次期頭首とはいえ中学生の少女相手に震えている  
など笑い話もいいところだ。

「……………“協定”では、ウチは暫くはセツ兄様……………夜白 刹那様」  
夜白家』の教育下・庇護下に入ることになっているはずや……………間  
違いないですよね？」

京都弁が消え、標準日本語が陰陽師の鼓膜を震わす。同時に、声色はますます恐ろしいものになっていく。

「はい」

「……だったらどうして、こんな計画が立案されるんです？」

“計画”　つまり決定事項ではないことを強調しながら、木乃香は怒りと侮蔑が籠った視線を陰陽師に向ける。

「こんな阿婆擦れな計画、御父様ではないですよね？……何処の者です？」

「……申し訳ありません」

連絡員に過ぎない女性陰陽師は、そう言って頭を垂れることしかできない。

「そんなことをすれば、この私の身にさらなる危険が起こるようになるだけ……そして何より」

木乃香はそこで息を止める。静寂が場を支配し、頭を下げた陰陽師の額から汗が垂れる音だけがその場に響いていた。



「夜白 刹那様に御迷惑がかかります」

その言葉に込められたあまりの“重み”に、刑部葵陰陽師はゾツとした。

「関西呪術協会の得難い強力な同盟相手……失くすには惜しすぎます。違いますか？」

「……いえ」

「次期頭首近衛木乃香の名において、本計画は却下します。他に連絡は？」

「ありません」

「ならば退室してください」

「……は」

刑部葵はそう言って、身体の震えを隠すように部屋から出ていった。

「……馬鹿ばかりや」

とてつもなく平坦な声で、木乃香は小さく呟いた。

彼女は盆に載せてあった最中もなかを手に取り、丁寧に包みを開く。いかにも教養が高そうな雰囲気醸し出す大和撫子な少女は、上品なポーズで最中を口に運んだ。

はむはむと口を動かしながら、木乃香は考え込む。

どうも西には早急というか、血の気が多い連中が未だにいるらしい。恐らく若手、それも下っ端の独断だろう。若いとはいえ各流派のトップは、血の気が多かるうが戦闘狂だろうがこんな手は取らないし、そもそも詠春を無視するわけがない。

そして詠春が、木乃香を曝し者にするような提案を飲むわけがない。私情を抜きにしても、今木乃香の存在（と次期頭首就任）を宣伝することは愚策だ。

そもそも現在の自分はまだ若輩。鍛えているとはいえ（トンデモない才能のせいもあり、メキメキ力をつけているとはいえ）まだ表に出るべきではない。

何より、それが刹那の意志だった。

「セツ兄様の想いを、崩すわけにはいかへん」

木乃香は自分に言い聞かせるように呟いた。

小さい頃から、彼の事を想ってきた。

彼の正体も本来の役割を知っても、その想いに揺らぎなどない。彼に添い遂げる事が敵わなくとも、親友の娘としか思われていなくとも。表に出せない間柄であろうとも、中途半端な主従関係しか結べなくとも。

この感情は、彼以外に抱いた事などない。いや、抱いてはならない。

「……セツ兄様」

言葉にする。近衛木乃香にとって、自分や父親以上に特別な名前。

「……ウチは、セツ兄様の……想いに、応えるんや」

その“想い”が、自分の妄想の産物だとしても、仮初のものだとしても。

それを邪魔することは……許さへん。

くしゃ、と小さいが歪な音が響いた。

桜色の最中の包みが、木乃香の握力で潰された音だった。



第59幕「沈殿、それは泥草の骸と朽ち果てた生者/Er...Lazy D...

ところで、番外編も兼ねて別作品の話を一、二話くらい書いてみようかなと思っっているのですが、候補がまったく上がらない状態です……。

考えているのは、『<sup>ドクターズ</sup>娘達』が「リリカルなのは」の世界で暴れまくるくらいで……。

何かアイディアがあたりでしたら、どんどん教えてください。

御意見や御感想は随時募集しております。

第60幕「昇華、それは熟れ過ぎた知略と病のリキユール」(前書き)

今回、さらに短めです。申し訳ありません。

番外編どうしましょうか……。ていうか、ようやく本編が進み始めましたよ、グダグダで済みません。

第60幕「昇華、それは熟れ過ぎた知略と病のリキユール」

「何、ウェールズに行くത്？」

学園長が片眉をひそめる。そんな些細な仕種にすらイラツとしてしまうのは、たぶんまだ感情が高ぶっているからだろう。

お兄ちゃんの申し出を否定するのは勿論、聞き返すのすら許されることではない。本音を言うと“些細な”で済ましたくないのだが、そんなことでイチイチ頭が沸騰してはこっちの我慢がもたないから仕方が無い。

「はい」

お兄ちゃんは小さく頷く。

「スプリングフィールド先生らの一団は、全員3・A生徒で構成されています。担任の私が、事前に挨拶に行くのが筋かと」

「それは……先方に釘をさす……という意味かろう？」

「ええ。ウェールズ……特にスプリングフィールド先生の従姉、ネカネ「スプリングフィールドさんとは個人的にもツテがあります。彼女が説得に回れば問題は無いでしょう」

「ほっ?」

学園長が興味深げにお兄ちゃんを見る。

「失礼じゃが、どういったものかのう?」

「プライベートです。ああ、恋愛関係ではありませんよ? 以前お会いして、少し話を交わした程度です」

そう言ってお兄ちゃんは、珍しく肩をすくめておどけて見せた。可愛げのある仕種に、思わず口元が上がりそうになる。

ネカネネスプリングフィールド。

ドが付く過保護だが、それ以外は、極めて聡明な少女だ。以前、私達が『夜白家』の仕事でウェールズにお邪魔した時にお世話になり、その後もちよくちよく連絡を取っていた。

お兄ちゃんは御礼に彼女に手製の魔法具やらオリジナル術式やらを幾つか渡していた。礼儀正しい少女で、珍しく私もすぐに気を許した女でもある。

お兄ちゃんにはそれなりに気があるようで、相談を持ちかけていたり雑談していたりしていた(通信でだが)。サクやマナが不機嫌になったのも懐かしい思い出。もっとも当のネカネネはよく出来た

他者に嫌悪感を与えないといった意味で 人物だった。



最近は会っていないし連絡も交わしていないが、そろそろ良い年になっっているだろう。最後に会ったのは……そう、四、五年前くらいだと思う。

ちなみに私達がウエールズに行つたときは、ネギはメルディアナに籠りきりだつたから会っていない。多分ネカネもネギに話してないだろう。ネギは私達の事を知らなかつたし。

ちなみにネカネは連合側で私達の事を知っている数少ない人間だ。『それがどうした』と言わんばかりに、お兄ちゃんにベタ惚れ……だつたと思う。人間の心の内はよくわからないが、あれは“羨望”ではなく“恋心”だつた……気がする。あれだ、乙女の勘だ。

というか、彼女はとても純粹でネギを思う気持ちにもお兄ちゃんを想う気持ちにも邪念や思惑が一切ないのだ。簡単に言うと、不自然なまでに悪気が無い。当人は自覚していないだろうけど。

「彼らがウエールズに行く事は最早確定でしょう。それならば、せめて保険は掛けておこうかと」

「成程のう。行くのは刹那君だけかの？」

「自分と輪廻、そして煌月です」

「ふむ……」

学園長は小さく唸つた。実力の高い者が三人も（一時的にとはいえ）へるわけで、当然喜べはしないだろう。……即答でお兄ちゃんに従

わなないことに苛々するが。

「何も夏休み中其処にいるとは言いません、教員としての仕事もありませんし……。スプリングフィールド一行及びその周辺に危険が無い判断すれば、直ちに麻帆良に帰還いたしましょう。」

ちなみに詠春殿には、すでに許可を頂いております。一時とはいえ、木乃香嬢の護りが少々減ってしまいましたが……。疎かになるわけではありませんので、ご心配なく。」

そこまで言ってお兄ちゃんは、付け加えるように言った。

「それと、いざとなれば桜咲とタツミヤを動かせるよう、許可を願いたい。」

「……まあ、最近は襲撃も減っておるし、問題はなにか……。あ  
いわかった、許可しよう。」

その言葉に、私達は揃って一礼した。

今回の件で、お兄ちゃんは一つの懸念を持っていた。すなわち“ネギ達がウェールズにいる間、元老院が何らかのアクションを起こさないか”  
といったところだ。

麻帆良が駄目ならメルディアナ……下賤な塵芥らしい、実に短絡な思考回路だ。幼稚園児の戯れでも造れそうな思考回路しか持てない塵芥共に、一杯喰わされるのはもう御免だ。

煌月が封じたそうだが、それでも不安は残る。

別に煌月を信頼していないとかそういう意味ではなく、煌月が封じたのは“政治力”だけだ。“武力”は違う。

煌月の『絶対選択権』にも弱点はある。それは“同じ対象に複数の『選択』ができない”ことだ。つまり政治力による介入を禁じたら、武力による介入を禁じられなくなる。強力だが使い勝手は結構悪いのだ。

勿論そんなことは煌月も自覚しているから、今回の案にあっさり了承した。

もつとも私にも煌月にも、お兄ちゃんの提案を拒否する理由などない。

麻帆良にはサク達が残る。彼女達は木乃香の護衛と教育を担当してもらうと同時に、いざとなればいつでも呼べるようにしてある。

要するに、万全の態勢だ。

そんなこんなで、私達はウェールズに行くために準備をしている。ネギ達よりも一足早く向かうつもりだ。

勿論正規のルートで　つまり転移とかはしないで　航空便で行く。突然現れて変に警戒されたくない。

サク達に見送られ、私達は空港へと向かった。

第60幕「昇華、それは熟れ過ぎた知略と病のリキユール」（後書き）

モン○ンプレイ時には、取り敢えずキリン装備の完成を目指している  
皐月二八です。

最近HPの開設を密かに検討中。機械に弱すぎる私にとっては鬼門  
です。  
ですがちょっと興味あります。いつか本当に開設するかもしれませ  
ん。

第61幕「遠隔、それは首と指の磔/Panic・・・Not Disorder

ヒダリキキ様とコラボしていただくことになりました。

詳細はヒダリキキ様の『とりあえず最強になってみた。』までどうぞ。

識者の知る通り、イギリスは連合王国 すなわち複数の国で構成されている。グレートブリテン島の南西に位置するウェールズも、イギリス構成国の一つである。

ついでに言うと、ウェールズはその面積の二〇パーセント程が国立公園に指定されている。自然豊かな所なのだ。

かつてはケルト人が国を成したここは、古くはケルト魔術、現代では西洋魔法が（“裏”で）盛んになっている。“西洋魔法”と呼ばれるからには発祥の地は西洋であり、それはごくごく自然な事だ。

しかし、今では良い意味でも悪い意味でも魔法は隔離され、魔法使いはほとんど一般人とは（地理的に）隔絶された世界で暮らしている。

ネカネ「スプリングフィールドが暮らす村も、その一つだ。

嘗ての悪魔襲撃で打撃を受けたものの、“謎の男”によって石化された住民はほとんどが治療されている。もつとも完全回復とはいかず、未だにより静かで安全なところ つまり（“表”にとつては）秘境 でのんびり療養中だ。この場合、“療養”とは空気中の魔力を吸収するなどする自然療養を意味する。

治癒系の魔法使いは稀少だし、治療薬も相応のコストがかかる。元より、都会とはいえない良く言えば長閑な、悪く言えばさびれた村だ。住人の大半を治療する金などない。

そしてネカネを含む生き残りその後から移住して来た者で、この村は

細々と成り立っている。

ネカネニスプリングフィールドはネギニスプリングフィールドの従姉にあたる。彼女は天性の優しさと世話焼きで、以前村を訪れた夜や白しろ 刹那せつな以下『夜白家』の面々を色々世話し、そして礼も兼ねて刹那達の訓練や雑談相手となっていた。文通友達　といったところだろう。

そんな彼女の元に、久しぶりに夜白　刹那の名が書かれた手紙が届いた。

速達　それも文字通りの意味での“超・速達”の手紙を一目見るや、ネカネは慌てて封を切った。唯の挨拶なら普通に出せば良い。

刹那の事をよく知るネカネとしては、刹那が些事で速達など出さない事はわかっていた。

おまけに刹那が寄越したのは、魔法世界では広く売られている秘匿プライベート用の魔法手紙だ。これは普通の手紙より些いさか値が張るが、宛て名に書かれた人間しか読む事が出来ない……それ以外の人間が呼んでも言語も文法もしつちやかめつちやかの文章にしか見えないという魔法がかけられている。

術式自体は単純だし手紙も広く流通しているので、秘匿度はそれほど大きくない。精々学生がラブレターに使うくらいである。が、無いよりはマシだ。

「え？　せ、刹那さんがこちらに!？」



彼女は自分一人しかいない室内で素っ頓狂な叫びをあげると、慌てて丁寧な筆記体で書かれた英語の文章を目で追った。

「朝一の便で向かうって……ええと、日本国の位置は……あれ？  
日本国での朝一ってえことは……」

ネカネの頭は暗算できる態勢を整えるが、彼女はすぐにそれを放棄する。今はそんな時間が惜しい。どっちみち、二日や三日もかからないことは確かだ。

ウェールズにはカーディフ国際空港がある。カーディフ城ら歴史的建造物と近代建築が共存する湾岸商業都市カーディフにある、ウェールズ最大の空港だ。

手紙には、そこに到着予定だと記されている。

ネカネ「スプリングフィールドは、夜白 刹那に好意を抱いていた。ネカネ自身は憧れと恋心の間のようなものだと思っっているが、傍から見れば大マジ 俗に言う“ベタ惚れ”というやつ である。

出迎え、という選択肢が浮かぶも、それなら家を掃除して温かいスープでも作って歓迎の用意でもすべきではないか。

そんな思考が浮かび上がる。刹那がウェールズにやって来るのは今回が初めてではない。地理は把握しているはずだ。

それに刹那がこれ程急に渡英してくるのは、それだけで、ネカネの危機感に火を付けるのには、十分な効力があつた。唯事ではない。

でも、刹那さん達なら転移術で来れるはず……。それほど緊急ではない？ それとも、此方に気を使った？

生憎ネカネが受け取った手紙には、詳しい用件までは書かれていない。

加えてこの時のネカネは、従弟の少年と敬愛する青年が同じ職場で働く同僚同士だという事も、ネギ達がウェールズに来る気満々であることも知らない。

ネギからちよくちよく手紙を貰ってはいたが、そこには刹那のことは書かれていなかった。いや、書かれてはいたのだが、刹那達の名前までは書かれていなかった。

ネギもまた、ネカネが刹那と知り合いだということを知らなかったから無理もないが。

数秒首を捻り続けたネカネは、ポンと膝を打ち、

「そうか！……これが日本国（ジャパン）の慣用句、（メイク・ヘイスト・スローウイ）“急がば回れ”ね！」

少々ズレた結論に至ったのだった。

「……久しいなあ、ウエールズも」

「そうだね、お兄ちゃん」

「はい、刹那様」

ネカネが家で大人しく準備してしようという結論に至ってから数時間後、幾度か乗り継いでカーディフ国際空港に到着した刹那達は其処らへんの日本人旅行者と同じように……とは言い難い格好、刹那と夜白やしろ 煌月くわげつは黒を基調としたスーツ、夜白やしろ 輪廻りんねはいつも通りの漆黒のドレスと黒い帽子姿でネカネ達のいる村へと歩を進めていった。

『存在希薄』のオーラを展開しているため、無駄に注目されることはない。

「観光でもしたい所だが……そうもいつていられないしな、さっさと済ませてしまおう。ネカネさんにも御迷惑になるしなあ」

「お兄ちゃんが観光したいって言うならさせてあげるよ？ 邪魔者を消し飛ばすか……時間を止めようか？」

自分の腕に抱きつき微笑む妹を見て、刹那は薄く笑う。

「それには及ばないだろう……。煌月、まさかとは思っけど……見

つかってないよな？」

「はい」

そんな仲の良い兄妹の一步後ろを超然と歩く煌月は、刹那を見つめて小さく首肯した。

「連合を含む何れの組織或いは個人からの追跡乃至監視は、今のところ確認できておりません。喻え沸いて出たとしても、確認次第“駆除”する用意はできております」

淀みなく答える煌月に苦笑しながら、刹那は『有難う』と返した。

煌月は周囲の“水分”に視神経などを接続させ、言うなれば強力な“感知網”<sup>センサ</sup>を構築していた。そして目標が現れば、水分を見えない刃に再構成し、目標の首を刎ねる用意もしていたのである。

「すでにウエールズに、連中の手先が潜んでいるかもしれない……。注意するに越したことはないだろう。最悪、ネカネさんに危害が及ぶ可能性すらある」

「卓見です。彼女も“守護”対象としましょうか？」

「頼むよ、煌月」

「承りました」

煌月は再び首肯する。勿論刹那は煌月に全幅の信頼を寄せているので、具体的に如何どうこうするのかを尋ねたりしない。そして煌月も、命令された以上は唯実行するのみだ。

その頃。家の中を一通り片付け、料理の下ごしらえも済んだネカネは、高揚する気分を抑えるためにも散歩に出ていた。

以前悪魔襲撃の際、ネカネはネギを庇って両足を失いかけたが、たまたま訪れていた夜白刹那（珍しく輪廻や煌月は連れていなかった）の能力『調和』ハイモニーによって事無きを得ていた。

石化の呪いとネカネの足が“調和”され、彼女の足の一部分となったのである。

御蔭でネカネは、半身不随になるところか脚力大幅アップを果たしている。加えて刹那が以前教え込んだ護身術もあってかなり身体能力が高い。肉体強化の術を使えば鬼に金棒となる。

刹那さんが来るのは、きっと想定外の事が起こったから……。  
久しぶりに会えるからといって、浮かれているわけにもいかないわ。

ネカネは自身に言い聞かせ、ひどく真剣な表情　喜びを抑えきれ

ないのか、半分笑っているが　で歩いていた。傍から見ればまさに“恋する乙女”なのだが、幸か不幸か当の本人は気付いていない。  
ひとけ人気の無い場所まで来て、ネカネは突如固まった。

背後に人の気配を感じ取る。

懐の短刀に手を伸ばし、ネカネは勢いよく振り返った。同時に後ろに飛び退く。

バチンツ！と衝突音が響く。先程までネカネが立っていた地面に、電気を纏った輝くモノが衝突し、周囲に稲妻を進させる。

『魔法の射手』の『雷の1矢』だ。初歩中の初歩術だが、生身に当たればタダでは済まない。

「……………」

そして、又ツと誰かが現れた。黒ずくめの格好をしている。仮面で表情は窺えないが、どう見ても友好的ではないオーラを放っている。

「……………」

ネカネもまた、一瞬で思考を切り替える。折り畳み式の携帯式杖を素早く装備し、構えを取る。ネカネは格闘技に精通していると同時に、本業である魔法使いもこなせる。

じりじりと距離を取りつつ、ネカネは詠唱を開始する。話し合いな

ど、最初から選択肢にない。それ程楽観的な思考は持ち合わせていないつもりだ。

が、それより早く、仮面男の首が落ちた。噴水のように血が噴き上がる。

「これは……」

血を被らないように離れながら、ネカネは男の遺体をまじまじと眺める。

突然落とされた首。そして、微かに残る水気。

「煌月さんか……成程、ここも射程範囲なのね」

感心したように呟き、ネカネは杖を仕舞う。そして小声で礼を言って、その場を後にしたのだった。

ちなみにネカネは脚力が凄いことになっており、接近戦では蹴り技が唸るという設定。

本作における悪魔襲撃事件は

悪魔襲来以前から刹那はネカネやスタン翁らと面識あり。

? 悪魔襲来（時期・詳細は原作と変化なし）。

? ネカネらがネギを庇う。

? ナギ登場、悪魔撃退。ネギに杖を託す。

? 数時間後、刹那が（単独で）ネカネを訪ねる。その時に事情を聞いて『ハイモリ調和』や『閉鎖の神眼』で村人を治療。ネギは寝込んでいたため詳細を知らず。スタン翁やアーニヤの母も治療される。その時にメルディアナ校長ら村・魔法学校の知識人らとも面識ができる。

? 治療されるも完全回復とはいかず、遠い秘境で自然療養するため（そして連合からの追及を避けるため）患者らが移住。この中にはスタン翁やアーニヤ母も含まれる。

? 連合、詳細を聞いて村人達に事情を聞くが知らぬ存ぜぬでつつばねられる。連合は自分達の手柄と盛んに宣伝するもあり効果無し。同時に連合は密かに刹那を手配するも、顔も名前も知る事が出来なかったためまったくの無意味。



という筋書きになっております。

ネカネは刹那達に鍛えられているので、かなり強い（タカミチクラス）です。

あくまで本作の独自設定なので、あまり突っ込まないで頂けると嬉しいです。

**娘達編第2幕「夜白硯璃の脳内環境」(前書き)**

今回は次回作の主人公(予定)の、硯璃の過去編です。

最近、ウチの一番のヤンデレはこのコじゃあないかと思いはじめました。

娘達編第2幕「夜白硯璃の脳内環境」

わたくしは、創られた存在。  
わたくしは、弄られた存在。  
わたくしは、愛された存在。

わたくしは。

どこかの世界の未来の話。

そこにある不思議な建物のとある一室で、一人の女性が、部屋の整理をしていた。

ライトブルー  
縹色の軍服風コスチュームに身を包み、純白の長髪を揺らす少女の名は夜白やしろ 硯璃すずり。

『ドーターズ娘達』の長女にして、愛すべき父親、夜白やしろ 刹那せつなに忠誠を誓っている神工生命体の美少女である。

「……あら、これは……？」

硯璃はデスクの引き出しの奥から、古ぼけたキャンパスノートを発見した。

「……懐かしいですね」

白神少女は瑠璃色ラピスラズリの瞳を細めると、顔を綻ばせた。

壁掛け時計を一瞥するが、まだまだ時間には余裕がある。

硯璃は適当な場所に腰を下すと、ノートのページを捲ったのだった。

わたくしは、御父様によって生み出されました。

始めは生体ポットの中から、わたくしを見て微笑んでくれる御父様が目に入りました。

神力をポットに注ぎ込み、真剣な表情で計器を見つめる御父様の御姿を、わたくしはずっと見つめていました。

悪戦苦闘する御父様を見るたびに、胸が痛みました。

無力な自分を呪い、御父様の迷惑となった自身を恨み、それでも頑張っている御父様の御姿を、ひたすら胸に刻みつけました。

稼働直後も、わたくしは寝たきりと、御父様の腕の中で抱かれていますのを繰り返しました。あの頃のわたくしは、人間の赤ん坊と大差ない姿でした。

わたくしには様々な機能が逐次追加されました。

その度に御父様は嬉しそうにそれを教えて下さり、頭を撫でてくれました。

「娘が出来たぞ！」

御父様はそう言って、わたくしを抱きしめてくれました。  
その度に、自身の幸せを噛みしめたのです。

しかし、それからのわたくしの日々は 恐ろしく苦痛でした。

ただ、御父様のためになりたい。

そう思い、必死に勉強しました。

術式・学問・体術・神術・世界管理 何でも学びました。

ですが、わたくしはプロトタイプ試作品。

御父様の、初の作品です。

よって……不具合が多発しました。

御父様は何度も申し訳なさそうに謝って、わたくしを慰めてくれました。

しかし、それがわたくしにはかえって苦痛でした。

わたくしは、何？

御父様を補佐するために造られた『ドクターズ娘達』の一番目。



の厳しい叱責でした。

「なぜ、自分を殺すよう命じたんだッ！！」

生まれて初めて、わたくしは怒られました。

怖かった。

御父様の怒った顔は勿論 自分が捨てられるのが、不良品となるのが一番怖かったです。

ですが、御父様は、涙を浮かべながらわたくしを抱き上げてくれました。

そして、わたくしもまた、生まれて初めて、泣きました。

泣いて、謝り続けました。

それから、何も恐れなくなりました。

わたくしは御父様に創られ、御父様の手により強化され、そして御父様に愛された存在なのです。

どこまでも、御父様に依存しきったこの身体。





少女は小さく呟き、ノートをデスクの上に置いた。

そして、身なりを整え、外へと向かう。

ノートの表紙には、丁寧な筆文字で、『御父様』とだけ書かれていた。

その言葉が、彼女の全てなのだから。

娘達編第2幕「夜白硯璃の脳内環境」(後書き)

『カレカノ・ライフ』の更新を優先させるため、本作の更新スペースは下がるかもしれませんが、完結にはもっていきますのでよろしくお願いします。

御意見や御感想をお待ちしています。

第62幕「来訪、それは途切れた五線譜 / Came . . . Smashed B

今回、今までスポットが当たっていなかったタカミチがついに活躍  
……しませんね。どうしてこうなった……。

新オリキャラ出す気なんてなかったのに……。

時間は、ネカネニスプリングフィールドが、外に出ていく少し前まで遡る。さかのぼ

場所はネカネの住む家、いや村からずっと離れた山奥。登山コースからもずれ、山菜取りか猟師でもなければ入らないような場所だ。

その空気が、静かに揺れた。

そして直後、突風、稲妻、豪雨。そんな悪い気象を一緒くたにした様な“気象”が巻き起こった。

しかし不思議なことに、音は一切発生していない。

そして、それも三秒とかからず消滅する。

普段通りの山の中の光景が戻りつつも、そこには、先程までは存在していなかったモノが居た。

それは、少女だった。

髪は黒く、後ろで束ねている。瞳の色は右目は髪色と同じく黒だが、左目は青天の様な青色だった。肌は白い。前髪を、水色のヘアピンで留めている。

身体はスレンダーで、身長は140センチ程。小柄の部類に入る少女である。

服装は藍色のブラウスにストライプのスカート。

日本の女子中学生の制服に見えない事も無い。

「ふふ、やってこれましたね」

少女は小声で呟くと、キョロキョロと辺りを見渡した。

「ばー いや、硯<sup>すずり</sup>姉様に見つかるのも時間の問題ですし……迅速に動きませんと」

少女は小首を傾げ、何かに集中するように目を閉じた。

数秒後に目を開け、

「あつちですか」

口元に笑みを浮かべながら、少女は歩きだした。

その頃、タカミチ<sup>II</sup> <sup>II</sup>高畑<sup>たかはた</sup>教諭もまた、夜白<sup>やしろ</sup> 刹那<sup>せつな</sup>より一足早くウェールズに来ていた。といつても、彼は刹那達がウェールズに向かっている事も、何も聞いていない。いつも通りの出張の行き先が、たまたまウェールズだっただけの話である。

タカミチは任務を終え、ウェールズの街中を歩きながら、ホテルへと向かっていた。

ふと、彼の視線に一組の男女が飛び込んできた。

カップルかと思ったが、寧ろ兄弟と言った方がしっくりくる。片方はイギリス人らしい青年で、もう一人は東洋系の少女だった。しかし、聞こえてくる会話はイギリス英語だ。

おや？

タカミチはふと違和感を覚えた。  
何かがおかしい。

暫くさり気無く男女を観察していて、気付いた。

少女がおかしいのだ。

服装は　まるで中学校の制服の様だし、髪は黒いから目立っている。が、だからと言って不審でもない。  
ウェールズは観光名所でもある。東洋人がいたって、別段おかしくも無い。

だが、その笑顔が　不自然なのだ。

仮初、対外的、社交辞令　どれにも当てはまらない。  
が、絶対に本心の笑みでもない。

そんな笑いだった。

暫くして、少女は青年から、メモと本を渡された。

よく見ると、メモには手書きで地図の様なものが書かれている。そして本は、小型サイズだがどうやらパンフレットか何からしい。

ああ、道を教わっていたのか。

少し合点が言ったが、それでもまだ違和感は拭えない。

タカミチは一瞬考え込んだが、すぐに決断して、さり気無く歩きだした少女の後を追った。

少女は、ひとけ人気の無い路地に行き、メモとパンフレットを見つめる。

そのメモとパンフレットは少女の手を離れ、地に落ち

「なっ!?!」

踏み潰された。

少女は、何度も踏む。踏みつけ、踏み躪り、音が響く程に何度も何度も繰り返した。

「何を」

タカミチは何も考えずに、ほぼ反射的に飛び出し、少女に問いかけた。

少女はポケットからハンカチを出し、まるで汚れを拭つかのよう仕種で手を拭いていた。

その表情は、嫌悪感や不快感に歪められている。

「……あら？」

少女はようやくタカミチに気付いたのか、冷めた目を彼に向けた。

「……何を、しているんだ？」

「何って、“消毒”ですが」

少女は事も無げに言うと、タカミチの方に身体を向ける。

「消毒、だって……？」

一方、タカミチは混乱する。

目の前の少女はどこかおかしい。



表情は冷めていて、鉛のようだ。それだけでなく、口調も大人びていや、冷めている。

スカートから伸びる白い足は相変わらず、最早ボロボロになったメモとパンフレットを踏み躪っている。

そして何より　隙が無い。

タカミチは武人だ。

彼は魔法使いとしては落ちこぼれであるが、それを武術でカバーしている。

故に、彼は魔法世界でも有名な実力者なのだ。

そんな彼だからこそわかる。

目の前にいる少女は、いつでもタカミチを殺せるし、タカミチから逃げられる。

有り得ない。

そう現実逃避したくなる自分の脳に鞭を打ち、タカミチは煙草を取り出した。それを啜える。

「君は、何を」

「汚らしい」

彼が紫煙と一緒に吐き出した言葉は、少女の冷淡な声によってかき消えた。

瞬間、突風が巻き起こり、紫煙と煙草が吹き飛んだ。

「ぐっ!？」

タカミチは慌てて身構える。

が、あくまで軽い突風だったので、彼は吹き飛ばされずに済んだ。  
……煙草を一本失っただけである。

「そんなもの煙草、私にかけないでくれませんか？」

少女は冷めた目で、高畑を捉えた。黒と青のオッドアイに射抜かれ、タカミチは警戒を最大限にまであげる。

風系統の『武装解除』……いや、違う……!？

伊達に魔法使い相手に拳のみで挑んではない。

タカミチは対策のため、魔法に関する知識も経験も豊富であった。

が、今回ばかりは相手が悪かった。

何しろ少女の使う術は、“魔法”ではなく、“神力”という魔法使いにとつては大部分が存在すら知らない、未知のエネルギーを使って発動した“能力”なのだから。

「……汚らわしいですね」

そんなタカミチの心境など知った事ではないのだろう、少女は小声で呟く。

「この私は、父様の手によって生まれました」

淡々と、ご高閲を述べるわけでも、誇張するわけでもなく、少女は“事実”を告げる。

「この服は、父様から頂いたもの。ヘアピンから靴までも、そうです。そして」

少女は一息つく。

「私の身体に入るモノも、全て、父様から頂くものです。食べ物、飲み物、空気、何もかも、そうです。」

私の身体を構成するモノは、全て父様のモノでなければいけないのです。

それだけでなく、私が頂くモノ、紙一枚からペン一本、全て、父様から頂かなくてはならないのです」

少女は、汚らわしいものを見つめるかのような目で、未だに少女に蹂躪されているもの、そしてタカミチを見つめた。

「ですので、こんな何処の馬の骨とも知れぬ男から押し付けられたものも、貴方如きの吐いた煙も息も、私に触れることすら許されません」

そこまで言って、少女は面白そうにカラカラと笑った。但し、目は全く笑っていない。

「ですので普段は、父様の周囲の空気だけを創り出してそれを吸っていますし、他のモノに触れる時は薄い空気の膜を張っているのですが……不快感は軽減されません。よって 消毒です」

少女がそこまで言って、タカミチは瞬時に距離を取ろうとしたが全てが遅すぎた。

「……………ぐあッ!！」

気付いた時、タカミチは身体を炎に焼かれ、崩れ落ちていた。が、すぐに炎は消える。

すでにメモとパンフレットも燃えていたが、そんなことは現在進行形で全身の火傷の苦痛に耐えねばならないタカミチにとっては、最早どうでも良いことだった。

「……おっと、殺すのはマズイでした。私が殺すのは……コレではありませんでしたね」

そんな声が聞こえたと思った直後、タカミチの全身を何か包み込んだ。

「ふふ。軽い消毒も終わりましたし……。それにしても先程の馬の骨、聞いてもいないのにぺらぺらと喋くつて勝手に道案内してパンフレットを寄こして……はあ、しょうもない連中ですね。人間は」

倒れたタカミチを放置し、少女の瞳は剣呑な光を放つ。  
が、すぐに首を振った。

「いえ、今は父様に会う事の方が先決ですね。……ウェールズでしたっけ？  
この辺りに近付いている事は確かです」

そう言つて、ブラウス姿の少女は歩きだした。

「父様、夜白 照雨が、今参りますよ」



第62幕「来訪、それは途切れた五線譜／C a m e . . . S m a s h e d B o

照雨の正体は……まあ、わかると思いますが。

彼女もまた、輪廻達とはちょっと違うヤンデレです。

幕間みたいなものです。

本作、あまり出番が無いコンビの話。

といっても、片方しか喋りませんが。



連合と連合傘下の魔法組織の繋がりには、薄いとはいえ確かに存在する。

例えば麻帆良の魔法職員・魔法生徒には、現地（日本）出身者が多勢を占めているが、中には、連合出身の者（ガンドルフイーニ教諭やタカミチ＝T＝高畑教諭）もいる。

麻帆良における裏側の人間は、大抵が現場責任者（学園長）の独自裁量で賄われる。つまり、志願した者、或いは学園側が直接引き抜き・スカウトを行い確保する。

どんな人間をどれ程採用するかまでは、連合の旧世界人事監もノータッチだ。彼らが任命する者は、各々の組織のトップのみ。

もつとも、麻帆良所属と言う事は、自動的に連合所属にもなるのだが。

だから、本人には麻帆良所属のつもりでも、連合に派遣される事も多い。

所詮、麻帆良は連合の下部組織だ。強権には逆らえないのである。

その目的は様々だ。

修行だの、上との顔見せだの、或いは単なる戦力の引き抜きだの。

今回、高音＝D＝グッドマンと佐倉 愛衣の二人が連合に派遣されたのは、表向きは“夏季限定短期修行”ということになっていたが、そんな事は単なる建前だ。

実際は、半減したメガロメセンブリアの戦力補充。若いながら、“期待の新人”である二人を、一時的に引き抜いたのだ。

高音と愛衣は、そのことをよく理解していた。

不満があると言えはあるが、高音は元より実直で正義感が強く、愛衣も心優しい少女である。

それに、教員が（夏休み中だけとはいえ）引き抜かれる方が、学園としては痛手である。

要するに、二人が派遣されたという事実は、連合と麻帆良の激しい“人取り合戦”の産物だった。

もつとぎつくばらんと言つと、高音達二人は、体の良い“スケープ・ゴート”<sup>ニエ</sup>とされたのだ。

不満にならない方が、どうかしている。

が、連合の戦力半減が治安の悪化を招き、市民が怯えているのも（言いすぎかもしれないが）事実であり、断るわけにもいかない。

魔法使いと言つ立場上の面目もあるし、何より高音の正義感が許さなかった。

こうなるともう、高音の従者である愛衣は、心中で、主の愚直なまでの真つ直ぐさを呪う他ない。

第一、今回の派遣は学園からの指示 “強制”だ。一女子中学生の愛衣が止めたところで、どうにかなる話でもない。

彼女らの監督を担当する、ガンドルフイーニ教諭は反対していたが……魔法教師ほぼ全員から懇願されては、頑固黒人教師も分が悪かった。

それに高音達二人が、（生徒の中では）高い実力を持つコンビである事もまた事実だったからだ。

他の生徒を派遣しようにも、『夜白家』のメンバーは問題外として、実力がありすぎる者も引き抜かせるわけにはいかないし、実力が低い者や新人を送っても、死に行かすようなものだ。

それに問題児や新任を送るのも、麻帆良の品位を落とす要因にもなる。「下らない」と言われようが、組織において、周囲の批評は大事なのだ。

はっきり言うと、高音達以外の“妥協点”（適役）がいなかったのだ。

これを悟った時、愛衣は、心の中で涙を流した。

こんな理由（消去法）での派遣を、“名誉”だと誇れる程、彼女はポジティブ思考ではなかった。

さて、此の二人　というより、佐倉　愛衣の不幸はまだ続く。

この年が、彼女にとって“厄年”となるのも確定事項だろう。

魔法使いの主従は、当たり前だが、常にコンビ（所謂“二人組”ツーマンセル）で任務に従事するのが、魔法使いの常道だ。

が、それはコンビでのみ、或いは分隊スコートロンブラートン、小隊などの小規模部隊での話だ。

より巨大な中規模、或いは大規模な部隊にもなると、前衛は前衛、後衛は後衛で纏められ、前衛同士、後衛同士でチームを編制する事が多い。

これは、各主従のコンビワークや実力より、“数は力”、“戦力集中”の原則を優先しているということだ。

其々の実力・戦闘スタイルがバラバラでも、効力を発揮するのは、ミニマムな戦闘単位に限ればの話である。

数十人以上の部隊ともなれば、戦闘スタイルがバラバラの者たちがチームを組む事は、プラスどころかマイナスとなる。

そしてメガロメセンブリア首都防衛隊は、まさに後者の典型だった。

其れを“柔軟性に欠ける”と非難すべきか、“基本に忠実”と誉めべきかはひとまず置こう。

要するに、高音と愛衣は別々の部隊に配置されたのである。

それだけならまだ良い。

愛衣も中学生とはいえ（そして後方支援・遠距離攻撃担当とはいえ）、曲がりなりにも戦闘員である。

「知り合いがないとイヤだ」などと抜かすつもりはないし、言っ

たところでもうにもならないことくらいは自覚しているつもりだった。

もつとも流石の高音も愛衣も、着任早々、実戦部隊に配属されるとは思ってもいなかったが。余程人手が足りないらしい。

問題なのは、この度一時的に“同僚”となった面子 要するに、チームメイトだった。

彼らは、良くも悪くも、典型的な“連合所属魔法使い”だった。

魔法世界、連合を絶対視しており、西洋魔法原理主義というものに染まりきっていた。

愛衣は一時期、夜白やしろう 刹那せつなに修行を担当された事がある。ちなみに高音もまた、刹那の元に一時期預けられていた。

その時愛衣は、西洋魔法だけでなく、神道などの古今東西の術式を教わっていた。

が、あくまで補助系統に拘って教わっていたため、“器用貧乏”にはなっていない。呪具や魔具も幾つか融通してもらい、今でも大切に持っている。

それと、接近戦時の武術も少し習っていた。

その時から愛衣は、刹那に並々ならぬ尊敬の念を抱くようになったのだが、そこはともかく。

首都防衛隊の同僚は、そんな愛衣を嘲笑したり、非難したのだ。

曰く、「旧世界の異術に手を出す裏切り者」と。

それだけならともかく、“西洋魔法の優位性”を延々と説かれたのだ。それも配属初日で、何回も。

流石に温厚な愛衣も、これには笑顔を引き攣らせた。

麻帆良では、ガンドルフィーニが戦闘武術に手を伸ばしていたし、神鳴流劍士葛葉くすのは 刀子こや陰陽師なども少数派とはいえ所属していた。

愛衣からすれば、西洋魔法だろうが東洋呪術だろうが、一つの“道具”に過ぎない。

全ての道具は、一長一短……メリットもあれば、デメリットもある。ならば、其れを補うため、任務の達成率や自身の生存率を上げるために、様々な術や武器に手を伸ばす事は、寧ろ当然ではないのか？  
無論、やり過ぎは良くないが……。

それは刹那から、修行当初に伝授された合理的思想だったが、今の愛衣にはしつかりと、それが板についていた。

もともと、それについては愛衣は深く突っ込まなかった。誰にでも主義や主張はあるし、それを犯しても仲違いになるだけだ。

愛衣が一番辟易したこと。

それは、彼らの“西洋魔法至上理論”の演説が、何時の間にか“西洋魔法使い至上理論”に置き換わっていることだ。

これには愛衣も閉口し、心中で呆れ果てた（もつとも演説した当人達は、愛衣が自分らの主張の正当性に黙ったと思っていたのだが）。

「魔法を使える事は、確かに有利かもしれないけど……それは、相手が使えない場合に限られるのに」

魔法世界では、魔法は広く一般的なものとなっている。多かれ少なかれ、ほとんどの住人が、その恩恵を受けているのだ。それ以外にも、“気”というものがある。気の達人は、下手な魔法使いよりかは余程厄介だ。

「魔法の使い手が偉いんじゃないのに。魔法が便利な道具ツールなだけ……。  
刹那先生が此処の人たちの主張を聞いたら、きっと呆れ果てるんだろっなあ」

頭を抱えながら、愛衣はため息をついた。

彼らが言っている事は、まるで魔法に使われているようではないか。“力に溺れている” そんな陳腐な表現が当てはまる同僚達の姿に、愛衣の心はさらに沈む。

「ああ、もうっ……お姉様（高音）もいないしい……。刹那先生（ガンドルフィーニ先生）、助けてくださあ〜い……」

一流の術師とはあまりに思えない弱音を吐きながら、愛衣はメガロメセンブリアの警備を続けていた。



思うんですけど、何で魔法使い連中ってあそこまで偉そうにできる  
のですかね……。

そんな事を思いながら書き上げました。

第64幕「天候、それは不変の万華鏡」(前書き)

ネカネとの話、そして照雨との話。

照雨のキャラは、この先もっと明らかになると思います。

## 第64幕「天候、それは不変の万華鏡」

「お久しぶりです。刹那さん、輪廻さん、煌月さん」

ネカネに挨拶され、私達も返す。彼女は紅茶を注ぎながら、流暢な日本語で私達を労ねぎった。

「遠路遙々御苦労さまです。ウンナン・ティー雲南茶くらいしか出せませんが、どうぞ。

刹那さん達が支援してくれたおかげで、ようやくこの村にも、其れなりに活気が戻ってきました。もっとも……」

プレートにビスケットを出しながら、ネカネは私達 お兄ちゃん、私、煌月を順々に見やり、悲しげにため息をついた。

「元々いた住人の半分以上が療養中ですので、殆どゴースト・タウン……いや、ゴースト・ヴィレッジ幽霊村となっていますが。廃村同然ですよ。とんでもないことになったものです。

……さらに、とんでもない事態になりそうですが」

「ネカネさん、貴女の従弟、ネギィスプリングフィールドが、此方に来ます。魔法世界に行くために」

カチン、と音が聞こえそうなほど綺麗に、ネカネが固まった。

途端に、ダラダラと汗を流す。

……恐ろしい程わかりやすい、いや、思った通りの反応だ。

そんなネカネを気遣いつつ、お兄ちゃんが丁寧に事情を説明する。

「それは……何とも」

ネカネは頭を抱えた。

「ネギは流されやすい子ですからね……押しに弱いんです。

それにしても、まさか早々に仮契約を結ぶとは思っていませんでした。

やはり、あの子には危険すぎる内容でしたね……」

「内容？ 修行内容の事ですか？」

「はい、日本国の人口は英国を遥かに凌ぎますし、人口密度もケタが違います。特に麻帆良は首都圏に位置しますし、何てたつて学園都市ですからね」

そう言って、お兄ちゃんにクッキーを渡すネカネ。

「麻帆良がどのようなところかはよく知りませんが、非魔法関係者も多いのでしょうか？ 此処やメルディアナとの環境差は凄いでしょ

うね。

確かに楽では卒業試験にならないでしょうが……運が無いというか、何というか……」

ネギが麻帆良生きになったのは、麻帆良・メルディアナ両トップの陰謀なのだが、其処は黙っておこう。

お兄ちゃんも黙っているし、言ったところでどうにもならない。

その後も、お兄ちゃんとネカネは話し合いを続ける。

……ん？

違和感。

私は少し鼻をヒクつかせた。

この匂いは……うん、間違いない。彼女たちと同種だ。

「お兄ちゃん、私、少し外に出てくるよ」

「輪廻？」

立ち上がった私を見て、お兄ちゃんが戸惑ったような表情で此方を見てきた。

煌月は無表情だが

彼女はわかっているかな。

やっぱり、そうだ。

お兄ちゃんとネカネにだけ、わからないようにしてる。  
こんな芸当が出来るのは。

「些事だよ。すぐに戻るから」

そう言っつて、私はドアへと歩いていった。

村の入り口付近に、一人の少女がいた。  
黒髪に黒と青のオッドアイの、小柄の少女だ。

「はじめまして、夜白 輪廻様」

ブラウス姿の少女は、そう言っつて深々と頭を下げた。  
誠意の欠片も感じ取れない、小馬鹿にしたような御辞儀だった。

「何番目なの？」

そんな事は気にせず、私は聞く。

此の娘は、『ドクターズ娘達』だ。

間違いない。お兄ちゃんの神力と、女性の匂いを混ぜた様な……心地良くて、それでいて胸糞が悪くなる匂いだ。目でも、お兄ちゃんの神力の揺らぎを感じる。

そして恐らく 意図的に、お兄ちゃんにのみ神力を隠したのだから。ネカネがわからなかったのは、単にネカネの感応能力が低かっただけのことだ。  
人間に、神力を感じ取れと言う方が無茶ぶりだ。

「11番目です。名前は夜白 照雨しょううというのですが、まあ、どうでも良いでしょう？」

輪廻様は、父様以外に興味など持ち得ませんからね」

照雨は少し顔を俯かせ、くすくすと笑う。

……殺気が漏れている。

「ええ。……貴女、私と闘やる気？」

「まさか」

フルフルと首を振る。

「勝ち目などありませんよ……何て返すと思います？」

瞬間、私の九本の尻尾が動いた。

何かが弾ける音、閃光。

何処までも響くラップ音……隔離結界を展開しておいて、正解だった。

もう、此処は焼け野原だ。

眼前に迫りくる稲妻と轟風を見つめながら、そんなことをふと思っ

「……お兄ちゃん、寂しいよ……」

少しだけ離れているだけなのに。

一秒足らずで、すぐに会いに行ける距離なのに。

時間にして、五分も経っていないのに。

寂しさのあまり、自分の胸を抱きしめる。

お兄ちゃんのことを考えるだけで、頬は朱に染まり、身体は疼く。

そして

尻尾

は、あの女を殺す。

尻尾を振れば、『世界』一つはまるまる吹き飛ぶ。  
でも、そんな事はしない。



唯、この結界内を次元ごと斬り裂くだけだ。

結界内が漆黒に染まる。

次元断層が起こった証拠だ。

私は其れを見つめ、口を少し開けて、

『きつねび狐火・くれんこう紅蓮杭』

蒼炎の杭を吐きだした。

それは、断層からヒヨッコリ顔を出した照雨の顔面を貫き、そのまま結界に衝突、霧散した。

「うわっ、相も変わらず、エゲツない炎ですね」

顔の真ん中に風穴を開けたまま、照雨は大げさに驚いたポーズをした。

その風穴も、すぐに再生する。

流石はお兄ちゃんが創った神工生命体というべきか、今まで消した塵芥コホコの中でも最もしぶとい。

そして、攻撃も強力だ。

尻尾の一本から、絶え間なく血が流れている。

あの稲妻と轟風、予想以上に斬れ味が良かったようだ。その傷もまた、すぐに再生するが。

「本当に理不尽ですよ……。この時代の輪廻さんなら、ダメージを与えられると思っただけなんです……」

「嘗めるな、小娘」

私は少しイラついていた。

何故かって、わざわざお兄ちゃんの元を離れてまでやってきたというのに、向こうはツマラナイ態度をとり続けている。

おまけに、お兄ちゃんのことを考えていたのに、少し集中が途切れ

「お兄ちゃんの創作物だからと言って、調子に乗るな。私だってお兄ちゃん为天狐なんだ……。勝手に殺して創り替えて、お兄ちゃんと私に従う奴隷にしてもいいのよ？」

「結局、未来とそんな変わらないじゃあないですか」

そう言って、照雨はクスクスと笑う。

イチイチ態度が気に喰わない娘だ。

「其れは兎も角」

照雨は急に真面目な表情になると、私を見つめた。

「私が此処に来たのは、父様に逆らう異分子を除去するためです。幾ら“天候”や“気象”を自在に操り、生み出せる私と雖も、時空転移が可能な“気象”を生み出すには骨が折れましたよ。……あのババ　失礼、硯璃姉様に見つからずにやるのも、一苦労でした」

彼女の顔には、疲労の色が浮かんでいる。どうやら本当のことらしい。

「異分子？」

「連合……でしたっけ？　兎に角、そんな連中が動き始めます」

照雨は忌々しげに呟くと、ポケットから煙草を取り出して啜えた。

「其れが話をややこしくする。だから私は、父様の力になりに来たのです。ですが」

「お兄ちゃんに直接会うのは、都合が悪い、と」

「慧鈴<sup>すれい</sup>姉様ではありませんが、干渉し過ぎるというのも問題です。ら。

父様以外になら、幾らでも可能ですが……父様以外の運命に介入して、其れが壊れても、『娘<sup>わねわね</sup>達』は気にもとめませんので。

勿論、少し会う程度なら問題は無いのですが」

「それで？」

「私としては、とっとと殺しておきたいのです」

「……いいけど、条件があるわ」

「……？」

首を傾げる照雨。

その顔を見て、私は薄く笑った。

「トップを殺すのは私の仕事。雑魚はあげるけど、ね」

ピクリ、と照雨の顔が歪んだ。

「……さあ、どうしましょうか」

そう言って消える照雨を見ながら、私は小さく呟いた。

「お兄ちゃん、やつかいなのが来ちゃったかもねーえ……」



第64幕「天候、それは不変の万華鏡」(後書き)

やたらと輪廻への反抗心が高い照雨。

彼女は輪廻の決定に不服なようです。

第65幕「雷雨、それは崩れて殺されて泣かされる思惑」(前書き)

輪廻VS照雨戦再び。

戦闘描写って難しいですね、時間がかかった割には短いし……。

輪廻が強すぎるのも一因ですが。

第65幕「雷雨、それは崩れて殺されて泣かされる思惑」

嫌な勘ほど良く当たる。

いや、私の“勘”は殆ど予知といっても過言ではないものだけど、それでもこの言葉のジンクスは信憑性が高い気がする。

……信憑性？ 自分でも何を言っているのかわからなくなってきた。

……ああ、現実逃避か。私は現実逃避をしているんだ。今更気付いて、私は小さく息を吐いた。

吐かれた息は蒼い狐火となって、滞空してかき消えた。

「……………何が、『父様の力になりに来たのです』 よ。此  
れは無いですよ」

そう言った私の視線の先では、天から墜ちる幾重にも広がる雷の洗礼を受けている、メセンブリーナ連合首都メガロメセンブリアの行政府の姿があった。

あのあと、私はお兄ちゃんに直ぐに報告し、お兄ちゃんと煌月を残してネカネとの挨拶もそこそこに魔法世界に向かった。  
何とも嫌な予感がしたので、行ってみれば案の定だ。



メガロメセンブリアの行政関係の建築物があるところだけが、スカツとするくらい燃えている。

煌月が調べた情報にいと、あのあたりにいる元老院及び関係者の数は、全体の半分ほどだ。

どうやら、態ワザと全員が集まっていない時を狙って攻撃したらしい。

誰が？

決まっている、夜白 照雨だ。

私に分け前を残したのか、それとも後でじっくり喰クうつもりなのか……多分、後者だ。

それにしても、と周囲を見渡す。

流星に殺しすぎるのも問題だろう。

よく見ると、民間人への被害は皆無だったし、直撃を受けていない護衛兵達ガードマンや下っ端職員たちは悪くて怪我……良ければ無傷だろう。

お兄ちゃんの娘を名乗る神工生命体の名は、伊達ではない、ということか。

考えてみれば、『娘達ドクターズ』の実力を此処まで見せられ、把握するのは初めてだ。

骸巫の時は直接見ていないし、能力を発動したのもほんの数瞬だった。

硯璃の場合も同じ。

慧鈴はそもそも能力を全くと言って良いほど使っていなかった。

「へえ……面白い」

私は誰に聞かせるまでも無く呟いた。周囲の喧騒や雑音など、全く耳に入っていない。

瞬間、私の腹を、巨大な雷の槍が貫いていた。

「ホントウに……面白い」

意図せずして、私の口元は歪んでいた。  
三日月型になるように。

そのまま雲の上までジャンプすると、やっぱりいた。  
虹色のオーラを纏い、周囲に暴風やら雷やら吹雪やらを撒き散らしている照雨の姿だ。

「輪廻様、父様の御側にいなくとも良かったのですか？」

「どの口がそういうの？ 原因である貴女が」

「フフフフ、妬ましいですね、輪廻様  
御側にいることが」

父様の

そう言つて、照雨は突っ込んできた。

さて、と。

前にも思ったが、照雨は今まで出会つた中で一番の塵芥だ。強く、そして汚らわしい。

「貴女は、お兄ちゃんの何の役にも立つていない」

せせら笑つ様に言つ。

案の定、照雨から表情が完全に消えた。

その顔面に、拳を叩き込む。

身体中に拳の嵐を叩き込んでやる。

尻尾も使い丁寧<sup>さほ</sup>に貫き、削り、殴り、捌き、残りの尻尾で彼女の身体を固定する。

拳だけでは物足りない。脚も使つてやろう。

そう思い、蹴りもひたすらに加えていく。

噴き出し続ける鮮血を浴びながら、次は鋭い爪で照雨の胸を貫いた。そのまま心臓を引き摺り出し、握り潰し、大きく蹴り飛ばすと同時に尻尾による拘束を解く。

両手、いや身体中にべったりとついた血を一口舐めとり、

「不味ッ<sup>マス</sup>」

吐き出した。

「……やっぱり、不味いわね、お兄ちゃんの素敵な匂いがするわりには。

綺麗でとても美味しいお兄ちゃんの血が、貴女本来の臭さと不味さによって汚れてしまっている」

「輪廻様こそ、年中発情した獣臭を父様に擦りつけないでください」

何食わぬ顔で戻ってきた照雨は、いきなりこんなことを言う。

「失礼ね、私はお兄ちゃんだけにしか発情しないのに」

「当たり前です。誰彼構わず発情していたら、正真正銘の獣<sup>けだもの</sup>です」

「……………初めてコイツの口から、正論が聞けたような気がする。

「そんなことより、どういうことですか？ 私が父様の御役に立っていない、とは」

「そのままの意味よ」

私は鼻を鳴らしながら、冷たい視線を向けた。

「貴女は、お兄ちゃんのことを全く無視している。連合を今潰すこととは、お兄ちゃんに反しているのよ。」

貴女程度がお兄ちゃんをわかったような口をきくな。

お兄ちゃんは深く、綺麗で、輝かしく、美しく、優しく、そして、罪深い。お兄ちゃんを完璧に理解するのは、私だって至難の業。数世紀は時間を共にしていなければ難しい」

私だってミスをする。

お兄ちゃんをわかった気になって、行動して  
それでは駄目だ。

命令を待つだけというのも勿論いけないが、勝手に動いた結果、お兄ちゃんを苦しませるのはもっと駄目だ。  
あつてはならない。

私は、それを犯しそうになった。

自分で定めた禁忌に、自ら触れようとした。

本当に、笑えない。

「お兄ちゃんは別のシナリオを思い描いている。貴女は其れに出演すらしていない、割り込んできた野次馬よ」

「成程」

思っていたよりあっさりと、照雨は納得した。  
ポロポロになった服をパンパンと払いつつ、大きく吐血している。

「ゴポツ！ んんツ！

ですが未来では、ちよつとややこしい事態も起こっています。そのため、私は早急に手を打つべきと考えました」

どうやら、考えなしで行動していたわけではないらしい。

……コイツ、もしかして案外とキレ者か？

考えてみれば、コイツの行動は私も呆れるくらい短慮だ。  
でも、短慮にしては矛盾もある。

誰にも邪魔されずに連合を潰したいのなら、最初から私など無視して潰しに行けばよかつたのだ。

そうすれば、多少は私も気付くのが遅れたはず。

それ以前に、最初から魔法世界に行けば良いのに、照雨は態々ウエールズくんだけまでやってきて、しかも私を呼んだ。

……どうも、ちぐはぐだ。

そんな私の考えに気付いたのか、照雨はクスクスと笑った。

「埃を除去するだけでは詰らなかつた……それだけですよ。

私は貴女が、父様以外の全てが　　大ッ嫌いなのですよ!!」

そう叫び、照雨は再び消えていった。

……… 未来に戻って……… はいない、か。何処かにいる。

次は、何をやらかす気かしらないが……… 碌なことにならないだろう。

「……… いい加減にウンザリしてきたなあ、お兄ちゃんへの愛も止まらないし、お兄ちゃん成分も補給していないし……… 帰ろう」

私は小さく呟き、その場を後にした。

**第65幕「雷雨、それは崩れて殺されて泣かされる思惑」(後書き)**

照雨の出番はまだあります。

次回から、漸くネギたちが動き始めます。魔法世界編突入です。



**第66幕「到着、それは転がり出した屑鉄」(前書き)**

久しぶりの更新です。

原作主人公登場回。ただセリフはありません。

## 第66幕「到着、それは転がり出した屑鉄」

お兄ちゃんの下に帰って、魔法世界の拠点アシトに行き、お兄ちゃんに存分に甘えてから数日。

私は一人で、ゲート前に立っていた。

いや、正確には周囲に姿を見られないようにして、この場に立っている。

学園長の連絡によると、ネギ、そして彼の従者 明日菜とのどか、そして+ が今日、魔法世界こじちに来るそうだ。  
まあ、わかっていたんだが。

やろうと思えば、世界のあらゆるところの“音”や“声”を拾える獣耳だが、私はあまり使わない。使つと、頭の中に雑多な声と音が入ってくるからだ。

それは、お兄ちゃんの声以外はできるだけ聞いていたくない私にとつては、酷く不快なものだった。

でも此の耳を使えば、監視カメラで見るよりかは余程情報が入ってくる。

相手の位置から心拍数などの状態や、風景もある程度は把握できる。まあ、耳をすませばならないうえに、私にはお兄ちゃん以外の声が入ってくる一秒一秒が苦痛だから、普段は意図的に獣耳の方は使っていない。

狐には、得意なことが二つある。

一つは異性を惑わすこと。これはまあ、お兄ちゃん専用だから他に使い道もない。

もう一つは、“化かす”こと。はっきりいうと、“幻術”だ。

でも、此の幻術もそうそう滅多に使わない。

理由は単純明快。使う必要性がないのだ。

お兄ちゃんと会おう前は使う相手がいなかったし、出会ってから様々な塵芥チリを処分する時も、幻術を使うまでもなくあっさり潰せていたこと。大抵の塵芥は、私が適当に一発殴ればそれで終わる。

そして、私は肉体を責める拷問が好きで、精神を責める拷問はあまり好きじゃあない、ということ。

この二つの理由からだ。

相手を精神的に潰す幻術をかけるには、相手の記憶やトラウマなどを把握して、それにあつた幻術をかける必要がある。

それ自体は簡単だ。最適な幻術のチョイスから発動プロセスの構築、そして発動までに一秒とかからない。

が、お兄ちゃん以外、それも塵芥チリの記憶を覗くなど、虫唾ムソの走る行為そのものだ。

実際私は、何度か塵芥の頭の中を覗いたことがある。でも、あまりのおぞましさと気色悪さに、胃が空になるまで吐瀉物を吐き散らすこととなってしまうた。

……お兄ちゃんの目の前で。

黒歴史だ。できれば二度とやりたくない。

で、何が言いたいのかというのと、幻術を使えば普通にネギたちと初対面として接し合うことができる……ということだ。

まあ、私がやったのは、ゲート・ポーカー・キパー関所の入国審査官に潜り込んで、このことやってきたネギたちを事務的な口調と科白セリフで迎えたくらいだが。

……ん？

嫌な予感がした。空気を嗅いでみる。

嗅ぎ覚えのあるにおい……これは……。

記憶の中から、該当する情報を取り出す。

「……ああ、雪広か」

ようやく思い出した。

お兄ちゃんのことを考えるのを暫し中断し、私は神力を込めた瞳を関所の入口へと向けた。

その行為自体がとても気に食わない。

自分で、自分が凄く不機嫌になつてくるのが分かる。

せつかく、せつかくお兄ちゃんのことを考えていたのに……。

「……………チツ……………」

周囲にしか聞こえない声で、私は舌を打った。

……照雨との戦闘の影響か、ちよっと気持が昂ぶってしまっているのかもしれない。

それにしても……学園側やサクたちは何をしているのだろうか？ いや、そもそもメルディアナは……まあ、最初から期待も何もしていなかったが。高畑教諭がもしもの時に備え、来ているはずだったが、そんなもの、最初からアテにしていない。私が信じ、尽くすものはお兄ちゃんだけだ。

フウ、小さく息をはくと、口から狐火がボツと飛び出し、消えた。

面倒、の二文字が浮かんだが、あれもお兄ちゃんの大切な生徒たちだ。

彼女たちが魔法世界で変なことに巻き込まれたら、お兄ちゃんは心を痛めるだろう。

そんな思い、そんな姿、お兄ちゃんには似合わない。

……幻術でもかけて、引き返させよう。

ネギたちが魔法世界に入ると、私も幻術をかけながら離脱。

「……………ん？」

途端に、大音響とともにゲートが吹き飛んだ。  
警備兵たちが吹き飛ばす。

黒い服を纏った、中学生くらいの背格好の集団が、器用に連携しながらゲート警備兵たちと交戦している。

ネギたちは……あ、ゲートの近くで右往左往している。

しかも、あの右往左往が、場合によっては黒子集団に指示を出しているようにも見える。

黒子集団もそう見せたいのか、ネギたちを背にして一步も引かずにどっしり構えている。

……あれじゃあまるで、ネギたちの盾になって護っているようじゃあないか。

「あれは……『アイゼンハイム樹液人形』ね。ブリジットが独断するわけないし、アーウェルンクスおしゃべり人形かあ……」

そう呟くと、私の真横に警備兵が吹き飛んできた。

「サインラヒル警備隊長！」

「中佐！」

どうやらこの男が、警備部隊の指揮官らしい。

「くそっ……」

サインラヒルと呼ばれた警備隊長は、上半身を持ち上げて黒子集団と、その後ろで指揮を執っている（ように見えるだろう）ネギたちを見やった。

その後ろでは、撮影魔具をもって襲撃犯たちを撮影している警備兵たちがいた。大声で怒鳴り合っている内容から考えると、指名手配犯との照合でもしているのだろう。

ブリジットは……いない、か。

多分、遠くから指示を出しているのだろう。

「お兄ちゃんに報告することが増えたわね……」

私は小さく呟き、吹き飛んできた警備兵をひよいと避けた。

……ああ、近くにお兄ちゃん以外の異性がいるだけで、ウットウシイ。

第66幕「到着、それは転がり出した屑鉄」(後書き)

輪廻はかなりイラついています。機嫌が悪いです。



## お知らせ

こんにちは、皐月二八です。

さて、此の物語ですが、前々から感じていた違和感、読みづらさ、そして主人公の立ち位置や行動・観点などから大いに反省し、一旦凍結。

改訂版を投稿しなおすことにしました。

本作は、もともと“妹や従者、娘たちなどの家族が主人公（刹那）のために頑張る話”というモノだったので、あまりにも刹那の登場やシーンが少なかつたこと、サクヤ真名のおいたちや思想に私自身が違和感を感じ始めたこと。

そして、今の私からすればあまりに展開や文体が理想と離れていて、今現在の執筆・構想スタンスでは執筆しづらくなってしまったしまったことなど。

これらの点から、大幅リニューアルして再構成しなおそうという結論に至りました。

本作は削除しません。そのまま残します。

改訂版は刹那の考えや行動をもっと前面に出し、輪廻との絡みを大幅に増やす予定です。

そしてこのさいですので、時期予定作『国造り（仮名）』とドッキングさせ、ストーリーも大きく変えることにしました。

誠に勝手な判断ですが、御容赦願います。

このまま執筆していつでも違和感はぬぐえないし、何より自分で執

筆するのが苦痛な作品など、読者の皆様に楽しんで読んでもらえるわけがないと考えたからです。

タイトルは『魔法先生ネギま！』と狐と兄の燈し語・改し語』。

こんなタイトルですが、前述した通り『燈し語』とは一部設定と主人公の顔触れが同じなだけの別モノとお考えください。

早ければ今月中には投稿します。

改めて、私の勝手な行動を謝罪させていただきます。申し訳ありませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1306o/>

---

魔法先生ネギま！～狐と兄の燈し語～

2011年10月14日21時50分発行